
IS 北欧生まれのカレンダー

タピオカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 北欧生まれのカレンデュラ

【Nコード】

N5847T

【作者名】

タピオカ

【あらすじ】

女性しか操縦出来ない最強の現代兵器、インフィニット・ストラトス。

IS学園はその兵装の訓練学校のようなものであった。しかしそこへ一人の少年が現れる。名は織斑一夏、何かの間違えかIS を起動させてしまった奇跡の少年。

彼はそこで運命の再会をする。

メカ×美少女×ハーレム＋一途〓???

IS 北欧生まれカレンデュラ、始まります！

再会はしたいが……

俺こと織斑一夏は今、果てしないほどに追い込まれていた。

何故かって？……それを語るには少し時間がかかる。しかし自身に降りかかった不幸をきちんと理解しよう。という訳で簡単簡潔に語ろうか。

・ちょっとした間違いから、女子しかいないIS 学園に編入してしまった。

・ちょっとした間違いが起こる前に、注意してくれた友人に間違える訳ないと大見得を切ってしまった。

・その友人が、俺と同じ学園、同じ学年にいる事。

ヤバイヤバイヤバイヤバイッ！……

確実に、ゲラゲラと笑われるだろう。

数年振りに再会すると言うのに、笑われて恥ずかしいから会いたくないな〜なんて思ってる自分がいる。

まあ本当はめっちゃくちや会いのだが……

ちくせうッ！これを不幸と呼ばずなんと言う！？

え？間抜け？……う、うるせえ！！

織斑一夏は割りと真面目に追い込まれていた。

机に突っ伏しながら自分に対し突っ込みをいれる程度に。

「顔を上げる、馬鹿者が」

そんな俺に振り落とされる裁きの鉄槌。

机に突っ伏している俺の頭に容赦なく叩きつけられた拳は、脳細胞を一撃で全滅させるのではないかと思わせる程痛かった。

突っ伏していたせいで、机に顔をぶつけ、痛みは更に倍、倍率ドン、更にドンっ！。

「いつてええっ！？な、何すんだよ！…って、え？…千冬姉？」

「織斑先生と呼べ馬鹿者」

顔と後頭部を抑えながら顔を上げた俺の視界に現れたのは実の姉、織斑千冬。

これまた似合った黒いスーツに身を包んだ実姉は、その容姿と相まってデキル美人教師に見える。

「あ、あの、ごめんね、ごめんね！　けど自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、良かったら自己紹介して欲しいなって、だ、ダメかな!？」

俺の席の真ん前、教卓から身を乗り出しながら謝る女性、どうやらこれからお世話になる先生だそうだ。

「あ、いや別に…良いですけど」

「ほ、本当ですか!?!や、約束ですよ!?!」

微妙にサイズの合っていない眼鏡を掛けた副担任は山田真耶と言うらしい。

黒板に名前書いてあるし。

つか本当に先生か?幼い顔のせいかな年代か年下にも思える。

「えっと……うっ!?!」

振り返り、クラス全体を見回し、ようやく気付いた。

クラス中から向けられる視線、その数三十と九、その全てが女性だ。

IS、…インフィニットストラトスと呼ばれる現代兵器(表向きにはスポーツに使われてるパワードスーツ)は、何故か女性しか乗れない。

この学園は、インフィニットストラトスを操縦する、操者を育成するために設立された物である。

まあその他説明は省かせて貰う、入学前に貰った百科辞典並みに分厚い資料を使いふるしの電話帳と間違え捨ててしまったのだ。

簡潔に言えば、

- ・宇宙進出を目的としたパワードスーツ
- ・今世界にある兵器で最強
- ・女性しか扱えない
- ・世界に467機しかIS はない

と言った感じだろう、更に詳しい話を知りたいのなら原作を購入しましょう。

さて、話に戻るが教室の中は、俺意外は皆女性と言う素敵空間である。

しかし俺は素敵に思わない。

クラス中から奇異の目で見られている俺は現在進行で気分が陰鬱になっっていく。

「えっと、織斑一夏です」

なんだ、この、『それでそれで？』空間は!？

多くの女子達は目を輝かせ、俺を見る。

中には『君の事、もっとお姉さん達に教えて欲しいな（はあと）』
なんて思わせる視線を送る女子もいる。その瞳はまるで狩人のよう。

おいおい、俺と君は同学年だ。

だからそんな誘うような目はやめなさい。

さてさて、俺としましてはいきなりあつたばかりの女性に興味趣向
を教えて合おうと言う気はさらさらない、なので自己紹介はこころ
で切り上げたいのだが……そうは問屋ちひやねえが下ろさない。

名前だけ紹介してハイ終わり、では『暗い奴』のレッテルを貼られ
てしまう。自己紹介で失敗した奴の末路は悲惨だ。

故に、それだけは回避せねばならない。

俺が取るべき最良の手、それは『短く明るく』だ。これを元に……、
俺は次の言葉を紡ぐ。

名前を名乗ってからここまで、約0・2秒の間。――

「以上です！」

スッパーンツ！

元気良く自己紹介を締めた俺の頭部に出席簿が叩きつけられる。
流石は千冬姉だ、音に見あったほどよい激痛が走る。（ほどよい激痛ってなんだよ）

今日だけで脳細胞は半数は死滅したと見た、脳内葬儀屋も数年先まで予約らしいし、これ以上はやらせるわけにはいかん。

「貴様は自己紹介もまともに出来んのか馬鹿者」

「し、しかしだ千冬姉！」

スッパーンツ！

「ぐっ…っおっ……」

反論しようとした瞬間に出席簿が降り下ろされる。

「ぷっ…くっ…ぷくくっ…ひくっ、
フヒヒっ」

俺が痛みを堪えていれば、教室の何処からか、聞いた事のある、少し変わった笑い声が聞こえて来た。

「ちよっ…お前…クヒヒっ…笑わせるなよっ」

教室の一番奥、窓際の最後列に腹を抱えながら机に突っ伏して笑う
淡い栗色の長髪をした少女…顔を見ずにわかってしまった。

「相変わらず変わらないな一夏」

顔を上げた少女に息を飲む。
彼女とは二年振りに会う。

「…ち、千春？」

千春・フレイヤ・ブリュッセル、北欧生まれの外国人。
二年前に日本に来た中学時代の同級生……そして、

「おう！、久しぶりー夏。IS学園へようこそ……なんてな……クヒ
ヒッ」

必死に爆笑しないように堪える少女は……俺の初恋の相手だ。

再会はしたいが……（後書き）

ふふふ、……遂にやってしまった…

他の作品を終わらせてないのに浮気なんて…い、いや、俺のせいじゃないんだ！ば、パソコンのせいなんだ！

俺はチマチマとパソコンのメモに四話位書いてたのに、HDが故障してしまっただんだ！

そうなるとテンションはただ下がりにして…そこへきて最近マイブームなISを書きたくなるのは四流物書き家、つまり素人にはよくあることなんだ！！

うん？言い訳になってない？

わかっています（笑）

小説家になろう内インフィニット・ストラトス二百五十作品突破記念……になにかやろうかな〜と思いき書き初めたのがこれで、コンセ

ブトは一夏君が女の子に一目惚れした！？と言った感じですよ。

一夏君が一目惚れなんてありえねえだろと思いつつ、あれ？これ行けるんじゃない？…なんて思ったのが運の尽き、二番煎じでした（笑）

いや、まあ幼馴染みサードにしなけりや大丈夫だろと愚行しやつちやいました。千夏ちゃん可愛いよ千夏ちゃんはあはあ

とまあパソコンが使えずスマートフォンでの投稿なので時間はかかるでしょうが生暖かい目で見てください。

「い〜ちかつ！」

一時間目の授業が終わると共に親友の背中を軽く叩く。

「うお！？ち、千春か、ビックリさせんなよ…」

「悪い悪い、いや〜にしてもマジで藍越とアイエス学園を間違えるとはな、

流石一夏クオリティ。テレビで見たときや驚いたぜ」

驚いて振り返った一夏の肩をバシバシと叩きながら笑う。

数年ぶりの再会でテンションが高めなのが自分でもわかる。

「む、悪かったな俺だって別に狙って来たわけじゃないんだ。

ただ試験開場が迷路みたいになってて、迷い着いた場所にIS があつて、触つて

みたら動いたんだ」

少しむくれた一夏はため息しつつ頂垂れる。

まあ確かに男子が望んで来れる学校じゃなし、偶然と言うのはわかる。

わかるのだが…やはり笑ってしまう。

「そうむくれんなって！ まあ何はともあれあたしは嬉しいぜ？ ました一夏とおんなじ学校に来れるんだからな！」

一夏の肩に手を回し頬を突く。これをするるとどんなに元気がなくても一夏は元気を出すのだ。

まあ恥ずかしいのか顔は真っ赤になるが。

「お、おう！ 俺もその……嬉しい……ぜ」

ほら、真っ赤になった。

頬を掻きながらそっぽ向く親友はチラチラと私を見る。

「ん？ なんかついてるか？」

「い、いや！ なんも！ なんでも！」

一夏は慌てて顔をそらす。

どうしたんだ？ 挙動不審だぞ？

「少し、良いか？」

「あ？」

side 一夏

色々疲れた一時間目だった。

職業不詳だった実姉である千冬姉だけならまだしも、二年前に日本から北欧はアイスランドへ帰った初恋の女の子（千春は真友しんゆうと思っている）とまで再会したのだ、色々と疲れた。

千冬姉は事ある事に叩くしそれみて千春には笑われちゃうし……はあ、不幸だ。

「い〜ちかつ！」

そんなことを考えていれば、名前を呼ばれると共に背中を叩かれた。

「うお！？ち、千春か、ビックリさせんなよ……」

驚いた、思考の海に肩まで浸かっていたためか声を掛けて来た相手が千春なのかはわからない。
多分後者だけどね。

「悪い悪い、いや〜にしてもマジで藍越とアイエス学園を間違えるとはな、

流石一夏クオリティ。テレビで見たときや驚いたぜ」

二年前と変わらずニコニコと嬉しそうに笑いながら千春は俺の肩をバシバシと叩く。

「む、悪かったな俺だつて別に狙って来たわけじゃないんだ。

ただ試験開場が迷路みたいになって、迷い着いた場所にISが

あつて、触つて

みたら動いたんだ」

確かに間違つたのは俺だけさ、そんなに笑わくても良いんじゃないか？

ゲラゲラと笑わってるわけじゃないが、やっぱり笑われるのはやだ。

それが片思いの相手なら尚更。

「そうむくれんなって！ まあ何はともあれあたしは嬉しいぜ？ま

た一夏とおんなじ学校
に来れるんだからな！」

参った。またこれだ、千春は俺が元気が無いときや機嫌の悪い時には毎回、俺の肩に手を回し、
頬をツンツンと突くのだ。

肩に手を回すために身体は密着し、千春の顔がすぐそこにある。
更には頬を突いてくるなんて言ったご褒美までッ！

「お、おう！俺もその……嬉しい……ぜ」

顔が熱いのがわかる。多発耳まで真っ赤になってんだろ。う。
やや上擦った声が手でしま。う。

ちくせう、相変わらず可愛いじゃねえかっ……！

千春を直視出来ず顔をそらす俺マジへたれ。

でも……二年前から可愛かったけど……なんて言うのかな、綺麗になっ
た。

太ももまで伸びる淡い栗色の髪はさらさらと、碧色の瞳は大きく開
かれて、その身体は女性

らしい身体付きで……本当に何もかもがグレードアップした感じだ。

そのくせ昔のまままで接してくるんだ、正直戸惑う。

「ん？なんかついてるか？」

「い、いや！なんも！なんでも！」

チラチラと見てたのがバレてあからさまに慌ててしまう。

そりゃ千春と俺の距離はゼロ距離だ、嫌でも相手が見える。いやいや、
嫌なんかじゃないぞ？

「……少し、良いか？」

「ん？」

s i d e o u t

声を掛けて来たのはポニーテールの女の子だった。
なんかすげえ睨まれてるよおい。

「お前…箒？篠ノ之箒か！？」

突然一夏が声をあげる。箒？ホウキ…掃除用具？

おい一夏、お前いつから人に変なあだ名付けていじめるようになったんだ？親友として情けないぜ！

「あ、ああ、久しぶり…だな」

と思ったがどうやらあだ名じゃないらしい。

ポニーテールの少女は顔を赤らめながらどこか気恥ずかしそうに頷く。

「やっぱりか！いやあ六年ぶりか？変わらいなあ、箒は、一目でわかったぜ」

「ふ、ふん…」

嬉しそうに笑う一夏とは対照に、一夏を軽く睨んでからそっぽ向く。

「なあなあ一夏、この人知り合い？」

二人の会話をぶった斬つての問い。

ポニーテールがギンツと迫力満点の睨みを向けてくる。「こええ

「あ、ああそっか、俺がまだ小学生だった頃のお隣さんで幼馴染みの篠ノ之箒だ」

「おお！一夏が前言ってた剣道少女か、いやぁ〜良い実りなこと」

なるほどと手を合わし、相手の身体の一点を見つめる。

たわわに実った二つの丘、胸であるおっぱいである巨乳であるッ！

わきわきと手を動かす私を一瞥し箒さんとやはらは一夏に詰め寄る。

「私の方からも聞きたい、この女は誰だ？説明しろ一夏」

やや高圧的な態度で一夏と私を交互に見る。

「中学に上がってから仲良くなった友達の千春だ」

「千春・フレイヤ・ブリュッセルです、よろしくお願いしますね？
篠ノ之さん」

一夏や親しい仲でないひとは私はできるだけ話し方を変える。
いわゆる猫被りだ。

にこりと微笑み、一礼。

篤さんは私の猫被りに眉をひそめるも、一夏に向き直る。

「一夏…その、話があるのだが…」

「ん？ああ良いぜ？えっと、廊下で良いか？」

話難い事なのだろうか、一夏は頷いて立ち上がる。
勿論私は一夏から離れた。

「ほいじゃあいつてらっしやくい」

「お、おう」

片手を振りながら見送り、私は自分の席へ向かった。

「ねえねえ、ブリュッセルさんって織斑君と知り合いなの？」

先ほどから見ていたのか、五、六人くらいの女子が私の席を囲む。
威圧感がばねえ。さてさて被りますか。

「ええ、織斑君とは中学生の頃に一年間同じクラスになって…」

その後、私はチャイムがなり、一夏が戻ってくるまで中学生時代の
一夏の話ませがまれ話し続けた。

いやあ懐かしいな。私が四人くらいの男共（高校生くらい）にナンパされた時なんて、その四人相手に大立ち回り。

「お前は俺が守る！」なんて大真面目に言い放った時は親友ながらカッケエと思っただもんだ。

その後学校に呼ばれた千冬さんに頭を殴られてた事も皆に言っておく。

stage 1 『愚鈍な女』（後書き）

二話です。

いやあ箒ちゃんが難しい（笑）

最後の方に千春に話かけて来た娘は相川さんです。
原作で一番好きな娘なのでこの後も度々でる事でしょう。
準レギュラーくらいに。

三話

「ちょっとよろしくて？」

「へ？」

二時間目の休み時間、机に突っ伏していた俺に金髪ロールの少女が声をかけて来た。

二時間目にて自分の知識の足りなさを思い知った俺は頭を抱えて机に突っ伏していた。

そんな俺はいきなり声をかけられ素っ頓狂な声を出した。
我ながらカツコ悪い。

「訊いています？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……何かな？」

俺はそう答えると目の金髪ロールの女子は口に手を当てわざとらしく声を上げた。

「まあ！ なんですの、そのお返事は？わたくしに話かけられるだけで

も光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではなくって？」

「……………」

正直この手合いは苦手だ。

女性しかIS を動かせない〓軍事力になる〓IS 操者は偉い〓
女は偉い

なんて図式を馬鹿正直に謳う手合いは苦手だ。

偉いのは百歩譲って許せるだろう。

しかし、だからと言ってその力を振りかざすのは違うだろう？
粗暴な力は暴力でしかない。
力は誰かを助けるためにあるんだから。

「えっと、悪いな。俺君のこと誰だか知らないし」

実際知らない。

職業不詳だった千冬姉の仕事先がIS 学園だった事のほうが十倍
驚きだし、

千春が同じクラスだった事なんて百倍驚いた。

しかし彼女は俺の答えが気に食わないのか、吊り目を細め、いかにも
男を見下した目で俺を見る。

「わたくしをしらない？このセシリア・オルコットを？ イギリ
スの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!？」

へえ、セシリアっていうのか。ふーん。

「あ、質問しても良いかな？セシリアさん」

「ふふん。下々の者の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ？質問を受けましょう」

「代表候補生って、何？」

ガタタツ、ゲラゲラ。聞き耳を立ててたクラスの女子数名がズツコケた。

笑ってるのは絶対千春だ。ちくせう。

「あ、あ、ああっ…」

「『あ』？」

「あなたっ！ほんきでおっしゃってますの！？」

凄い剣幕だ。思わずオールひらがなになってしまっくらいに。

「ああ、本気だぞ？知らん」

知らない事は素直に言おう。見栄は身を滅ぼす。

「……………」

セシリアはあんぐりと開けていた口を閉じ、頭痛でも起こしたのか、頭が痛そうにこめかみ人差し指で押さえながら呟き始めた。

「し、信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ？テレビがないのかしら……………」

「失礼な、テレビくらいあらあね。見てないけど」

あ、セシリアがため息付いた。

「で？代表候補生って？」

「はあ……………まあいいでしょう。このセシリア・オルコットがお教えしましょう。代表候補生とは……………」

「国家代表IS 操者の、その候補生として選出される優秀な人達のことだ。つまりエリート、つか一夏、単語から考えりやまるわかりだぞ？」

セシリアさんの説明を千春が引き継ぎ会話に入ってきた。
なるほど、簡単な事ほど見落し安いつてのは本当なんだな。

「そう言われればそうだな。サンキュ、千春」

「気にすんなダチ公。IS についてわからない事があつたらあ

しが教えてやんよ」

「マジか！？助かるぜ！」

千春と一緒に勉強フラグが立った！

いやっほ〜！！……なんて心の中で受かれてたらセシリアさんが肩をプルプルと震わせてるのに気付いた。

「あつ、あなた…一体なんですか！？突然会話に入ってきて来て！わたくしが話していたのに！」

セシリアは吼えた。

吼えたと言っても子犬が鳴くくらいの声だったが。

「ああ、すみませんMsオルコット。彼とは友人で、つい…」

「ついつて！………？…あなた、わたくしと会った事はございますか？」

苦笑気味に謝る千春に、セシリアは小首を傾げる。

いや、本当に傾げた。

「え？…あ、そっか。あの時はサングラスかけてたから…そりや気づかないか」

セシリアの言葉に何を思ったのか、突然胸元を広げ、現れた胸の谷間からサングラスを抜き取り、それを慣れた手つきで装着した。

「な、なんで…い、いえ！何故あなたが… Ms・カレンデュラが…」

ヒステリックにも聞こえる声で叫んだ。ん？みす、かれんでゆら？
カレンデュラってなんぞや。

「カレンデュラってのはキンセンカの事だ。ほら、一夏から貰ったコレ、キンセンカの花があしらってあるだろ？」

「キンセンカだったのか、それ。で？ミス・カレンデュラってのは？」

なんかさっきから聞いたばっかだな。

「Ms・カレンデュラ…名前、年齢、出生不明のIS操者。付いたあだ名は数知れず。その一つが、『北欧の魔女』。ずば抜けたBT適性値を叩き出した北欧がアイスランドの元代表候補生だ」

…千冬姉、突然後ろに現れないでくれ。

「ちなみにあらゆる国でモデルをしている超人気の操者だそうだが、ほう、グラビアまでしているのか」

千冬姉、何Wikipedia見てんのさ。

「二度目は許さん、織斑先生と呼べ」

スッパーン！

千冬姉、あーた読心術まで会得してたんですか？

スッパーン！

Stage 2 『セシリアと北欧の魔女』（後書き）

セシリアーッッ!!

俺だーッッ!!

結婚してくれーッッッッ!!!!

と言う事でセシリア・オルコットさん登場。

当方オルコット党員なもので、書いてる間異様なテンションでした。

北欧の魔女……なんかもつと厨二病全開なあだ名はないものか……
っ

Stage 3 『代表候補生 vs 一般生徒』

ヒソヒソ

「千春さんってあのミス・カレンデュラなんだって〜」

ヒソヒソ

「ミス・カレンデュラってあの！？3・5世代型のIS、『グレード
ーション』を開発したって言う！？」

ヒソヒソ

「そんな事より、あのミス・カレンデュラのブローチって中学生の
時に織斑君がプレゼントしたみたいなのよ！」

ヒソヒソ

「ええ！？それ本当？」

ヒソヒソ

「もしかや許嫁とか、将来を誓い合った仲とか？」

ヒソヒソ

「きゃあああっ！それ良い！それ良いよ！」

ヒソヒソ

「でも千春さん、ブリュッセルって……」

ヒソヒソ

「ブリュッセルと言えば世界最高の大富豪のあのブリュッセルしか……」

ヒソヒソ

「片や世界一の大富豪の1人娘！」

ヒソヒソ

「片や千冬お姉様の弟で、男で唯一のIS操者！」

ヒソヒソ

「身分を越えた愛！いいなあ〜憧れるなあ〜」

ヒソヒソ

「かつ、カレンデュラさまと同じクラスなんてっ……」

ヒソヒソ

「そっかあ、みうつちはミス・カレンデュラのファンだっけ？」

ヒソヒソ

ヒソヒソヒソヒソ……

もはやそれはガヤガヤだった。

三時間目が始まり二分を過ぎてなお、クラス中の女子の話題の中心は千春の事だ。

どうやら千春は世界的に有名な著名人らしい。

写真集とあるらしい。

つかすげえ欲しい。

渦中の千春は爆睡中。

つか皆そろそろ静かにしようぜ？

千冬姉のこまかみがピクピクと痙攣してるし、山田先生なんておろおろとして泣きそうだし、箒なんて何故か俺に向けピンポイントで殺気向けて来るし。

「あー、んっんっ……！」

一瞬で騒がしかった教室が静まりかえる。

流石千冬姉だ。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特製について説明する」

先程までの授業と違い、山田先生でなく千冬姉が教壇に立っている。

よっぽど大切な授業なのだろうか、山田先生までノートを手に持っている。

「ブリュッセルっ！起きんか馬鹿者！」

よっぽど大切な授業なのだろう。

すやすやと寝ている千春へ向け出席簿を投擲する。

パシーンッ！

良い音が響き千春の頭に激突する。

「ふぎや！？」

激突した衝撃で姿勢を崩し、椅子と共に転んだ。

例えるなら犬神家、逆さまになり下半身が机から見えている。

つかスカートでそれやると下着が見え……

スッパーン

俺の視界を出席簿が塞ぐ。

千春の下着を見る前に一瞬で俺の意識が掠め取られた。
む、無念。

「ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけなかないな」

ふと千冬姉が思い出したように言う。

うん？ クラス対抗戦？ 代表者？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はできないからそのつもりでいろ」

ざわざわと教室が色めきたつ。

俺は例によって事前知識がゼロだ。まったく意味がわからん。

まああれだ、クラス長とか言ってたから面倒な仕事が多いのだろう。もちろんパスだ。

「はいっ。私は織斑君を推薦します！」

出席番号一番、相川さんが元気良く挙手。

へえ、俺以外に織斑って名字の人がいるんだな

「私もそれが良いと思います！」

おう、俺も俺も。つか俺以外になるなら誰でもいいぜ。
まだ見ぬ織斑さん、御愁傷様だ。

「わ、私はブリュッセルさんがいいと思います！」

千春がクラス長かあ、委員長……良いも。

どこまでもついて行くぜ千春しいんぢょう！

「では候補者は織斑一夏、千春・フレイヤ・ブリュッセル……他に
はいないのか？ 自薦他薦は問わんぞ？」

ほうほう、まだ見ぬ織斑さんって俺と同姓同名なのか って
んなわけあるか！

「お、俺！？」

ガタツと音を立てての起立。

そしてクラス中からの視線の一斉掃射。
振り向かなくてもわかる、これは『織斑なら、織斑ならきつとなん
とかしてくれる』という無責任かつ勝手な期待を込めた眼差しだろ
う。

俺は仙道じゃありません。

「織斑。席につけ、黙れ、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いな
いなら二人への投票で決まるが」

「ちよつ、意義あり！俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わんと言った。他薦された者に拒否権などない。選
ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも」

しつこく反論し続けようとした俺を、突然甲高い声が遮る。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

パンツと机を立ち上がったのは代表候補生のセシリアさん。

おお、人望がここで役にたったぞ。
人とは仲良くしとくもんだな。

「そのような選出は認められまけん！ Ms・カレンデュラ、な
らまだしも、男が代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、
このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっ
しやるのですか!？」

そうだそうだ！言ってやれセシリアさん！ ……ん？なんか馬鹿
にされた気が

「それに！実力から行けばわたくしは Ms・カレンデュラの IS 適

性値の『B』を上回る適性値『A+』です！故に、わたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で、極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって男や『幻惑の魔女』とサーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

あれ？俺人間じゃなくなってる。
なんで？

つか魔女って……確かさつき千冬姉言ってたな、『北欧の魔女』って……まさかだけど……幻惑の魔女って……

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

興奮冷めやまぬ　　というよりようやく暖まってきたセシリアは怒濤の剣幕で自己陶醉する。

代表にはなりたくないが今のはちよつと癪だ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛ですよ！？ アイスランドも然り、わたくしの祖国、イギリスの助力なくして完成しなかったIS を、初の3・5世代型と謳って……それがわたくしを差し置いてクラス代表など！」

あーあ、やっちまった。

知らないぞ？もう止まらんぞ？

「イギリスだつて大したお国自慢なんかねえだろうが。世界一不味い飯で何年世界王者だよ」

俺がね。

「なっ………！？」

当然だろ？セシリアは明らかに千春を侮辱していた。

現に窓際の最後列にいる千春はどこか悲しげに苦笑していた。

んなもん見せられたら理性が止めてと俺は止まらん。

気だるげに後ろを向けば、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリアが顔を真っ赤っかにして怒りを示していた。

知らん、千春を侮辱され俺の怒りが有頂天になった この怒りはしばらくおさまる事を知らない。

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「俺の祖国を侮辱しやがったのはどこの英国淑女だよ馬鹿野郎！」

「っ………！よろしいですわ……決闘ですわ……！」

パンツと机を叩くセシリア。

「おう。いいぜ？手袋がないからそのストッキングでも投げつけるか？」

手袋投げつけるのってイギリスだったっけ？

「はっ、破廉恥な！ い、言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い…いえ、奴隷にしますわよ？」

「侮るなよ紅茶党。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいないぜ。ちなみに俺は緑茶党」

俺とセシリアの間にバチバチと閃光がバジル。もとい、走る。

「そう？何せちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！よくあんな苦いお茶が飲めますこと」

「はっ、言ってる。で？ハンデはどれくらい付ける？」

とは言え俺は女子相手に本気で行くわけにもいかない。

「あら？早速お願いかしら？」

「逆だ逆。俺がどれだけハンデ付ければ良いかだ」

と、そこまで言ってクラスからどっと爆笑が巻き起こる。
ちなみに千春と篤は入ってない。

「お、織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったなんて大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにISを動かせるだろつけど、それは言
いすぎよ」

みんな本気で笑ってる。

そうだ、そうなんだ。

今、男は圧倒的に弱い。

腕力はなんの役にも立たない。確かにISは限られた一部は限られ
た一部の人間しか扱えないが潜在的に全ての女性がそれを扱える。

対して男は原則としてISを動かせない。

もし男女差別で戦争が起きようものなら男陣営は3日と持たない。

超時空なアニメなら互角だったのに。

「じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを
付けなくていいのが迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだ
なんて、日本の男はジョークセンスがあるのね」

さつきまでの月光蝶、もとい激昂はどこへやら、セシリアは明らか
な侮蔑の笑みを浮かべていた。

「ねーねー織斑くん。今からでも遅くないよ？セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

俺の席から斜め後ろの女子が気さくに話しかけてきた。

しかしその表情は苦笑と失笑の混じったものでつい俺はカチンと来てしまった。

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはいらねえ」

「えー？それ本気で代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

「……確かに俺はIS同士の戦闘を生で見たことはない。せいぜい千冬姉の現役時代の動画を見た事がある程度だ。だからと言って、男には退けない時があるんだ。セシリア・オルコット、てめえは俺の大切な（友達の）千春を侮辱しやがった！それが俺の退けないたった1つ、たった1つのシンプルな答だ！」

俺は握り拳をセシリアに向けいい放つ。

「きゃあああああつー！！」

それを一言で言うならソニック・ブーム。

クラスから弾けた黄い声はソニック・ブームとなり俺の耳をツンザク。

「静まらんか小娘共っ!!」

ピシヤリ。

一言で人口（誤字にあらず）ソニック・ブームを止めた。
流石千冬姉だ。

「さて、話は纏まったか？ならば……」

「織斑先生、織斑君とM S・オルコットの試合の際に与えるM S・オルコットに与えるハンデを決めましょう。」

45

千冬姉の言葉を遮り意見したのは、千春だった。

「ちっ、千春！？なんでハンデなんか!」

「一夏、お前は代表候補生を甘く見すぎている。それ依然にマトモな勝算なく勝負を仕掛けるのは愚の骨頂。勝利を手繰り寄せる糸口くらいは確保しろ」

千春はネコ被りでとんでもない、真面目な言葉で俺に言う。

「ではブリュッセル、オルコットにあたえるハンデを言ってみろ」

千春は頷き、セシリアを見て、

「M S ・ オルコット、彼女の近接武装の禁止。そして」

最後に俺に視線を向けニコリと笑う。

ぐっ、ちくしょう。この表情には逆らえねえ。

「織斑一夏、彼の訓練に私が付きます」

それはつまり……

「一夏を……一週間でセシリア・オルコットを打倒できるまでに仕立て上げます」

よからう、と千冬姉はニヤリと笑った。

【おまけ】

「あ、あと私も参加するのではたね？…では、私は相川^{あいかわきよか}清香さんを推薦します（きらきらオーラ全開）」

「え！？」

「これで四人、最初にセシリア・オルコットvs織斑一夏。次に私と相川さんとで闘い、両組み合わせの勝者同士で戦うのはいかがでしょうか？」

「ちよっ、おまっ、」

「よかるう。では勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、オルコット、ブリュッセル、相川はそれぞれ用意をしておくように。そうだな、織斑と相川は訓練機を優先して回してもらうよう手配してやるう。それでは授業を始まる」

「織斑先生！わ、私辞退」

「他薦された者に拒否権などない」

「...」

Stage 3 『代表候補生vs一般生徒』（後書き）

ついにオリ機の名前が出ました！その名も『グラデーシオン』3
5世代型なんて中途半端な（笑）

今回、現物のトレスが多かったです。すみませんでした。

適性値の話が出ましたが、現時点で適性値最高はセシリア、ついで一夏。

千春、相川さんに筭と言った順で強いです。（名前が出たキャラだけですが）

しかし、白兵戦ではセシリアは筭に負けるし、同じく千春も苦手なので負けます。

適性値は強さの値ではなく適性値ですので悪しからず。

s t a g e 4 『同居人』(前書き)

今回は初のニヤニヤ回。

Stage 4 『同居人』

「うっ……」

放課後、俺は机の上で頂垂れていた。

にしてもこの机は良い。十年來の友のようにしっくりくる。机で寝るには持ってこいの机だ。

「ちくしょう、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだよ……」

あれから幾多（三時間目から五時間目までだが）の授業を乗り越えわかったが、専門用語の羅列だ。辞書でもなければやってられん。

しかしISの辞書なんて存在しないのでらつまり今日俺は全く勉強せず、つか授業についていけなかった。

ちなみに放課後と言うのに教室には他学年、他クラスの女子が押し掛け、きゃいきゃいと小声で話し合っている。

（うぐ……視線が辛い。勘弁してくれ……）

昼休みなんてそりゃもう地獄だ。

学食に行こうとすればそろそろとみんなついて来るし、学食ではモ

ーゼの海割りだ。人垣のね。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね？よかったです」

「ほえ？」

呼ばれて顔を上げると副担任の山田先生が書類片手に立っていた。至極どうでも良いがこの先生、やはり身長と胸があってない。身長は低いくせに胸は千春並みにあるんだから困ったもんだ。

ちなみに千春は俺よりも身長がデカイ。

対して変わらない数値なのだがやはり好きな相手より身長が下なのは男のプライドが許さん。

牛乳のもっ

「えっとですね、寮の部屋割りが決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキー（カード）をよこす山田先生。

そう、ここは全寮制の学園なのだ。

「あれ？俺の部屋、決まっていなかったんじゃない？」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……織斑くんは政府からは何も聞いてないんですか？」

最後は俺にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。

まあ今まで前例のない男のIS 操者だからな、国としては保護と監視の両方を付けたいようだ。
ちなみに政府つてのは日本政府な。

「そう言うわけで、政府特命もあつて、とにかく寮に入れられるのを最優先にしてみたいです。1ヶ月もすれば個室の方が用意出来ませんが、しばらくは相部屋で我慢してください」

「はい、わかりました。部屋割りはわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備出来ませんし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいた。ありがたく思え」

ダダン、ダンダ、ダーン。

この声、間違いない。千冬姉だ。

今日はダースベイダーよりもターミネーターな気分だ。

「ど、どうもありがとうございました……」

「まあ生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器があれば問題なかるっ？」

「すげえ大雑把ですね。いやまあ確かにその通りですが」

しかし、人間には日々の潤いも大事だと思っんです姉さん。

「では時間を見て部屋へ行ってくださいね？夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取って下さい。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。ただ、織斑君はいまのところまだ使えません」

え？なんでですか？レベル制限とか？解禁イベントはどうすれば…
…俺大浴場好きなのに……

「アホかお前は。まさか同学年の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

俺の表情から読み取ったのか千冬姉は呆れたのうにため息をつく。

「あ、そっかレベル云々の前に性別からして違うか。一緒に入りたいのは否定しないけど」

スッパーンッ！

「お前はもう少し周囲に意識を向けながら言葉を選べ」

「い、イエス マム」

俺はきちゃあきちゃあと騒ぐ女子をよそに、敬礼しながら寮へむかった。

「え〜っと1025室は…っど、ここか」

俺は部屋番号を確認し、ドアのロックを外すためにカードキーをスライドさせる。

おろ？開いてるみたいだ。

ガチャツとドアノブを回し室内に入った俺の目に入ったのは大きめのベットが二つ、感覚を空けて置いてあった。そこらのビジネスホテルより高級そうなベットだ。みるからにふわふわしてそうだ。

「うおお〜、すげえモフモフ感。やべえ、安眠できるってこれ」

荷物を置いた俺は早速ダイブ。これは間違いない、高級ベット&^エ mp;羽毛布団だ。

「誰かいるの？」

ふと、部屋の奥から声がした。

あ〜、確か部屋にもあるんだっけ、お風呂。

「こんな姿ですみません、んつと、同居人になる」

「ち…はる？」

俺の思考力は停止^{フリーズ}した。

だって目の前には頬は赤く上気し、風呂上がり特有の色っぽさを持った、一糸纏わぬ千春の姿があったのだから。停止したわりに細部までガン見してる俺マジ変態。

千春はもそもそと、身体を拭いていたタオルで身体の前を隠し、顔を茹で蛸の如く赤くしていく。制服の上からでもはち切れんばかりの大きな胸も、しなやかながらほどよい肉付きをした瑞々しい脚も、タオルで隠し切れるはずもなく、さらに色っぽさを加速させる。

対する俺も状況を理解し、……

「きゃ……」

「きゃあああああ！？」

叫んだ。

「はあっ、はあっ！」

俺は部屋を飛び出しドアの前で息を荒げる。

見ちゃった見ちゃった見ちゃった見ちゃった見ちゃった！！！！

ち、千春の裸を見ちゃった！！

ど、どうしよう、き、嫌われたか！？

「どしたのどしたの〜？」

「あ、織斑くん発見！その部屋が織斑くんの部屋なの？」

「ラッキー、良い情報ゲット〜」

先程の俺の叫び声を聞き付けたのか、それぞれの部屋から女子がぞろぞろと出てくる。

しかも、困ったことに全員が全員ラフなルームウェアで、かなり男の目を気にしない格好ばかり。

一部の子に限っては長めのパーカーを来て、下にはズボンもスカートも穿いてない。

白の逆三角形がチラチラとのぞいている。

ほかにも羽織っただけのブラウスの合間から肌色の胸元が見えてるこまでいた。

その姿は先程の千春の姿を想起させるには容易で、俺は顔を真っ赤にさせひきつった笑みを漏らす。

ガチャッ

背後のドアから音がなり、ドアと合間から手が伸びおいでおいでする。

まさに救いの手とはこの事だ。

俺は迷うことなく部屋の中へ入った。

「そ、その、…すまん千春！わざとじゃ

」

「んな事わかってるよ一夏、ほら、別に怒ってないから顔上げろって」

部屋に入るなり頭を下げた俺の頭を触れるように軽く叩きながら千春は苦笑する。

「わ、悪い、ちは

」

そこにいたのは女神でしたとき。
太ももまで伸びる髪の毛を結び上げ、上はタンクトップに下はデニムのシヨートパンツ。

もうね、はつきり言って卑怯だね。

千春のスタイルの良さでそれは卑怯だ。

「謝らなつて」

千春はボリボリと後頭部をかきながらベットに腰掛ける。
部屋の手前側のだ。
奥側のベットを狙ってた俺としては嬉しい。

「あたしも相手が一夏だつて言うのに声あげようとしちゃつてぞ。
ごめんな？」

千春の悪い癖だ。俺相手の時ほど卑屈になる。

「んなことねえよ……まあなんだ、よろしくな」

気恥ずかしさを覚えながら妙に冷静に俺は奥側のベットに腰掛ける。

「うん。よろしくな、一夏」

そう言つて千春は苦笑した。

「そつだ、一夏、これお前に」

部屋の風呂へと入ろうとした俺に、千春が何かを投げて来た。

「ん？なんだこれ、携帯か？」

受け取ったそれをみてみれば、掌大の、卵を思わせる形のメカだった。

「携帯型空間ディスプレイだ。右のボタンで起動、後はディスプレイが出てくるから直接操作。防水加工してあるから風呂で使ってみてくれよ」

空間ディスプレイ。別名ホログラフィックウインドウ。

空間に投影されたウインドウに触れる事により、キーボードを必要とせずキーボードのウインドウを叩く事によりタイピングを可能としたなにやらすごい技術。

SFに出てくるあれだ。

メタ発言するなら東さんが使ってたやつ。

「いいのかよこんなもんもらっちゃって」

「いいのいいの、我が親友への細やかなプレゼントだ。IS辞書がインストールされてあるから何か分からない事があったら調べよ。この学園で学ぶ専門用語とかなら全部入ってるはずだ」

へえ、と俺は声を漏らす。

「ISの辞書なんてあつたんだな、いやあ辞書ないかな〜と思ってたんだよ。助かった、サンキュな？」

「おう、じゃあ入ってこい」

俺は頷き、片手に携帯型空間ディスプレイを持って風呂場へ向かう。

ほんとに、千春には感謝してもしきれないな。

「なあ……………」

「……………」

「なあって、お前なに怒ってるんだよ」

「……私は怒ってなどいない」

「嘘つけ、顔が怒ってますよっていつてるぞ？」

「生まれつきだ」

にべもない。

ちなみに今は入学式翌日の朝八時。一年生寮の食堂だ。相変わらず右を見ても左を見ても前も後ろも見ても女子ばかり。職員まで全員女性なのだから恐れいる。

そして俺は『幼馴染みのよしみ

』でこうして箸と朝食を食ってるわけで……

ちなみに俺のメニューは和食セット。味噌汁が五臓六腑に染み渡る。

やはり日本人は白米と味噌汁に限るぜ！

「もぐもぐもぐと」

鮭の切り身を咀嚼しながら千春から貰った空間ディスプレイを起動。昨日はどこまで行ったっけ？確かISの特殊機動を幾つか見てたはず。

「行儀が悪いぞ一夏、いつからそんな風になった」

「う、…一週間後に代表候補生とやりあうんだ、多少の事は目を瞑
つてくれって」

確かに行儀が悪い。しかし待つて欲しい。寝る間も惜しんで訓練し
なきゃヤバいんだ、飯時くらい許してくれよ。

「簡単な挑発になる貴様が悪い」

ピシヤリっ

ちくせう、確かにその通りだよ。

にしても機嫌が悪いな、あの日か？

「……………」

「な、なにも考えてないっすよ!？」

殺気を飛ばされた。

「ねえねえ、彼が噂の男子だって〜」

「なんでも千冬姉様の弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってIS操者かあ、やっぱり彼も強いのかな？」

そしてこれも変わらない。

周囲では女子が一定の距離を保ちつつも『興味津々ですよ。でもが

「つきませんよ」

と言ったむず痒い気配の包囲網。

「なあ筈」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ之さん」

「……………」

名前で呼ぶなって言ったのに名字で呼んだら今度は今度でむすつと
してしまった。

こいつ自分の名字嫌い直ってないな。

まあ仕方ないとも思えるが…

ザワ…

食堂の空気が変わる。

そりゃもうガラリと。

「千春」

「!……」

食堂に現れた千春・フレイヤ・ブリュッセルに先程まで俺に注がれていた視線の数々が移る。

ん?どうしたんだよ第一段と機嫌悪くなって。

「か、カレンデュラ様……」

近くに座っていた女子の呟きが聞こえた。

なんか惚けたような視線が混じっていることに俺はなんとなく気づいた。

「お!居たな一夏。篠ノ之さん、おはようございます」

トレイの上にサンドイッチを数個乗せた千春が、俺の前の席にトレイを置き、挨拶しながら席に座った。　ちなみに筈は俺の隣。

それに呼応してか、

「お、織斑くん!隣いいかな?」

「へ?」

見ると朝食のトレイを持った女子が三名、俺の反応を待ちわびるが如く立っていた。

「ああ、別にいいけど」

というよりここは公共の場だ。
何処に座ろうと自由な訳で……

しかし俺がそう言うと声をかけた女子は安堵のため息を漏らし、後の二人は小さくガッツポーズをしてる。

周囲から妙なざわめきが聞こえた。

「ああ〜っ私もはやく声かけとけばよかった……」

「カレンデュラ様と織斑くんの一石二鳥があ……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る時間じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押し掛けてた子もいるって話だよ！」

「なんですって!?!」

……………ああ、うんそうなんだ。

一年生が八人。

二年生が十五人。

三年生が二十一名、俺と千春の部屋に自己紹介にきた。

同居人が千春とわかつたらその倍の人数が押し寄せた来た。

いや、千冬姉が納めてくれなきゃひどい事になってたぜ。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「ブリュッセルさんも結構多いねっ」

「俺は朝多めにとって夜少なめにするタイプだから」

ちなみに千冬姉から真似しただけなんだが。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないのか？あ、でも千春は普通か」

三人はメニューこそ違うが、飲み物一杯、パン一枚、おかずしかもすくなめ一皿だ。

ちなみに千春は食パンを半分に切ったサイズのサンドイッチを三つ。

卵、ハムサラダ、ハムカツと意外とコーヒー一杯。量はある。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

なんとなく燃費の良さだ。女性しかISを使えない理由って実はこれとか？（伏線にあらず）

「お菓子をーよく食べるしねー」

……間食は太るぞ？

「まあ一夏、女の子には引けない戦いがあるんだよ」

「千春、お前だって女の子だと思ったが？」

思い出されるのは昨日見てしまった千春の裸。

煩惱退散煩惱退散！！脳内画像フォルダへGO！

「あたしだって撮影前には体型維持頑張ってるんだ。基本的に食べる量は変えないけど」

撮影するのはあれか？グラビアとか？欲しいなあ

「ブリュッセルさんっ、モデルのお仕事とかってどんな感じなのかなっ？」

「あ、それ私も聞きたーい！実はファンファン冬の特大号からのファンなの！今でもちゃんと持ってるの！」

ファンファンなるものはいわゆる女性向けのモデル雑誌らしく、中小企業だったらしかったが、千春が初めて紙面にのった号の人氣が凄まじく、今では世界二十一个国家に出版されるほどのトップレベルのモデル雑誌らしい。

千春が出るのはたまにで、その時は表紙、巻頭ページはすべて千春になるんだとか。

保存用、鑑賞用は普通で、名かには布教用を買う猛者もいるらしい。
以上、谷本さん？からの説明でした。

「…………織斑、私は先に行くぞ」

「ん？ああ。また後でな」

さつさと食事を済ませた篤は席を立って行ってしまふ。

俺と篤は幼馴染みだ。

小学一年の時に千冬姉の付き合いで剣道場に通うことになって、四年生まで同じクラスだった。

よく篠ノ之夫妻にはよく夕食に招いて貰っていた。

しかし篤とは最初から仲がよかったわけじゃない。

むしろ確が悪かった。

けれどまあそこは同じ道を歩むもの　　剣道を一緒にやるうちに
仲良くなった…………はずだったのだが、

（あんまりよく覚えてないんだよなあ。昔のこと…………）

まあ大概みんなそうだろう。昔は昔、今は今。

「いつまで食べてる！食事は迅速かつ効率よく取れ！遅刻したらグ
ラウンド十周させるぞ！」

途端、食堂にいた全員が慌てて朝食を食べる作業に戻った。なにせこの学園のグラウンド、一周が五キロある。って冗談じゃねえっ！

「織斑あつ！お前は遅れたら二十周だ！」

身内鼻肩はよくないぜ千冬姉！

まあ多分昨日の騒ぎのせいで気が立ってるのだろう。俺も急いで食べねば。

ちなみに千冬姉は一年生寮の寮長も務めてるらしい。

相変わらずいつ休めてるかわからん人だ。

まあ心配無用、タフネスで我が姉に敵う人類はいない。わりと真面目に。

(ま、今は飯に集中するか)

俺は最後のラストスパートをかけた。

千春は優雅にコーヒーを飲んでいた。

stage 4 『同居人』（後書き）

箒さんマジ空気。

つか裸は不味かったでしょうか？（魚籠魚籠）

タンクトップにデニムのショートパンツは俺のジャスティス。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで少々時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから少し待て。お前の機体は学園で用意するよ
うだ」

「????？」

前の時間に習った専門用語を書いたノートに、千春から貰った辞書
を用いて翻訳していて気づかなかったが、今は二時限目らしい。
突然振られた言葉に思い辺りがあるはずもなく、俺がちんぷんかん
ぷんでいると、教室中がざわめいた。

「せ、専門機!?!一年の、この時期に!?!」

「つ、つまりそれって政府からの支援が出るって事で……」

「ああ。いいなあ……私も早く専用機欲しいなあ」

「一体全体どういうこと？」

「なにがそんなにうらやましいのか。」

「教科書六ページ。音読をしる」

「は、はあ……」

『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、そこ中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、その全てのコアを作る技術は篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状態にあります。しかし博士はコアを一定数以上作る事を拒絶しており、各国家・企業・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取り引きする事はアラスカ条約第七項に抵触し、全ての状況下で禁止されています』

「つまりあれだ、国家にも属してなくて企業なんかにも属してない俺は特別待遇と」

「理解が早いのか悪いのかわからんな。そうだ、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意さる事になった」

にしても専用機か…なんかこう、胸が熱くなるな。

「あ、あの先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なのですか？」

女子の一人がおずおずと挙手して千冬姉に質問する。

……まあ、篠ノ之なんて名字はそうそうないし、いつかはバレるよな。

篠ノ之束^{たばね}。

ISをたった一人で作成し完成させた稀代の天才。千冬姉の同級生で、そして算の実姉。

天才なんて言葉でくくり付けておくのも愚かしい程の天才。

もはや人外魔境、『鬼才』とか『神才』^{しんさい}と呼んだほうが正しいだろう。

「ああ、篠ノ之はヤツ　　篠ノ之束の妹だ」

おい教師、個人情報バラしてもいいんかい。

大体、束さんは今超国家法に基づいて絶賛手配中の人物だ。犯罪者というわけじゃないが、各国には国の思惑があり……

（まあ、束さんにとつちやどうでもいい話なんだろう）

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ISの操縦教えてよっ」

授業中だというのに筭の周りに女子がわらわらと集まる。

おお、これは端から見るとなかなかおもしろい光景かもしれん。道理で俺の時にも誰も助けてくれないわけだ。

（そついや千春が鍛えてくれるって言うってたが、一体どんな感じになるんだろ。放課後に第三アリーナだったっけ）

「あの人は関係ない！」

突然の大声。俺は思考を中断されて、ぱちくりと瞬きした。

見ると、筭に群がっていた女子達も軒並み同じような表情をしていた。

「……いきなり大声を出してすまない。しかし私はあの人じゃない。教えられるようなことはなにもない」

そう言って、筭は窓の外に顔を向けてしまう。

女子は盛り上がったところに冷や水を浴びたような気分のように、それぞれ困惑や不快を顔にして席に戻った。

(……箒……)

背中から箒の表情がわかるはずなのに、何故か俺には箒の表情が手に取るようにわかった。

「さて、授業を続ける。山田先生」

「はっ、はひ！」

こんな状況でも構わずマイペースな千冬姉を尊敬するよ。

山田先生も箒の事が気になる様子だったが、そこはやはりプロの教師。

慌てながらも授業を始めた。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

はあ、なんで休み時間早々俺の席にやってきて腰に手をあてて偉そ

うなポーズとってんですかセシリアさん。

お前好きだねそのポーズ。

別にどうでもいいが。

「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんものね」

ガリガリガリガリ。

ノートに先程習った事を書き写す。

辞書を用い、専門用語を理解した上で書き写すので、よく理解できる。

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ

「人の話しをお聞きなさい！」

バシンツ。セシリアか机を叩き声をあげる。あ、ノートが落ちた。

「ああウザったいなあんたはもうっ！！あんだよ、珍しく猛勉強中の俺を止めやがって！フェアだかフェアだか知らねえが少し黙っててくれ！」

「はっ、はは破廉恥ですわ！これだから男はっ！」

「呆れたならどっか行けよ！これだからドリルはっ！」

「なんですって！？」

「なにおう！？」

むぎむぎむぎむぎっ…！

額と額をぶつけて一進一退の攻防。

このドリル、なかなかやる。天を穿つドリルは伊達じゃないぜ。

「まあまあ落ち着け一夏、セシリアさんも落ち着いて」

そんな俺とセシリアの間に割り込んで来たのは千春。

「千春…」

「み　ブリュッセルさん…」

「千春でいいよセシリアさん。でさ一夏、今日の訓練なんだけど篠ノ之さんも連れてきてよ」

クスリとセシリアに笑い、次いで俺に微笑みかける。

ん？

「なんで箒？」

「なぜ私が！？」

ガタツと音がすれば、箒が慌てたように立ち上がった。

「あ、ちょうどよかった。打倒セシリアさんのためにどうしても力を借りたいのよ」

千春はセシリアをチラと見てから両手を合わせて頭を下げた。

その一連の動作を見てセシリアはふふんと鼻を鳴らす。

「わたくしに勝利出来ないのを知りながら、無駄な努力ですわ」

「やってみなきゃわかんねえじゃねえか！」

「わかりますわ。あなたとわたくしには歴然とした実力の差がありますもの。例え専用機を得たところで、素人にならないあなたを下すなんて赤子の手を捻るが如くですわ！」

セシリアは今にもおーっほっほっほっほっ！と笑い出しそうな勢いだ。

「おーっほっほっほっほっ！」

あ、ホントに笑った。

「……………」

箒と言えば、ぶすつとどこかむくれたような顔で千春を見ていた。ぶすつとと言ったが別に箒がブスなわけじゃない。

幼馴染みの視点から見させてもらっても美人だし、スタイルもなかなかのものだ。

箒の彼氏になる奴は幸せものだな。

「一夏に剣の修行を付けて貰いたいのよ」

額かない箒に、それでも千春は頭を下げる。

「……………わかった。わかったから頭を上げてくれ」

箒が折れた。

「ほんと！？ありがと篠ノ之さん！」

「っ！？は、はなれろっ」

ああ〜羨ましいなあ千春のハグ。

「ああ、ごめんなさい。と、言うことで作戦会議と行きましようか
！」

千春は俺と箒の手を取り上機嫌で歩き出す。

「ちよつ、千春!？」

「どこへ行気だブリュッセル!？」

「ノンノン、千春でいいよ篠ノ之さん。作戦会議〓仲間会議。仲間になるには『裸の付き合い』か『同じ釜の飯を食う』かだ。さすがに『裸の付き合い』は無理でしょう?」

「と、当然だ!」

「いや、別に俺はバツチ来いなんだが……って冗談ですゴメンナサイっ!？」

隣を歩く筈からの殺気が痛いぜ。

「でだ。二人にはISを用いた剣道の訓練をして貰います」

学食のラーメンを啜りながら千春が切り出す。

三人の位置は、俺の隣に筈、そして俺の前に千春だ。

ちなみに俺と筈は和食ランチ。

「ISで?」

「そ、篠ノ之さんは中学生の女子剣道全国大会で優勝した猛者と一夏から聞いてるわ」

そう言えば昨日の夜、風呂から出だ後箒のこと話したっけ。

「んで、私は一夏にIS を教えるから、篠ノ之さんに一夏に剣道を教えてもらいたい」

「そういう事なら……わかった、受けよう……その…千春。私は箒で良い」

箒はそう頷き、千春を名前で呼んだ。

「……ん、わかったよ箒」

嬉しそうに、本当に嬉しそうに千春は笑った。

stages 『同じ食堂の飯を食う』(後書き)

うおおおん、はやく戦闘を描きたいぜっ(笑)

次話で漸く白式が登場するか!?

感想待ってます!

「さあやって参りました！一年一組クラス代表決定戦！司会は私、二年のまゆみがおるこ黛薰子。よろしくね！」

わああああ！！とアリーナが湧く。

座席完売満員御礼、どうしてこうなった。

本来一組内のみで行われるこの試合に、何故か全校生徒が集っていたのだ。

千冬姉いわく、カレンデュラにイギリス代表候補生、そして男にして唯一ISを動かせる俺。

ネームバリューがやたら高いらしい。

さてさて、今俺は観客席にいる。

千春対相川さんの試合を見るために来たんだ。

「相川さんには悪いが、この試合は千春の勝ちだ。一夏、千春の機動を盗み見ておけよ？」

「ああ、訓練の時も『千春自身の機動』は見せて貰えなかったからな」

隣の席に座る筈の言葉に頷き返す。

あれから一週間、千春と箒と訓練を続けて来たが、千春はある人物の機動を真似して俺と戦っていた。

そしてこの一週間で、箒と千春の仲は良くなり、今では千春の方もねこ被りせずに接するようになった。

「お、箒はなんか飲むか？」

観客席で、千春と相川さんの二人が登場するのを今か今かと待ちながら辺りを見回すと、観客席を歩く所謂売り渡しの人達がいた。メジャーリーグの観客席でよくみるようなあれだ。箒の肩を軽く叩き、売り子の人を指差して聞く。

ちなみに売り子さんも勿論女の子。

「む？私はなんでも」

「わたくしは紅茶でお願いしますわ」

「私はビールを、山田先生は？」

「び、ビールはダメですよ織斑先生！え、えと、オレンジジュースで……」

「融通の効かん……では私は炭酸物を」

「オツケー、すみませーん！」

売り子さんを手を振りながら呼ぶ。

ウーロン茶に紅茶、え、あつ、ない。

ミルクティーなら？じゃあそれで。あとオレンジジュースとコーラ
二つでお願いします。

ホットドック？ あ、いいですねそれ。

じゃあそれ五つで。

あ？手ではしたない？？うるせえばか淑女、やまじこつ言う場所ではこつ
いう食べ物食うのが作法なんだよ。ほら、郷に入っては郷に従え
つて言うだろ？

それにさ、みんなでわいわい楽しく騒ぐのも、乙なもんだぜ？

よしよし偉い偉い。そんなセシリアにはプレゼントだ。
ひとつマスタード多めをお願いします。

「行き渡った？」

売り子さんから買った物を各自に配り終え、確認。

どうやら行き渡ったみたいだな。

ではいただきます

「って！なんでここにいるんだよセシリアー！？」

いつの間にか俺のもう片方の隣の席にセシリアが座っていた。

そして箸を間に千冬姉、山田先生と並んで座っている。

「随分と今さらですわね。別にわたくしが何処に座ろうと自由ではなくて？」

セシリアは口元を手で少し隠しながらホットドックを口に運ぶ。

俺や千冬姉はそれに習いホットドックを一口、箸や山田先生も続く。

パリッ！

うおお、すげえ。ソーセージがパリッって鳴って肉汁が溢れ出す。

パンもまた香ばしく焼けていて、ケチャップとマスタードがいい味わいをもたらす。

うめえ、何がなんでもうめえ。

海水浴場の海の家で食う焼きそばとかカレーとかと違い、こっちは明らかにレベルが高いのがわかる。お祭り騒ぎで美味しさが増すのは同じだが。

「~~~~っ!?!?!?」

「にしてもなんでこんな騒ぎになったんだろ」

美味しさに悶えるセシリアを見て優しい笑みを浮かべた俺はふと空に疑問を投げ掛ける。

「生徒会長が今回の一件を嗅ぎ付け、学校公認のイベントとして全校生徒を参加させたんだ。クラス対抗戦前のデモンストレーションとでも言えば聞こえはいいか」

空に投げ掛けた言葉を千冬姉が拾い上げ、俺に投げ返す。

「~~~~っ!!!(怒)」

バシバシと俺の背中を叩くセシリアを無視し、俺は二つ持っている紙コップのうち、コーラが入っている方を口に運ぶ。

うん、やっぱりファーストフードにはコーラだよ。

「お、織斑君…そろそろオルコットさんに飲み物をあげたほうが…」

山田先生は俺とセシリアに視線をチラチラと向けながら困ったように言う。

確かに、セシリアの顔は赤を通りすぎてなんか黄色い。

「ほらよ」

セシリアの前にミルクティーの入ったカップを差し出せば、勢いよくセシリアに強奪された。

全く、ミルクティーが欲しいならちゃんと言えよな？

「あつ、あああつ貴方は鬼ですよ!？」

「残念、鬼の弟だよ」

スッパーンっ！

ざわめく観客席に一発、いい音が響く。

そうだった、千冬姉がいたんだった。

つか篤が間にいるのに、全く動かず出席簿アタックかますこの人はなんだ？

もはや達人とかそう言うもんを超越してるね。

パリッ

んんん、やっぱりホットドックうめ

「~~~~~っ!?!?!?」

俺は思わず手で塞いだ。

一体なんだ！？このマスタードを馬鹿みたいに入れられたような辛さは！

鼻が染みるぜこんちくしょう！

「これはお返しですわよっ！」

涙目になりながらも、大きく口を開いた俺にマスタードたっぷりなホットドックを詰め込みやがったセシリアはドヤ顔でキメる。

何言ってるのかよくわからんがしてやったり、な顔のセシリアを見たらカチンと来た。

その前にコーラで……あれ？ない。手に持ってたはずのコーラがない。

「ふふん」

！！！！！??????

成る程、してやったり顔になるわけだ。

セシリアの太ももの間に、俺のコーラがッ

「泣いて謝るなら……返してあげてもよろしくてよ？」

いまさらだがセシリアのスカートは他の生徒より長めだ。

膝下くらいまであるスカートはセシリアの持つ所謂、気品とかそこからへんのせいでドレスに見えるくらいだ。しかも似合ってる。

そう、セシリア・オルコットのスカートは長めなのである。

そのセシリアが太ももでコーラを挟んでいるわけで……つまりはスカートをたくしあげてるわけで……ストックキングとスカートの境界線、この絶対領域が少しでもずれてしまえばストックキングの上から見たパンティが見えてしまいそうなので……

長ったらしい前口上を付けたが、つまりは無理矢理とろうとしたら変態に見えてしまうというわけだ。

しかしそこは空気が読めると定評のあるこの俺織斑一夏、泣いて謝ったりなんてするもんか。

躊躇わずセシリアの口に俺のホットドックを突っ込み、空いた両手でコーラを奪いにかかる。

そして俺は両手でセシリアの股をこじ開け、コーラを奪い取る。

ふっ！……完全勝利だばか野郎。

貴様の敗因はたったひとつ、たった一つのシンプルな答えなんだよワトソン君。

テメエは俺をおこらせ

スッパーンっ！！

「何、教師の前で淫行をしてるか馬鹿者がっ」

勝利の美酒に預かろうとした俺に降り下ろされた正義の一撃。

それを受け俺は勢いよくセシリアの太ももにダイブ。

顔を太ももで挟まれ危うく窒息しかけましたとき。

Stage 6 『幸せホルド』（後書き）

すみません、白式なんて影も形も出て来ませんでした（笑）

おつかしいなあ。対相川さんはソッコーで終わり一夏VSセシリアに移るつもりが………端からみたらバカップルな二人に……っ

このSS誰がメインヒロインだったっけ（笑）

ここで皆様にアンケート。

一夏VS セシリア戦後、セシリアのデレ方をアンケートします。
具体的には、

- ・原作っぽい何か
- ・今のツンツンした感じだが、多少は認め、福音辺りで完全に墜ちる

前者ではなんつーか全体的に妄想家になってエッチな娘に

「セシリアはエロいな〜」ルート。

後者は好敵手ながら一夏を一人の男として意識する「ツンデレ」ルート。

旨味があるのは前者ですね〜

アンケートと言っても確実に変わるわけではないのであしからず。

では感想などお待ちしております！

「へえ、相川さんは打鉄か」
うちがね

手に木刀、殺気を纏う修羅一人。

「打鉄は純日本国産の第二世代型のIS。日本刀のような2m超の近接ブレードを基本武装とし、防御に重点を置いた、初級者から上級者までの多くの操者から高い評価を獲得した機体です。」

顔を朱に染め、拳を握る修羅ここに。

「いやあ、山田先生は詳しいですね」

頬を染め、ため息混じりに出席簿を構える修羅が座す。

「こ、これでも先生ですからっ」

あはははは。

今日が俺の命日かも。

理由は簡単。見損なっただぞと何度も呟き、殺気を纏う筈。

ハレンチだと何度も呟きながら殺気を飛ばすセシリア。

その二人に囲まれながら、さらに篝の隣に座す千冬姉。
こんな場所で…とか、まだ早いとか、私になら…とか、子供は…と
か、呟いてるけど一体なんの話だ？千冬姉？

まあそんなわけで、試合が終わるまで待つてやると慈悲深い御言葉
をくれた篝に感謝し、アリーナに登場した相川さんに目を向けた。

山田先生の説明通り、日本産のIS『打鉄』を纏った相川さんがそ
こにはいた。

特訓の最中、俺と篝が使用していたISだ。

「千春はどっちなのかな？ラフォールと打鉄」

「え？…どう言うことですか？」

俺の言葉にセシリアが反応する。

その表情は若干険しい。

「ん？特訓中にさ、千春はラフォールか打鉄で俺達と戦ってたから
な。両方使えるんだよ」

「ああ、そう言うことですよ。…多分、どちらでもないですよわよ？」

クス、とセシリアは笑う。

「どつ言つことだ？千春はそのどちらかしか使っていなかった……まさかつ！？」

箒はセシリアの言葉に気づいたのか、目を見開きアリーナに目を向ける。

「箒？まさかつて」

何かしらに気付いたらしい箒に聞こうとするも、アリーナに爆発音にもまさる歓声が鳴ったからだ。

「千春？…なんで…」

ISを付けてないんだ？

それに、制服のままなんだ？。

side 千春

……久しぶりに私の視点になった気がする。

まあいい、今は試合に集中しよう。

目の前に広がるはアリーナ。そこに『打鉄』を纏った相川さんがいた。

緊張で顔が強張っている。

なかなか可愛いもんだ。

しかし手心は加えない。

行くわよ、私…っ！

「展開っ！」

首に付けた黒のチョーカーに触れる。

チョーカーがほどけ、量子分解される。

次いで光が私を包む。母の腕に抱かれるような心地よい感覚だ。

「『グラデーシオン』………ここに見参！」

私は灰色の鎧を纏う。
名をグラデーシオン。『色彩』を纏う。

s i d e o u t

え！？あたしの視点こんだけ！？

もうちよっとやらせてよ！

……では気を取り直して、

「……………専用機？」

思わず呟いた。

(一夏あああっつ！！)

何故か千春がタパー、と涙流してる。どうかしたのかな？

千春のISは打鉄でも、フランスのラファール・リヴァイブでもなかった。

非固定型の翼や武装が一般化して来た今頃では珍しく、固定された計六枚、三対の多方向加速推進翼。

スラリと伸びた脚部や腕は一般的なISよりも人間味があり、なにより胸部、

制服から一瞬でISスーツに着替えた千春の胸はISの胸部装甲により、持ち上げられるように固定され、山田先生よりある

（僅差だが、中学時代の親友との、二人の胸部写真を交えて論議した結果、千春の方が大きく、形が良いと完結付けた。余談だが、その友人は山田先生のベビーフェイスと背丈、そしてスタイルなどが好みにマッチしているらしく、ロリ巨乳最高ー！！などと、ほざいていた。） 胸がさらに強調されていた。

もはや眼福というレベルではない。
ヤバイのだ。

ドカツ！バキイツ！スッパーンっ！！

もはや何も語るまい。言うなら一言、一周囲三人からの多重連続同スリー・プラットフォーム時攻撃。とでとっておこう。

しかし俺は傷みをこらえそれでも幻想を望み続ける。

理想を抱いて溺死しろ とはよくいったものだ。千春からの受け売りだけど。

千春の巨乳リネックに溺れるなら俺は死すら厭わない。

「がっ、がぶっ………なんでセシリアまでやんだよ」

しかし溺れていないのに死にたいとは思わん。

最初の打撃音の殴り担当者、セシリア・オルコットに非難の言葉を

「お黙りなさい変態！」

「へんっ！？んなっ！！」

「否定するつもりか一夏っ！きつ、貴様、千春の…そ、その…胸を
っ見ていたであろう！？鼻を伸ばしニヤニヤとっ！」

真っ向から叩き斬られた。そりゃあよう真っ向唐竹割りみたいな感
じで。

二人とも腕で胸を隠すようにし、顔を赤くしていたのはなんでさ？

「確かに大きさでは叶わん、しかし私とて感度では負けんっ。胸も
ある方だ、それに別に女の魅力は胸だけではない。

腰のくびれや尻、うなじや脚。もはや玄人の域だが鎖骨を愛でる者
もいるのだしな……

だが、一夏の好みは一体なんなのだ？部屋の中を物色したが出るの
はグラビア程度、しかも分かりやすい所にだ。明らかに^{テコイ}困だろっ。

一夏に助言者が付いたと見るか。あの程度では一夏の性癖はわから
んからな……一度徹底的に……」

千冬姉、貴女はぶつぶつと何を……

「あっ！始まるわ！」

俺の席の後ろ辺りから声が聞こえ、俺はその言葉に呼応しアリーナを見る。

アリーナの上空には投射型ウィンドウ（千春から貰ったやつ的大型版だ）に写されたのは円の中にある数字の五。

四

まるで映画の始まる時のカウントのように円が消えていき、数字が減る。

三

先程まで騒いでいた観客が静まりかえる。

二

シンツ……と、静まり帰ったアリーナ。

しかし、静かなのは確かだが、それは所謂嵐の前の静けさだ。

一

零

始まりの鐘が鳴ると共にアリーナは歓声に包まれる。

ドオオンッ！！

先に仕掛けたのは相川さんだ。

後付け武装イコライザのバズーカを展開し、開幕直後にぶちかます。有効な手だ。

しかし、届かない。観客席から見ていたからわかったが、相川さんが放ったバズーカは千春に当たる前に爆発した。

爆煙が千春を包む。

一刻置いて、爆煙からそれは現れた。

「機体の色が！」

「これが3・5世代型、か。なるほど、確かに追加装甲は付けていないな」

俺は声をあげた。

装甲を深い蒼で染めた千春のISは翼を拡げ飛翔する。

「織斑先生、千春のISの特徴を知っているのですか？」

篤が千冬姉に問いかける。

うむ、と千冬姉は頷き、脚を組んだ。

「ブリュッセル、奴のISの名称は『グラデーション』機体の装甲^{モト}色によりまた別名が付く。

奴の最大の特徴はモード別に得意距離^{レンジ}が異なり、それを『戦闘中』に変更、選択ができる事だ」

「へ？」

それだけ？

「それだけ？とでも思ったな？」

千冬姉はジロリ、と俺にジト目を向けた。

い、いや…だって…ねえ？

その凄さがよくわからんし。

「今各国は第三世代型ISの開発・研究に勤しんでいるのは知っていますよね？」

山田先生が人差し指をピンと立てて聞いてきた。確かこの前の授業で習ってたはずだ。なんでも、

第一世代型は『IS』の完成を目指した世代。

第二世代型は後付け装備による戦闘の用途の多様化。

そして第三世代型は『イメージ・インターフェイス』を用いた特殊兵器の実用化を目指した世代だ。

「その通りです。そして、実際には第三世代型は実用化できるレベルにはまだ達してません。その理由のほとんどが燃費の悪さが上げられるのですが……ブリュッセルさんのISは、その第三世代型ではなく、卓上の空論と言われている第四世代型を目指したISなんです」

山田先生がゴクリと生唾を飲み込み、神妙な顔つきで解説してくれた。神妙なのだが、山田の童顔のせいでなんか可愛く見えた。

「目指した……ああ、だから3.5世代型なんて言われてるのか」
「いまだ完成はしておらず、故の3.5。」

装甲を蒼く染め上げたそのISは、翼を拡げ空を舞う。

迫る弾丸を踊るように避けるその様はまるで…

「クツ、『幻惑の魔女』いや、『ダンシング・フェアリー踊る妖精』か。よくいったものだ」

千冬姉が面白そうに呟き、セシリアを目だけ向けて見る。

「……………相も変わらず…悔しいですが、認めるしかありませんわね……………」

そのセシリアは舞う千春の姿を忌々しい物を見るような目で見ていた。

千春が飛ぶ姿は誇張も何かしらもなく美しかった。

千春の舞いはこのアリーナにいる者全てを魅了する。

対戦相手である相川さんも例外なく。

俺の席の周りの女子達も見惚れているようだ。

なのに何故、セシリアは親の仇を見るような目で……………。

「あつ……………はあ、彼女 Ms・カレンデュラと合間見えたのはB
T兵装の評価試験の際です。わたくしと彼女は当時、試作品とも
呼べぬソレを装備したISで評価試験、模擬戦を行いましたわ」

俺と目があったセシリアはため息を漏らすも、千春を目で追いかける
ながら呟くように語り始めた。

観客が魅了されていたのは幸いだ。

小さめのセシリアの声が良く聞こえる。

「しかし、彼女はそんな事はどうでも良いとばかりに、そのISで空を飛び始めました。わたくしも、最初こそ武装を展開し彼女を撃ち落とそうとしましたわ。……けれど、彼女はその時も、全てを魅了するあの舞いで魅せました……空を遊ぶように……」

空を遊ぶ……確かにな、と頷く。

「その場にいたスタッフ一同魅せられ、十分以上経った後に気付いたのか、慌てたように戦闘を促しましたわ。結果は彼女の勝利……魅せられていたわたくしは、突如攻撃に転じた彼女について行けず、負けてしまいましたの。……二度目の戦闘では速攻で終らせわたくしが勝ちましたが」

ふふんと鼻をならし胸を張った彼女は千春をまた見る。

「あいも変わらず、魅せる機動ですわ」

セシリアは大きいため息を付いた。

「だから、サーカスなのか」

俺は一週間前、セシリアが言っていた言葉を思い出す。

「確かに幻惑の魔女だな……本当に……綺麗だ」

俺は思わず立ち上がり、空を舞う妖精に見惚た。

side 千春

さて、そろそろ決めるかな？

私はアサルトライフルから放たれる弾丸を回避しながらも、手に持った二八口径ビームライフル『ディ・バスター』で相川さんを狙い撃っていた。

結構な数を当てられ、シールドエネルギーが底をつき掛けているのか、若干処じゃない焦りがみえる。

さて、と思った時、ハイパーセンサーの視界内にある人物を見つけた。

「一夏…？」

直立不動で私を見る一夏に、私はクスリ、と笑ってしまった。

身体を前に傾ける。ソレだけで私は前へ向かって飛べる。

段々と一夏が近くに見えて来た。ハイパーセンサーを使わずに、だ。

そして私は止まった。アリーナを取り囲むバリアーの目の前で。

「一夏」

s i d e o u t

名を呼ばれた。

織斑一夏は弾けるように席から離れ、アリーナと観客席の境界線まで走る。

シールドバリアーで隔てられ、二人はその場に立ちつくす。

どちらかが先にシールドバリアーに触れた。

それ以上まえには手は進まず、それは透明な壁だ。

そしてどちらかが次いでシールドバリアーに触れる。

触れあう事など出来ない。

壁一枚隔ててのふれ合い。

しかし本来伝わるはずのない温かさが伝わった気がした。

「一夏」

「千春」

同時に互いの名を呼ぶ。

「待ってる。勝って来い」

「待ってる。絶対に勝つ」

互いにニヤリと笑い、どちらからでもなく手を離す。

妖精は飛び去り、青年は見送った。

Stage 7

『妖精』（後書き）

衝撃の事実！

千冬姉はブラコンだった！？

……わりと衝撃でもないか（笑）

七話目投稿です。おいおい、まだ鈴が出てくる前だったのに七話か
よ

鈴が出てくるのはいつになるやら。

感想、お待ちしてます！（前話のアンケートも待ってます）

千春と相川さんとの試合後、15分のインターバルを挟み、俺とセシリアの試合が始まる。

言わずもがな、千春は相川さんに勝利した。

打鉄にも装備されていた刀型の近接ブレードを二振り。

それを交差させて構え突撃、打鉄とぶつかり合うと同時に振り抜く、するとどうだろう。なんとか十字切り、とかクロス・ブレード！なんて必殺技の名前が着きそうな剣の軌跡を生み出した。

いやまあ実際に千春が必殺技を叫んでたしね、オープンチャンネル大音量で。

妖精のような舞いからの荒々しい攻撃は、なかなか心を揺さぶるものがあった。千春の胸も揺れていた。

バキィッ！！

「ふっ、不埒な事を考えていただろう？しかも千春でっ」

箒が放った木刀の一撃を脳天に一発食らった俺は第三アリーナAピット内の床を転りまわった。

「しっ、仕方ないだろ！？ 箒だつて見てただろうが！ あの胸を！ 人類の秘宝を！ 胸革命を！」
バストレホリユーション

バキィツ！！ズバシャアツ！グチャアツ！！

拳を振り上げ力説していた俺に箒が放つ三連撃が直撃する。

またしても転がる俺。頭いてえ

「篠ノ之、よくやった」

どこからか現れた千冬姉がサムズアップ。

「千冬姉？なんでここに？」

「本来この戦いは一組だけで処理するものだった。しかし全校生徒を巻き込んでしまった以上他の教員も出る羽目になってしまった。故に一回戦こそ休みを貰ったが後の三回戦までは私と山田先生がジャッジを担当する」

なるほど、山田先生も千冬姉もお疲れ様です。

「そう思うなら面倒を起こすなよ？」

だから千冬姉、いつの間に読心術なんか……独身だけに読心術、な
んちて

「ふん、安心しろ、馬鹿な弟にかける手間がなくなれば、見合いで
も結婚でもすぐにしてやるさ。………まあ手間がなくならなければ
……」

千冬姉はどこか寂しそうな顔でため息ついた。最後の方は「ごによ
ご」によと呟いて聞こえなかつたけど。

「にしても、……俺のIS来ないな」

「来ないな」

そう、来てないのである。

一回戦目で千春達が先に試合をしていたのも、俺の専用機の到着が
遅れるかららしいのだ。

だが……

「流石に時間がキツいか、……千冬姉、打鉄は出せる？」

「打鉄か？……どうするつもりだ？」

千冬姉が怪訝な表情になる。

「最悪、打鉄でセシリアと戦うよ。特訓中に使ってたから、動かすなれてるし」

そう。箒と千春、二人と特訓してた時はずっと打鉄を使っていた。

打鉄で勝つのは難しいだろうが、不戦敗なんてことにはなりたくない。

「そうか、では」

千冬姉は頷き、踵を返そうとした。
その時、

「織斑くんっ織斑くんっ！来ましたっ！来ましたよっ！」

スピーカーを通しての山田先生の声がAピット内に響く。

来ましたっ……まさかっ

「織斑くんの専用機がっ、来ましたっ！」

ピットの搬入口が音を立て開いていく。

そこに鎮座していたのは、

白だった。

無骨な装甲は須らく白。純白の白を纏ったそれは、王に忠誠を誓う騎士の如く待っていた。

そう、こうなる事をずっと前から待っていた。この時を、ただこの時を。

「これが…俺の…」

「はいっ！織斑くんの専用IS 『白式』びやくしきです！」

白式に触れる。

試験の時、初めてISに触れた時に感じたあの電撃のような感覚はない。

いや、そんな『弾かれる』ような感覚じゃない。

むしろ俺を白式が受け入れようもしてるとさえ思える。

「…俺は…こいつを知ってるか？……」

様々な情報が頭の中で錯綜する。

わかる。理解出来る。これが何なのか、何のためにあるのか……
全てがわかった。

武装はただひとつ、近接ブレードただ一振り。

「雪片。……なんの因果か千冬姉と同じブレードか……」

雪片、その名を呟けば千冬姉が目を見開いた。

「参ったな……負けられないじゃないか。いや、元より負けるつもりはなかった……問題ないか」

千冬姉は人類の中で最強の部類に入る。

だがしかし『最強』ではない。

この雪片はその千冬姉を『最強』と呼ばせた一因。

一夏は確信した。

セシリアに、勝てる...と。

stages 『そこに座する者』(後書き)

今回はちょっと短めです。

次回、やっと一夏VSセシリアです！

いやぁ楽しみだ！

感想お待ちしてます！

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化してくれる」

千冬姉の言葉通り、装甲を開いている白式に身を任せる。

抱き止められる感覚がしてから、すぐに俺の身体に合わせて装甲が閉じる。

カシュツ、カシュツ、という空気を抜く音が響く。

感覚が鮮明になる。各種センサーが告げてくる値は、どれも全て普段から見ているかのように理解出来た。

「…これは…セシリアか？」

戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。『ブルー・ティアーズ』確認。

「ISのハイパーセンサーは問題なく稼働しているな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもと同じような態度に見える千冬姉の、その微妙な声の震えま

で感知出来る。

心配してくれているのだ。

「ああ、大丈夫だよ千冬姉。心配してくれてありがとう」

「そ、そうか」

ほっとしたような声。

ハイパーセンサーがなければ恐らく気付かなかったであろう声のブシだった。

「すう……はぁ……」

息を大きく吸い込み、勢いよく吐き出した。

ゲートが開く。

俺はカタパルトの上に立ち、出撃に備える。

足をカタパルトがロックする。

「っ……………」

ふと、筈を見た。360°。全周囲を見渡す事が可能なハイパーセンサーを使ってるために、何か言いたげな筈が見えたのだ。

「なあ箒」

「なっ、なんだ？」

「行ってくる」

ただ一言、箒を一回も見ずに言う。

「あっ…ああっ必ず勝って来い！」

俺はその言葉に首肯しゅこんで答えた。

「織斑くんっ、発進、どうぞー！」

アリーナへの道が完全に開き、山田先生の声がピットピットに響く。

「織斑一夏。』白式』、行きますっー！」

前傾姿勢を取り、俺は出撃する。

カタパルトが稼働し俺をアリーナへと引きづり込む。

stage 9

ブルー・ティアーズ
『蒼き雫』

「あら、逃げずに来ましたのね」

アリーナの上空、見下ろすようにセシリアはいた。

いつものように腰に手を当てたポーズが様になっている。

しかし俺の関心はそんなところにはない。

鮮やかな青の機体。

『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じさせる。

そして同時に、千春の蒼い『グラデーシオン』と似通った外見だ。

いや、『グラデーシオン』が『ブルー・ティアーズ』に似ているの

か？

前に、イギリスの技術だとかなんとかセシリアが言ってたし。

その『ブルー・ティアーズ』を駆るセシリアの手には2mを超す長大な銃器。

と一致
検索、六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』

「最後のチャンスをあげますわ」

腰に当てた手を俺に向け指差す。

自信の現れか余裕なのか、砲口を下げてままだ。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、…許してあげないこともなくってよ？」

そう言っつて目を笑みに細める。

警告、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。
セーフティのロック解除を確認

んな事言われなくてもわかってる。あれは狙撃手、それも狩りをするような目だ。

俺は『白式』から送られてくる情報を一度頭の中で整理する。それでもしなけりゃセシリアにも、『白式』にも飲まれてしまいそうだからだ。

「そっか、じゃあごめん！」

「えっ？」

俺は頭を下げた。おいおいセシリア、自分から薦めといて唾然となるなよ。

「俺、お前と試合する事が決まった時も、どうにかなるだろ、とか思ってた。けど違かった……」

頭を下げながらも、俺は続ける。

「千春と特訓してわかったんだ。ISの操縦者として、『国家代表選手候補生』がどれだけすごいのか。そりゃそうだよ、国の中から選りすぐりの選手集めてんだもん。……」

顔を上げ、ため息まじりに頭を搔く。

「千春は言ってた。「セシリアは私より強い。当然だ、彼女は努力を怠らなかつた。彼女はIS操者として天性の才を持つ。だがそれだけじゃ代表候補生にはなれない。……そう、努力し続けたからだ」……てな。セシリアは俺なんかより数段強いんだって事がこの一週

間でわかった。だから謝る。頑張れば勝てるとか、大丈夫だろう、なんて感じでお前を見てたことを」

セシリアと目が合う。

セシリアの瞳は大きく見開かれ、俺を見ていた。

「だけど！……俺は負けるつもりはない。ボロボロになっても……セシリア、お前に食らいついて見せる！！」

「……ふふ……わかりましたわ。食らいついてみなさい。このわたくし、セシリア・オルコットに食らいつけるものなら！」

『スターライトmk?』を構える。

砲口が俺を捕まえる。

「胸を借りるつもりで行くぜっ、セシリア！」

「来なさいっ！抱き留めてあげますわ！」

セシリアがトリガーに手をかける。

「ああっ！そのまま<ruby><rb>押し倒さ</rb></ruby><ruby><rb>かた</rb></ruby></ruby></ruby></p></div><div data-bbox="492 884 521 909" data-label="Page-Footer">

126

</r t><r p>></r p>></r u b y>>せて貰ひませー」

足に力を入れる。すぐに動けるように

【初弾は必ず回避しろ】

千春の教えを思い出す。

ここだっ！

俺は、右に向けて全力で飛んだ。

「イグニッション・ブースト瞬時加速だど？あの馬鹿者、いったいどこで……」

アリーナの管制室で織斑千冬は眉をひそめた。

「一夏はあれを、千春との特訓で身に付けました。千春としてはあまり乗り気ではなかったみたいですが……」

篠ノ之箒は一夏と千春とともに特訓していた。故に知っている。

「だろうな。あれは速度こそ弾丸並に速いが、あんなものは突撃と変わらん。オルコット相手に、それでは勝てん。何を考えている…
…一夏」

千冬と箒は写し出された映像を見ながら思索する。

(一夏……)

しかし、箒はただ祈るだけだ。

彼は勝つ。勝つて来いと言った言葉に一夏は頷いたのだ。

故に祈るだけ。せめて彼が、怪我せず帰ってくるのを……

「舐められたものですわね？武装を展開せず逃げ回るだけとわ……」

セシリアは上機嫌で俺を見下してた。

そりゃそうだろ。

イグニッション・ブースト

初弾こそ瞬間加速で無理矢理避けたが、その後はセシリアの放ったレーザーが何度も真横を掠め、600くらいあったシールドエネルギーが400くらいまで減っていた。

おおざっぱに説明すると、ISバトルは相手のシールドエネルギーを0にすれば勝ちだ。

ただし、バリアーされたりすると実体がダメージを受ける。

そっちは数値化されてるシールドエネルギーなんかと違って、大なり小なり戦闘行為に影響を与える。

例えばスラスタを破壊されたら加速出来なくなるだろ？

ちなみに、操縦者が死なないように、ISには『絶対防御』という能力が必ず備わっているらしい。

あらゆる攻撃を受けとめるが、ただし、これはシールドエネルギーを極端に消耗させる。

つまり、絶対防御を発動させれば相手のシールドエネルギーを大幅に削減させる事が出来るのだ。

いたぶるのが趣味じゃなくても、自分が優位なら機嫌も良くなる。

しかし、このエネルギーの減りよう……たぶんセシリアの攻撃だけじゃない。イクニッション・ブースト 瞬時加速を多用し過ぎたか……。

イクニッション・ブースト
瞬時加速、

ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、《圧縮して放出》し。その際に得られる慣性エネルギーを、して爆発的に加速するという、加速機動。所謂デコピンだ（親指で力を溜めて弾く感じ）

使用中は加速に伴う空気抵抗や、圧力の関係で軌道を変えることができず、直線的な動きになってしまう……らしい。しかしこの機動、

突撃に感じてはピカイチなわけだが……いかんせん燃費が悪い。毎回エネルギーを一定以上消費するわけで、このざまだ。

「まずは見極めるのが大事なんでね！」

いいながらも右腕を狙って放たれたレーザーを避ける。武装を展開しないのはまだ俺の距離じゃないから。

千春曰く、「剣を握るのは必殺を誓った時のみ」、だ。

それにこのISの武装は雪片のみ、ますます見せ所は決め所になる。

「ふふ、では見せぬまま、そのまま落ちなさい……行きなさい、『ブルー・ティアーズ』！」

セシリアは『スターライトmk?』の砲身を下げ、まるで指示を跳ばすように手を掲げた。

ガチャツ、ヒュンヒュンツ

『ブルー・ティアーズ』のフィン・アーマーから四つ、なにかが放たれた。

それは真っ直ぐと俺を狙い……

《BT兵装だっ！避けて一夏っ！》

散開すると同時にビームを放って来た。

「う、うおおおっ!!」

咆哮、上空へ向け全力で瞬時加速をぶちかます。

つい先ほどまでいた場所には四方から放たれたビームが埋め尽くす。

千春の声が聴こえなければ避けなかった。

ん？千春？

「なんで…千春の声が？」

《い、いめんっ け、けど今は集中しなさい、一夏》

「わっ、わかった!」

どこか切羽詰まった声だ。

会場のどこかで見ているであろう千春、たぶん俺の戦いが稚拙ちせつなもんだから心配かけさせちゃったんだろう。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・

ティアーズの奏でる円舞曲で！」

四機のBT兵装の『蒼き雫』から放たれるビーム、ビームビームビーム。

まさに弾幕だ。ビームの雨とも言える。

それら全てが正確にこちらを狙ってくるため、凌ぐのですら難しい。

ガンガンと身体が揺れるのと同時にガリガリとシールドエネルギーが削られた行く。

ちくしょう、『白式』のアラートがうるせえっ

「こちとりゃ盆踊りが関の山だっ、円舞曲なんて性質に合わんっ！」

「安心なさってよろしくてよ？リードはわたくしがしてあげますから」

「なめんなこんちくしょうっ！てめえこそ、絶対に…ちいっ！?...盆踊りを、踊らせてやらあっ！」

立ち尽くしたまま、余裕の表情のセシリアを前に、俺の勝ちを信じてくれてる筈の前で、千春が舞ってる場所を目の前にツッ、

「俺はっ！無様に、踊ってるわけにはいかねんだよおっツッ！...」

これ以上はじり貧だ、多少強引でも血路を作るしかなえようだ。

なら見せてやる。俺が編み出した、『イグニッション・ブースト バリエーション
瞬時加速』の一つの完成形を
っ！

背後のスラスターが、放出したエネルギーを取り込み、圧縮し放出
弾かれるように翔んだ。

俺は右手に『雪片^{けん}』を握る。

stagger

『蒼き星』(後書き)

お気に入り件数100突発!!

皆さま、ありがとうございます!

いやあ、七十辺りから急激に伸びて驚きましたよ(笑)

さて、お気づきの皆さまもいらっしやるでしょうが……一夏が熱血漢です。とても(笑)

カタパルトに乗せたのは明らかにガンダムの影響を受けてます。

最近になってようやく二話目の『赤い彗星』を見たのですが、フル・フロントルの機動がやべえ(笑)
カッコ良すぎて笑いました。

感想待ってまーす!

Stage 10 『零落白夜』

加速する。イグニッション・ブースト 瞬時加速による加速で、俺は弾幕の中を飛ぶ。

そう、今この時のタイミングで飛び込まねばならなかった。

B T兵装『ブルー・ティアーズ』が俺の周囲に展開している今この時に。

「その鬼札には少々驚かされましたわ」

嘘つけ、平然と狙撃し続けられて何言ってるやがる。
けど、おかげで知ったぜ？

その銃が、次弾を発射するのにかかる時間を、……

「けれど、その機動は見切りました。それに、いくら速くとも、真
正面から来る相手を落とせぬセシリア・オルコットではなくてよ？」

ガチャッ、セシリアが『スターライトmk?』を構える。

そして、俺は今確信した。

セシリアが周囲に展開している『ブルー・ティアーズ』からの弾幕が……止んだ。

「落ちなさい」

勝利を確信した声。僅かに上ずっている。

放たれるレーザー。

そして

イグニッション・ブースト
瞬時加速中に、俺はソレを真横に避けた。

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

今ごろ皆驚いた顔をしてるだろう。

少なくとも、目の前にいるセシリアは驚いている。

千春も、千冬姉も、篝も、管制室で見てるであろう山田先生も、こんな顔をしてるんだろうか。

これが俺の編み出した『マルチ・トリガー 多方向個別近距離瞬時加速ショットイグニッション・ブースト』だ。

推進翼が二つ以上あるのが最低条件だが、

まあ簡単に言ってしまうえばこれは二つ以上ある多方向推進翼による、イグニッション・ブースト片翼だけで行う瞬時加速だ。

ただ普通の瞬時加速と違う所は、加速する距離を剣道で踏み込む程度の距離に抑える点である。

故の近距離瞬時加速、方向転換などが出来ない瞬時加速の弱点を二つ以上の推進翼と力業で弱点を覆い隠した機動。ショットイグニッション・ブースト

この機動の短所は、二つの推進翼で、マルチ・トリガー多方向個別近距離瞬時加速ショットイグニッション・ブーストを行った場合、もう片翼で瞬時加速を支えるためバランスが極端に悪

い所だ。

推進翼があと二つは欲しい所だが……

今のところ、これだけで十分だ。

「うおおおおおッッ！！！」

またしても咆哮、いや、雄叫びのほうがしっくりくるだろう。

距離はもう近距離^{ショートレンジ}、一步踏みだしや白兵戦^{インファイト}。

今度は俺が確信した。勝った、と。

だってそうだろ？相手の今使える武装は取り回しの難しい《スター
ライトmk?》、しかも、白兵戦の武装を禁止されてるんだ。

ハンデがこんな所で生かされるなんてな、千春にホントに感謝だ。

俺は勝利を確信した。

相手もまた、切り札を持つてる事を、ただの一瞬たりとも考えず。

「かかり…ましたわね！」

にやり、と。セシリアが笑うのが見えた。

まずいつ、本能的

に危機を感じて距離を取ろうとすふが、それこそ間に合っはすもな
い。

ウンッ

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。
その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは…六機あつてよ?」

回避が間に合わない。しかも、先程までのビーム射撃を行うビットではない。
『ミサイル弾道型』だ。

赤を越えて白い、その爆発と光に、俺は包まれた。

「一夏っ……………っ!」

モニターを見ていた篤は、思わず声をあげた。

爆発に巻き込まれた一夏はそのままアリーナの地面に叩き落とされたのだ。

千冬も真耶も、地に伏せている織斑一夏が写る画面を、真剣な面持ちで注視する。

「一夏」

だが千冬は、一夏ではなく、一夏の持つソレを見た。

「お前ならば…使えるはずだ」

不思議と手に力が入る。

「見せて見る……お前の雪片を……」

千冬は小さく笑った。

自分の声に呼応するように、一夏が立ち上がったのだから。

「っ、……はあっ、……はあ……」

何秒気絶していた？

それが最初に浮かんだ疑問。

爆発による衝撃で俺は気絶した。

次いで勝敗は？シールドエネルギーの残留は？など世話しく疑問が浮かぶ。

そして俺は、まだ負けていない事に気がついたのだ。

(シールドエネルギーっ………108!………まだ俺は負けてねえ!)

雪片を杖代わりに立ち上がる。

ちくしょう、雪片てめえっ、なに杖代わりにしか役に立ってねえんだよ!!

お前は千冬姉を『最強』^{パフォーマンス}に仕立てあげた立役者なんだろうが！名前負けのただの近接ブレードとか言ったら叩きおろぞ!?

力を貸せ、最悪今だけで良いっ…たからっ

《呼んで。わたしを、わたしの名を》

突然、頭に声が響いた。

どこか千冬姉に似た声、頭に直接聞こえるような……

《わたしを、あなたの、雪片わたしの名を》

俺は雪片を見る。

日本刀から生まれたようなその刀身は、刀より太刀に近い。鎧には僅かに溝があり、そこから呼応するように光りが漏れ出している。

妙に機械的なそれは間違いなくISの装備として作られたものでもあることを示していた。

「雪片の?…」

よく見れば、この雪片の名は雪片でありながら名称未設定だと武器選択欄が答えたいた。

つかホントに雪片一振りだけなのかよ武装。

「そっか：雪片だけど、お前の名前はまだないのか」

それは人間でありながら名前がないのと同じ。

「決めた。今決めたぜ？」

俺は雪片を掲げ、名を呼ぶ。

「千秋ちあき、勝とうぜ」

名を呼ぶ。雪片、いや千秋はそれに答えた。

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力、れいらくひやく『零落白夜』発動

『雪片・千秋』が、溝に沿って二股に分かれ、そこから蒼いエネルギーの刀身が延びる。

俺は今、更に理解した。これがなんなのかを、

「悪いがセシリア、今回は俺が勝たせて貰う！」

言づが速いか、俺はイグニッション・ブースト瞬時加速でセシリアに向け加速する。

「ふふん、わたくしの勝利をは揺るぎませんわ！」

セシリアは『スターライトmk?』を構え、レーザーを放つ。

迫る。レーザーが迫る。こっちも加速しているせいでそのスピードは常人では捉えられない。

そのレーザーを、『雪片・千秋』を構えたまま突撃した俺は切り裂いた。

「な!？」

セシリアに衝撃が走る。レーザーを切り裂いた相手は、更に加速して自身に迫るのだ。

「いつ、インターセプトっ！」

その声は悲痛で、悲鳴のようだった。

もはや『ミサイル弾道型』のブルー・ティアーズを撃つたら自身にも被害が来る。

故に展開した近接レーザーブレード。

しかし、『雪片・千秋』の、白式の『れいらくひやくちや零落白夜』はエネルギー兵装を無力化することが可能だ。

新たな刀身を展開した雪片が、セシリアの近接レーザーブレードを引き裂いた。

「今回は…俺の勝ちだな、セシリア・オルコット」

「……………」

喉元に突き付けられた雪片。
セシリアは言葉を失った。

出会ってしまったのだ。

自分が求む理想の相手。

強く気高く、その志しを貫く者。

その瞳に炎をたぎらせ、自分を下してくれる男性^{おとこ}。

「……………はい」

セシリアは運命を予感させた。

強く気高く、情熱に燃え、セシリア・オルコット……………自分を跪かせ
てくれる……………理想の男性との恋の運命を。

Stage 10 『零落白夜』（後書き）

第一形態移行せずにかっちゃった（笑）

なんだよ多方向個別近距離瞬時加速とかWWW

ご都合主義って良い言葉。（笑）

感想待ってまゝす

Stage 11 『彼女のISスーツにメロメロです』

セシリアとの試合は俺の勝ちで終わった。

あの時点でまだ双方のシールドエネルギーは残っていたのだが、セシリアは白兵戦用の近接レーザーブレードを使ってしまったのでセシリアの負けとなったのだ。

と言っても俺のシールドエネルギーは残量は残り一。
もし俺がもう少しダメージを受けていたり、『零落白夜』を使うタイミングが速かったりしたら俺の負けだった。

『零落白夜』は自身のシールドエネルギーを、攻撃用に転換し、相手のシールドエネルギーを切り裂く諸刃の剣。まるで魔剣だよ、ほんど。

「なんにしても、勝てて良かったよホンと」

十五分のインターバルの後、待ちに待った千春戦だ。
千春はセシリアのように慢心しないだろうから最初からキツイ戦いになりそうだ。

「千春相手に雪片だけで勝てんのかな？」

俺は待機状態になった『白式』を見た。

今俺の右腕に装着されたガントレットがソレだ。

「それは一夏、お前の使い方次第だ。しかし白兵戦においてはお前に一日の長があり、なおかつ千春は白兵戦が苦手だ」

ベンチに腰かけていた俺に幕がぬるめのスポーツドリンクを渡してくれた。

ありがたい、冷たいのは気持ちが良いが後々響いてくる。

「っ、はあ、そりやそうだろうけどよ……千春は多分、マルチ・トリ多方向個別近距離瞬時加速を見切ってるぞ？どうやれば接近戦に持ち込めるんだよ」

セシリア戦で披露したあの瞬時加速の亜種（千冬姉曰く）だが、本来千春のために使う予定だった虎の子の技だ。

セシリアとの差が埋めれず使ってしまったが、千春は必ず見切ってるだろう。

正直勝てる気がしない。

「それを見付けるのがお前の仕事だ一夏。」

「だろうね、辛いがやるしかねえか」

スポーツドリンクに刺してあったストローでちゅー、と飲む。

ああ、身体に染み渡る。

「しかし…なんだ」

箒がベンチに…つまりは俺の横に座る。
その頬が赤いのを俺は見逃さなかった。

「ん？どうした箒？頬赤いぞ？」

風邪を引いたんじゃないかあるまいな？
俺は箒の顔を覗き込んだ。

「っ！？あつああ赤くないっ！赤くないぞっ！」

「そうか？…風邪とかじゃないなら…別にいいけどさ」

凄い勢いで顔を横に振る箒、なんかあるな…けど俺はこれ以上突っ込んで話を聞かない。

この数年間で俺も学習したのだ、地雷は踏まねば爆発しない、とね。

「そ、それでだな…一夏。先程のお前は、その…その……」

箒が俯きながら何か言ってる。独り言か？

「か、かかつカッコよかった」

「織斑あッ!!準備が出たなら速くアリーナへ出る! ブリュッセルはもういるぞ!」

「え!?ああ、もう十三分か…じゃあな、箒。行ってくるぜ」

千冬姉の怒鳴り声を聞き、反射的に立ち上がった俺は箒に軽く手を振りながらカタパルトへ急ぐ。

「あ、……ああ……ぐすん」

なんか凄い暗かったが大丈夫か？

「大丈夫だ、問題ない。全力を尽くせよ一夏?」

千冬姉が俺の肩を軽く叩く。
その表情はどこか嬉しげだ。

「ああ、行ってくるぜ千冬姉。……『しろしき白式』織斑一夏、出ます!」

俺は『白式』を纏いカタパルトに乗る。

「さて……よく頑張ったな一夏。まさかセシリアを倒すなんて……
驚いたよ、ホンと」

アリーナには千冬姉の言っていた通り千春がいた。

「お陰で虎の子の技を使っちゃまったがな」

俺は雪片を片手に、ISスーツに身を包む千春を注視した。

やべえやべえやべえやべえやべえやべえやべえやべえつ!!

なんだよコレ、エロすぎるっ

千春のISスーツは特注品らしく、おへそが見える、上と下が分かれたタイプだ。

その下のISスーツは、一言で言うならば紐ビキニにニーソックスだ。一言じゃないな、すまんかった。

上なんて、下乳が見える程度しかなく、正面から見ると……………

「ご馳走様ですっ!」

「な、なんの話だ一夏?」

思わず両手をあわせてしまった。

つかあのビキニ、Tバックじゃないだろうな?流石にそこまで言ったら製造会社を訴えてやる。

「てか千春、そのISスーツ……………」

「ん?…ああ、これが私専用のISスーツだよ。相川さんとの時は元々内蔵してた緊急用ISスーツで、一夏達との特訓時は学園支給のやつ使ってたから、…そっか、御披露目は初めてか」

「…に、似合ってるぞ、千春」

俺は自分自身に表彰したい気分だ。

言っただけ!遂に言ったあああっ!!

まるで逆転ゴールを叩き込んだような気分だ、マジ頑張った俺!

「ええ〜？そうか？……微妙な水着みたいで私はやだっただけだなあ」

ちくせう！十秒前の俺を殴れたらッ。

「まあ一夏が言ってくれて嬉しいし……うん、これ正式採用にしよっかな」

クスリと笑う千春。

やべえ、千春マジ天使。

くっそおっ！！俺やっぱ千春の事大好きだっ！！セシリアに勝てて良かった！

「じゃあ一夏、行くぜ？」

千春が腕を組んでニヤリと笑う。

そう言う小悪魔みたいな顔も可愛いぜこんちくしょうっ！！

「色は変えなくていいのかよ、千春」

雪片を構える。戦闘開始直後に勝負を仕掛ける。

「べつに？一夏相手なら『灰色』^{このまま}でも勝てるしな」

それは慢心でもなんでもない。確かにそうなんだろう、……しかし、そのままできてくれるならそれがいい。本気を出される前に……

「……………」

「……………」

試合の鐘を待つ。

互いに相手の瞳を見る（少しだけ、少しだけだが俺は千春のISS
―ツを盗み見た）

155

「一夏」

「な、なんだ!?!」

チラ見してたのがバレたか?!

「魅せてくれ」

一夏、お前の強さを……………そう千春の目が語る。

「ああ、任せろ」

想い人の期待に答える、それは俺の邪な心を洗う。

煩惱退散煩惱退散！脳内画像フォルダへGO！！

洗えねえツツツ！！

「千春・フレイヤ・ブリュッセル、…推して参る！」

「行くぜ千春うっ！！」

試合の鐘が鳴ると同時に俺はイケニッション・ブースト瞬時加速を仕掛けた。

stage 11 『彼女のISスーツにメロメロです』(後書き)

タイトルの適当さと千冬姉のブラコンさがヤバイ(笑)

さて、千春のIS、『グラデーション』の能力やいかん!

感想待ってまゝすノシ

Stage 12 『四色の攻防』

「モードセレクト、『グリーン・ガイア深緑の大地』！」

千春のISの装甲色が変わる。

「な！？色は変えないんじゃないのかよ！？」

配色が深い緑へと変わっていく。

しかし止まるわけにはいかない。

イグニッション・ブースト瞬時加速で千春へ向け突撃を仕掛けた俺は、更に加速して雪片を振り抜く。

ガキインツ！！

「変えないとは一言も言ってますんよ〜だ」

鋼と鋼の衝突音。それを聞き、見るより感じるより先に攻撃が防がれたと俺は知る。

雪片は深い緑に染まった大楯にその刀身を半分くらい埋めていた。

「こん…のおっ！」

「おおつと。大胆だねえ」

力を込め、雪片で大楯を切り裂く。

千春と言えば、大楯が爆散するより速く手を離し、その手にはアサルト・ライフルを構える。

「ちいつ!?!」

雪片で実弾を切るなんて事は至難の技だ。

故に身体をひねりながらの回転で放たれた弾丸を避ける。がしかし、避けると言っても放たれた弾丸をすべて回避できたわけではなく、幾らか貰ってしまったが。

600あるシールドエネルギーは586まで減っていた。

「ミサイルの、弾幕は、男のロマンだぜえ!!」

回避行動により距離が開いてしまい、千春は距離を埋めさせじと追撃をかける。

両肩に背負うように展開したミサイルポッドから無数のミサイルが放たれる。

つか多すぎだろ!?!

「こなくそおおおー!!」

急加速からの横転回避。バレルロール これで……………追っかけて来やがった!?

「切れるか?…………このやろっ!」

追いかけて来たミサイル達を雪片で切り裂く。斬、斬斬斬!!

「ミサイル切りって…………まるで白騎士みたいじゃない!一夏やるっ!」

ミサイルポッドから二挺のアサルト・ライフルに持ち変えた千春が弾をばら蒔きながら迫る。口笛を吹きそうな勢いだ。

「ちいっ…………うおおおッ!」

弾丸をばら蒔くような射撃だが、その大半が俺に当たる。

このままじゃじり貧、こっちなりや『零落白夜』れいらくはくやで決めてやるっ!

俺は咆哮と共に単一仕様能力、必殺の『零落白夜』れいらくはくやを発動する。

雪片を解放、溝に沿って二股に分かれた刃から、新たな刃が延びる。

シールドエネルギーを切り裂く『雪片・千秋』と対象のエネルギーを零にする文字通りの必殺技、『零落白夜』。

これを当てられたら俺の勝ち!!

千春が迫ってくるなら俺はこれで迎え討つ!

「モードセレクト、『イエロー・ライトニング黄色の閃光』!」

千春の纏う色が黄色へと変わる。

しかし間に合わない。何故なら、千春が剣を展開するにも、盾を出すにも、もう遅かった。

振り下ろした雪片は千春を

「残念、惜しかったな一夏」

捉えはしなかった。

「ぐうっ!？」

振り抜かれた二つの刃が脇腹に叩き込まれる。

なんだ、一体何があった？雪片は何故千春に届かなかった？

何故千春は俺の真横から攻撃してきた？

「答えは簡単だよトソン君、さっき魅せてくれた一夏の技さ」

千春が迫る。唇と唇が交わりそんな距離まで近づいて来た千春が、クス、と目の前で笑う。

まさか、まさかまさか!？

冗談だろう!？見切るだけならまだわかる。

なんで……マルチ・トリガー ショートイグニッション・ブースト多方向個別近距離瞬時加速が使えるだよ!！？

「これには驚かされたよ一夏。いやホンと、思わず立っちゃったし」

ガガガッ！

二つの近接ブレードによる止まらぬ連撃、俺は紙一重で避けながら反撃の一撃をかます。

「っ、…危ない危ない、一夏の単一仕様能力、多分エネルギーを消費させる類いでしょ？セシリアのレーザーを掻き消したのも多分それでしょ？」

避けられる。あと一步が届かない。

「よくわかるな、流石千春……っ！……っ！」

雪片を振り上げると同時にイグニッション・ブースト瞬時加速で千春に詰め寄る。

「っっっ…うん、まあね！」

双剣を交差させるように構え、俺の一撃を防いだ千春は、つばぜり合いを避け距離をとるわ。

「さて、じゃあセシリアと同じく光学兵器で圧倒して見せよっかな？……モードセレクト、ブルー・アース『蒼き水面』！」

黄色の装甲が色褪せ、蒼に染まる。

緑が重火器による砲撃戦を特化させた遠距離モード。

黄色が高機動型の白兵戦特化、『白式』と似た思想のモード。

そして青が千春の得手分野、中距離特化の汎用型だろう。

『ブルー・ティアーズ』を彷彿させる蒼い装甲は、腰回りや足を包むだけで、千春の魅力的かつ健康的な太ももをさらけ出す。

エロい。

「光学兵器？…レーザーとかか？ならこっちの得手分野だぜ！」

俺は内心を全く出さず好戦的に笑う。
手に持つ雪片が力強く唸る。

「えっと…こうだったかな？…踊りなさい！この千春・フレイヤ・ブリュセルと『グラデーション』の奏でる円舞曲^{フルツ}を！……」

千春がセシリアの声、所作を真似して、展開したライフルの銃口を向ける。

「！……よっ、喜んで！！」

思わず素で答えてしまった。

やべえ、お嬢様然とした千春も可愛いぜっ！！

そんな事を考えてたからだろうか、千春のIS、『グラデーション』の推進翼から、六基の『羽』が舞ったのを見逃したのは

Stage 12 『四色の攻防』 (後書き)

お気に入り百五十件突破！

……急に上がり過ぎてなんか恐いですが(笑)

感想待ってます

Stage 13 『星を砕くひかり』

「行け！『ファンネル』！」

千春がライフルのトリガーに手をかける。

途端、ライフルの銃口とは全く別の場所から幾つものビームが放たれる。

その数六、射線上には『ブルー・ティアーズ』に似たBT兵装……

「があっ!?!」

四方八方から降り注ぐビームの雨に、千春に見惚れていた俺は晒される。

あ、いてっ、衝撃で舌嚙んだ。

「『グラデーション』、この機体は『ブルー・ティアーズ』の開発スタッフを引き抜いてつくられた3.5世代型ISだ。

特にこの『蒼き水面』は『蒼き雫』の姉妹機とも言われてるのよ」

ビームの雨から抜け出し、必死に逃げ惑う俺を見ながら千春は説明を始める。

「セシリアが言った通り、イギリスの助力無しには出来なかった
ISだよ」

ビットがビームを撃つのをやめ、千春の元へ戻る。

「まあ『ブルー・ティアーズ』の劣化版みたいな感じね」

「劣化版ってな……」

「シールドエネルギー見てごらん？」

「え？」

「あんまり減ってないでしょ？」

「いや、『零落白夜』使ったしエネルギー213だ。悪いけどどれ
だけダメージ受けたかわからない」

「あ、そうなんだ。これは『ブルー・ティアーズ』より一回り大き
いし、それで威力は負けるし、使い勝手なら『ブルー・ティアーズ』
の方が上なの」

「へえ」

「あれ？一夏のワンオフアビリティって……シールドエネルギー消費するの？」

「!?!?!?」

し、しまった!会話の乗りでついっ……………

「へえ、一夏のワンオフアビリティって、シールドエネルギー消費するんだ。しかも、その様子じゃすごく燃費わるぞ」

にま、と笑う千春。その瞳は悪戯心に満ち溢れている。

「い・い・こ・と、かんがえた」

どこからともなく、『スターライトmk?』より二周りほど大きい、馬鹿デカイ銃を展開。

「『スターライト』系の強化発展型、七六口径『スターライトブレイカー』って言うんだけど、……………」

「!?!」

『スターライトブレイカー』に、膨大な量のエネルギーが集う。淡いピンク色の光球が風船のように膨れ上がる。

やばい。本能で感じとる。あれは受けたらやばい!

「全力!全壊!スターライトっ……!」

なんか物騒な事いつてるし!

仕方ねえ、…『零落白夜』発動!

「ブレイカーっっ!」

視界を覆い尽くす光。暴虐の極み。名は体を現すと言つが、^{スタ}星を軽くぶっ壊す』とはよく言ったものだ。

しかし、いくら星を軽くぶっ壊そうと、エネルギー兵器。

対象のエネルギーを消滅させる『零落白夜』ならおつりが来るくらいだ。

セシリア戦と、千春との戦いでBT兵装の弱点は理解した。

セシリアも、千春も、ビットを展開する際は『他の攻撃』をせずに、ビットを操っていたのだ。

ビット以外の武器で攻撃する際は、必ずビットからの攻撃が止む。

これが正しければ、今最大級の攻撃を放っている千春は隙だらけ。巨大なビームの中を『零落白夜』を発動して突っ切れば最大の攻撃チャンスを得る！

「うおおおおおツツツ！！！」

イゲンニッション・ブースト
『瞬時加速』

なんどこの機動に助けられたか……今回の戦いはすべて『瞬時加速』が鍵を握っていたといっても過言はない。

説明文なんて瞬時加速を連呼してたし。

スラスターに放出したエネルギーを『圧縮』、それを放出し

ビュッ！

ガンっ！

「な！？」

体勢が崩された。

加速に入る寸前、背後からビームを撃たれた。

「な……んで……ビットが……」

もはや驚愕しかない。

何故？ビットは、『他の武装で攻撃する際は攻撃出来ない』んじやなかつたのか！？

さっきだってそうだ。もし攻撃出来ていたなら、ビットで狙い撃つてきた時、ライフルで攻撃してこなかつたじゃないか。

「ああ、さっきの？」

極光を前に、踏み出せずその場で雪片を構える。

「さっきのねえ？……わざと攻撃しなかつたんだ？」

とても楽しげな千春を前に、俺は戦慄した。

なんて……なんて

嬉しそうな顔なんだ!!!!!!

ニコニコと、満面の笑みを見て、俺は不覚にも、ときめいてしまったのだ(テヘっ)

「ちつきしよおおっつ!!」

極光に包まれながら俺は自分の馬鹿さ加減に泣いた。

ジュツ、と音と共に涙は蒸発したいった。

「はあっ、はあっ……死ぬかと……思った……」

極光を受けきつた後に残っていたシールドエネルギーは75。

ほんとよくもってくれたよ、びやくし

「モードセレクト、『グリーン・ガイア深緑の大地』」

目の前には、深緑の装甲を見にまとい、バズーカを担いだ千春。その砲口は問答無用で俺を捉え

「お疲れ様、一夏。かつこよかったよ」

千春の嬉しい嬉しい労いの言葉も、今の場面では死刑宣告と同義だ。

いや、すごい嬉しいんだけどね。舞い上がるくらい。

ドカァァァンッ……!!

赤を超えて白い、その爆発と光に俺は包まれた。

あれ？デジャヴ？

stage 13 『星を砕くひかり』（後書き）

すみません、今回ふざけすぎました。特に武器の名前で（笑）

だってだって！『スターライトmk?』とかスターブレイカーとか、明らかにリリカルマジ狩るな魔法少女を意識してるとしか思えないじゃないですか！（原作が）

と言つ言い訳を並べました。

さて、みなさまのお叱りを受ける作業に移るか、

びくびくびく

感想待ってます！

Stage 14 『準単一仕様能力』

「お、織斑くんがっ！」

管制室、オペレーターとしてそこにいた山田真耶は、爆発に巻き込まれた一夏を見て今日二度目の悲鳴をあげた。

一度目は一夏が単一仕様能力を使った際。まだ一次移行さえ完了してない筈の『白式』が、単一仕様能力を使った時には驚いた。

ファーストシフト

至近距離からのバズーカによる一撃。

爆煙の中にいる一夏の姿はまだ見えない。

煙が濃すぎて、見えないのだ。

「ふん」

自分の生徒である一夏の心配をしていた山田真耶をよそに、千冬は呆れと、嬉しさと、安堵が混じった難しい表情を見せる。

「機体に救われたな。一夏」

黒煙が晴れた時、アリーナを見て観客席の誰かが声をあげる。

「何アレ、織斑くんのISの姿が変わったの？」

「一夏っ…まさか…ファーストシフト一次移行!？」

煙が弾けるように吹き飛ばされる。
その中心に、皆、『白』を見た。

千春との戦いで、軽微だが損傷していた傷は、まるで癒えたかのよう
に『無傷』。

『白式』は真の姿で、そこにいた。

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボ
タンを押してください

(な、なんだなんだ……?)

意識に直接データが送られてくる。それに呼応し、目の前に現れるウインドウ。

その真ん中には「確認」と書かれたボタン。

訳もわからずそれを押す。

完了、正式に形態移行が終了しました。新たな単一仕様能力を確認。発動しますか？

「え？単一仕様能力ワンオフアビリティって一個じゃないの？」

『白式』内に、二つの単一仕様能力確認。『零落白夜』、『疾風迅雷』の二つがあります

「しっぷうじんらい？……どんなの？」

発動、しますか？

んー、発動しても良いけど……エネルギーがねえ。さすがにバズーカ食らって残ってるわけ……

シールドエネルギー残量、600。『零落白夜』、『疾風迅雷』、共に発動可能です

え？回復してる？……んじゃま、発動しますか。

了解。準単一仕様能力『疾風迅雷』発動

ワンオフセカントアビリティ

しつぱうじんらい

発動

とたん、一次移行を終えた白式の、至る所に走っていた溝がスライドし、内部装甲が顔を覗かせる。

そこから放出するのは金色こんじきの光の粒子。『白式』から放出される余剰出力。

黄金を纏った『白式』が、光の粒子を撒き散らしながら『グラデーシヨン』へ迫る。

千春からは、一夏の姿が、幾重にも重なり、分身を残しながら迫るように見えた。

「な！？速い！」

武器すら持たず突撃してきた一夏を紙一重でかわす。

すかさず背後へ向けライフルの銃口を向けそのトリガーを引く。

しかし、放ったビームは一夏の『残像』を貫いただけだった。

（そんな！？ハイパーセンサーは今のを『一夏』として捉えていたはず……質量をもった残像だとしても言っの！？）

千春は舌打ちと共に飛翔する。一次移行を経て、何かしらの機能が発動したのだろうか？

「『フェザー』っ！」

不安を払拭するように声をあげる。

六枚の推進翼から六基の羽根が舞い散る。

「当たって…っ！」

六基の羽根とビームライフルによる、蹂躪が始まる。

狙いは付けない。ハイパーセンサーが誤認する。

超音速、その一步手前の速度で飛ぶならば、この雨を避けきれはしないと踏んで、千春は計七つの砲口を射ちまくった。

(くそっ、俺が白式の反応に追いついていけない！)

ビームの雨を、『白式』は避けていた。

『疾風迅雷』により、スライドした装甲の至る所から露出した小型スラスターによる『全方位近距離瞬時加速』。通常の飛行速度が常時超音速一步手前までくるこの『疾風迅雷』には必要不可欠な機構。

どうやら『白式』は瞬時加速が気に入ったらしい。

しかし、そこは人体が至る事の出来ない境地。ハイパーセンサーの助力を得たところで『反応速度』『思考速度』は上がらない。

「一度『疾風迅雷』を解いて……いや、そんな事してたら撃ち抜かれるっ」

降りしきるビームの雨を、右に左に時には回転して回避しながら一夏は舌打ちする。

千春は言い知れぬ戦慄から、一夏は己の力不足に苛立ち舌打ちをした。

先に動いたのは千春だった。

周囲に展開していた『フェザー』を散開させ、自身も突撃する。

ここでセシリア・オルコットと、千春・フレイヤ・ブリュッセルとの、BT適正值の差を語ろう。

BT兵装の適正に必要なのは人並み外れた空間認識能力だ。

これに関して、セシリアと千春は互角と言えよう。いや、狙撃を得意とするセシリアの方がわずかに上だ。

ならばなぜ、千春が『BT適正值の世界最高値』を叩き出したのか？。

それは、類い稀な『並列思考』と呼ばれる能力故だ。

『並列思考』とは？と問われれば、一度に複数の事を考える事が出来る事。と答えよう。

そう、一度に複数の思考が可能なのだ。まったくの同時に。

十人の言葉を聞く事をより異常な、人並み外れた異能。

十人から投げ掛けられた言葉を、それぞれ理解し答えを提示出来るのだ。

『並列思考』による複数のビットの制御。これはまさに『チート』と呼べる行為だ。

他の事をしながら、一基一基のビットに意識を集中し、完璧に操っているのだから。

セシリアはビットを仕様する際は他の攻撃をしない……いや、出来ない。

今のセシリア：いや、常人では頭がそれを処理仕切れないからだ。

故の『世界最高値』。BT兵装のためにあるような能力。

『グラデーション』が『蒼き水面』^{ブルー・アース}時のみ展開可能なBT兵装『フエザー』。

その一基一基が、一夏を捉え唸りをあげる。

「うおおおおっつ！」

しかし、『並列思考』、『空間認識能力』が高くとも、いくら完璧に操作出来ても、

『捉えられない』のならば途端に意味のないものと化する。

残像を残しながら加速する一夏は、手に『雪片・千秋』を展開。

『零落白夜』を発動する。

「くっ、…一夏！」

銃口を向ける。

斬、

ライフルを真っ二つに切られる。それと同時に後ろへ退る。

「千春ッ！…！」

「夏が雪片を振り上げ千春に追いつがる。」

「俺の……勝ちだっ！」

「散々盛り上げておいて、この様か大馬鹿者」

「すみ…ません」

試合が終わって、俺は馬鹿者から大馬鹿者になっていた。すげえうれしくないランクアップだった。

ダウンじゃないのが千冬姉らしいと言えば千冬らしい。

「武装の特性を良く考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「……はい」

頷く。頷くしかないよなあ……。

あんな大見得切ってエネルギー切れで負けてりゃあさあ。

「しかし…まあ……オルコット、ブリュッセル両名に良く善戦した。流石は私の弟だ」

千冬姉は背中を向けて歩いて行く。

声が小さくて聞こえなかったけど、なんて言ってたんだろ？

「えっと、ISは今待機状態になってますが、織斑くんが呼び出せ

ばすぐに展開できま…あ、知ってましたっけ？。ただ、ISを展開するのにも規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

ドサッ。

ドサッっていったよ。つか目の前のこれはなんだ？

IS起動におけるルールブックと書いてあるが『アナタの街の電話帳』じゃないのか？

すげえ分厚いくせに一枚がめちゃくちゃペラ紙なんだが…何ペー
ジあるんだよ、これ……

「何にしても今日はこれでおしまいです。お疲れさまです織斑くん」

山田先生はニコニコと笑いながら、歩き去っていった。

「行くぞ」

出た。出ましたよ。俺の周りの優しさ欠乏症人物ナンバー2。
名前は筭。俺の幼馴染みなただけどな！。

俺は重い腰をあげて、寮への道のりを歩き始めた。

「……………」

「…な、なんだよ」

横にならんでいると、さっきからじろじろと俺を見てくる。

「負け犬」

「わおーんっ！」

「涙を流しながら喚くな！」

「うるせえ！そ、そりゃ勝つなんて言っただけだよ！仕方ないじゃねえか！エネルギー切れちゃったんだもんよ！」

ああ、見苦しいな俺。なんて思いながらの反論。

ちくせう。幼馴染みにお疲れさま、の一言もねえのかこの幼馴染みさんはよおツ？

千春だったら、

「お疲れさま、一夏。残念だったね、……け、けど！……すごく……かっこ良かったよ！……一夏の頑張ってる姿……すごく……」

なんて言ってくれて、

「千春…、俺強くなるよ。千春をあらゆる事から守れるくらいに！」

「一夏っ！……」

「千春！」

なんて感じに……うへへへへ……。

「ふん、……それで……どうだ？負けて悔しかったか？」

「あ？そりゃまあ。勝てたのに負けたなんて悔しいさ」

「そ、そうか。では、これからも剣道の鍛練をしよう」

「え？いいのか？」

「い、嫌ならいいが……」

「馬鹿、嫌なわけあるか。宜しく頼む筈」

「ああ……任せてたおけ一夏」

筈は嬉しそうに笑って頷いた。

Stage 14 『準単一仕様能力』（後書き）

セシリアのシャワーシーンはカットです（笑）

誰にも俺の愛人の裸は想像させねえぜ！

？嫁じゃないのかって？

ハハハ、何を馬鹿な。俺の嫁は相川さんですよ。

さて、今回出てきた『準単一仕様能力』『疾風迅雷』ですが、明らかにユニコーンの影響受けました。

あとF91も見たので質量をもった残像が追加されました。

『疾風迅雷』も『零落白夜』もエネルギーを食いまくり、その上回避に『全方位近距離瞬時加速』使ったらフルだったエネルギーだつて簡単に底をつくさね。

以上！感想、お待ちしております！

stage 15 『クラス代表は一続き』

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

セシリア、千春の二人との激闘の翌日、朝のSHRショートホームルームでの山田先生の言葉である。

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの皆(もちろん全員女子)も大いに盛り上がっている。俺に勝った千春含め。

「先生、質問です」

拳手。質問は手を挙げてしよう。常識だ。

「はい織斑くん」

「俺は昨日試合に負けたはずなんですが、なんでクラス代表になるとるんでしょうか？」

「そ、それは」

山田先生が口よどむ。あ、なんか顔真っ赤だ。

山田先生の視線の先には……

「あ、そっかそっか、一夏に言っただけだったっけ？」

苦笑しながら立ち上がる。昨日部屋で伝え忘れてたか。

「生理きちちゃってさ」

下腹部を擦りながら片目でウィンク。

いやまあ痛くないんだけど、一夏のためだ。演技は苦手だが演じ切って見せる。

「んなっ!？」

一夏の顔が真っ赤になる。リンゴみたいだなほんと

スッパーンっ!

「あいだっ！」

「謹みを持ってブリュッセル」

飛翔する出席簿。いや飛来か。

千冬先生の所持する対軍宝具『一年一組出席簿』はただの出席簿でありながら、織斑千冬が所持し、使用する事で一級の宝具へと変わるのだ。

いや、千冬先生が武器として使えばあらゆるものが宝具となるだろう。

シュパーンッ！

私にぶつかり、その衝撃から千冬先生の元に戻った出席簿が威力を増して再度放たれる。

「ブリュッセル、失礼な事を考えたろう」

「イエス、ママ」

てかブーメランですか千冬先生。

そしてもう一度投擲の構え、歯を食いしばれ！私！

「ちっ、千冬姉！」

シュパーンッ！

威力を込めていた出席簿が私ではなく、立ち上がった一夏へ向け軌道変更。

「織斑先生とよべ、それで？なんだ織斑」

クルクルと回転しながら手元へ戻った出席簿。
出席簿のコントロールなら誰も勝てんだろう。

「いつつ……お、織斑先生、生理中に千春を叩くのはやめてくれよ！千春は女の子だぞ！あ、ああ……赤ちゃんを産めなくなっちゃったら……どうすんだよ！」

長い沈黙だった。

その間約15秒、しかし一夏と千春以外のクラスの中にいた人物はすべからず、その間を一時間以上ではないかと思った。

そして、

「「「「「きゃあああああああつ！！！」「「「「「

放たれるソニック・ブーム。

バシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシン

「いだっいだだだだっ！いてえよ千冬姉！」

スッパーンっ！

出席簿によるほぼ同時に放たれた八つの連撃。止めの脳天直下の角でのいちげき。

「お、お前は自分の言葉をちゃんと理解してから言葉を発しろ！」

珍しく千冬姉が顔を真っ赤にしながら出席簿を降り下ろす。山田先生なんて顔を真っ赤にしながら身体をくねくねと動かしながら妄想世界へ旅立っていった。

「だ、だから………ひいつ!？」

反論しようとした途端、教室の二ヶ所から凍るような、それでいて触れれば燃えてしまいそうな殺気が放たれる。

見て見れば箒とセシリアが、黒を越えて黒い、どす黒い殺気を纏っていた!

なんだよあれ、人間越えて、阿修羅すら凌駕した存在かよ。怖すぎる。

「一夏」

ふと声が掛けられた。

「千春？」

先程まで騒いでいたのが嘘みたいに静かになった。てかクラスの皆、何を期待した目で俺と千春を見てるんだ？

「あん。でな…えーと、別に生理中だからって頭叩かれただけで赤ちゃんを産めなくなるなんて事はないから大丈夫だよ。心配してくれてありがとな」

「」「」「」
「きやああああああああつ！！！！」
「」「」「」

今日のSHRはショートホームルームこんな感じで終わった。

Stage 15 『クラス代表は一続き』（後書き）

千春が生理と理由付けて一夏にクラス代表を渡したの巻。

こつ言うつ使い方なら生理休暇もありだなとニヤニヤしてました申し訳ありません。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、ブリュッセル。試しに飛んで見せる」

四月も中旬、遅咲きの桜の花弁が舞い散る頃……と言うより俺がクラス代表に決まった日の三日後の二時限目。俺達一年一組生徒達は鬼教官こと千冬姉の授業を真面目に受けていた。

「はい、織斑先生」

「なんだブリュッセル」

「いや、あのですね。私生理だって言ったはずで……あいだっ！」

「貴様のような生理があるか。クラス代表の件はもう織斑に決まったんだ、くだらなん真似はよせ」

「さ、さいですか」

拳指して質問した千春に千冬姉の指弾が炸裂する。

親指を弾く動作はツンデレールガンに似てる……

つか空気を指で弾いて当てるとかやっぱ普通じゃないよな。

千春が額擦りながら鳩が対物狙撃銃を食らったかのような顔してる。

いや、鳩が対物狙撃銃なんてくらったら爆散するか。ここは無難に豆鉄砲にしとこう。

ちなみに、千冬姉曰く指弾は威力が低いそうだ。ちょっと痛めのでコピン程度しかだせん、とか言っで。

そう言う点では実践授業万歳だ。何しろ出席簿が飛んでこない。

「質問がないなら早く展開しろ。織斑、お前から展開して見せる熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

急かされて、意識を集中する。

ISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の身体にアクセサリーの形状で待機している。

セシリアは左耳のイヤークラス。千春は首のチョーカー。

俺は右腕のガントレット。……いや、普通は、アクセサリーらしいんだが……俺のは完全に防具だよな。なんでだろうか。

「集中しろ」

いかん、次ぎは叩かれる。

俺は右腕を突きだし、ガントレットを左手で掴む。

色々試して、このポーズが一番集中できる　　というよりもISが展開されるのをイメージできる。

(来い……白式)

心の中で呟く。すると、右手首から全身にかけて薄い膜がひろがっていくのがわかる。約0.7秒の展開時間。

俺の身体から光の粒子が解放されるようにあふれて、そして再集結するようにまとまり、IS本体として形成される。

各種センサーが意識に接続され、世界の解像度が上がる。

視界がクリアに感じるこの一瞬、まるで視力が悪い人が眼鏡を掛けたような感じだろうか。

「1.5秒、まずまずのタイムだ。ではオルコット、代表候補生の速度を見せてやれ」

「はい。…では、…！」

セシリアがイヤークラスに触れ、それを優しく弾く。

刹那、目を瞬いた次の瞬間にはセシリアはIS、『ブルー・ティアーズ』を纏っていた。速い。桁違いに速い。

「ふむ、0.6か。流石と言っておこう。」

「すげえ…すげえなセシリア！」

「い、いえ。これくらい代表候補生にとっては普通ですわ。一夏さん』こそ、短い期間でそこまで速いなんて、才能ですわ」

……さん？

「ではブリュッセル、やってみろ」

「セリフは言っても？」

「不可だ。それとも逐一喚ばないと出せんのか？」

「いやあ、テンション上がるじゃないですか」

「ぐだぐだ言わんでやれ。頭に連続で当てるぞ？」

グッ、と千冬姉が親指に力を入れる。

「イエス、ママ…」

千春がすげえ不服そうに敬礼した。

ちなみに千春のESスーツは学校支給のものだ。

この前のエロスモはやみすぎたーツは色変更の為一度返却したらしい。

残念でならん。ちなみにTバックだったので訴えておいた。
いやしかし、千春のドーン！キュッボンに掛ければ学校支給のIS
スーツもエロスーツと化す。
眼福眼福。

「はあ、……んつと！」

チョーカーに触れて目を瞑る。セシリアと比べると遅いが、それでも一秒以内にISを展開。

やっぱこの装甲が胸を鷲掴むような機構は見事、ゲットジョブGJと言える。

千春の『グラデーション』は、千春がスタッフリーダー兼テストパイロットとして開発が進められたらしく。

『グラデーション』の最大の特徴、『モードシステム』は千春の発案、開発らしい。

装甲や武装に関しては他のスタッフの魂の結晶らしく、千春の爆乳を初め、魅力的なボディラインを損なわずに一騎のISに仕上げたのは匠の腕。

個人的には、千春の肉付きがよく、それでいてスラット伸びた脚の矛盾した魅力を損なっていないのがポイントが高い。胸部はポイント計算外。ありや狡すぎて評価する気も起きん（決して装甲に鷲掴まれ、持ち上げられた爆乳を見て惚けてポイントが付けられない訳ではない。断じてない）

そしてヒップ。お尻だ。

胸をメロン、いやスイカと評するならばお尻は白桃。それも最高級

だ。

それを、背部の六枚の多方向推進翼で『微妙』に隠す。

推進翼を閉じた状態で後ろから見れば千春の白桃尻がチラチラと見え、生唾ごくり。

推進翼が開けばもう天国の門が開いたかのような心情にしてくれる。

エロスーツなら更にTバックだ。正直殴り倒したいほど開発スタッフが羨ましい。

後は肩だろうか。

肩が露出してるのは良い、それだけで魅力ポイント10加算だ。

「よし、飛べ」

言われて、セシリアと千春の行動は早かった。

二人とも急上昇し、遙か頭上で静止する。

俺も遅れて後に続くが、その上昇速度は二人よりかなり遅いものだった。

「何をやっている。スペック上の出力は白式の方が上だぞ」

通信回線から早速お叱りの言葉が……急上昇と急下降は以前から千春に習ってはいたがまだまだ苦手だ。

『疾風迅雷』を使えば速度に関しては絶対に負ける気はないが、あれを使うと全身筋肉痛になるからやだ。今も痛いし。

『自分の進む方向に角錐を展開させるイメージ』と言われても、感覚が掴めない。

上に向け瞬時加速でも使うか？

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやり易い方法を模索する方が建設的ですよ？」

以前の見下したような態度ではなく、慈愛の化身と見間違えるほどの優しい声色のセシリア。

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体があやふやだからなあ。何で浮いてるんだ、これ」

白式にも推進翼があるが、今急上昇した際スラスタは使っていない。

翼の向きと関係なしに好きな方向に飛べるのだから、ますますわからない。

「私は完全に自己イメージだしなあ。理論的な事なら」

「わたくしですわね。説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「なるほど、わからん。説明はしてからなくて良い」

即断即答。絶対に俺の頭が理解してくれん。

「それは残念ですわ。ふふっ」

楽しそうに微笑むセシリア。

その表情はやはり嫌味でも皮肉でもなく、本当に単純に楽しいという笑顔だった。

一体どういった心境の変化なのだろう。はじめてあった時のあの態度が今では嘘のように見える。

いや、嘘だったのだろう。

これがセシリアの本当の素顔なのだ。

「一夏さん、よろしければ今日の放課後に指導してさしあげますわ。そのときは二人きりで」

「一夏っ！いつまでそんな所にいる！早く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。

見ると遠く地上では山田先生がインカムを箒に奪われておたおたしていた。

まるで望遠鏡並みの視力はハイパーセンサーによる補正だ。

地上二百メートルから筈の層まで見える。
どこ見てんだ俺は。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんでしてよ？」

隣で変な声を出して驚いていた俺に、クス、と笑いセシリアが近づく。

そついやもともとISは宇宙での稼働を想定したものだ。それくらいは同然か。

「織斑、オルコット。こんどは急降下と完全停止をやって見せる。
地表から100?が目標だ」

「私は？」

「ブリュッセル、お前は二人の後地表0?を目標として急降下だ。」

「あきらかにおかしいですよね？」

「む、よく聞こえんな。では始める」

「イエス、ママ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

千春はタパー、と涙を流し敬礼。

セシリアは俺をチラ、と見て急降下していった。

みるみるうちに小さくなっていくセシリアの姿を見て俺はちょっと感心しながら眺めた。

「うまいもんだなあ」

そしてどうやら完全停止も難なくクリアしたらしい。よし俺もいっくか。よ

意識を集中。

イメージは背中にロケットをくくりつけて突撃する感じ。

「つおおお！？」

地表10？は意外と難しく、俺は大体地表20？の所で静止した。

「馬鹿者、誰がそこで止まれと言った。まあ及第点としよう。では次、ブリュッセル」

ギョーンッ

ズカアアンツ！！

千春は地表に激突した。グラウンドに穴を開けて

「…？。失敗だブリュッセル。グラウンド5週、生身で走ってこい」

「う、ううっ…」

ISをしまった千春はトボトボと走り始めた。

代われるならば代わってあげたい……が、俺は走って揺れる胸をハイパーセンサーで鑑賞することにした。

s t a g e 1 6 『理不尽』(後書き)

次回、あのキャラが登場する!?

感想待ってます

「と、いうわけです！織斑くんクラス代表おめでとう！」

「「「おめでとう！」」」

パン、パンパン！

クラッカーが乱射される。

俺の頭になってきた色とりどりの紙テープは、その実質重量よりかはるかに重く俺の心にのしかかってきた。

ちなみに今は夕食後の自由時間。

場所は寮の食道、1組のメンバーは一人を覗いて全員揃っていた。各自飲み物をもってやいのやいのと盛り上がっている。

「……………」

めでたくない。ちつともめでたくない！なんだこのパーティーは。

ちらと壁を見れば、そこには『織斑一夏クラス代表就任パーティー』とデカデカと書かれた紙がかけてある。そうか、就任パーティーか。

……はあ。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

全校生徒の前で戦ったせいか、ますます押し掛けてくる女子で、俺の部屋も盛り上がってますよ。

その時、千春と同室なのが幕とセシリアに知られ、殺気を向けられたんだが、あれはまたなんでき。

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「いいなあ、私達のクラスにちょうだいよっ！」

「ダメダメ、織斑くんは私んちのクラスメイトだからね」

もはや所有物らしい。

あれ？てかさつきから相槌ついてる娘って二組の女子だった気が…

……

つかおかしいだろう。あきらかにクラスの人数以上の人間がいるだろ！

「人気者だな、一夏」

「そう見えるなら眼科行け、もしくはISのハイパーセンサーを使

つて人の顔をよく見てみるよ」

「ふん」

隣で座っていた筈は鼻を鳴らしてお茶を飲む。
なんでこいつは機嫌が悪いんだろうか。

「ところで千春はどうしたんだ？……同室なのだろう？」

「ん、走らされてグツタリ。千春って運動出来るけど体力ないんだよ。今部屋で早々と襲ってきた筋肉痛でうつ伏せになって寝てる。」

「……なるほど、筋肉痛か。あれほど辛そうだと可哀想に思えるな」

「え？……千春っ！？」

筈が視線を食堂の入り口へ向ければ、壁を這うように歩く千春の姿。
脚がふるふると震えてる。

俺は席から立ち上がり千春に駆け寄る。

「い〜ち〜か〜……」

声までふるふるしてる。涙声だし。

「千春！まだ動いちゃダメだって、今は安静に……」

「だって〜、楽しそうなんだもん」

タパー、と涙を流しながらぷるぷると脚を震わせながら食堂内をあるこうとし、壁から手を離れた時、

「わっ！千春！……ほら、危ないだろ？」

「う、うう……ゴメンー夏……でもなあ」

倒れかけた千春を抱き止める。途端、女子特有の甘く、それでいて清々しい気分にしてくれる香りが鼻をくすぐる。

「仕方ねえ……ち、千春……すこし我慢してくれ？」

「え？いちっ ひゃあ!？」

思わず、抱き止めていた千春を両腕で抱き上げる。お姫様だったのだ。

千春は、俺が太ももに触れてしまったせいで筋肉痛の痛みが走り、俺の首に手を回し抱きついてきた。

ん？何故冷静なのかって？

食堂中の女子に見られ、もうなんか羞恥心とか吹き飛んじゃったんだよね。

「あ、あれは!?!」

「伝説の!?!」

「「「「お姫様だっこだ〜!!」」」」

あ、いやゴメン。超恥ずかしかった。

「おお〜、楽チン楽チン」

当の千春と言えば、お姫様だっこされ、心地良さげに目を細めた。犬とか猫とかの喉を撫でてあげたりするのとどこか似てて思わず笑ってしまう。

超かわえええ〜!!

「えっと、俺のと、隣で……いいか?」

「ん?一夏がそうしてくれると助かる。今腕も上がり難いし…飲ませてくれると、わたくしとっても助かるな〜。ああ、飲ませてくれないかな〜?」

さつきまでいた席に戻ると、自然に相手いた隣に千春を座らす。

片目を閉じ、いたずらっこのような笑みを浮かべた千春。任せろ、言われなくてもしてたから！

「おう、何がいい？コーラから？」

「え？じ、冗談だってっ…それくらい自分で…」

「問答無用！ほら、口開けて」

「わっ、バカー夏！そんな、子供のじゃないんだからっ」

コーラの入ったコップを持ち、千春に飲ませようとした俺は、顔を背けた千春の頬にコップを突きつける。

なんつーか、悪戯心が沸き上がる。

「ん、じゃあほら、自分で飲んでみるよ千春」

「え？…っ！…っ…っ…っおっ…」

片手にコップを無理矢理持たせる。

そうすると、力の入らない千春は両手で持つことになり、ゆっくり

とそれを持ち上げ飲もうとする。

そこで思い出してほしい。千春は腕が上がらない。故に、限界まで上げて胸より下までしか届かない。

「と、ところからいよゝ、いちはっ…」

それでも頑張つて飲もうとした千春。舌を出して嘗めようとしても届かない。

またしてもタパー、と泣する千春は降参の意思を表し、俺はニヤニヤと笑いながらコップを奪い、飲ましてあげる。

なんか雛鳥に餌を与える親鳥みたいだ。

すげえ可愛いぜっ!!

「いつ、いいいつまでやっとなるかあっ!」

「あいだっ!?!」

「ひゃうっ!?!」

イチャイチャ（一夏はイチャイチャしてた気分だが、千春からしてみれば一夏にいじわるされてただけ）してたら、竹刀をとった筈がそれを俺の脳天に叩きつけられ、思わず、というか衝撃でコップを手から離してしまう。

そうするとコップの中のコーラは千春に零れてしまい、……胸にかかってしまったのだ

Stage 17 『クラス代表就任パーティー・前編』（後書き）

まさかの前後編。何故かこの物語を読んでくださった皆様ひ人気な一夏くん。

メインヒロインを差し置いての可愛い発言に私の中の何かが反応した！！

???

「いいぜ！てめえらが、メインヒロインより主人公の方が可愛いってんなら……まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

的な勢いで書いた話。

本来なら全身筋肉痛で微動だにせず布団の上でうつ伏せになった青春を無理矢理起こしました。

223

なんか女々しいのは筋肉痛のせい。

風邪とか筋肉痛など、体調が悪く一夏に甘える（頼る）ときは大体こうなります。

追記

登録けんすう200突発あっ!!!

うれしい、嬉しいです!。

今後とも「北欧生まれのカレンダー」をヨロシクお願いします!

「ち、ちは……」

ゴクツ、生唾を飲む。

「う…わぁ…」

周囲からも熱い吐息が漏れる。今の千春の姿は同性であっても魅了する。

ゴクツ、またしても喉がなる。

「っ、つめたぁ、っひいっ！？」

胸に冷えたコーラをぶちまけられた千春は制服を脱ごうとし、上からぬ腕を上げようとしてまたしても筋肉痛に痛む。

「千春：お前：下着付け」

バシインツ！！

濡れて肌に密着した制服からは、「下着」を付けているようには見え
えず、何しろその大きな胸の先つちよには…

とまで思考した所で箒が放った竹刀を後頭部に受け意識を掠め取ら
れた。

ナイスだ箒。あのままだったら酷いことになってただろう。

千春を俺なんかの血で汚けがしてたまるか。

……あれー？ここだけ抜き取るとカッコいい台詞になるんだけどな
。使う場面を間違えてる感がバリバリ感じるんですがー。

それは、千春と仲の良い一田島さんとリアーデさんと相川さん《とくにさわぎたいひとたち》らが千春を強制送還してからすぐのことだった。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君にインタビューをしてみました〜！」

オー！と食堂にいた一同が盛り上がる。オーじゃねえですよオーじや。

「あ、私は二年の黛ほろみ薫子よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

受け取って一応頭を下げる。なんとというか様式美だ。

「ではではさっそく、織斑君！君の本命の相手はやはり千春・フレイヤ・ブリュッセル女史!？」

オイあんた、何イキナリ核心ついてんだ。

ガタタツ！

「そ、それは違うぞ！」

「あ、あり得ませんわ！」

俺の時間が止まった際に立ち上がり抗議するのは箒とセシリア。

え？なんで？

「ええ〜？だってほら。この写真を見てそう思わない子はいないよ？私がここに来たのもこれの調査だし」

ペラ、と渡して来たのは一枚の写真。

ISを纏った千春と俺が向かい合い、手と手を重ねて勝負を誓いあった時のものだ。

てかこの真横からのアングルだとアリーナのシールドに突っ込んでる気が……まあいいか。

「すみません。これ一枚貰えます？」

「お？構わないよ。インタビュー代と言っことば」

「クラス代表就任パーティーの入場料としていただいております」

「なかなか賢しいものだ。しかたない、スクープの時使わせて貰ったし、…いいよ!」

「さて、スクープってなんぞや」

「熱愛発覚!?!かの織斑一夏の恋人はカレンデュラ!?!、の見出し
一大トップで使わせて貰いました。あの号の売れ行きはヤバかったな」

それはあれか?俺と千春の愛の巢あごぐちが最近盛り上がっていたのはこの
新聞部の……………

「一夏っ!」

「一夏さん!」

「一夏くん!?!」

「おりむーっ」

食堂中の女子の視線が俺に向けられる。

あ、なんかやばい。捕食者の気持ちがあった気がする。

「の、ノーコメントで」

ポコポコにされました。

「じゃあ本題に移りましょうか」

「あれ？さっき千春の件でって……」

「ああ、あれ嘘。インタビューついでにスクープGETなるか！？
って気構えで聞いて見ました」

こうやって一般市民はマスコミに人生を変えられてしまうのか。ち
くせう。

「ではズバリ織斑一夏君！代表になった感想をどうぞ！」

ボイスレコーダーをズズイっと俺に向け、無邪気な子供のように瞳

を輝かせている。

「まあ…面倒くさいことになったな……とか思ってたんですが、…
こんなパーティーまで開いてくれたんだ、皆の為にも負けられない
……いや、俺が負けるのが嫌だから勝ちに行く。全力で、俺の全身
全霊を賭して戦いに勝ちに行きます……こんな感じ……かな？」

思わず力んじやったよ、はずかしい。

ボイスレコーダーを下げた先輩は、どこか熱を持った瞳で俺を見上げていた。

「う、うん……すごく……かつこよかった……が、頑張つてね織斑くん
っ、応援してるから！」

モジモジとスカートを弄りながら見上げてそう言った先輩は……な
んかさつきまでと別人だった。

「あ、ありがとうございます?。」

「じゃあ次、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが…
仕方ないですわね」

とかなんとか言いつつも満更でもなさそうに立ち上がるセシリア。

心なしかいつもより髪の毛のセットに気合いが入っている気がする……
写真対策だろうか？

「コホン、ではまず、一夏さんとわたくしの馴れ初めを……」

「却下。写真だけちょうだいな」

「なっ！最後までお聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、君も織斑くんに惚れた
からってことにしておこう」

ポツと赤くなるセシリア。きつと怒り心頭だろう。怒髪天なセシリアが懐かしい。

「なにをバカな」

ここは援護射撃し、セシリアの怒りを抑える。

「え、そうかなー？」

「そ、そうですね！なにをもって馬鹿としているのかしら！？」

あれー？俺が悪いのー？

「大体あなたは」

「はいはい。とりあえず二人並んでね。写真撮るから」

「え？」

意外そうなセシリアの声。しかしその声色はわずかに喜色を含んでいた。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらうよ。握手とかしてるといいかもね。あ、ただし個人的に腰に手を回したり、腕を組んだりしなだれたりとかはNGね」

「こ、腰や腕くらい！」

「やだ」

「…まあ、良いですわ……ん……」

何故かモジモジとし始めたセシリアはチラチラと俺を見てくる。

なんだろうか、この『チャンス到来、ただし安く見られないように気を付けなくては』的な雰囲気。あれか？この間の試合の雪辱を晴らすつもりか？

「あ、あの…撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて」

「やらせると思うてか、時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

先輩^{先ゆずみ}は俺とセシリアの手を引いて 俺の手を壊れ物のように
触れて そのまま握手まで持っていく。強引な先輩だ。

「……………」
「……………」

「な、なんだよ？」

「べ、べつに、何でもありませんわ」

「…なんでもない」

こっちをじろじろと見てくるセシリアと篝。

何か言いたいのか、と思ったが違うらしい。紛らわしいやつらだ。

「それじゃあ撮るよー。織斑くん、かつこよく撮るよーっ！」

は、はあ、そりゃありがたい事で。

「織斑くんに、一を足すとー？」

「……………」
「……………」
「……………」

シャッターが押される瞬間、一年一組が一人を除き全員フレームの
なかにいた。

箒なんて俺に抱きついてカメラに写るうとするくらいだ。

「箒……」

「っ、つい、転んだのだ。決して抱きついたわけでは……っ」

「ああ、わかってる箒、俺はわかってる……」

人見知りが激しい箒にしては頑張ったほうだ。
本当はクラスに馴染みたいんだ。

俺はセシリアと他のクラスメイトが騒いでる中、頑張って一歩を踏み出した箒の頭を優しく撫でるのだった。

「夏あ……」

その表情は、惚けていて、擬音でいうなら、ほにゃ、と音がつくよ
うな笑みだった。

Stage 18 『クラス代表就任パーティー・後編』(後書き)

今回で酢豚を出すと言ったな? …… あれは嘘だ。(笑)

次回! 本当に次回には出ます! 上々芋町を!

今回は千春がす巻きにされて強制送還されたお話でした(笑)

感想待ってます

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなスポルディングのバックを肩にかけた少女が立っていた。

まだ穏やかな四月の夜風に

「きゃあつ！？…な、何よ、いきなり、びつくりしたじゃない…」

急に吹き荒れた夜風にスカートを捲られ、髪を左右それぞれを高い位置で結んだ……ツインテール少女は顔を赤らめながら自然現象に悪態を漏らす。

「たく、…えーと？、受付って何処にあるんだっけ？」

上着のポケットから一切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格とカッパツさを非常によく表していた。本人の前で言えば回し蹴りの一発や二発を食らいそうだ。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれ何処にあんのよ」

取り出した紙にとつてはとても不幸だ。紙を穴があくほど睨む少女の眼光は鋭く、イライラとしているせいか殺気も漏れだしている。

「う、ごめんなさい！？私道順までは知らないんですう！！」
とでも泣きながら謝りそうだ。

しかし文句を言っても紙が答えるはずもなく、少女はくしゃ、と握りしめてから上着のポケットに紙をねじ込む。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさと言いながらも、その足はとにかく動いている。
思考よりも行動。彼女はそう言う性格なのだ。

彼女は辺りを見回し、生徒か先生など、学校を案内出来そうな人物を探りながら敷地内を練り歩く。

その鋭角的でありながらどこか艶やかさを感じさせるその瞳は、中国人のそれだった。

(あーもー、面倒くさいなー。空とんで探そうかな……)

一瞬、名案！と思った少女だったが、あの『アナタの街の電話帳』三冊文に匹敵する学園重要規約書を思い出して、やめる。

まだ転入の手続きが終わっていないのに学園内でISを起動させた
ら、事である。

最悪外交問題にも発展する。

それだけは本当にやめてく、と何回も懇願していた政府高官の情けない顔を思い出して、少女の気分はちよつと晴れた。

(ふっふーん、まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないと

ねー)

正直、自分の倍以上も歳のある大人がへこへこ頭を下げるのは、ちよつと気分が良い。

昔から、『歳をとつてるだけで偉そうにしてる大人』が嫌いな少女にとつて、今の世の中は非常に居心地が良かった。

男の腕力は兎戯、女のISこそ正義。

それもまた気分がいい。少女はかつて『男つていうだけで偉そうにしている子ども』が大嫌いな子供だった。

でも、アイツは違つたなあ。

とある男子の事を思い出す。その男子のことは、少女にとって日本に帰ってくる最大の理由になつていて思い出だ。

そう、この少女にとっては日本は第二の故郷であり、思い出の地であり、因縁の場所でもあった。

元気かな、アイツ。

まあ元気なんだろうけど。アイツの元気の無い姿を見たことがない。そついうやつだったから。

「……………ら、……………ぐぞ?」

ふと、声が聞こえる。

視線をやると、女子がIS訓練施設から出てくるようだった。どこ

の国でもE.S.関係の施設は似たような形をしているから、すぐにそうだとわかる。

ちよつどいいや。場所聞こつと

声を掛けようとして、少女は小走りにアリーナ・ゲートへと向かう。

「急ぐつたつてよ、なんで俺が…」

不意を突かれて、少女の体はびくと震えてその足が止まる。

男の声　それも知っている声にすごくよく似ている。
いや間違いない、同一人物だろう。

予期しなかった再会に、少女の鼓動がペースをあげる。

あたしつてわかるかな？わかるよね。一年ちよつと合わなかっただけだし。

そう自分に言い聞かせつつ、もしも自分だとわかってくれなかったらどうしようと言う不安に駆られる。

大丈夫。大丈夫！それにわからなかったら、あたしが美人になつたからだし！

超ポジティブ思考のレバーを入れて、少女は再び歩みを再開する。

「いち」

ああっ、声裏返っちゃったよ。なんかあたしがすっごい意識してるみたいじゃん！恥ずかしいなあもっつ。

「いつまで嫌がっているのだ、一夏。パーティーが始まってしまっぞぞ？」

「クラス代表なんかにされて喜ぶかよ、……はあ、なんで、は俺なんかに譲ったんだろ……」

「……顔を会わせて一月たってないが、ヤツの思考を読み取るうなんて一生出来んと核心した。わかったのはヤツが生粋の愉快犯だというだけだ」

「まあ確かに。中学の頃から不思議な雰囲気を持ってたな」

仲良く談笑しながら歩いて行く男女。

誰？あの女の子。なんで親しげなの？っていうかなんで一夏を名前で呼んでんのよ。

さっきまで高鳴っていた胸は冷えきり、酷く冷たい感情と苛立ちが

雪崩込んでくる。

それからすぐ総合事務受付は見つかった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、ファン・リンイン 鳳鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉を半ば無視して聞いた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね」

「二組のクラス代表ってもう決まっていますか？」

「決まってるわよ？」

「名前は？」

「え、ええと……聞いてどうするの？」

鈴音の態度に少しおかしなところを感じたのか、事務員は少し戸惑ったのように聞き返す。

「お願いするんです。代表、あたしに変わってって
」

後にこの事務員は語る。

彼女の表情を見たとき、私は生きるのを諦めた、と。

「大・復・活！！」

朝食も済ませ、クラスに着いた俺の目に入ったのは筋肉痛が治り元
気そうにピースしてる千春。

昨日部屋に帰ったときにベットにうつ伏せになっていた千春にマッ
サージをしたからだろうか、もう元気いっぱいだ。

つかマッサージ中の千春マジえろかった。

「ふぁっ」とか「んんっ!？」とか「やぁっ、きもち、い…いつ」とか……………おかげで僕は眠れず徹夜です。

千春の周囲には、千春と特に中のいい女子達がいた。

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

自分の席につくなり、クラスメイトに話し掛けられる。

「転校生?この時期に?」

今はまだ4月だ。なぜ入学じゃなくて転入なのだろうか。それにこのIS学園、転入はかなり条件が厳しかったはずだ。試験はもちろん、国の推薦がないと転入できないようになっていいる。となるとつまりは

「そう。なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

やっぱりか。あ、代表候補生と言えば。

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら？」

一組最強にしてイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。
今日も腰に手を当てたポーズが似合う。

一組最強なのは、あの試合のあと戦ったが、俺も千春も、最初から
全力を出したセシリアに瞬殺。

俺はともかく、千春が負けたのは驚いた。

ほうふな実弾兵装を扱う遠距離モード『深緑の大地』^{グリーン・ガイア}、高機動白兵
戦特化『金色の閃光』^{イエロー・ライトニング}では相手にすらならず、同じ戦闘思想であり
ながら千春がセシリアに勝っているBT適正値を遺憾なく発揮出来
る、中距離汎用型『蒼き水面』^{ブルー・アリス}で互角だった。

敗因は『蒼き水面』^{ブルー・アリス}のBT兵装、『フェザー』の火力不足。真つ正
面から向かい合えば扱い易さと火力で押し負けてしまうのだ。

正直試合の時のセシリアが可愛く見えるほどの無双っぷりだった。
その事をセシリアに言ったら顔を真っ赤にしてうつ向いてしまった。
可愛い、より綺麗と呼ばれたいお年頃なのだろう。決してそう言う
意図で言ったわけではなかったが。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのこ
とでもあるまい」

筈が腕組みしながら俺とセシリアを見る。

「どんなやつなんだろうな」

代表候補生ってんだからセシリアみたいに恐ろしく強いんだろうか？
勝てなくてもいいなら戦って見たいもんだ。

「む、……気になるのか？」

「ん？、そりゃもちろん」

「ふん」

聞かれた事に素直に答えたら、箒の機嫌が悪くなった。なんでさ

「今のお前に女子を気にしてる余裕があるのか？来月には対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわー夏さん。クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう。お相手はこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわー！」

ちなみに、放課後の訓練教官は三人に増えていた。

白兵戦が箒。

その他戦闘訓練がセシリア。

そして部屋での座学が千春だ。

千春から貰った携帯型投影ディスプレイにインストールしてあるIS辞典、あれは千春がつくったものだった。

最後のページ、製作者の名前が千春だった。

「ま、やるからには本気だ。クラス対抗戦、獲らしてもらおうぞ」

不満げな篤とセシリアにニヤリと笑う。

「うっ」

「あっ」

二人が顔を反らす。？なんだ？

「織斑くん、頑張ってるね！」

「デザートフリーパスのためにも！」

「今のところ専用機もってる代表って一組と四組だけだし余裕だよ」

周囲に集まっていた女子達のやいのやいのと楽しそうな気概を削ぐわけにもいかず、俺は「任せとけ」とかだけ言っておく。

「その情報、古いよ」

ふと、教室の入り口から声が聞こえた。なんかすげえ聞いたことのある声だが……

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから……残念だったわね」

腕を組み、片膝を立ててドアに持たれている、ツインテールの少女。

「なっ、貴女は何者ですの!?!」

セシリアが狼狽する。『同じ代表候補生』同士、相手の纏う雰囲気
でわかるのだ、セシリア曰く。

「私の名前は鳳鈴音^{フヤン・リンイン}。中国の代表候補生よ。今日は宣戦布告に来た
ってわけ」

ふっ、と小さく笑う少女。そのトレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。

ガタンっ！！

教室の窓際でその音はなった。

席についていたらしい千春が勢いよく立ち上がったのだ

「り……ん？……」

千春の口はわなわなと震えながら、少女の名を呟いた。

まるで親の仇を見るような^{まなこ}眼で。

stage 19 『転入生』 (後書き)

ついに登場！

やっと出せましたよ鈴。このペースだとゴスペル編までどれだけ時間がかかることやら(泣)

感想待ってます

「え？……千春？」

鈴は目を見開いた。まるで、あつてはいけないものを見るかのよう
な眼まなこで。

クラスに緊張感が走る。

「……鳳、鈴音……なんで、ここに……いるのよっ！」

千春は机から離れ教室内を駆け出す。目標は鳳鈴音、この少女だろ
う。

「千春！、落ち着け！」

私は怒りに震える千春を止めようとするが間に合わない。

ダンッ！

一夏の机を蹴り、高く飛ぶ鳳鈴音。それはまるで、『相手に飛びか

かる』ようだった。

いや、間違いなく千春に向かって飛び掛かったのだ。

机を蹴られた一夏はため息を漏らし、床にばら蒔かれた筆記用具を拾いあげる。

一夏、なぜ止めようとしないのだ！

私が一夏へ向け一瞬だけ怒りを向けた時、事態は急変していた！

「ちっはるー！！」

「りーんっ！」

抱^だきっ！

そう、二人とも甘い声で互いを呼びあい、抱き合ったのだ。

「へ？」

私は想わず変な声をあげる。まるでクラスを代表して声をあげたようだった。少し恥ずかしい。

しかし声をあげたくもなる。さっきまでの、一触即発、修羅場、など、様々な言葉が合いそうな雰囲気は一片も残さず消えていたからだ。

「会いたかったよりーんっ！、もうっ、二年ちよい合わなかっただけでこんなに可愛くなっちゃってえ！、可愛いよお！」

普段、喋らなければクールに見える千春の顔が緩みきっている。凰鈴音を抱き締めながら頬擦りする姿は親バカのようだ。

「あたしも会いたかったわよ千春！む、二年でこんなにつ…少しはサイズちょうだいってのーっ！」

凰鈴音もまた嬉しそうに笑い、次いでどこか羨ましげに千春の胸を揉みしだきながら吠える。

「やあつ、鈴つ、やめつ…んあつ！？」

相手を抱き締めていた腕を離し、胸を揉まれ悶える千春。

「ゴクリっ」「」

クラスメイト達が生唾を飲む。千春はビクビクと身体を震わせながら凰鈴音に胸を揉まれ続ける。その姿はすごく扇情的で、とても艶やかだった。

すぱんっ！

丸めたノートで凰鈴音　鈴の頭を叩く。

「変なキャラを演じたと思ったからすぐキャラ崩壊してるし、お前は何がしたかったんだ鈴！つか千春の胸から手を離しやがれ」

「あいたっ！？なにすんのよー夏っ！、一夏もやる？すっごく柔らかいわよ？」

片手で頭を擦る鈴は俺に振り返り、ニヤリ、と口元を釣り上げ、『悪魔の取引』をしてきやがった。

「おっ、おねが…いつ！？…やめ…て…ひゃあっ！？」

片手で千春の胸を片方揉みつづける鈴は、チラ、と悶える千春の『空いて』いる胸を見た後、

「空いてるわよ？」とでも言つようにニヤリと笑つ。

「是非やらせていただきまうばおっ！？」

千春の胸を揉もうとしたとき、視界に入ったのは千冬姉。

うつむきながらふるふると震える姿は、現代に蘇った鬼のようだった。
顔を真っ赤にしてたのは怒りからだろうか。やべえ、殺される。

「お、織斑…席につけ……………」

腕を胸の下辺りで組んだ千冬姉は俺をチラチラと、なんども見ながら促す。

胸の下で腕を組んだせいか胸が押し上げられるように強調され……

…は！？これはあれか！？

「胸を揉みたいようだな織斑、よかろう、胸に触れたら貴様を八つ裂きにしよう。それがいやなら席に座れ」と言う意味！？

た、たぶんそうだろう。『胸を強調』し、怒らず着席を促すからには……………そう言う意図があるのだろう。

「はっはいっ！」

俺は音を置き去りにするほどの素早さをもってして席に着席する。背筋はピンと伸ばし顎をひく。

席につく、という行為において、これ以上のものはないと言う形で。

「…………やはり、胸か……………」

千冬姉はどこかガツクリしたように肩を落とし、

「あわわわわっ……………」

ガクガクブルブルと、千冬姉を見て怯えている鈴の目の前に立つ。

「……もうSHRショートホームの時間だ。自分の教室へ戻れ……」
鳳鈴音

鬼など生温い。今鈴の前に立つは、悪鬼羅刹の修羅の王。
小娘如きが相対することが烏滸おしがましい殺戮の武神。

その一言で、鳳鈴音の下着が濡れた。

「ち、千冬さん……」

鈴の顔は青を通りすぎ、一周してまた青になっていた。……つま
りは青い。

その表情は死刑を宣告された絶望に色泥れた無罪の少女。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、でなければ……八つ当たりをす
る」

それからの鈴の行動は早かった。

千春から離れ、股をスカートの上から抑えて教室から走り去ってい
った。

鈴……小学生の時から癖、『チビり癖』、まだ治ってなかった
のか。いやまあ千冬姉何故か切れてたし、仕方ないか。

昔のままの鈴だ。気取った口調の鈴を見たときは驚いたよ。

「つか、あいつ、IS操者だったのか。初めてだった」

そう素直に思っつて、なんとなく口に出したのが不味かった。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？偉く親しげだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどう言う関係で」

「ねえねえ！あの子って織斑くんの恋人！？千春とも親しげだったけど……まさか愛人！？」

「千春、あの子とはどう言う関係なの？」

「んう……あ、ああ。私の大親友。中学の時にね……」

クラス中からの質問集中砲火爆撃。ああ、馬鹿……。

バシンバシンバシンバシン！

「席につけ、馬鹿ども。ブリュッセル、お前は席の後ろでSHRが終わるまでスクワットだ」

千冬姉の出席簿が火を噴いた。

stage20 『あなたは私の

』（後書き）

まさかのお漏らし属性追加wwwwww
数あるISのSS内でも鈴にお漏らし属性をつけたのは私くらいで
しょう（笑）

シリアルですね。誤字にあらず。

おやの仇を見るような眼……睨んでたのは抱きつきたい衝動を抑
えてたから。

し、静まれっ静まれ私の腕！みたいな。

感想待ってます

stage 21 『お揃いでどじいくの?』

「お前のせいだ!」

「あなたのせいですわ!」

昼休み、開口一番箒とセシリアが文句を言って来た。

「なんでだよ……………」

この二人、午前中だけで山田先生に注意五回、千冬姉に各三回叩か
れてる。学習しないんだろうか。

（と思う一夏だが、教室の一番後ろでスクワットをし続けた千春の、『ぶるんぶるん』と揺れる乳房を見ようと何度か後ろを見ようとしたり千冬に叩かれ、ならばと白式のハイパーセンサーを用いて、『前を見たまま後ろを』見ようとしたり、シールドを突破した、千冬が降り下ろした出席簿かどにて意識を掠め取られたのだった。彼は学習しない、というわけではない。諦めないのだ。）

「まあ文句でもなんでもメシ食いながら聞くから、とりあえず学食
行こうぜ」

「む…………。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

はいはい、ありがとうございます。ありがたくて涙がでるぜ。

「一夏っ、学食行こうぜ」

「お、千春。ああ、今行こうとしてた所だ。箒とセシリアもいるけどいいか？」

先程まで筋肉痛で泣いていた千春。

太ももマッサージをしてあげたらなんと動けるまでに回復したのだ。今も動きこそぎこちないが、俺に後ろから抱きついてくるくらいだ。

ああっ！ヤワラケエ！、当たってるだけで天国に行けそうなくらい気持ちいいっ！！。

どこに何が当たってるかは皆様のご想像におまかせします。R115が付かないようにするための処置です。綿密かつえっちな描写がご覧になりたい方は、製品版をご購入することをお薦めします

「ん、全然OKだぜ。むしろ来なかったら呼ぶし」

千春は俺から離れると俺達を率いるように先頭に立ち歩き出す。

さて、俺もいきますか… 　　なんで箒もセシリアもジト目で俺を……ん？鼻の下が延びて？………あれ？なんで二人の拳が眼前に

「ふ、不潔だっ！」

「不潔ですわっ！」

顔を真っ赤にして二人は食堂へ向け歩き出した。

ちくせう、今日は厄日だ、千春の太ももを触れたのとさっきの抱き付かれたこと以外は。

「待ってたわよ、一夏！」

ちびちやいな か あらわれた

どーん、と俺達の目の前に立ち塞がったのは噂の転入生、ファン・リンイン 鳳鈴音だ
った。

ちなみに俺や千春は略して鈴と呼んでいる。

しかしこいつほんと変わらんな。
髪型も昔から一貫してツインテールだし。

「まあとりあえずそこどけ。食券撮れないし普通に通行のじゃまだ」
「う、うるさいわな。わかってるわよ」

ちなみにその手にはお盆を持っていて、ラーメンが乗っかっていた。

「のびるぞ?」

「わ、わかってるわよ!大体アンタが遅くくるのが悪いんじゃない!
!…あつ、千春は悪くないわよ?そいつが悪いんだから!」

なんで早く来ないといけないんだよ。

鈴は元気なく俯いた千春にすかさずフォローする。

昔からこいつは騒がしくせ、千春には絶対に嫌われるようなことはしなかった。

いや、一度だけ説教され、嫌われたかもしれないと人ん家で泣いてたっけ。

まあとりあえずこのままじゃ俺が通行の邪魔になりかねるので食券を買い食堂のおばちゃんに渡す。

メニューは日替わりランチ。

「ゲルルルユ」

「な、何故千春さんは獣のような呻き声をなさっているのですか?」

「ああ、鈴に抱きつくのを我満してんだ」

「千春らしいが、抱きつかないのは何故だ？」

「今ラーメン持ってんだろ？抱きついたら危ねえし」

「ちっ、千春が自制しているのか！？」

「あ、ありえませんか！！」

今のやりとりで二人が千春に抱いてる感想が良くわかった。

全く、こいつらも、俺の中学時代からの親友（先日おっぱい談義したバカ）も千春をなんだと思ってるんだ！

あのバカも、『顔はいいが笑い方と生き方が合わん』とか言いやがる始末。友達なら全然OKだが恋人としてならアウトだなんて…とりあえずそいつとは互いにぶっ倒れるまで殴り合った。

「にして久し振りだな、ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

日替わりランチを待ってる間、隣で俺の事をチラチラと見てた鈴に話をふる。

「げ、元気にしてたよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

「どんな希望だこのバカ」

コツン、と痛くない程度に鈴の頭を小突く。

両手を塞がれていた鈴は恨めしそうに俺を睨むも、すぐに嬉しそうににへら、と笑った。

「あー、ごほんごほんー！」

「ンンンッ！……一夏さん？一夏さん？注文の品、出来ましてよ？」
棒読みで咳き込んだ筈とセシリアに会話を中断される。

おお、今日の日替わりは鯖さばの塩焼きだ。

こんがりとした焼き目が食欲がそそられる。

「向こうのテーブルが空いてるぜ？」

ラーメンセット（どんぶりいっぱいいっぱいのラーメンと炒飯、餃子と量の多さで学食とつぷのセットだ）をお盆に乗せた千春が先導する。

そう、鈴と同じラーメンを頼んだ千春が。

先程鈴がといったが、実は千春も鈴に嫌われるのを極端に怖がるのだ。

三人で何か食いに行くときも、鈴と同じものを必ず一品たのみ、さらに他に頼んだりしていた。

俺はと言えば、千春と『あぐん』がしたいために違うものを必ず頼み、千春と物々交換をしていたのだ。まあそうすると必ず鈴も乱入してきたが。

stage 21 『お揃いでどこいくの?』 (後書き)

ども、今回は短くてすみませんでした。

最近マドカ・マジカなるアニメを見まして、第三話で視聴簿…もとい、放棄しました。

無理、私リヨナだめなんです。しかもあのアングルだめ、余計グロさ増して…あの化け物が追撃して食い散らかすところも個人的にアウトです。

お陰でエンディング曲を知り、その曲を聞きながらラストのプロットが浮かびましたが。

『絶対的な絶望からの逆転ってかっこいいよね』って感じのラストです。

原作時系列なら七巻くらいですね。これは七巻までしかでてないからじゃなくて、ラストを迎えると決定的に原作と話が乖離してしまうからです。

まだ一巻分も終わってないですがねwwww

夢はでっかく大きく、と言いますが今の夢はラストまで持っていくところですかね。

感想待ってまゝす！

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいものだが」

「そうですね！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやいますの!?!」

昼食を食べている途中、二人は多少棘のある声で聞いてくる。

食堂にいる他のクラスメイトも、興味津々とばかりに頷いていた。

「べつに……こいつとは付き合ってる訳じゃないわよ」

はあ、と大きな声でため息をついて視線を二人から反らし応える。

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだよ。箒だって小学校の頃に俺とただけで夫婦とか言われて嫌だったろ?」

「へっ!?!あつ……あれは……その」

そう。剣道と一緒にやっていたせいで、箒はいわれのない中傷を受けたのだ。

四人組でよってたかつて箒を苛めていて、俺が切れて乱闘騒ぎになったが……今思うと、あの男の子達（一応書いておくが、言わずとも一夏と同学年なので今は彼らも15歳）は箒が好きだったんじゃないか？昔から箒は可愛かったからな。

んな事を言ったら、箒は顔を真っ赤にしてテーブルに突っ伏した。？どうした箒？

「あきれた。あんた昔からそんな事続けてたの？」

ほんとに呆れたように鈴がため息をつく。ジト目で見るなよ、なんか悪いことした気分になる。

「昔から……と言うことは、前にも一夏さんはそのような事を？」

「うん。あたしの時にも突っかかってきたガキンちよ五人に蹴りかましてからの大乱闘。なんだっけ？あの相手持ち上げて落とす技」

「ブレーンバスターな」

「ぶははははっ！子供の放つ技じゃねえよっ」

千春がテーブルをバシバシ叩きながら爆笑。

千春をヒーヒー（笑いだの意味で）言わせてやったぜっ！

「あとは千春の時もあつたわね。ナンパされて嫌がった千春を無理矢理連れていこうとしたの、しかもそんなのが三回も」

「それ、鈴が加勢してくれた時だけだろ？一夏に助けられたのは……更に四回プラスしてみて」

「あと四回も！？ああ、そう言えばボコボコになってた時が何度か……あんたあの時転んだって言ってたじゃない！」

「ああでも言わないと、なんで呼ばなかったんだ！とかお前キレるだろうが！」

ギヤーギヤーと騒ぐ二人を見て、セシリアは眉をひそめる。

「何故、一夏さんはそんなにも人のため、傷ついても戦つのかしら……」

その言葉は誰かに対して言った言葉ではなかった。ただわからなかったから、呟いたまでだ。

だからだろう。答えられたのに驚いたのは。

「人のためつつか……一人によつてたかつて虐めに入るのが許せなかったからだな。べつに一对一の喧嘩なら様子見に回るさ」

「え…?」

「千春の時は違う理由のくせに」

「ばっ!? 鈴てめえっ!!」

「ちはるっ、一夏が怖い」

「よしよし、ほら一夏、鈴が怖いってよ?」

「ぐぬぬ……この泥棒猫が…」

「へへくん、悔しかったらアンタが大好きな人に告白でもしてみなさいよ」

「ばっ!? ばばばっ!!!????」

「へえ! 好きな人がいるのか一夏! なあなあ誰だ誰だ? かわいいのか?」

「一夏っ!?、好きな人とは……誰なんだ!？」

突っ伏していた筈が覚醒し、周囲の野次馬たちも騒ぎだす。
当の一夏は顔を真っ赤にして停止フリーズしていた。

「件の織斑くだんくんが好きなきが!？」

「ま、まつんだ！こういう時は素数を数えて………素数ってなんだっけ！？」

「お、落ち着いて！まだ慌てるような時間じゃないわ！」

「邪王炎殺黒龍波あつっ！！！」

周囲の野次馬は総じて慌てていた。つか最後のはなんだ。

「でだ、俺と鈴は小五からの幼なじみだ。箒は小四の終わりに転校したからちょうど入れ違いだ」

周囲のざわめきを無視しながら話を元に軌道修正する。

「ふうん、この人がアンタの言ってた剣道娘？」

「ああ、篠ノ之箒って言うんだ」

鈴は箒をじろじろと見る。

箒は箒で負けじと鈴を見返していた。

「そ、…これからよろしくね」

「ああ、こちらこそな」

そう言っただけ挨拶を交わす二人の背後に、俺は竜と虎を見た。

膨れ上がる互いの覇気。それは通常状態いづもの千冬姉の覇気に、勝るとも劣らない。

相打つ二人の修羅は、今まさに通常状態いづもの千冬姉と並んだのだ!!!

しかしここで終わるかのように見えた挨拶たたくあいに新たな展開が!?

「ンンンっ！わたくしの存在を忘れて貰ってはこまりますわ！旦那

さま コホン、一夏さんからの寵愛を承るのはわたくしですわよ。

中国代表候補生、ファン・リンイン 凰鈴音さん？」

ここで現れるはもう一人の修羅。箒と鈴の気質を『剛』と言っなら、

セシリアもまた『剛』の者。

ちなみに『柔』は千春だけ。

「?……アンタ、まさかセシリア・オルコット?」

龍虎の激突に参戦したのは朱雀。これで玄武がいりゃ四聖獣が揃う。

「あら?わたくしの事を知っていますの?……まあ、このわたくしの存在を知らずこのIS学園に転入するはずありませんが!」

腰に手を当て優雅なポーズ相変わらず似合うなそのポーズ。

「まあね。アンタの噂だけは絶えなかったわ。BT兵器の適正値第二位の化け物……ってね。……ま、でも戦ったらあたしが勝つよ?悪いけど、あたし強いもん」

ふふん、と鼻で笑う鈴。相変わらずだな、コイツ。こいつ妙に確信じみてるし、しかも嫌味でない言い方をする。
素で、そう思ってるのだ。

「言ってくれますわね……」

途端、空気が変わった。

覇気から殺気へと、威圧から殺意へと変わる。

しかし鈴はそれをニヤリと笑っただけで涼しげに受ける。

そしてなに食わぬ顔でラーメンをすする……

『なに食わぬ』顔で飯を『食っ』、なんつって。

「そう言えばアンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん」

鈴はどんぶりを持ってごくごくとスープを飲む。こいつはレンゲとかそういうものは使わない。

『女々しいからイヤ』らしい。そのくせ千春にはレンゲを強要するんだからわけわからん。

「あ、あのさあ…ISの操縦、教えてあげよつか？」

顔を俺から逸らし、視線だけをこちらに向けてくる。言葉にしてもやけに歯切れが悪い。

「そりゃ助か」

「一夏に教えるのは『私』の役目だ！千春に指名されたからな！」「あなたは二組でしょう！？敵の施しは受けませんわー！！」

二人の修羅は、『阿修羅』へと覚醒した。
サイキック

stage 22 『超次元ラーメンホール』（後書き）

千春が空気の回。つまりエロ無し

鈴を書いててだんだんと鈴が好きになってきた今日このごろ。

千春メインにストーリーが進むので、鈴も多く書くことでしょう。
あの二人が出るまでにどれだけ好きになっているのか……（笑）

次回からクラス対抗戦に入っていきます。

Stage 23 『命短し、恋せよ乙女。その恋が実らずとも』

「くっ！……ぬおおお！？」

「箒さん！」

「わかっている！せえいつっ！！」

ガキンッ！

箒が駆るIS『打鉄』の近接ブレードと、『雪片・千秋』が激突する。

セシリアのビット攻撃を回避し、体勢を崩した俺に箒が仕掛けて来たのだ。

「ち……くしょっっ！」

つばぜり合いを制したのは『白式』出力の差で無理矢理押し勝ったのだ。

「ちいっ」

「『零落白夜』……！」

押し負けるや、すぐに距離を取った筈に俺は『ワンオフアヒリテイ単一仕様能力』を發動。

一撃で終わらせる!!

「やらせるとお思いで?……」

カシュッ、ヒュンヒュンヒュンッ! セシリアのビットが飛来する。

レーザーの雨が降り注ぎ、筈へと攻撃しようとした俺の進行を防ぐ。

「はあああっ!」

「こなくそっ!」

雨が降り止み、筈が近接ブレードを構えまた襲いかかる。
俺は『れいらくびやく零落白夜』を發動したまま『雪片・千秋』を降り下ろす。

「私が……真っ向からぶつかり続ける馬鹿に見えるか?」

「!?!?」

筈は近接ブレードで、雪片を『絡め取った』。

降り下ろした雪片を、ブレードで円を描くように振り、相手から剣を奪う『いなす』技。

出力で『白式』に敵わないと判断した筈は、技巧を凝らして『白式』

を纏った俺を制した。

『雪片・千秋』を後方に飛ばされ武器を失った俺に、箒が止めの一撃を見舞おうとする。

「うおおおおおおっ！！」

しかし、食らうわけにはいかない。俺は多方向個別近距離瞬時加速マルチトリガー ショートイグニッションブーストにより、『真横』に避ける。

突然、しかも無理矢理な加速に身体が悲鳴をあげるが俺はそれを無視。

今この時、俺は無惨にやられるわけにはいかない。這いつくばってでも勝たなければいけない……何故なら……

「頑張つて！一夏っつ！」

第三アリーナの観客席にて俺の勝利を願う千春がいるからだ。手を振っている千春の胸が『ぶるんぶるん』と揺れていた。ちよつとまで、あの揺れかた……！！??まさかノーブ

「チェックメイトですわ」

こめかみに青筋を浮かばせたセシリアの『スターライトmk?』から放たれたレーザーにより、瞬時加速中のスラストターが撃ち抜かれ、盛大にスツ転んだ。

さらに、スツ転んだ俺に箒が追撃とばかりに何度もブレードを叩きつけて俺のシールドエネルギーはゼロになった。まるでリンチだぜ箒……。

うっでいっ!!

「ちくしょう!セシリア、お前スターライト禁止だったろうが!」

「わたくし達が貴方に特訓をつけてあげるといふのに、余所見をしていた貴方が悪くなくて?」

「そつだぞー夏、今の訓練は私がメインだったのだ。こ、この時くらい『私』だけを見ている!」

「は、はあ……………」

そつ、今の戦闘は特訓だったのだ。

食堂での一件の後、訓練だ特訓だと言う二人に、千春が対鈴用に提案した中・近距離戦闘の、だ。

箒とセシリアがタッグを組み、箒が距離をとったらセシリアがビット数機により俺の動きを牽制する、と言った感じた。

なんでも、鈴のISは『白式』と同じくパワータイプのISで、なおかつ特殊兵装による高い空間制圧力を持つらしい。

一般的に有名な空間制圧兵器は、『ブルー・ティアーズ』や『蒼き^{ブルー}水面』のBT兵器が有名だ。

しかし鈴の操るISはBT兵器ではないそうだ。
ネタバレ禁止、と千春が教えてくれなかったのだ。

「なっ！？メインはわたくしの『ブルー・ティアーズ』ですわよ箒さん！？」

「白兵戦がメインだ！セシリアのビットは鳳鈴音の特殊兵装の『代わり』ではないか！」

いや、どっちも正しいんだけどね。白兵戦& amp; 中距離戦闘を想定した訓練だし。

言い争っている二人を他所に、俺はビットへ向かう。汗だくになった身体をシャワーではやく流したい。

「お疲れさま、一夏」

「うわっぷ!?!」

ピットの更衣室に入った途端、目が何かによって遮られた。タオルだ。

「サンキュ、鈴。…あー、生き返る」

投げわたされたタオルで顔の汗を拭い、すぐさま水筒に入ったスポーツドリンクを投げわたされた。

汗まみれの顔はそれだけで鬱陶しいものだ。それを微妙に濡れているタオルで拭えばそれはもう気分爽快。

更にぬるめのスポドリ。熱くなった身体を考えてぬるめにされたスポドリを、俺は更衣室や部室特有の背もたれのないベンチに腰かけ、ゴクゴク音を立て飲み下す。

「さっきの見てたけど、アンタ中々やるじゃない。最後の千春の胸を見て思考が遅れたのは最低だけど」

ニヤニヤと笑いながら、俺に背を向けるようにベンチにこしかけた鈴。

俺は「悪い」、と一言謝り鈴にもたれ掛かる。鈴は昔から、運動などで疲れて倒れそうになった時はいつも背中を貸してくれた。

「もっつ、いつまでも私の背中を頼りにしないでよね？重いんだから」

呆れたように言った鈴の顔は見えない。しかしその声色は少し嬉しそうだった。

「ん、悪い。けどお前に背中預けると落ち着くんだよ」

俺も、本当に前から何も変わっていなかった鈴に嬉しく思いつい甘えてしまう。

俺と鈴を家族で表すならば姉や母だろうか？鈴からはそう言った安心感を得られる。

千冬姉？父親だろ常考。

「ばっ！？バカじゃないのアンタ！」

「む？バカっってお前…」

「そういう言葉は控えなさいって前散々言っただじゃない！」

「ああ、確か小六の時に言われたっけ？「乙女心をわかってないわ！」「ってさ。ははっ懐かしいなあ」

まだ昔を語るほど歳は食っちゃいない。けれど懐かしく思っくらしい若輩の身でありながら許されるだろう。そう言えば

「そう言えばさ、酢豚は上手く作れるようになったのか？」

遠い昔にした約束を思い出し、俺は背中を預けたまま鈴に聞く。

ビクッ、と鈴の身体が震えた。

「昔約束したろ？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を食わせてくれるってやつ！なあなあ、上手くなったのか？昔っから鈴の酢豚は格別だったからなあ、それが毎日となると……ゴクリ、楽しみで仕方ないぜ！」

昔日本にいたころ鈴の家は中華料理屋を営んでいて、当時千冬姉が家にいない時が多かった俺は親友（件のロリ巨乳バカ）の実家の定食屋と並んで頻繁に利用させて貰っていた。

その時に馳走された鈴特製の酢豚を食べ、俺は思わず涙を流した。悲しいからじゃない。鈴の酢豚を食べるたびに幸せが口の中で広がったからだ。

鈴の旦那さんになるヤツは幸せだな、羨ましいぜ。

「あれは……その、毎日はやっぱ辛いから無し。あ、でも……作って欲しかったら作ってあげるわ」

「え、……まあ確かに毎日は辛いな。じゃまあつぎの機会を待つさ」

「……『そんな事』より、アンタどうなのよ？」

「え？………あ、何が？」

何故か、『そんな事』、と強調した鈴に疑問が浮かぶも、

「もち、千春の事に決まってるじゃない！アンタ千春の事見て一発で惚れたじゃない？どうせ一歩も進歩してないだろうけどっ！」

次の言葉で俺の疑問も違和感も吹き飛んだ。

「りっ、鈴！？」

「その様子じゃほんとに進んでないみたいね、ほんとヘタレなんだから！まあ仕方ないか、夏休みの時、海で千春の水着見て鼻血噴いたチエリーちゃんだもんねー夏は」

背中を預けていて表情は見れなかったが、間違いない、絶対ニヤニヤ笑ってる。

これ以上いるとヤバイ。主に思い出したくない過去のな感じで。故にここは戦略的撤退に限る。

「お、俺ようじがあっただ、わすれてたぜ。じゃあな鈴、あんがとよ」

軽く手をふりながらそそくさと更衣室から出ていく。

部屋から更衣室までISスーツで来たので帰りもISスーツなのだ。

「うん。ちゃんと身体洗いなさいよね？千春に嫌われちゃっわよ？」

「よ、余計なお世話じゃいっ！」

鈴は俺が更衣室を出る間際も、ずっとうつつ向いていた。

「たく…なんで忘れててくんないのよ…」

ひとりになった更衣室で、鈴はうつむいたまま呟いた。

「しかも意味間違っって伝わってるし……………はは、何期待したんだろ、アタシ……………」

自分自身で忘れようと、思いでの中で封じておこうと決めた約束。それを彼が覚えていてくれた。

その嬉しさや、言葉で表せられるものではない。

もしま、……もしかして……『彼』は私の事を………なんて、甘い幻想だ。自分は理解していたはずだ。

中学一年の一学期。入学式の日、彼から初めて持ちかけられた頼み事を聞いたあの日から。

好きな子ができた、彼女と仲良くなるにはどうしたらいいだろうか？

と言った内容の相談を聞いたあの日から。

最初こそ、一夏を拐かした！とか言って彼女に突っかかっていたが、彼女と話すと、言葉を交わすと、

『彼女』なら一夏が惚れて仕方ない。

と納得してしまった自分がいた。彼女はとても優しい人で、私が泣いている時にはいつも優しい言葉をかけてくれて、傍にいてくれて

……

私と彼女は大親友になった。

そして、私が大好きな二人が結ばれれば私も嬉しいと自分の心を騙し……いや、結ばれて欲しいのは本心だ。そう、騙したのは、

『一夏に恋した私の心』だ。

「せっかく、アタシが身を引いたって言うのに……」

身を引いたわけじゃない。もともと彼の目には彼女しか写っていなかった。

そんな事さえ騙す。さも彼女に譲ってやったとでも言うように。

「言うのに……っ、ひっ……ふえっ」

息がし辛い。目が熱い。

「いちっ、かあっ……っ、やっぱり……あたしっ、一夏が……すきっ！」

溢れだす涙を腕で拭う。止めどなく溢れる涙は彼女の頬を伝い、膝に墜ちる。

うつ向いていた彼女の顔は、涙と鼻水に濡れてくしゃくしゃだった。

もう、騙せない。再会した時、彼の事が大好きだということを再確

認ってしまった。

彼の横顔を見るたび、トクンと鳴る胸が彼女の恋慕を知らず。

千春ですらない相手と楽しげに話していた彼を見てズキリと傷んだ胸が嫉妬を知らず。

そう、彼女は自分の本心を騙せなかった。それを理解してしまった。

故に、彼女はひとり、涙を流し嗚咽しながら騙っていた恋心に心痛めた。

今までのツケはとても大きい。

鈴は、ああ、こんなに苦しいくらい彼に恋焦がれていたのか。と酷く冷静に理解した。

目頭が、頬が、胸が、身体が熱い。

それを冷やすように酷く冷静に。

stage23 『命短し、恋せよ乙女。その恋が実らずとも』(後書き)

まさかのシリアスですよ皆様。

結構真面目な。私が書いたんですよ？他人に書かせたんじゃ？何てことはございません。

鈴好きの皆様、ご安心ください。酢豚は黒にはなりません。ヤンデレ苦手ですので。鈴は元気一敗、もとい一杯に恋に悩んでいく予定です。

ではでは感想待ってます！

294

PS、

これやってみたかったんですよね〜(笑)

登録件数300突破!!!!いやあ、ほんと嬉しいです。

思わず小躍り踊っちゃいました(笑)

これからも、『IS 北欧生まれのカレンダーユラ』を応援よろしく
お願いします!!!

次から本格的にえろ……対抗戦になって行きます！

Stage 24 『三次元躍動旋回』

「ほらほら一夏、思考がだんだん単純になって来たよ？」

「っ、うおおおっ！」

特訓を開始してから数週間、俺が幕とセシリア相手に慣れたという理由で相手は千春となった。部屋での座学がある程度終わったのも大きいだろう。

そう、相手は千春なのだ。あとは言わずとも……………わかるな？

「ほら、突撃だけじゃダメだって！」

「くそっ、届かねえ！」

雪片で斬りかかっても、それを千春は身体を逸らしたり身体を曲げるだけで回避していく。

そして、千春が身体を動かす度に『揺れる』『胸……………もうね、集中出来ん。』

しかも千春のISSーツは以前のISSーツの強化版。

下乳こそ少なくなつたが、背中はや元……微妙にお尻の谷間が見えるところまでパツクリと開き、前は胸元から下乳まで、上下の谷間が見える作りだ。

簡単に言うなら、身体のラインがクッキリ出るタイプの黒のライダースーツ、二つジッパーがあり一つは鎖骨辺りで、もう一つはへそ辺りでまで下がっていて、そのジッパーの間はパツクリ開き……ううむ、わかり辛いかな……なら、黒のレオタードに鎖骨辺りからへそ辺りまで、上下に細長いひし形の穴を開ければいい。

ともかくこれで今の千春のエロさがわかるはずだ。つか肌色面積がISスーツの面積にくらべ圧倒的に広い。沖縄と北海道くらい広い。

さらにさらに、胸が『ぶるんぶるん』と揺れる度、

こぼれてしまいそうで怖い。何がこぼれてしまいそうから諸君らの想像力にお任せしよう。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄つ！！」

「っあ！？」

B T兵器『フェザー』から放たれる無数のビーム。

千春の身体にはかり意識を集中していた俺はそれをモロに食らう。白式の装甲が弾け飛び、衝撃が伝わる。

「たく、集中しないとダメだつて一夏！鈴相手にこんな隙を見せちゃったらアウトだぜ？」

「くっ、すまん！」

そつだ。今は千春との特訓中。千春に呆れられてたまるか！
千春の周囲に漂う『フェザー』からビームが放たれる。散開させ、
周囲から放たないのは特訓だから。

それを身をよじり回避し、『跳躍』して千春の背後に回り込む。
回避と状況の立て直しに特化した『クロス・グリッドターン三次元躍動旋回』。その機動で
逆に相手の死角に回り込む。

「千秋いつ！！」

決め所だ。さつきまで仕舞っておいた雪片を展開。音声認識による
ラビット・チェンジ高速武装展開、0・1秒で武装が展開される。

俺はそれを横なぎに振るう。

「ホント、魅せてくれるよね、一夏は！」

俺の背後から、ライフルを構えた千春の声が聞こえた。

相変わらず見切るのが速い。クロス・グリッドターン三次元躍動旋回を使われ今度は俺が背
後を取られた。

「隙だらけだぞ一夏！千春がお前に甘いからよかったものの、ファン・リ鳳鈴シン音相手にそんなので勝つつもりか！？」

「その通りですわ！あの隙だらけな戦い方の貴方を、わたくしでしたら戦闘開始から57秒で17回撃墜できましてよ！？」

こめかみに青筋を浮かべた篤とセシリアが俺に詰め寄る。こええ。いや、確かに集中出来てなかった。折角三人が俺に付き合ってくれてるのに。

「まあまあ二人とも、落ち着いて。けど確かに一夏は集中出来てなかったな。最後のクロス・グリッドターン三次元躍動旋回の応用はすごいと思ったけど……どうかしたのか？」

千春が心配そうに俺の顔を覗き込む。

「……悪かった、ちょっといろいろあって集中出来なかった。あと

一回、あと一回だけ、……頼めるか？」

「……………うし、今日が試合前にアリーナ使える最終日だしね。…
…そだ、箒、『グラデーション』使ってみる？」

頷いてからライフルを展開した千春が箒を見て問う。

今の箒はISスーツを纏ってるだけで『打鉄』は装備してなかった。
なんと言っても今日は、クラス対抗戦前にアリーナが使用出来る最
終日。訓練機『打鉄』を使用したい生徒は山ほどいる。

アリーナは試合用の設定に調整される。つまり実質特訓は今日で最
後だ。

「え？……わ、私がか？それにお前のISは……」

「大丈夫大丈夫、『グラデーション』はファーストシフト一次移行してないしね」

『グラデーション』を装備していた千春が膝を付き『グラデーシヨ
ン』から降りる。

降りる瞬間、胸が一際大きく揺れる。

「一次移行していないんですの!？」

紺色のISスーツで身体を包んだだけで、専用IS『ブルー・ティ
アーズ』を装備してないセシリアが千春に駆け寄る。

「え？知らなかった？『グラデーション』は一次移行をせず、最低システムが同乗者に合わせるだけで高い能力を発揮出来るようにした機体なんだ。だからモード選択機能を付け、同乗者の得意タイプのISにするのよ」

それじゃあれか？今までの千春は最適化とモード選択のみで戦ってたのか？

「まあね。機体の特性上、一次移行なんてもつての他だからね。同乗者に合わせて武装変わったりもするし」

啞然、だ。最近ようやくISの専門用語が理解できた俺を始め、箒やセシリアまで啞然としていた。

「ほら、箒乗って見てよ。箒なら『イエロー・ライトニング黄色い閃光』かな？」

頷いた箒が『グラデーション』に乗り込む。灰色の装甲の『グラデーション』が起動する。

「では行くぞー夏。モード選択、イエロー・ライトニング『黄色い閃光』！」

装甲を黄色に染めた『グラデーション』が多方向推進翼を広げ飛翔する。

「ああ！行くぜ箒！」

俺も推進翼に火をつけ飛翔した。

「ぜえっ、ぜえっ！も……ムリ」

第との戦闘後、同乗者を千春へ変えた『グラデーシヨン』と戦い、心身ともに疲れきった俺が倒れ込む。ISを展開してないため、地面へ倒れた痛みが直に伝わる。

「お疲れさま一夏。さて、アリーナの使用時間も終わりに近いし、今日はこれでお終いにしようか」

同じくISを粒子変換しチョーカーにした千春が俺含め三人に聞く。

「ああ、そうしよう。ありがとう千春、貴重な経験をさせて貰った」

「スペック上では『打鉄』を上回っていますからね。さらにその特性から専用機クラスの機体に触れたということです。IS適性ランクCの箒さんにはそうそうできない経験ですわよ?」

「む、…わかっている。だから貴重な経験をさせて貰ったと言っただろう。それに元より私はセシリアに言っではない!」

いつもならもつと噛みつく箒も、BT兵器を用いてみてセシリアの凄さを理解したのか、フン、と顔を逸らす程度だ。

「ふふ。でも箒はモード選択の切り替えがとても速かったね。普通の人は始めての時は大抵急激な性能変化についていけないのに。才能だよ才能!」

「そ、そうなの?…ふふ、そうか…才能、か」

首のチョーカーに触れながら少し驚いたように言う千春に、箒は気分を良くしたのか、フンと腕を組んだ。
不適に笑いながら喜ぶな、怖いです。

「ほら、大丈夫?」

千春が倒れている俺に手を伸ばしてくれ。
俺はそれをドギマギしながら掴んで引つ張られた。

「悪いな千春。じゃあまた後で、食堂でな？」

箒とセシリアに軽く手を振りながら俺と千春は二人とは違うピット
へ向かい歩き出した。

「にしても、クロス・グリッドターン三次元躍動旋回の応用は本当にお見事だったよ一夏。
初見で見たら鈴だつて驚くだろうね」

「あ、ああ……」

「一週間はアリーナは使えないし……千冬先生に頼んでグラウンドを
使わせてもらえないかな？」

「あ、ああ……………ゴクッ」

今千春の着てるISスーツは前回のISスーツの『強化』版。後ろ
から見た千春のISスーツはもうやばかった。

歩く度にぷりっぷりっ、と突き出されるお尻。

此度の背中がガバツと開いたISスーツは前からも後ろからも至高
の一品だった。俺が訴えたおかげかTバックでもなくなったし。い
や、ある意味Tバックよりエロい。
思わず生唾を飲む。

「っと、お風呂先にする？後にする？」

幻視するのは、玄関先に現れたフリフリの白いエプロンの千春。そのフリフリエプロンから延びる四肢は肌色。手にはご飯を作っていたのか、お玉を一つ持っていた。ご飯を作ってる最中だというのに、帰ってきた俺を玄関先まで迎えに来てくれたのだ。その甲斐甲斐しさにときめく俺。

そ・れ・と・も、一緒に、入る？（はあと）

「一緒に入るでっ！」

エプロンを取った千春は生まれたままの姿で、俺はそんな千春をお姫さま抱っこして一緒に入るのだった。

台所では沸騰した鍋から泡が吹き出し、火が自動で止まる……………俺と千春がご飯にありつけたのは深夜だった……………なんてな！妄想、妄想だぜ！

いやあ、ベタだ、ベタベタだ。共同作業して身体も汗でベタベタだ。うわ、下ネタでだじゃれとか初めて使ったよ。

「ふえっ？……一緒に……え？……いち……か？」

そう、妄想だったのだ。千春が、一緒に入る？なんて聞いたのは妄想内の話なのだ。

なのに、俺は現実^{リアル}で答えてしまったのだろう。
顔をそりゃもう真っ赤にして聞いて……最終確認してきた千春を見
て俺はそう確信した。

stage 24 『三次元躍動旋回』 (後書き)

対抗戦にまだならない……け、けどそのかわりにえっちにしまし
た！えっへん！ (笑)

「いち……か？」

千春はおずおずと、俺を見ながらもう一度俺の名を呼ぶ。
耳元まで顔を真っ赤にした千春もっ……たまん！

じゃねえよ俺！なにこんな時に萌えてんだよ俺！

どうすんのよ、どうすんのよ俺！

神は言っている。ここで押し倒すべきだと………

黙れっ！神と言う名の俺の煩惱っ！……！

そんなことしたら嫌われるに決まってんだろ……！

「きゃっ……？……いつ、一夏………どうしたの？」

あれ？なんで俺千春の両肩掴んで壁に押さえ込んでるんだ？

「い、一夏？……一夏の今の顔……こ、怖いよ？どうか……したのか？」

千春の怯えた顔。だけど俺は止まらない。段々と千春の顔が近づいてくる。

「いつ、一夏！だつ、ダメ！ダメだよっ！」

千春の顔に涙が浮かぶ。しかし、その言葉に反して千春は反抗しつしない。言葉だけだ、身体は受け入れようとしている。

「い……ちか……だ……め……」

二人の唇がふれ合う時、千春は瞳を閉じた。その閉じた瞳から一筋の涙が零れた。

「おい！一夏？だいじょーぶか？」

ぶんぶんと、目の前で千春の手が振るわれる。

「へ？」

あれ？今俺、千春とキスし……

「お、気がついた。ほら、だから先に入るか後に入るかって……
…そだ、なんなら一緒に入るか？私はべつにいいぜ？」

千春はニヤリと笑うとISスーツに手をかけチラリ、と素肌を見せる。

「……………」

あれか？まさかあれなのか？あそこまで行ってあれか！？

夢落ちとかのあれか！！？？

「ぐうおおおおおッ！！！！」

膝をつき頭を床に叩きつける。

俺は、俺は！今！この時！！煩惱しかないのか！！！？

俺はっ！好きな子を押し倒す妄想をっ！！

「ちつきしよおおおおっ！！！！！！！！！！」

「いつ、一夏あっ！！？」

何度も何度も頭をぶつける。千春が俺を止めようとすることも止まらない。恥ずかしさとムカつきと勿体なさで止まらない。

「ほんとに大丈夫？」

「ああ、もう平気。心配かけてごめんな千春」

「たくホントだよ、いきなり頭打ち付け始めてさ。びっくりしたんだぜ？」

ホットミルクが注がれたカップを千春から受けとる。並々と注がれたそれは千春の好物でもあった。

「ま、なんでも一夏が平気ならそれでいいや。篝とセシリアがご飯持ってきてくれるから、一夏はジツとしててね？」

千春は自分用のマグカップ（可愛らしいキャラクターが描かれている）にもホットミルクを注ぎ、ふーふー、と息を吹きかけてからずずず、と啜った。

そんな一つ一つの動作に一夏は見惚れ、先程のが妄想でよかったと心から思った。千春のあんな顔、俺は望んじやない。いつもの千春の表情のほうが魅力的だ。

「あちっ！」

ゴクツ、と飲んだホットミルクは熱く、俺は舌を火傷した。

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは初っぱなから俺と鈴。

噂の新生と唯一ISを動かせる男である俺との試合ともあり、会場は満員御礼。立ち見席や会場入り出来なかった生徒のためのモニタールームまで満席らしい。

前回のクラス代表決め試合と同じかそれ以上の熱気を会場から感じる。

「へえ、それがアンタのIS？なんか西洋の騎士みたいね？」

ピットから出た俺をまちうけていたのは鈴とそのIS『甲龍シムロン』が試合開始の時を静かに待っていた。

「っ……ああ、『白式ハクシキ』って言うんだ。よろしく頼むな」

なんでもないうような会話。しかし、俺はすでに圧倒されていた。

鈴の放った言葉に、全身を威圧する覇気が込められていた。本気のセシリアと戦った時と同じく、鈴の所作、言葉、視線、存在に俺が圧倒される。

肌にビリビリとした感覚が走る。

『絶対強者』の存在感。これが代表候補生。

「ふふ、そんなに震えてて大丈夫？手加減してあげよっか？」

鈴がクスリ、と笑う。

バれている。俺が鈴に圧倒されている事に。

「バカ、武者震いだ。お前こそ、手加減なんかするなよ？負けた後に文句言われても敵わん」

嘘だ。互いに、な。

俺の震えは武者震いなんかじゃない。恐怖、戦慄とかのもんだ。強者との戦いに心震えたわけじゃない。

対して鈴。奴は手加減ができない。いや、油断といった事が本能的な、あるいは体質と言ってもいいレベルで絶対に出来ない。強弱は付けられる。しかし、慢心や驕りが無いのだ。

昔からそうだった。全ての事へ全力で……

そして更には俺は手加減とかそう言うのをされるのが大嫌いだった。故に鈴の言葉はただの挑発。手加減できねえくせに言うなっつての。

「じょーとーっ！……と言うか、手加減してくれなんて言ったら試合前にボコボコにしてたわ」

握った拳をもう片方の掌にぶつけ、鈴はニヤリと笑う。

「そうかよ、そりゃ命拾いしたな」

対して俺は空中で直立不動。右手にいつでも『雪片・千秋』を呼び出せるよう、集中するためだ。

アリーナの試合開始のカウントが始まる。

鈴は片手に、二メートルはしそうな大剣を展開する。

青龍刀と呼ばれる剣に形状が似ている。

間違えなく、鈴のIS『甲龍』の近接武器だ。

カウントが2を切る。しかし俺はまだ雪片を抜かない。

カウントがゼロを示し、ブザーがアリーナへ鳴り響く。

ギョーンッ

ブザーがなり終わるよりはやく、高速で接近してくる鈴。

俺は、まだ抜かなかった。

stage25 『クラス対抗戦、試合開始』（後書き）

皆様、もちろん夢落ちですよ夢落ち。

どうなっちゃうんだろう！？なんてわくわくしていただけで皆様、申し訳ありません。なんにもなりませんでした（笑）

夢落ちか、「なっ、なーんてな！」って一夏が誤魔化す案があったのですが、誤魔化したあとの千春の反応が、自分の中の千春とちがうなーってことで夢落ちになりました。

性格（常識が）女の子すぎたのが原因です。当初は一夏の目の前でも、裸で大丈夫！な感じを想定してたくらいですし。

さて、やっと始まりましたねクラス対抗戦。

ようやく一巻の終わりが見えてきた……………

感想まっています！（笑）

何よ、武器を出そうともしないなんてふざけてんの？

ファン・リンイン
鳳鈴音はカウントが終わる刹那、憤りを持っていた。

いや、アイツが勿体ぶってる時は何かしらある。

あたしの誕生日の時にやった、トランプの大貧民（または大富豪）の時もそうだった。

あのバカは切り札がある時こそ『待つ』のだ。

なら様子見するか？

んなわけないじゃない。あたしを誰だと思ってんのよ？

ファン・リンイン
鳳鈴音！中国の代表候補生にまで上り詰めた女！

あのバカの切り札なんて無理矢理ねじ伏せてやるわよ！

ブザーがなり終わる刹那、一夏目掛け突撃しながら鈴は不敵に笑う。

あたしと、あたしの甲龍相手にどこまでやれるの一夏？。

巨大な青龍刀を振り上げたその刹那、期待を胸に鈴は心の中で問う。

ブンッ！！

降り下ろした剣は………

一夏を真っぶたつに叩き割った。

アリーナの会場に悲鳴が走った。それもそうだろう。人間が一人、真つぷたつに叩き割られた光景等見て驚かない者などそうそういない。

しかし、真に悲鳴を上げ、驚きたかったのは、叩き割った本人だった。

「なっ!?!」

なんで……手応えがないのよ!!

そう、叩き割ったはずなのに手応えがない。まるで空を切ったようにならぶった。

そして、叩き割ったはずの一夏は、目の前から消え失せていた。

鈴の頭の中に一つの解答が浮かびあがる。

偽物か？

それが一番説得力が高いだろう。あれを叩き切る瞬間まで、それを

『白式』だと『甲龍』は認識していた。

しかし、鈴の直感はそれを違うと否定した。

いや、『そんな安易な答えであるはずがない』と否定したのだ。

では一体なんなのか？

そんなの勝ってから問い詰めればいい。余計な思考などで時間を食い、負けてしまえば代表候補生としての誇りが傷つく。

これだけの思考を、凰鈴音、彼女はコンマ0・2秒の間に行っていた。

しかし、その0・2秒が命取り。

「千秋いつ!!」

背後から声が聞こえた。振り替えるより速くその声の主が一夏だと理解した。

『ワンオフセカンドアビリティ』
『準単一仕様能力』、その名も『疾風迅雷』。

機体全体に広がる溝がスライドし、各部位から小型スラスタがその身を表す。

『疾風迅雷』展開後の最大速度は『亜光速』。

後の歴史では、IS史上始めてにして唯一、現存するISの中で『亜光速戦闘』を行ったIS。とても歴史書に乗る事だろう。

通常稼働でも超音速一步手前なのだから恐れ入る。『疾風迅雷』はISのリミッターを外し、なおかつ高速機動中に、スライドした溝から放熱と共にエネルギーの余剰出力を放出する。その過程で放熱と余剰出力で形作られた『残像』が発生する。その放出された熱とエネルギーからか、他のISはハイパーセンサーでその『残像』を『白式』と認識してしまうのだ。

肉眼で見ればそこに『残像』が残っていないことなど見るだけである。

しかし、ISを装着している以上絶対と言って良いほどハイパーセンサーを使用する。

ハイパーセンサーを使用する以上、この『疾風迅雷』からは逃れられない。

元より、超音速一步手前で機動するISを、肉眼で捉えられようか？

千冬姉ならやってのけそうだ。

一夏は、右腕を引いた体勢で鈴の背後に回り込み、一人苦笑した。

音速機動による急停止、方向転換は全身から露出する小型スラストーを効率よく使用して機体制御する必要がある。しかしそこら辺は『白式』が勝手に制御してくれる。

俺はと言えば、『残像』を叩き切った鈴へ向け引いた手をつき出すだけだ。

そう、突きだしながら武器を『呼び出す』コールする

「千秋いつ!!」

腕を突きだしながらの音声認識による『高速武装展開』ラピッド・チェンジ。

その展開速度は0.1秒。本来音声認識を用いず武装を展開する場合、操縦者のイメージにより展開速度は大きく変化する。例えばセシリアだ。

彼女は得意な射撃武器の展開はすばやい。

しかし、苦手な近接武器の場合、その展開そくどはひどく遅い。

もたもたとたつき、最後には音声認識で無理矢理呼び出した。

授業中に千冬姉に指され、展開したときは怒られてたっけ。

しかし、音声認識にはイメージはほとんど使わない。そのくせ展開速度が速いのだ。

千冬姉曰く、音声認識は相手に使用する武器の情報が知られ、熟練した操縦者になるとその展開速度内に、その武器の対処法を組まれるらしい。

0・1秒以内に対応する相手とかどんなバケモンだよ、と俺は当時戦慄した。

何はともあれ、俺は『雪片・千秋』による高速の突きを放つ。展開速度は一秒以下、しかも背後からの奇襲により相手の反応は遅れる！

これが俺の切り札。武装もよくわからない相手を、『武装を出させる前に倒す』技。

まず武装を展開せず油断を誘い、『残像』を相手に切らせ、その隙に高速ど相手の背後に回り込み、背後から高速武装展開により、0・1秒で呼び出した雪片で切りかかる。

『残像』を囿に使う技、名付けて『インビシブル影打ち』

そう、『影打ち』こそ俺の切り札。

取った！

俺は勝利を確信した。

しかし、その0・1秒が命取りだった。

ガンッ！

機体に、身体に衝撃が走る。

腹部に蹴りを食らった。蹴り？なぜ蹴りなんか。

鈴が蹴りを放つには、

振り向く・蹴りを放つ

と言った行程が必要なはずだ。

振り向く間に蹴る？それも無理だ。振り向く瞬間に雪片が届いている。

「ならなぜか？ 何故……鈴が逆立ちのような格好で俺を『見下ろして』いるのだろうか？」

「残念だったわね一夏。確かに驚いたけど、自分から居場所を知らせたら意味ないわよ？」

例えるならばそれは逆サマーソルトキック。

突きを身を屈めることで回避し、そのまま足を後ろへ振り、前転すると共に後ろへ蹴りあげる。

故に今、鈴は逆立ちして見える。決して、俺が逆立ちしたわけではないのだ。

こいつ……0.1秒で……反応しやがったのか!?

ガシャッ！

『甲龍』の両肩に存在するスパイクアーマー棘付き装甲の『アンロック・ユニット非固定浮遊部位』がばか
つとスライドして開く。

中心の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

意識が消えかける。ダメージが身体に直接響く。この武器は……食らい続けたらヤバいつ。

「今のはジャブだからね？」

ニンマリ、と鈴が口元を吊り上げた。

不味い！！本気でヤバ

連射された見えない衝撃に、俺は『殴られ』続けた。

Stage 26 『新技・影打ち』（後書き）

まさかの同日……四時間で書き上げました（笑）
夜中のテンションプラスご都合設定満載（笑）

戦闘中の描写不足が目立ちますねこりゃ。

戦闘開始から五秒たっていないという真実（笑）

感想まっています！

「がはッ!..!」

地面に叩きつけられる。肺の中の空気が地面に打ち付けられた衝撃で吐き出される。

何をされた?... 弾丸なんて見えなかったし、なにかが放たれた様子もなかった。

いや、あの非固定浮遊部位アンロック・ユニットがチラリと光った。あの光でやられたのか？

いや、まさか。あれはたぶん発射した時、空気と空気が擦れて起こった火花みたいなもんだ。よくわからんが、あれが砲弾なわけがない。

「.....」

ニヤリと鈴は笑ったままだ。しかし、目だけは笑ってなどいなかった。

猫科の動物のように細められた目は、獲物を見る狩人の目。

どうやら俺は、『影打ち』インシッブルのせいで、雑魚から『敵』にランクアップ

プしたようだ。

「ちきしょう……」

俺は立ち上がり、口の中に広がった血を吐き捨て雪片を構える。

鈴はそれを見て持った青龍刀をクルクルと器用に回す。
見えない弾丸を放つ特殊兵装での中距離ではなく接近戦。インファイト

こっちの得意分野で相手しようって？……油断や慢心ではない……つまり純粹に俺の力量を見極めようとしてか……？

上等だ。その邪魔な非固定浮遊部位ごと、叩き切る！

俺は急上昇からの瞬間加速で鈴に切りかかった。イグニッションブースト

「なんだ……あれは？……」

ピットからリアルタイムモニターを見ていた筈が呟く。
突然一夏が地面に打ち付けられたのを見たからだ。

「一瞬……奴の……凰鈴音のISの近くが捻れたように見えたが……」

モニターを見て怪訝な表情を見せた箒。

しかしその言葉を聞き、同じくモニターを見ていたセシリア、千冬、真耶、千春は箒を一斉に見た。

「視認…できたのか？」

千春があり得ないものを見るかのように箒を見る。

「あ、ああ。僅だか捻れたような……気がしたのだが、間違っていたのか？」

「……………」

千春の表情が険しいものになる。

「『衝撃砲』。空間自体に圧力をかけて砲身を生成。その余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す、と言った武装です……箒さんが見た捻れは……たぶん空間に圧力を加えたさいに生じたものだと思います」

山田真耶が箒の問いに答える。モニターを見ながら語るその言葉にセシリアが続く。

「わたくしの『ブルー・ティアーズ』と同じく第三世代型の兵器ですわね……見えない砲身と見えない砲弾……そして砲身射角がほぼ無制限なしで撃てるようですわね……」

セシリアは唇を噛む。たぶん、セシリアでも『衝撃砲』を見切ることはできない。

偶然だろうか？……

セシリアは箒から視線を外す。

「一夏………」

モニター越しには一夏と鈴音が近接武器のぶつけ合いをしていた。その様子を箒は見つながら胸を痛めた。苦しそう。辛そう。一夏の戦う姿を、箒は身を切るような思いで見ている。

「……………」

そんな様子の箒の後ろ姿を、千冬と千春は睨むような見ている。その二人の思考は同じ。

ハイパーセンサーをもってして、ようやく見れる空間の捻れを、何故モニター越しで、肉眼で見えたのか。

二人の思考を占めるのはただその事だけだった。

「つつ!?!」

「やるじゃない! 『甲龍』は力自慢なのよ?」

ガンガンッと鈴が青龍刀を雪片に打ち付ける。先程から押され続きだ。

たく、何をおもいあがってたんだか、俺は。

接近戦は、明らかに奴、鈴も得手分野えてぶんやじねえかつ!

鈴の特殊兵装にばかり気を取られ忘れていた。

千春にも言われた。幕とセシリアとも特訓したじゃないか。

『近距離、中距離を得意とした対鈴用』の特訓をつ!

「こなくそつ!!」

顔の横を『暴風』が横切った。野郎、さっきの特殊兵装をツ!

ガガガガガカツ!

連続で発射される見えない弾丸。『空気砲』を、鈴の目を見ながら着弾点を予想し、身体を捻り、避け、辛うじて致命傷を避けていく。

頭に当たったらアウトだ。エネルギーシールドにより直接のダメージこそ身体にはないが、あの『空気砲』は衝撃が身体に伝わる。頭に衝撃が走れば、確実に意識を掠め取られる。例えばそれが一秒に満たなかったとしても、鈴の前で無防備な姿を見せたらその一瞬で

やられる。

「よくかわすじゃない。衝撃砲『じゅうげんぱう龍砲』は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

鈴はさも楽しげに言う。その場から全く動かずに衝撃砲を放ちながら。

「くそおつー！」

全く動くことのない鈴へ向け、なんと突撃したことが。何度回り込もうとした事が。

しかして全て、あらゆる方向へむけ、発射された衝撃砲に迎撃され失敗に終わった。

どうやらあの衝撃砲、あらゆる角度、方向へ向け発射可能らしい。真下や真上、背後でさえカバーできるのだろう。

高い空間制圧力を持つと聞いたが、俺の予想は大きく逸れていた。

空間制圧力と言うより、もはや空間迎撃力だ。

中距離特殊兵装、衝撃砲。その能力が最大に生かされるのは中距離、それも敵の動きを牽制する事。

相手が近接特化……つまり白式のようなISでは分が悪い。

(ホント、魅せてくれるよ、一夏はー！)

ふと、千春の言葉を思い出した。

s t a g e 2 7 『衝撃砲』 (後書き)

まさかの同日三回投稿WWW

一つ一つが短いからできる芸当ですハイ(笑)

「……………」

あの時、千春が言っていた言葉を思い出す。

ちくしょう、形のいい千春のエロいお尻しか頭に浮かんでこねえっ
！！

「なにアンタはニヤついてんのよ！」

「うわっ!?!」

こいつっ、衝撃砲で人の妄想邪魔しやがって!……………あれ?なん
で妄想してたんだ?

ガンッ!!!

腹部に衝撃が走る。鈴の衝撃砲が放たれたのだ。
そして、その衝撃で俺は、思い出した。

(にしても、三次元躍動旋回の応用は本当に驚いたよ一夏。初見なら鈴も驚くだろうね)

そつだ。千春はそう言っていた…。

これだ、これしかない

これがダメならエネルギーの問題で間違いなく負ける。『疾風迅雷』を用いても良いが、そんなことしたらすぐにエネルギーが切れる。

『影打ち』^{インビシブル}の時のように瞬間的に『疾風迅雷』を使っても、『零落白夜』が使えなくなる。

もう、これしかないのだ。接近し、『零落白夜』を叩き込むのは。

「うおおおおっつ！ー！」

腹部の痛みを我慢し、鈴に向け突撃する。両腕を前で交差させ、それを簡易の盾にする。

「無謀な事してっ…いいわ、お望み通り叩き落としてあげるわよ！」

俺は鈴の舌打ちを聞き逃さなかった。

鈴は今俺に呆れたか、その程度かと思限った。しかし、それで良い。
ガツ、ガガガガガツ！！

交差した腕に立て続けに衝撃が走る。止まるわけにはいかない。

ガツ、バキィッ！

片腕が弾け飛ぶ。その腕の装甲は、ミシミシと音を立てていた。

「落ちなさい、一夏っ！」

出力を上げた衝撃砲が放たれる。

ドンッ！

弾かれた腕の、肩装甲が爆散する。
痛みで思考が遅くなる。

俺はバランスを悪くしたようにグラツとふらつき、それを立て直す
ように『三次元躍動旋回』を行おうとする。

「やらせないわよっ！」

青龍刀を振り上げ機動を邪魔しようと思つと鈴が迫る。

かかった。

俺は鈴が振り上げた剣を『跳んで』回避、そのまま背後へ回り込む。

「なっ!?!」

「うおりゃあっ!」

「っ!?!」

一瞬驚いた鈴は振り替えるのに一瞬遅れ、一夏は鈴が振り替えるより速く、瞬時加速を使ったタックルをかます。

ガンッ、と一際大きく衝突音が鳴り、鈴は吹き飛ばす。

そして吹き飛ばす鈴にそのまま瞬時加速を使い追いつく俺。

吹き飛ばされ体勢を崩した鈴。今しかない、立て直しなんてさせるかっ!

「りいりいんツツ!!」

「くっ、こんな風につ」

『れいらくひやくちや零落白夜』を発動。相手の『絶対防御』を直接攻撃し、シールドエネルギーを消滅させる一撃必殺技。
しかし、自身のシールドエネルギーを大量に消費するため、ハイリスク・ハイリターンな諸刃の剣だ。

雪片の溝がスライドし青い刀身が姿を表す。

刹那。

刹那の時間が無限に感じられた。

振り上げた刃、それを見る鈴の悔しげな顔。

そして

一夏は振り上げた刃を身体を捻り、鈴と一夏の上に向け振り上げた。青い刀身は、遙か上空から落ちて来た赤い光の奔流を切り裂き、鈴と一夏、二人を守った。

「バカッ、避ける鈴ッ!!」

「えっ？」

赤い光の奔流に乗り、黒い塊が飛来する。

突然の事に身体を強張らせた鈴は、抱き寄せられひどく気の抜けた声を漏らした。

ズドオオオオンツッ！！！！

突然、第二アリーナ全体に衝撃が走った。

ステージ中央では高く砂塵が舞い、その砂塵から黒い影が姿を表した。さっきの衝撃はアリーナの遮断シールドをぶち抜き影が落ちて来た衝撃らしい。

「さっきのビームはあいつの仕業かよ、ちくしょう、人の試合の邪魔しやがって」

鈴を抱き寄せた腕に力が入る。

「あつ…」

腕を腰に回され、強く抱き寄せられた鈴は、当然一夏と近づく。肉体的に、顔がとても近くに。

鈴は混乱していた。

赤い光の奔流。それを切り裂いた一夏。先程まで自分がいた所を落下し、アリーナに落ちた黒い塊。

そして、力強く抱き寄せられ、唇が届くほど近くに迫った一夏の横顔。

鈴は混乱しながらも、

(一夏って、やっぱりカッコいいなあ)

と、しみじみ思うのだった。

「千冬姉！、空から遮断シールドをぶち抜いてISが落ちて来やがった！」

『こちらでも確認した。織斑、学園の教員がそちらへ向かっている。それまで耐えられるか？』

「ああ、俺達は奴を食い止める。つか試合の邪魔をしてくれた礼をしなくちゃな」

通信越しに、すぐに応えてくれた姉にニヤリと笑う。

『そんな！織斑先生、危険過ぎます！あの未確認機体はシールドをアンノウン突き抜けるほどのビーム兵器があるんですよ！？生徒さんにもしもの事があったら』

山田先生の声はそこまでしか聞こえなかった。

敵ISが巨大な腕を持ち上げ、掌からビームを放って来たのだ。

「ちっ……ハッ！敵さんはやるき満々みたいだぜ、鈴？………鈴？」

「っ！！？はっ、離しなさいよ！えっち！変態！王子様っ！」

「うわっ、暴れんな鈴っ、いてっ！こらっ、つか最後の別に罵倒じやねえだろ！」

ビームを雪片で切り裂く。光学兵器やシールドを切り裂く雪片は、ビーム兵器などに対しては盾ともなる。

殺す気で放って来たであろう相手に一夏はニヤリと笑う。
腕の中でおとなしかったお姫さまが暴れだす。

「もしもし！？織斑くん！織斑くん聞いていますか！？^{ファン}鳳さんも！
聞いてますー！？」

通信越しに、一夏と鈴が反応しなくなり、山田真耶は色んな意味で
涙を流しながら叫ぶ。

先生の話は聞いてくださーいっ！！

「落ち着きたまえ山田君。コーヒーでも飲め、糖分が足りないから
イライラするんだ。私のように冷静沈着になるには……しょっぱっ
！？」

「……………」
「……………」

「何をジロジロ見ている。それよりも何故塩がある？」

「でも大きく塩と書いてあるから間違えるような事は……………」
「あーやっぱり弟さんのことが心配なんですね！？だからそんなミ
スを……………」

ガシッ！×2

「最近握力が下がってしまつてね、ん？手伝つてくれるのか？ブリユッセル、山田君。それは助かるな」

「あだだだだっ！先生ーっ！？千冬先生！？いまこんな事やつてる場合じゃ…あだだだだっ！？割れる！もげる！？」

「いたたたあー！？織斑先生ごめんなさーいつ
！！」

満面の笑みを見せたら千冬は二人にむけ必殺のアイアンクローを放つ。

悪鬼羅刹の修羅の王。殺戮の武神は頬を赤くし照れ隠しに攻撃した。

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐ出撃できますわ！」

「そうしたいのは山々なのだがな、これをみるオルコット」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。そこに写し出された数値はこの第二アーリーナのステータスチェックだ

った。

ちなみに二人は頭を抱え、うずくまっていた。

「アリーナの遮断シールドレベルが4に設定？……しかも全ての扉がロックされて　あのISの仕業ですよ！？」

「恐ろくな。これでは避難することも救援に向かうこともできん」

実に落ち着いた調子で話す千冬だが、良く見るとその手は苛立ちを抑えられずせわしなく画面を叩く。

「で、でしたら！緊急事態として政府に　」

「学園外への通信妨害まで行われている。無理だな。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。扉のロックさえ解除できればすぐに部隊を突入させる」

言葉を続けながら、益々募る苛立ちに千冬の眉がびくつと動く。それを危険信号ととったセシリアは、頭を押さえながら溜め息を漏らす。

「はああ、……結局、待っていることさえできないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって！？」

「お前のISの装備は一对多向けだ。多対一ではむしろ邪魔だ」

「そ、そんなことはありませんわ！このわたくしが邪魔だなどと

」

そこで千冬は一度溜め息をついた。

「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどういう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定している？連続稼働時間

」

「わ、わかりましたわ！もう結構ですわ！」

「ふん。わかればいい」

放っておいたら一時間でも続きそうな千冬の指導を、セシリアは両手を揺らして止める。

『降参』のポーズだ。

「はあ、……。言い返せない自分が悔しいですわ……」

近くに席に腰かけたセシリアに、思わぬ所から救いの手がさしのべられた。

「連携時はセシリアはバックアップ。ビットではなく『スターライトmk?』による遠距離狙撃。味方は織斑一夏、凰鈴音。敵はレベル?、殲滅対象と想定。セシリア、貴女は狙撃ポイントと抜け道をナビゲーシオンするから戦闘準備をして、今すぐに」

髪をかきあげながら立ち上がった千春、その目は普段の『愉快犯』と呼ばれる女子高生ではなく、『北欧の魔女』、まさしく戦士の目だった。

「え?で、ですが、扉がロックされていて」

「そんなの、私が開けるわよ」

「私はね、これでも『電脳戦姫』と呼ばれたことのある………ハ
ツカーなんだから」

その両目は、本来の碧色の瞳ではなく、黄金の瞳だった。

Stage28 『電脳戦姫』（後書き）

対にここまでくれました！

電脳戦姫ってWWWあいたたたっ！自分の書いた設定がこんなに痛々しいなんてっ（笑）

感想待ってます！

小説家になろうNF内、SS、300件突破スペシャル（前書き）

今回の話は、全く本編に関係なく、またネタしかありません。そして次話が難産なため思いつきに逃げたわけじゃありません。（本当だよ！？本当なんだからね！？）

これを読んで置かないと話がわからなくなる、といった物ではありません。

メタ発言が飛び交うので、そう言った方は見るのを控えるのをお勧めします。

では始まります。

小説家になるうNF内、SS、300件突破スペシャル

「……………さて。諸君らに集まって貰ったのは他でもない。小説家になろうでISの小説数が300件を越えた。これを祝福し、我々は一話丸々使ってお祝いしようと言っわけだ」

「千春」

「なんだ？一夏」

「いやな？確かにISのSSが増えるのは嬉しい。けどなんか調子乗ってるように見られないか？」

「ふむ、確かに一理ある……………しかしだ、友よ。……………そんな事を言ったらこのSS、『北生』の存在意義はどうなるのだ！？」

「確か、小説数が250件を越えたから、記念にと、書き始めたな」

「その通りだ筈！我々は既に過ちを犯してしまっているのだよ！」

「『北生』!? な、なんだよその略し方! 攻めてカレンデュラは入れようぜ! つか過ちを繰り返すな! そ、それに! 話し方なんかおかしいぞ千春!」

「え? キャラに合わないかな?」

「あ、合わない! そ、その…千春はもっと可憐で…おしとやかで…ぶつぶつ…」

「そっか、じゃ辞めるわ。……で、300件突破記念にやる、このSSのイベントを決めて欲しいんだが………」

「ん〜…… (千春の) 水着は後で見れるし、 (千春の) メイドさんも後々見れるはずだ…… 安易なものと言えば料理対決か?」

「ふふ! それではわたくし、セシリア・オルコットの手作りで! 旦那さま コホン、一夏さんを美味しさで天国へ導いて差し上げましてよ!」

「違う意味で天国へ行きそうだよ俺!」

「で、ではこれでどうだ千春?………」

スっ……ぺら

「ええと、何々?…… (ラブライブイベント、篠ノ之箒編?)」

「なりませんわ! 原作で人気がなくせに、よいしょよいしょで

メインヒロイン然としたイベントがある貴女に、これ以上好き勝手な事はさせませんわ!」

「なっ!このエロく下着め!言っではならぬ事をつ…(ぐぬぬ)」

「えっ、エロくありませんわ!み、身嗜みですわ!」

「なんてかいてあったんだ?あの紙」

「口外禁止って書いてあるからダメ。プライバシーは守るのです」

「じゃっ、じゃあさ。アタシと一夏と千春をメインとした、中学の時の話をやらない?」

「おお、それ良いかもな。俺と千春との出会いは、そう、桜舞う桜並木の中だった……」

「それはダメだ!」

「それはダメですわ!」

「え?ダメか?この小説を見てくれる人の中には、過去話を聞きたい人もいるだろうし良いと思ったんだけどな」

「ど、どうせ本編中でやるであろうが!」

「祝福するのですから、もっと華やかなのがよくてよ!」?

「たし蟹。となると、お祭り騒ぎが出来るのが言いかな?」

「じゃあボクの案なんてどうかな？」

「おろ？お宅、どちら様？」

「ボクはもう少ししたら出てくるから、名前はまだ教えられないかな。ごめんね千春」

「ん、気にすんなって」

「ありがとう、千春」

「む……………」

「何むくれてんのよ、一夏」

「……………別に」

「それでね？……………体育祭なんてどうかな？ISを用いずの、普通の体育祭」

「ほうほう、そいつあまた斬新な」

「体育祭……………力不足だな」

「おっ、お前はっ！？」

「私もまたすぐに出る。名は名乗れ……………」

「いやあ、ダンボル戦機ではお世話になってます」

「違う！私の名はラウ」

「友達が少ない」

「中の人ネタかそれは！？ええいつ、ふざけてるのか貴様！？」

「で？アミさんの案は？」

「ふざけているのだな？ふざけているのだらう！？くっ
名乗れんとはこれほど齒がゆいものなのか……っ」

「一瞬名乗りかけたがな」

「ふん、……そして私の案だが……『泥んこレスリング』だ！」

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

「それだっ！」

「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」

「馬鹿者が」

すっぱーんっ！x2

「ひでぶっ！!？」

「ひゃっ！!？」

「せめてもう少し学生らしい節度あるイベントにして」

「では先生」

「なんだブリュッセル」

「先生と一夏の一騎討ちの、泥んこレスリングはいかがでしょうか？ポロリもあるよ」

「乗った。お姉ちゃん×弟をよく理解した答えだ。ジューズを奢ってやるっブリュッセル」

「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」
「ええ〜っ！!？」

その後、実りある話は出来ず、結局イベントはできなかつたとき。
終われ

小説家になるつNF内、SS、300件突破スペシャル（後書き）

今回はマジのネタ回です（笑）

「電腦…戦姫……？」

山田真耶が目を大きく開いた。

「……白騎士事件の際、『アイスランド』へのハッキングを防いだ
と言う……あの？……まっ、まさか！その時、ブリュッセルさんは
五歳児のほずです！そんな、ただの五歳の子供にっ……」

「ええ。当時『アイスランド』へのハッキングを防いだのは私の母
です……二代目となりますが……まあ私は母みたいにキーボード
二つでそんな芸当は出来ませんから……」

千春が首のチョーカーに触れる。

「計七つの思考操作キーボードの同時使用で凌駕します」

IS、『グラデーシオン』を展開した千春。

腕部装甲から伸びたケーブルを機器に接続する。

「モードセレクト、『グリーン・ガイア深緑の大地』……セシリア、これを！」

何処から取り出した一枚のカードをセシリアに投げ渡す。

「!……これはなんですか?」

表も裏も灰色のカードを見てセシリアは怪訝な表情を見せ、千春はクスリと笑う。

「勝利の鍵、かな?」

『グラデーシヨン』の周囲に投影された無数のウィンドウ。それらが閉じては消え、また表れては消えていく。

「があっ!?!?」

地面に叩きつけられ声をあげる。

「一夏っ!?!?!?、こんのっ!」

鈴が青竜刀を振り上げ肉迫するも、その巨軀に似合わず、素早い動きで回避する。全身につけたスラスタもつての出力が尋常ではない。

いや、姿からして尋常ではない。

深い灰色をしたそのISは手が異様に長く爪先よりも下まで延びている。

しかも首と言うものがなく、肩と頭が一体化しているような形をしている。

極めつけは『フル・スキン全身装甲』だ。

通常のISは部分的にしか装甲を展開しない。何故か？。必用がないからだ。

防御は殆んどシールドエネルギーによって行われる。故に見た目の装甲と言うのはあまり意味を成さない。

もちろん、防御特化型のISで物理シールドを搭載しているものもある。千春のIS、『グリーン・ガイアグラデーション』のモード『グリーン・ガイア深緑の大地』がそれだ。

しかしそれにしただって、肌が一ミリも出てないISと言うのは聞いた事がない。

そしてその巨軀もまた異形。

腕をいれると五メートルを越えようかというこのISは、姿勢を維持するためなのか全身にスラスタ口が見てとれる。

頭部にはむき出しのセンサーレンズが不規則に並び、両肩には小型だが連射の効くタイプの、腕には先程アリーナをぶち抜いたビーム砲口が四門あった。

「鈴、すまんっ」

「いいわよべつにつ……にしても、面倒くさいわねほんと！」

甲龍の両肩に浮かぶ非固定浮遊部位がスライドし、見えない砲弾が放たれる。

しかしあの謎のISはそれをまるで見えているかのようにスイスイと避けて

「やろっつ！……このビームの出力、セシリアの『スターライトmk?』を軽く越えてやがるっ」

鈴に向けられた腕から極太のビームが放たれる。

俺は鈴の眼前に躍り出て、そのビームを『雪片・千秋』で切り裂いた。

「埒が開かないわねっ……一夏っ！左右から挟み込むわよ！」

鈴が衝撃砲を連続射撃しながら謎のISに突撃する。

「うおおおっ！」

スラスターを吹かし、俺は鈴の反対側から回り込む。『雪片』を構成え『瞬時加速』で距離を詰める。

それを見て何を思ったのか、謎のISは両腕を広げると、独楽のように回り始めた。

「!?!?」

「冗談じゃねえぞ!？」

回り始めたISは……その両腕からビームを放ちながら回転し始めたのだ。

ビームの弾幕、威力こそ落ちたものの、連射性が格段と上昇し俺と鈴を近づけさせない。

そして突然、そのISはピタリと止まった。

鈴をそのセンサーに捉え

ドドドドドドツ!

全身から現れた発射口から、鈴へ向け無数のミサイルが降り注ぐ。

「くっ!……っ!？」

迫る無数のミサイルを衝撃砲で落とすきれないと判断するや回避行動に……移れなかった。

ISが放ったビームが甲龍の脚を貫き、動きを止められた。

「きゃああああっ!？」

降り注ぐミサイル、その爆風に吹き飛ばされ、鈴は地面を転がる。

甲龍の装甲はボロボロになり、もはや戦闘を続行出来ない。

その鈴の前に無情にも降り立った謎のIS。ISは腕を伸ばし、鈴の眼前にビームの砲口を突きつける。

「ひっ」

「鈴っ!?!」

もはやエネルギーなど気にするものか。瞬時加速で瞬時にトップスピードになりISに追いすがる。

「りいりんっっ!!」

間に合わない。間に合わない間に合わない間に合わない間に合わない。いつ

一夏は目の前で起こるだろう最悪の事態を幻視した。

鈴が、鈴が死ぬっ!!

手を伸ばし、相手の名を呼んだところで間に合わない。

ISの腕からは無情にも、光が溢れだした。

「ふう、間に合った」

千春は『グラデーション』を待機状態にし、額の汗を拭った。

「さて、私も行こっかな」

モニターで見たが戦況は佳境。

二人を向かわせたから戦力は十二分だろう。

しかしそれでも向かいたい。親友二人が死闘の真っ最中だ。気が気でない。

「ブリュッセル」

千春のオペレーティングに呆けてしまった山田真耶の頭に腕を置いて、千冬は千春をチラ、と見る。

「なんでしょっつ？」

「お前は……いや、なんでもない」

千冬はまたモニターへ向き直る。

「じゃあ手助けに行つてきます」

タツ、と走り出した千春を、千冬を険しい表情で見送った。

「あれ？篠ノ之さんはどこへ？」

唐突に意識を回復した山田真耶はきよろきよると周囲を見回した。

「間に合ったようだな」

振り抜いた近接ブレード、それを付属の鞘に収め、眼前の『隻腕』
になった敵へ殺意を向ける。

「あ、アンタ……」

「無事で何よりだ凰鈴音。千春から伝言を承っている。……無理を
しないで、と一言な」

振り向かずに言い放った。

その言葉に鈴は泣きそうな顔になるも奥歯を噛みしめ立ち上がる。

「わかったわ。アタシがバックアップに回るわ。アタシが衝撃砲で
牽制するから、アンタと一夏でアイツを押さえて。もうキレたわ。
中身に多少被害があっても構わない、ギッタンギッタンのめっちゃ
くちちゃにしてやるわ！」

片手に持った青竜刀。それと同じ物を取りだし柄と柄を連結。両端
に刃、といった異形の剣と化す。

「箒っ！！鈴っ！！」

一夏は今にも泣きそうな顔で、二人の幼馴染みを見た。
嬉しかった。自分では鈴を助けられなかった。

「ああ、一夏。助力に来たぞ」

鞘に収めた近接ブレードの柄に手をかけ、箒は居合いの姿勢を取った。

「いざ、参るっ……！」

ショート・イゲニツションブリスト
近距離瞬時加速で肉迫しつつ、『打鉄』を纏った篠ノ之箒は切りかかる。

stage 29 『勝利の鍵』（後書き）

まさかの第登場（笑）

次回でクラス対抗戦も終わりですね

感想待ってます！

「一夏っ」

「わかってるっ、なるっ！」

箒と俺の連撃、しかし謎のISは紙一重でその全てを避けていく。

「一夏っ、箒っ！離脱してっ！」

「「応っ！」」

鈴の声に、俺と箒が左右に散開する。

先程まで俺たちがいた場所にビームの弾幕が降り注ぐ。

「……………」

箒が来てから既に五分、奴に決定的な攻撃は出来ていない。
しかし俺はある事に気づいた。

「なあ、あれ……人が乗ってんのかな？」

「！」

「は？人が乗んなきゃISは動かな」

そこまで言って、鈴の言葉は止まる。

「そう言えばアレ、さっきからアタシ達が会話してる時、攻撃頻度が極端に減るわね……まるで会話を聞いているような……」
思い返すように鈴が今までの戦闘を振り替える。
その顔はいつになく真剣だ。

「一夏、いつ頃から気付いていた？」

「わりと最近。つーか俺自身半信半疑だしな」

「そうか……しかし、それは正しいんだろうな。奴からは殺気が感じられん」

「殺気っておま……いや、確かにな。殺気ってわけじゃねえが、アレからは人が『感じられない』……」

センサーの類いではなく自分の感覚に頼っているが、多分、アレには人が乗っていない。

「……でも、無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

それは俺も教科書で習った。ISは人が乗っていないと動かない。

しかし、本当にそうだろうか？

それに、ISが登場してから10年。今の最先端の研究でそれが不可能な事かどうかはわからない。何せ、そのことを黙ってりゃいいのだから。

「仮に、仮にだ。無人機だったら…どうだ？」

「何よ箒、無人機だったら勝てるっていうの？」

「ああ、我に秘策あり、だ」

箒は珍しく、クス、と笑い近接ブレードを鞘に収める。

「凰鈴音、私の合図とともに衝撃砲を全力で放ってくれ。それを足場に、私が『イグニッション・ブースト瞬時加速』を仕掛け……」

そう言っつて、俺をチラと見た後、近接ブレードの柄を掴む。

「はっはっん、なるほど。わかったわ箒。それと、私は鈴で良いわ」

「わかった鈴。では行くぞ？」

「いやいや、俺はまだ理解してないからわけわかんねえから」

「やって見ればわかる。行け、一夏」

「こなくそ、わかったよ、やってやる！」

雪片を肩に担ぎ上げ、謎のISへ向ける加速する。
それを見て、敵は残った腕を上げ、ビームを連射する。

しかしそれを切り裂きながら俺は奴に肉迫する。
また寸でのところで避けられ……………

「一夏っ！乗れ！！」

後ろから箒の声が出た。既に『瞬時加速』を使ったようだ。

しかし、何処に乗れと言うのだ。箒に馬乗りすれば良いのか？…………

それは…………あまりよろしくないのかい？青少年としては『馬
乗り』になっているという事実だけでその…………

箒がブレードを抜き、構えたのを見て俺はようやく理解した。

なるほど、そう言うことが。

「つあああっつ！！」

俺は後方から迫る、箒の持つ『近接ブレード』に乗った。

箒が声を上げ腕に力を込める。

ブレードに乗った俺を『放り投げる』ため。

「『零落白夜』ッ！！」

放り投げられ加速した俺は、残りのエネルギーを全てつぎ込み、奴を切り裂く。

しかし、裂いたのは薄皮一枚、『フル・スキン全身装甲』だけだった。

「ぐふうっ!？」

振り上げた奴の腕に殴り飛ばされ地面に叩き落とされる。

「一夏っ!」

鈴の悲痛な叫び声が聞こえた。

だがしかし、俺は鈴の叫び声より確認したい事があった。

「狙いは?……」

一筋の光が謎のISSの頭を吹き飛ばした。

『無論、完璧……ですわ』

アリーナの客席、虚空から突然姿を現したISS、セシリアが駆る『ブルー・ティアーズ』。

その手には、長柄の得物『スターライトmk?』のトリガーが握られていた。

『いやあ、助かった。ありがとなセシリア』

『お構い無く。それにしてもギリギリのタイミングでしたわ』

いつ頃からだろうか、セシリアは光学迷彩を用いずっと客席から狙撃の時を待っていたのだ。

通信越しに安堵のため息を漏らしたセシリア。

実は、筈が来てから少しして、セシリアの狙撃ポイントが千春から送られていていた。

故に俺は『零落白夜』で遮断シールドを切り裂き、セシリアがレーザーを放ちあのISを貫いた。

『セシリアならやってくれると思ってたさ』

確信じみた言葉は当然だ。セシリアの凄さは身をもって知っている。
狙撃に集中すれば、必ず当ててくれると、確信できた。

そんな言葉が意外だったのか、返ってきた言葉はひどく狼狽していた。

『そ、そうですの……。……。……。と、当然ですわね！わたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！』

プライベートチャンネルで話すセシリアはどこか嬉しそうで、俺は思わず笑ってしまった。

『な、なんですか？……。突然笑って……。』

『ああ、すまん。可愛いなって思ってたさ』

褒められ嬉しがったセシリアが少し子供っぽくて、可愛いとってしまったのだ。

『かつ！かわつ……。……。かつ！！』

『ちよつ、一夏つ！！アンタなにナチュラルに口説いてんのよっ！』

『そつだぞ！私も頑張ったではないかつ！』

『問題はそこじゃないわよ！』

『なっ、なぜ勝手にお二人がプライベートチャンネルに入って来て

いるのですかっ！』

キヤーキヤーと騒がしくなったプライベートチャンネルを切ると、
丁度千春が来るのが見えた。

「お疲れさま一夏。悪かったな手伝えなくて」

『グラデーシヨン』を装着した千春が俺の隣に降り立つ。

「いや、千春が箒とセシリアを送ってくれたお陰で助かった。ありがとな」

「その言葉は二人に言ってあげなよ。私はちょちょいとクラックしただけなんだし」

千春は苦笑しながら箒、セシリア、鈴の三人を見る。

「にしてもセシリアが突然現れたんだけど……なんだったんだあれ？」

「ああ、アレな？。あれは所謂光学迷彩。スラスターや火器を使用しなければハイパーセンサーでも掻い潜れる優れもんだよ。短所は使い捨てのくせに、一つ作るのにIS一機作る以上にお金がかかるんだよね」

「それって…すごいんじゃないか？」

「ああ、しかも基本的にISの兵装じゃないから世間様に公表しないでOKだしな」

ふふんと、豊満なおバストを誇らしげに張ればニヤリと笑う。
いや、やっぱり千春はすげえわ。いろんな意味で。

「ま、何にしてもこれで終わ
」

「避けるー夏あッ!!」

敵ISの再起動を確認。警告！ロックされています！

突然鳴った警告音。

俺は筭の声を聞いても、それが何故かに気付かなかった。

肩のビーム砲口が光を集め、その射線に俺がいた。

「あ
」

俺はひどく気が抜けた声を漏らした。

今俺はシールドエネルギーを使いきり、絶対防御も発動しない。
つまりはビームなんて食らえば身体に貫通し、『死ぬ』そんな事に
気づき思わず声が漏れたのだ。

しかし、俺をビームが貫く事はなかった。そう、千春に押され、尻餅をついた俺にビームは当たらなかった。

そう、奴が放ったビームは、千春の腹を貫いていて、俺に当たってはいなかった。

「千春うつつっ！……！」

お腹から鮮血を撒き散らしながら、崩れ落ちた千春の『グラデーシヨン』の装甲は、流れ出る鮮血と同じ、真っ赤な紅色だった。

stage30 『紅き痛み』（後書き）

ついに終わりましたゴーレム編。いや、次かな？戦闘は取り敢えず
終わり、と。

エロは多分次の次から。

それまでお待ちください。では感想待ってまーす！

Stage 31 『千春だから』

「……………」

織斑千冬。かつてISの世界大会モンド・グロツソにて最強の称号を手にした、人類……いや、霊長最強の女。

しかし、その織斑千冬とて人類である人間である人である。当然人に威圧されればたじろぐ事だつてあるのだ。

今みたいに。

「千冬姉ッ！！千春はっ、千春はどうなんだッ！！」

「お、落ち着け織斑。それと学校では織斑先生と……………」

「千冬姉ッ！！！！」

「っ！だ、大丈夫だ。当分は絶対安静だが、一週間もすれば普段の生活に戻る」

今この場に冷静な人物がいれば驚愕することだろう。

『あの織斑千冬が、弟に詰め寄られ、今にも泣きそうな顔であたふ

たしている』のだ。

「本当なのか千冬姉ッ!？」

「ほ、本当だ。ビームが綺麗に貫通していたお陰だそうだ……で
だな……織斑、ここは病室の前なのだ……その、少しは音量を下げろ」

しかし、今冷静な者などこの場にはいなかった。

一夏も、箒も、セシリアも、鈴も。冷静になどいられるわけがなかつたのだから。

「はぁ………よかった……」

「織斑先生、千春を見舞うことはできないのですか？」

「それは………！い、今は絶対安静なのだ、お前達の気持ちは痛いほどわかる！しかし今はブリュッセルの事を想え。面会が出来るようになったらすぐに知らせる。だからお、落ち着け織斑」

箒の間にできないと言おうとし、口を開け反論しようとした自分の弟の言葉に被せる。

「くっ………わかった……千冬姉」

「（ほっ）そ、そうか………ではここで解散だ。織斑、あまり思い詰めるな。自分が無力に感じるならば強くなれ」

「……………どうすれば…強くなれんだよ」

「まずは飯を食らえ。それから身体を動かせ。ISを起動しろ。…
…わかったな、一夏」

「わ、わかったよ千冬姉…」

大人しくなり始めた弟に、安堵のため息をつき、千冬は弟の頭を優しく撫でた。

頭を撫でれ、唇を尖らせながら恥ずかしがる一夏を見て、ようやく千冬は本調子になった。

「フツ……………お前は私の弟だからな、いつか開花するさ」

「ああ、絶対強くなって、千冬姉や篝、セシリア、鈴…そして千春。俺の大切な人達を守るようになってやる！」

一夏は拳を握り、誓うように千冬を見た。

「うつ……………おあ……………ンンツ、そうか。では期待しておこつ」

千冬は頬が赤くなるのを感じた。どうやら一夏のまわりの小娘達も同様のようだ。

熱い視線を送ったり、そっぽ向いてからチラチラと見たり。

正直、一夏が何か強い意思を持って誓った時の顔は卑怯だ。姉だと

言う事を差し引いても、異性として惹かれてしまう。お姉ちゃんにその顔は禁止だ。わかったな一夏？。

その思考速度は0.1秒を切る。平静を装いつつ千冬は今や貸切状態になった保健室へ入った。

「全く、貴様のせいとんだ目にあつた。いや、しかし……………一夏
のあんな顔を見れたのは……………まあ僥倖だったが……………」

保健室の一角、カーテンで仕切ったベットを一瞥し千冬は甘いため息を漏らす。

少し威圧されたが、激情の男らしい顔。そしてもう一つ、決意をした『男の顔』

ふたつの顔を見れて千冬はほくほくだった。

個人的には後者の方が好みだが、たまには前者のような表情も悪くはない……………

千冬が惚けた顔で思考の海に浸かり始めた頃、保健室の戸がノックされた。

「織斑先生、山田です。いらっしやいますか？」

「ああ、山田君か…入りたまえ」

キリッ、表情を整えた千冬。

山田真耶が一礼し保健室へ入って来た。その手には数枚の紙があり……

「織斑先生に言われ、あのISを解析したところ、やはり、無人機でした。そして更に……登録、されていないISのコアが検出されました」

真耶は紙の束を千冬に渡しながら、紙に書かれた答えを述べる。

その表情は強張り、何かに怯えるようだった。

「ん、……やはりな……。手間をかけさせた。すまないな山田君」

「い、いえ……。織斑先生……なにか心辺りが、あるのですか？」

やはりな、と言った千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする。

「いや、ない。今はまだ　　な」

そう言っただけはまた紙に目を移し、保健室にあったシュレッダーに資料を突っ込んだ。

その顔は自分の弟にデレデレだったブラコンのそれではなく、かつて世界最高位に座していた、伝説の戦士の顔だった。

「ブリュッセルさんの容態はどうだったんですか？」

少しの間が空き、会話を続けようと真耶が新たな話題を切り出す。

「……………三日で完治するそうだ」

「え？……………」

真耶に振り返った千冬の顔。それは戦士のままだった。

「三日って……………さん日のことですよね？」

「無論だ」

「……………三日でって……………そんなの可笑しいじゃないですか、あんなのをうければ、普通死んじゃうかもしれないですよ？……………なのに三日だなんて……………」

「しかし事実だ。現にブリュッセルの腹部の傷はもう塞がった」

「!?!」

今度こそ、今度こそ言葉を失った。驚愕により、言葉を失った。

「医師がサジを投げたよ。一言、異常だと言ってね……………見てみるか？私も見たときは驚いた…いや、戦慄を覚えたな」

苦笑しながらソファに座った千冬を見て、失礼します。と一言いい、真耶はカーテンの中へ入った。

「えっ!?!そんなん……………」

予想通りの声。山田真耶ならばああいう反応をするだろうと予想していた千冬は予想通りで苦笑する。

「ブリュッセルさんがいませんよー!？」

「なにいつ!？」

「……千春？」

「むしゃむしゃむしゃっ、カツカツカツ。ズズズズス……ゴクツ……ぷはあゝ
、生き返るゝ！」

テーブル一杯に広げた、肉やら野菜やら米やら肉やらスープやら肉を凄まじい速度で平らげて行く千春を見て俺以下三人は唾然とした様子で見っていた。いや、学食にいる全員が唾然とした。

なんと言っても患者着でそんなものを食ってるのが驚愕の理由の大半だろう。しかも背中が開いていて中が見えるタイプのだ。不謹慎だろうが言わせてくれ。エロい。

お腹や太もみに包帯を巻いてはいるが、他のところには全く衣服が着用されていないのだ、下着でさえ……あとはわかるな？（キリッ

「つかなんで千春が！？絶対安静じゃなかったのか？」

「いや、お腹減っちゃってさ。ほら、思考操作キーボード使ったでしょ？私ってばほら、頭使うとお腹減るし」

「いや、そう言う問題じゃないだろ！」

「大丈夫大丈夫！私が平気なんだから大丈夫！」

「ブリュッセルはいるかあっ!!!?!」

「ここにいるぞー!」

「この馬鹿者があつ!!!」

食堂へ現れた千冬姉。その言葉に反応し立ち上がった千春は顔面に出席簿を叩きつけられた。

どうやったなら出席簿の面の部分を叩きつけられんだよ千冬姉……

「貴様は絶対安静なのだ、来いッ!!!」

「ぐえ、首が、首が絞ま　　おろ?」

すぐさま千春の着ている患者着の首元を掴み、引っ張る千冬姉。

しかし諸君。ここで考えてほしい。

今千春の着ている物は患者着だけだ。

しかも脱ぎやすいように考慮され、背中部分がマジックテープで止められた簡易の服。

それを引っ張ればどうなるか、諸君らは想像に容易いだろう。

バリバリ、とマジックテープが外れる音と共に現れたのは……包帯を各所に巻いただけの千春。

その大きな胸はぶるんと震え、桜い

「ガン見してんじゃないわよ！この馬鹿っ！！」

「こっ、このえっちめ！成敗だっ！」

「はっ、破廉恥ですわっ！」

三人の鉄拳を食らい意識を掠め取られた。

南無三。

stage31 『千春だから』（後書き）

これで第一巻分は終わりです。

次回の次回にエロ回と言っておきながら耐えられなくなりやっ
てしました。

あれだ、やっぱりシリアスが苦手なのでシリアルになっちゃいました。

感想待ってますー

記憶

貴女にとって記憶とはなに？

(全て)

貴女にとって思い出とはなに？

(宝物)

貴女にとって彼はなに？

(全て)

貴女にとって彼との出会いはなに？

(私の始まり)

貴女にとって彼との別れはなに？

(苦痛)

！

彼との思い出を汚さないで！
彼との思い出を壊さないで！

お願い、お願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願いお願い
いお願い
ツ！！！！！！

これ以上…私の全てを汚さないでっ……………

私の全てを消さないで……

私の居場所が消えていく……

私の想いが消えて行く。

彼との出会いが、過ぎした日々が。

蝕まれていく。

蟲が頭の中を食い散らかしていく。

私が私でなくなる。

私が私でなくなっていく。

助けて、助けて……助けて一夏。私が私であるうちに早く。

助けて……一夏……。

—夏……いちか？……

誰……だっけ？……人？……物？

私が消えていく。

s t a g e 3 2 『六月初頭、僕は生きる糧を失った。』 (前書き)

新章、金と銀の転入生編。始動。

stage32 『六月初頭、僕は生きる糧を失った。』

六月頭、日曜日。

俺は久々にIS学園の外
家にいた。

と言うよりロリ巨乳好きのバカの

「ひでえ紹介だなオイ」

「他にどう紹介しようってんだよ。俺と中学三年間全て同じクラスで、いまや伝説となったデルタバカの一角とでも言えはいいか？」

「とりあえずバカはよせバカは。品性が感じられん。つかその残りの双頭はお前と千春だったろうが」
デュアルヘッド

「バカ野郎！千春はバカなんかじゃねえ！」

「そついやお前、名付けた先公に喧嘩売りにいったっけ、千春はゲラゲラ笑ってたけどよ。バカはやめるバカ」

「仕方ねえだろが。俺が千春を馬鹿にされて黙ってられると思つのかよこのバカ」

「少しは抑えろつて。相変わらず千春バカだなこのバカ」

「いや…まあ、な」

「照れんなうぜえ」

カチタチとゲームのコントローラーのボタンを押しながら織斑一夏とその男の親友、五反田弾は互いに親友を馬鹿にする。

「あっ！てめっ、ここで奥義使うか普通！？」

「イタリアのテンペスタは削りがヤバイからな。このまま押しきらせてもらうぜ」

五反田弾はニヤリと笑うと必殺技コマンドを叩き込む。

「だああっ！アイスランドの打鉄使っなって！」

「やなこつた。いやあ、アイスランドの打鉄、『閃光のマリアンヌ』機はマジでつええ」

「ちくしょう、なら今度はフランスのラフォール・リヴァイブ使わせてもらうぜ」

「うわ、中距離最強来やがった」

ちなみに俺と弾がやってるこのゲームは、インフィニットヴァイタルファイ『IS/VIS』

発売日だけで百万本セールスを叩き出した超名作。

ちなみにデータは第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』のものが使われている。

ちなみに千冬姉は諸事情によりプレイヤーキャラとしては登場しておらず、初心者用のトレーニングモードでのみ登場する。

(というのが表の情報で、実は、登場キャラクター全員をエクストラハードモードSSランクを叩き出した後。新たに追加されるタイムパラドックスモード(第一回『モンド・グロツソ』の世界にタイムスリップした、と言うモードだ)、その二週目のラスボスとして登場する。性能はと言えばまさに鬼畜。試合早々に仕掛けてくる不可避、更には食らってから数秒麻痺ると言う糞使用の必殺技を放つて来て、麻痺している間に接近して来て、一気にヒットポイントが半分まで削られ、圧倒的不利な状況から戦闘が始まる。こちらが数値を弄らない限り絶対に勝てないと言う前代未聞の詰みゲーだ)

「でっ。」

「で？って何がだよ？」

「だから女の園だよ。いい思いしてんだろ？」

「してねえっつの何回説明すれば気がすむんだよこのバカ！」

「嘘つけこのバカ。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえか。なにそのへヴン。招待券ねえの？」

「ねえよバカ」

親友のバカさ加減に飽きれ、俺はため息をつく。

「お兄！さつきからお昼できたって言うてんじゃん！さつさと食べに」

どかんと部屋を蹴り開けて入ってきたのは弾の妹、五反田蘭したんだらん。歳は一個下で今は中三だ。

超有名&small>えいんど超お嬢様学校に通ってる超優等生。

なんだっけ？生徒会長でしかも学年模試一位だっけか？兄とは違うのだよ兄とは。

「お、ひさしぶりだな蘭。お邪魔してるよ」

「いつ、一夏さん!?!」

やはり女子というのは自分の家だところもラフな格好なのか。

肩まである髪は後ろでクリップに挟んだたけの状態。

服装と言えば、千春の普段着と同じくショートパンツにタンクトップと機能性特化だ。

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……？全寮制の学園だっつて聞いてましたけど……」

「ああ、うん。今日はひさしぶりに外出。家の様子見に来たついでに寄ってみた」

「そ、そうですか……」

しかし、蘭って昔からそうだけど、なんで俺相手だと妙にたどたどしいというか、敬語なんだろうな。

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ

」

ギンッ！蘭の視線一閃。

おお、弾がダメージを食らった配管工のように縮んでく。相変わらず分かりやすい戦力図で何よりだ。

「……なんで、言わないのよ……」

「い、いやっ、言ってなかったか？そうか、そりゃ悪かった。ハハハ……」

「……………」

ギリリ、死に体にナイフを突き立てるが如くの視線を再度弾に送り付け、蘭はそそくさと部屋を出てく。

「あ、あの、よかったら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、うん。頂くよ、ありがとう」

「い、いえ……」

ぱたん、ドアが閉じて静寂が訪れた。

「しかし、アレだな。蘭ともかれこれ三年になるが、まだ俺に心を開いてくれないのかねえ」

「は？」

何気なく言った言葉に、「お前何言ってるんだ？」とでも言わん勢いで聞き返してきた。

「いや、ほら、だってよそよそしいだろ？今もさつさと部屋から出て行ったし。俺としてはもう少し仲良くしたいんだが」

「……………お前はアレだ、わざとやってんのか？」

「何をだよ」

「まあわからんならそれでいい。俺もこんな歳の近い弟はいらん」

「いやいや、蘭に失礼だろ？蘭にも選ぶ権利があるんだしよ」

なんで弟とか、そう言う話が出てくるんだよ。

「まあ、いいや。とりあえず飯くってから街にでも出るか」

「おう、そうだな。昼ゴチになる。サンキュな」

「なあに気にすんな。どうせ売れ残った定食だろう」

俺と弾は立ち上がり、昼飯のため一階の『五反田定食』へ降りる。

「うわぁ」

「ん？……千春！？」

そこには俺たちの昼食が用意してあるテーブルがあるんだが、そこに先客がいた。
千春だ。

「お、来たな？よつ、久しぶり、弾」

髪を蘭のようにクリップで後ろに束ね、黒のライダースーツに身を包んだ千春が、美味しそうに滅茶苦茶甘いカボチャ煮定食を食べていた。

「おう、久しぶりだ千春。時に蘭、落ち着け」

「なに？どこが落ち着いてないように見えるの？」

「いや、お前……」

「お兄、黙ってて」

「……………ハイ」

どこか気分が悪いのか、表情の優れない蘭が弾にまた棘のある視線を向ける。

「なんで千春がここにいるんだ？今日は確か用事あるって朝言ってたろ？」

「だから、その用事でこっちに来たの。詳しく言えば別荘にお母様が来てたから会いにいったんだよ。ああ、やっぱりこのカボチャ煮美味し〜」

別荘と言うのは、当時中学生の時、日本にいた千春が住んでいた豪邸だ。

千春のお別れパーティーで一度中まで入ったことはあったが、大きくてお城か何かに間違えたほどだ。

アイスランドの本邸はその規模の何倍も無駄に広いらしい。

「ん？蘭さあ」

「は、はひっ!？」

「着替えたの？どっか出掛ける予定なのか？」

「あつ、いえ、これは、その、ですねっ」

「すごく可愛いぞ？似合ってる」

「かつ、かわっ！！？」

先程までのラフラフな姿は微塵も残ってない。

髪もしゅるりと下ろしたロングストレートが、キラキラもキューテイクルを放ってる。

服装は六月と言う事もあってか半袖のワンピース。

薄手のそれを身に纏い、裾からは十代特有の躍動感溢れる脚が伸びている。

わずかにフリルのついた黒いニーソックスは、もしかしたら、好きな人にはものすごい好きなのかもしれない。

いや、知らんけど。

そこまで考え、俺はふとあることを考えた。

この服装を『千春』がしたら、だ。

身体のラインがくつきりわかるライダースーツを着こんだ千春は、六月特有の湿気と暑さから胸元まで大きくジッパをおろしていて、俺がチラと千春を見れば横から千春の胸の先端が見えた。

「ぐぶお！！！？？」

「これ以上横を視るな一夏っ！死ぬただぞっ！！」

鼻を押さえた俺に弾が駆け寄る。弾の鼻からも赤い筋が……

さて、話に戻ろう。

髪を下ろし、蘭と同じ半袖のワンピースと黒のニーソックスをはいた千春。それは一言で言うならば……

『清楚なお嬢様』

あ、俺ものすごい好きかも。

「ブリュッセルさん、お引越しですよ」

「はい？」

夜、IS学園に戻った俺を待っていたのは死刑宣告だった。

「先生、もう一度いつてください」

「はっ、はいっ。すみませんっ」

俺が鋭い視線を飛ばすもので、山田先生は小動物のようにびくつと身をすくめた。

「えっと、部屋の調整が付いたので今日から同居しなくてすみませよ
よ」

同居しなくて住みます……
ほう、山田先生もなかなかやる。
じゃなくって！

「えっと、それじゃあ、私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃ
いましょう」

「まっ、待つてください！それはっ、今すぐでないといけませんか
？」

「それは、まあ、そうですね。いつまでも年頃の男女が同室で生活を
すると言つのは問題ありますし」

足し蟹^{かに}。世間一般の常識とすれば問題だ。

俺が最初に世界に対し怒りを覚えたのはこの時だった。

「安心しろって一夏。最近はあるまり一夏の布団に潜り込んでなん
てなかったし、寝ぼけて抱きついたりなんて多分もうしないし……
他の子に迷惑なんて掛けないからさっ、安心して見送ってくれよ！」

千春が笑顔でサムズアップする。

千春の言葉を聞いて山田先生が一瞬で顔を真っ赤にする。

そう、千春。こう見えて寝起きは意識が殆どなく、なおかつ人肌恋しくなって近くの人に抱きついてしまうのだ。

驚いたよ。朝起きたら千春が俺を抱き枕のように抱きついて来たり、朝布団が盛り上ってると思ったら、『脚』に千春がしがみつくように抱きつき股間に顔を埋めたり、朝起こしてあげたら引き寄せられたり……正直、自分の理性に誇りを持ちはじめたところだった。

「よし、じゃあな一夏。部屋は別だけど飯は一緒に食おうなっ」

大きな旅行カバンを二つ、カバンについたローラーをカラカラと鳴らしながら、千春は陽気に去っていった。

ちくせう。日々の潤いが、俺の癒しが……

俺は膝をつき、床に拳を何度も叩きつけた。

stage32 『六月初頭、僕は生きる糧を失った。』 (後書き)

今回はまた難産だった。

千春を無理矢理登場させたよ！つまりはエロ投下だよ！(笑)

感想待ってます

「い、一夏っ……いるか？」

俺が部屋の隅でうずくまっていると、ドアが軽くノックされた。

声の主は放棄　放棄、あつ、また間違えた　箒だろう。

「ああ、いるぞ〜」

大きいため息をついて立ち上がる。玄関までいきドアを開ける。

「……………」

むすつとした顔の箒が腕を組み仁王立ちしていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「どうかしたのかよ？、まあいいか。とりあえず部屋入れよ」

「へっ、部屋あ!?!」

ドアを大きく開き招き入れようとしたら顔を真っ赤にしながら素っ頓狂な声を上げる。

「なんだよ、ここでいい要件なのか?」

「あ、ああ、ここでいいっ」

「そうか」

「そっ、そっだっ」

「……………」
「……………」

「箒、用がないなら俺、今からふて寝するから」

「よ、用ならあるんだっ!待ってくれ!!」

突然大きな声を出され俺は驚いた。

いや、箒。通路でそんな大きな声出すなって。

子犬のような目で見上げられ、俺は小さくため息をついて箒の言葉を待つ。

「こつ、今月末の学年個別リーグマッチなのだがっ」

六月末に行うらしいそれは、クラス対抗戦とは違い、全員参加の個人戦らしい。一週間に各学年、全校生徒を戦わせると言った荒事。

学年別でくぎられている以外は特に制限もないそうだが、しかし専用機持ちが圧倒的に有利なのは変わらない。

「わ、私が優勝したら」

よくみたら、篤はむすつとしながらも頬を紅潮させていた。何が恥ずかしいのか、目は俺を向いていない。

「付き合ってくださいっ！……じゃなかったっ、付き合ってもらおう！」

「……………は？」

何がなんだかわからない。突然指を指され宣言され、そして、きゃーきゃーいいながら走り去ってしまったのだ。

「付き合っつて、買い物かなんかか？罰ゲームかなんかか？」

腕を組み俺は首を捻った。

「聞いた聞いた？」

「うんっ！聞いたよ聞いたっ！」

「これはおもしろいことになるよーっ」

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「確かに、ハツキのっていいよな」

「おいや？チハるんはハヅキ社好きかい？」

「見た目だけだったらね」

「私は性能的に見てミューレイがいいなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど高いじゃんアレ」

「千春のはワীগナーだっけ？」

「うん。ワীগナー社製のネオカスタムモデル。うちの研究員が勝手に作らしてさあ、性能はいいから使ってるけど」

月曜日の朝。クラスの中の女子がわいわいと賑やかに談笑していた。その中に想い人の姿を見つけ、俺の心臓はとくとんと高鳴った。

みんな片手にカタログを持ってあれやこれやと意見を交換している。

「そつえば織斑くんのISスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」

「ああ、なんでも千春とおんなじで特注品らしい。男のISスーツがないからどつかのラボが作ったらしいんだ。なんでも、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている」

よく覚えてたな俺。最近は一生涯懸命勉強している成果だ。うんうん。

ちなみにISスーツとは文字通りIS展開時に身体に着ている特殊なフィットスーツのこと。このスーツなしでもISを動かすことは可能なのだが、反応速度がどうしても鈍ってしまうらしい。えーと、なんだったかな……………。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久用にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来ます。あ、衝撃は消えませんがあしからず」

すらすらと説明しながら現れたのは山田先生。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……………って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへんっ……………って山ぴー？」

入学から約2ヶ月。山田先生のあだ名は72通りあった。

初めてついたあだ名は確か……………そう、イーノっ……………

「あー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……………」

「えー、いいじゃないじゃん」

「まーさんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーちゃん………」

「あれ？マヤママの方がよかった？マヤママ」

「そ、それもちょっと………」

「もー、じゃあ前のマママに戻す？」

「あ、あれはやめてくださいー！」

珍しく語尾を強くして拒絶の意志をしめす。

何かトラウマでもあるんだろうか？

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたね？」

ハイとクラス中から返事が来るが、ぶっちゃけ言ってるだけの返事なのは間違いない。

今後も山田先生はあだ名が増えることだろう。

「諸君、おはよう」

「「「「「お、おはようございますー！」「「「「「」

それまでざわついていた教室が、一瞬にして静まり返る。

千冬姉のお出ました。

（あ、ちゃんと俺の出したスーツ着てくれてるな）

昨日家に帰ったときに、そう言えばと思い、夏用のスーツを出しておいたのだ。

早速使ってくれてるようで嬉しい。

「さて、今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。ISスーツに関しては、各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れた者は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それすらないものは、まあ下着でも構わんだろう」

いや構うだろう！と俺以外も絶対多くの女子は心の中で突っ込んだと思う。

男の俺がいるだし、下着姿は不味いだろう下着姿は……………

千春の下着ならウェルカムだが。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬姉が山田先生にバトンタッチする。ちよ
うど眼鏡を拭いていたらしく、慌てて掛けなおす姿が、わたわたと
している子犬のようだった。

「ええとですね、今日はなんと、転校生を紹介します！しかも二名
です！」

「……えええええつ！？」「」

いきなりの転校生紹介にクラス中がいつきにざわめく。

そりゃそうだ。この三度の飯より噂好きの十代乙女、その情報網を
掻い潜りいきなり転校生が現れたのだから驚きもする。しかも二人。

（つかなんでまたうちのクラス？普通分散させるだろうが）

そんな至極全うな事を考えていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

クラスにはいつてきた転校生を見て、ざわめきがピタリと止まる。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国ではま
だ不馴れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく願いま
す」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔で告げて一礼する。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

人なつっこそうな顔。礼儀の正しい立ち振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪。

黄金色のそれを首の後ろで丁寧に束ねているら。

男子にしては小さめで、華奢に思えるくらいスマートで、しゅつ、と伸びた脚がかっこいい。

印象は誇張じゃなく『貴公子』と言った感じで、特に、嫌みのない笑顔が眩しい。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああ

っ……！」

「ふぐお……？」

例えるならソニックブーム。クラスの中心を起点にその歓喜の叫びはあっという間に伝播する。ソニックブームに驚き千春が目覚めます。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった~~~~！」

いやあ、相変わらず元気だねうちのクラスの女子一同は。

ちなみに隣のクラス及び他の学年からまだ誰も覗きに来ないのはホームルーム中だからだろう。教員のみなさん、お仕事ご苦労様です。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから！」

面倒臭そうに千冬姉がぼやき、山田先生が慌てながら静めようとする。

「……………」

件の自己紹介が終わってない方の転校生^{くだん}。

シャルルくんとは正反対の銀髪は腰まで伸ばしてあり、そこまでボサボサではないにしる整えた様子はない。
無頓着なのだろうか。

そして女子には珍しいズボンタイプで、両腕は後ろで組んで、足を軽く開いて立っている。軍隊とかの待機の姿勢だ。

そして彼女を一言で表すのに必須になるだろう左目の眼帯。

それは病院で使うようなものでなく、黒の眼帯。
これに反応したのは千春だった。

『一夏、一夏っ一夏っ！、眼帯だっ！眼帯だよっ！やべえ邪気眼だ
邪気眼っ！いいなあ、私も眼帯つけよっかなあつ。赤色スカーフ
とかもいいな、なあなあ、一夏は何が言いと思う！？』

ISのコア・ネットワークを通して興奮した千春の声が聞こえる。

『えっと……ち、千春にはあれだ、ゴスロリが似合うと思うぞ、俺
は』

後頭部に意識を向け、応える。

昨日弾と街に出掛けた際に、ふと目についた雑誌にフリフリが沢山
ついた服を着た女の子が写っていて、気になり弾に聞いたところゴ
シックロリータとか言うジャンルらしい。

千春が着ればまるで精巧な人形なのでは？と言う不思議な感覚に落
ちいることだろう。

いや、わりと出会った当初の千春はそんな不思議な美しさを纏って
はいたが……惹かれ過ぎておかしくなりそうな、そんな美しさ。

まあ俺は今のくだけた感じの千春が大好きなので、昔みたいになら
ないでくれると嬉しい。

『おおっ！いいなっ、いいなそれっ！それでそれでっ、眼帯付け
て鎌待って……ISの武器で鎌なんていままでなかったし、イケる
かもっ』

どうやらお気にめしたらしい。千春が喜んでくれるだけで俺は幸せです。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

ずっと黙り続けていた銀髪の転校生は、千冬姉の言葉に直ぐ様反応し、千冬姉に向け敬礼をした。異国の敬礼を向けられた千冬姉はさっきとはまた違った面倒くさそうな顔をした。

「ここではお前は一般生徒、そして私は教師だ。私のことは織斑先生、と呼べ」

「はっ、了解しました」

そう答えたラウラはぴっと伸ばした手を身体の真横につけ、足をかかとで合わせて背中を伸ばしている。 どっからどうみても軍人。そうでなくとも軍施設関係者である。

しかも千冬姉を『教官』と呼んでいるので、間違いなくドイツだ。

とある事情で千冬姉は一年ほどドイツで軍隊の教官とし

て聞いた事があり、その後は一年くらいの空白期間を置いて、現在のIS学園教員になつたらしい。

らしいというのは山田先生や他の学園関係者に聞いたからだ。本人からはその事を聞いていない。

そこにはまた色々な事情があるんだろうが、やはり唯一の肉親なのだ。打ち明けて欲しいと思つてる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイトの沈黙。

続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた貝のように口を閉ざしてしまった。

ダメだぜ？ラウラ・ボーデヴィツヒさん。名前だけでもいいけど、明るく言わないと暗い八だと思われるぜ？

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなった山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに聞くが、帰ってきたのはは無慈悲な回答。

こらこら、先生をいじめるんじゃないやありません。見るよほら、泣きそつな顔してるじゃないか。まったく。

山田先生、貴女は今っ、泣いていいっ！

そんな事を考えていたせいなのか、ラウラとばかり目があつた。

「！貴様が

」

うん？目があつた瞬間、つかつかとこっちにやって来たぞ？

バシッ！

「……………」

「え…うっ？」

いきなり、殴られた。しかも無駄のない平手打ち。

なんで？

「私は認めないっ……
のかっ！」

貴様があの人の弟であるなど、認めるも

ダンッ！！

まるで机を蹴った音がした。

「！？」

俺に平手打ちをしたラウラ・ボーデヴィツヒが、『俺の上』に視線を向け目を見開く。

「？」

ずきずきと傷む頬を手で撫でながら、つられるように上を見た俺の視界を覆ったのは、

純白のパンティと健康的なかつ艶やかな魅力を持つふとももだった。

stage33 『金と銀の衝撃』 (後書き)

次回、尻アス。

この予告でもはやシリアスになどならないと

語ってるようですね(笑)

いやー、今回も難産でした。時間がかかり申し訳ないです

まさかの千春が厨二設定wwww

感想待ってまーす

Stage 34 『華麗な蹴舞、パンツ丸見え』

俺を飛び越えた千春が、ラウラに向け鋭い蹴りを放つ。

「っ……………」

「ふ、ざけんなッ！てめえ…今、一夏の事、どんな目で見やがったっ！？」

突然の事について行けない。

クラスの皆もぽかーんと口を開いている。どうやら俺だけじゃないようだ。

「貴様は…ほう、件のカレンデュラか。ちようどいい、ここで貴様を屠ってやるっ」

「上等だクソガッ！一夏を色眼鏡かけて見やがってっ！てめえはぜってえぶち殺してやるッ！！」

千春がいままで見せたことのないほど怒りを露にして顔を歪める。

対してラウラは冷静。空中で放たれた蹴りを片腕で防ぎ、着地した

千春に冷たい笑みを向ける。互いに殺意を放ちながら対峙する。

先に動いたのは千春。

姿勢を低くしラウラの懐へ向け飛びかかる。

ラウラは千春の動きに合わせて、カウンター気味に掌底を放つ。
しかしそれを、

千春は空中で逆立ちして、蹴りあげた。

「!？」

カポエイラと言う格闘技を知っているだろうか？

日本ではカポエラと誤った呼び方をされているが、脚技が映える格闘技。

また日本人が抱くカポエイラの技はそのほとんどが逆立ちして繰り出すと思われているがそれもまた誤りだ。

しかし千春のカポエイラは、日本人の偏見の『カポエラ』に近い動きだ。

サマーソルトキックからの、逆立ちして両手両腕、そして身体を捻る事により脚を広げて蹴りの連撃。

ラウラは防戦一方だ。隙ならあるだろう。しかし千春はその隙を速

さと威力で覆い隠す。

地に両足をつけたと思ったなら頭部への空中回転蹴り。
着地すると同時に脚払い。

千春の繰り出す美しい蹴舞しゅうぶい、一見して押ししてるのは千春だと思うが
……………その実攻めあぐねていたのは千春の方だった。

必殺を何度も感じた。しかしその必殺はまるで読まれたように避けられる。何度も何度も蹴りを放つも、それは変わらない。
怒りで思考が回らない。攻めると身体が告げている。

しかし、千春の動きは、背後から近づいた千冬姉に止められた。

スッパーンっ！

「あいたあっ!?!」

「何を暴れているか、ブリュッセル」

「なっ、なんで私が!こいつ!こいつが一夏を先に殴ったんですよ!?!」

降り下ろされるは判決の小槌しゅつせき。千春が涙目で千冬姉に食い下がる

「では、私がラウラを止めていたら?」

「ボディーブローからの踵落としてさあ

「
ゴツンッ！」

「全く馬鹿者が……あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人は速やかにISスーツに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組との合同で模擬戦を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて千冬姉が行動を促す。

千春は腑に落ちないと言いたげに睨み、千冬姉に睨み返されすごとごと自分の席へと帰っていった。

さて、俺もそろそろ行くのか。このままクラスにいと、女子と着替えるはめになる。

確か今日は第二アリーナ更衣室が空いてるはずだ。

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

おっと、そうだった。やっぱりそうなるわな。

「君が織斑君？初めまして。僕は」

「ああ、いいから、とにかく移動が先だ。女子が着替え始めちまう」

説明すると同時に教室を出る。

シャルルに来るように促すと、シャルルは俺の後ろをテクテクと付

いてくる。

「取り合えず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替えだ。これから実習の度にこの移動だから、早めになれてくれ」

「わかったよ、ありがとう織斑君」

にこりと笑ったシャルル。思わず見とれてしまっくらいその笑みは綺麗で、同姓ながら惹かれてしまう……。

だっ、ダメだダメだっ！俺には千春が……つかホモじゃないんだし。

俺は熱くなる顔をかぶりを振って冷ます

stage34 『華麗な蹴舞、パンツ丸見え』 (後書き)

尻なんてどこにもなかった…………っ

次だ次！エロスーツ出てくるしエロ回だ！(笑)

あ、でも次は千春の設定でも晒そうかしら

感想待つてまーす

俺とシャルルは教室を出てすぐ、危機的状況に襲われていた。

「いたっ！こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

待て、いつからこの学園は武家屋敷になったんだ？いまにもホラ貝を取りだしそうな雰囲気じゃ ……

ブオーツ、ブオーツ！

ホンとにやりやがったあああっ！！！？
誰だ！空気を読んで吹きやがった奴は！？

「……………（グッ）」

千春うううっ!?

な、なんで千春がホラ貝吹いて……………いや、なんでホラ貝なんか……………
い、いや今はいい。

一組の前の廊下で、ホラ貝片手にサムズアップする千春。そしてホ
ラ貝の音色に呼応して階段から、教室から、ありとあらゆる場所か
ら女子が現れる。

「ちくしょうっ、こっちだシャルルっ!」

「えっ、ええ!?!」

ここで女子に囲まれるとヤバイ。俺はシャルルの手首を掴み、ひっ
ぱりながら走り出す。

「織斑君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド!」

「きゃああっ!見てみて!ふたり!手!手繋いでる!」

「逃さぬっ！今日こそは捕まえヌードデッサンを……って!？」

囲まれた。俺はその状況に舌打ちし、ふと横を見た。

「ふええ!？」

俺はニヤリと笑ったろう。我に秘策ありっ!!

「喋るなよシャルル?……舌噛むぜえ!？」

次の授業に遅れるわけにはいかない。鬼教官じじのあねに怒られるし、

何より千春のエロスーツを眺める時間がすくなくなる。

「とおっっ!！」

俺はシャルルを抱き上げ、換気のためか窓ガラスが空いていた窓から、『跳んだ』。

「いつ…いやあっ!？」

腕の中のシャルルが女みたいな声を出して叫ぶ。

安心しろ、我に秘策ありっ!

「よっと、行くぞシャルル!」

「……へ?お、織斑君!？」

地面にぶつかる瞬間ISを部分展開する。
そして着地と同時に装甲を閉じ、

「……お姫様だっこー!?」

抱いていたシャルルを降ろし、第二アリーナへ向けて走り出す。

後ろで阿鼻叫喚が聞こえた気がしたが、多分気のせいだろう。そう
思うことにした。

「はあっ……はあっ……思い付きでやってみたが……上手くいった
な」

第二アリーナの更衣室。そのベンチに横たわるように俺はねっ転
がった。

「い、いったいなんだったの?なんでみんな騒いでるのかな?」

シャルルと言えば。見かけによらず中々スタミナがあるらしく、
肩で息をするだけで、俺みたいにグッタリせずに立っていた。

「そりゃあ男子が俺達だけだからだろうな」

俺は休みたがる身体に鞭をうち身体を持ち上げる。

(休ませてくださいっ！)

「馬鹿やろう、休んでる暇なんてあるかっ」

(何時もは適度に休ませてくれてるのに！！)

「いま休んだら千冬姉にイジメ抜かれるぞ？」

()() 指示を我らにッ！)()

つてな具合で動いてくれた。

「……？」

シャルルは俺の言葉を聞いて、

え？なんで？と「意味がわからない」って顔をした。

「いや、珍しいんだろ？ISを使える男って。俺達しかいないみた
いだよ」

「あっ！ ああ、うん。そうだね」

「まあ俺は置いとき、シャルルが騒がれるのは理由がわかるぜ？」

「え？………なんでなの？」

「いや、シャルルって何だか可愛いし、そのくせカッコいいだろ？
いいよなあモテスリムは」

ベンチから立ち上がりロッカーを開く。制服を脱ぎ、備え付けのハ

ンガーにかけていく。

「かつ、かかかった!？」

「ん?……にしても助かったよ」

「なにな何がつ!？」

「いや、やっぱり学園に男一人はつらいからな。何かと気を遣うし。一人でも自分がいに男がいてくれるってのはやっぱり心強いもんだ」

「えっと……そうなの?」

「ああ、まあな。……ま、何にしてもよろしくな。改めてだが、俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん。よろしく一夏。僕のことシャルルでいいよ」

「わかったシャルル。うわ、時間ヤバイなすぐに着替えちまおうぜ」
時計を見るとかなりギリギリだった。

制服の下のTシャツを脱ぎ捨てズボンに手をかけた時、シャルルは叫んだ。

「わあっ!？」

「ん?どうしたシャルル、荷物でも忘れたか?」

両手で顔を隠し、指の合間から目を覗かせる。
その頬は赤くなっていた。

「ってなんで着替ええないんだ？早く着替えないと遅れるぞ？シャルルは知らないかもしれんがうちの担任はそりゃあ時間につるさい人で」

「う、うんっ、着替えるよ？でもっ、その、あっち向いてて……ね？」

「？ いやまあ別に着替えをジロジロ見る気はないさ」

俺はトランクスごとズボンを脱ぎ

野郎の着替えなんて描写したくないので割合します。

「さて、先にいつてるぜ？シャルル」

「えっ！？一夏っ！」

制服をロッカーに叩き込み振り替えるとシャルルは調度、ISSー
ツの下の部分を着ていた。

「ははっ、シャルルの尻ってなんかツルツルしてんな？」

調度見えたシャルルのお尻はぷるぷるしていて綺麗だった。あれだ、肌の艶ってやつか？男でも俺とシャルルじゃ全然違うな。

軽く手をふりながら更衣室を後にするとグラウンドへ向け駆け出した。小走りに。

「織斑。今回の責任を、お前はどつとる？」

第二グラウンドに無事到着　　とはいかなかった。シャルルが授業が始まってから、五分後に現れたのだ。顔を真っ赤にしてもじもじと、お尻を手で隠しながら。

「いや、責任ってあーた……」

「面倒を見てやれと言っただろう？」

いや、確かに言っていました……

「……………」

シャルルくん、顔を真っ赤にしてうつむいてないでさ……………なんか千冬姉に言ってくれよ。

「け、けどさあ！」

「問答無用だ。自分が先に着替え終わったからと言い、デュノアを置いてきた貴様に非がある。デュノア、こいつに何か言うことはあるか？」

出席簿を構え千冬姉がシャルルを見る。

シャルルは真っ赤になった顔を上げ、

「一夏の……………えっち」

爆弾を投下しやがった。

「「「「
きゃあああゝ！！」「」」」

ソニック・ブームとなった女子達の黄色い歓声と共に俺の降りおろされた出席簿、降り下ろした千冬姉の顔は真っ赤になっていた。

千春と言えば、歓声の中俺を指差しゲラゲラと笑っていた。

その姿が、エロいISスーツだとわかると、俺は意識を手放した。次に目を開ければ、あのエロいISスーツを着た千春を見れる。と、起きた後の恐怖を考えないようにしながら………

stages 35 『責任問題』（後書き）

エロ回と言った。しかし千春のとは……言っただけ？（笑）

シャルにどんなエロをさせるか悩み時間がかかりました。

一夏は気づかない。けど知ってる人はニヤニヤする。なんてエロを……そのせいで感想も返せませんでした、大変申し訳ありませんでした。

今から一つ一つ返していくつもりです。

さて、次回は千春のエロ回の前に千春の設定を晒そうと思います。

感想まっつてまっす！

千春 設定

名前：千春・フレイヤ・ブリュッセル

所属：アイスランド

搭乗IS：

グラデーション
『色彩』

特徴：

笑い方が変。

身体がエロい。

厨二病患者。

好きノ

一夏 鈴 友達

嫌いノ

一夏の事を悪くいつたりする人

北欧に居を構える世界最高の大富豪、ブリュッセル家の一人娘。

膝まで届く淡い栗色の長髪、碧色の瞳。

人形のような『人間』離れた美しさを持ち

、それでいて表情がころころ変わる。

制服からISスーツに至るまで肌身離さず、二年前一夏から譲り受けたキンセンカのブローチを付けるのがクセ。（後述のMs・カレンドュラのあだ名もこれが理由）

スタイルもよく、女性にしてはかなりの長身と大きく実った乳房で

同性異性問わず魅了してしまう。ファッションモデルをしていて、千春が雑誌の巻頭を飾ると、その雑誌の入手が困難になるほど品薄になるという逸話がある。

『愉快犯』と言う言葉がとても似合い、自分が楽しむためならば周囲を利用しバカ騒ぎを起こす。

中学時代、織斑一夏・五反田弾の両名と共に『^{デルタ}バカ』と呼ばれ親しまれ、学生からは英雄視され、教師からは悪ガキ扱いされていた。

一夏との出会いは中学校の入学式当日。

満開に咲いた桜並木の中、舞い散る桜の花弁に包まれた千春を見て一夏は一発で惚れた。

高い情報処理能力を持ち、また固有技能で並列思考と高いレベルの空間把握能力を持つ。

しかしISの適正は高くなく、総合能力では中の下位程度。

数多のあだ名を持ち、

『MS・カレンデュラ』を筆頭に、

『北欧の魔女』

『幻惑の魔女』

『踊る妖精』

『閃撃のフレイヤ』

など千春が喜びそうなあだ名ばかりである。

機体名：『グラデーション色彩』

待機状態：黒のチヨーカー

千春が設計した3.5世代型IS。

ISのシールドエネルギーの転換効率を変更することにより、3種のモードへ仕様変更が可能。

遠距離戦仕様『グリーン・ガイア深緑の大地』

中距離戦仕様『ブルー・アース蒼き水面』

近距離戦特化『イエロー・ライトニング黄色の閃光』

の三つ。各モードで使用可能な武器が別れている。』

千春 設定（後書き）

設定と言つより覚書き見たいな感じでしたね。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合いが入っている

しかしてこの織斑一夏。今この時目の前の現実から目をそらすことなど出来なかった！

「」

「……………ッ！」

目の前に立ちはだかるは、『千春』のお尻。

背中がぱっくりと開いたISスーツからは肩甲骨がぱっちり見える。エロい。エロ過ぎる。

ゲシゲシッ

『アンタ、何処見てんのよッ』

『一夏さん！？何処を見てらっしゃいますの！？』

ISのコア・ネットワークを通して鈴とセシリアが俺に向け叫ぶ。
せんせー！後ろのちっちゃい子が蹴ってきましたよ！先生！せんせーい！

「さて、今日は諸君に模擬戦を見て貰う。 ファン 鳳、オルコット前
に出てISを展開しろ」

「ええっ!？」

「な、何故わたくしまで……!！」

「仮にも代表候補生が尻込みしてどうする。いいから前に出ろ」

鈴とセシリアは大きくため息をついて列から外れて前が出る。

「少しはやる気を出さんか。 アイツに良いところを見せられるいい機会だろうに」

千冬姉が二人に何かを小声で言った。すると、ピクツと身体が跳ねてから俺を見て、二人は前に一歩出た。

「やはり!ここはわたくし、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットの出番ですわ!」

「ま、実力の違いを見せつけなきゃね、専用機持ちの」

セシリアはいつもの腰に手を当てたポーズ、鈴は拳をもつ片方の手のひらに打ち付け、ニヤリと笑った。

「それで？お相手はどちらで？鈴さんとの勝負でもわたくしはよろしくてよ？」

「ふふん。こっちのセリフよセシリア！返り討ちよ」

二人は互いにISを展開して不敵に笑う。

「慌てるなバカども。お前達の対戦相手は」

キイイイン……

ん？何この音？空気を裂く音にすごくよく似てるんだが、まさか…

「あああーっ！ど、どいてくださいーっ！」

空から山田先生が降ってきた。すげえスピードで。つかやべえ、明らかにこっちに向け突撃して あれ！？なんで皆退避完了してんだ？

「一夏っ！伏せる！」

退避してた人垣から、千春が飛び出してきた。

俺を押し倒すように抱きついてきた千春。そして次の瞬間、落下音

がグラウンドに鳴り響く。

むじゅ。

「ひゃんっ!」

なんだろうか？この手のひらと顔に感じる柔らかな感触は？。触れるだけで気持ち良くなるし……何より、すごい良い匂いだ。俺は顔を埋めたまま柔らかな感触と、スンスンと香りを嗅いだ。

むじゅむじゅ。

「やっ、はあっ、んっ……」

？何故か千春の声が聞こえ

もみんもみん

「ら…めえっ、一夏あっ…」

まさか…まさかまさか……………ッ!?

ビュンッ!

「ち、千は ひいつ!?!」

俺が顔をあげると、そこには仰向けになった千春。どうやら俺は千春の胸に顔を埋め、さらに胸をわし掴み、揉みし抱いていたらしい。現代進行系で胸をわし掴んでるし。

顔をあげた瞬間、先程まで頭があった部分をレーザービームが掠めて行った。

「ホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

顔は笑っているがその額にははっきりと血管が浮いているのが見てわかる。

蒼穹の狙撃手、セシリア・オルコットの『大逆鱗バージョン』だ。
うわぁ……

ガチィッ！……ブンブンブンンッ！

何かが噛み合ったような音がして、次いで何かを振り回す音が聞こえた。

「……………」

あれ？鈴、今のって確かあれだろ？『甲龍』シエンロンの近接武器『双天牙月』そつてんがげつを連結した音だよな？
確か連結したら投擲も可能になるつつつてたな、そうそう、そんな感じで振りかぶって

「だあああつ！？」

躊躇いなく首を狙い投げつけて来やがった。

ダンッダンッ！

ガキインツ！

短く二発、火薬銃の音が響く。弾丸は正確に『双天牙月』の両端を叩き、軌道を変える。

キンツキンツ、と薬莢が跳ねる音を聞きながら、俺はピンチを救ってくれた相手を見る。

「大丈夫ですか織斑くん？ 凰さんにオルコットさん、危険ですので許可なく武装を相手に向けてはいけませんよ？」

そこには、うつ伏せから上体だけを反らして、スナイパーのように銃を構えた山田先生がいた。いつもの子犬のような雰囲気ではなく、大人の様相。クスと笑って俺を見た山田先生に思わずドキッ、とした。

「……………」

どうも驚いたのは俺だけでなく、セシリアと鈴は勿論他の女子も啞然としたままだった。

「山田先生はこう見えて元代表候補生だ。しかも代表候補生の中で

も特に秀で、私は所謂ヴァルキリー級のIS操縦者と言っても過言ではないと思っっている。この程度射撃は造作もない」

「そ、そんな事ないですよ。候補生止まりでしたし……」

滅多に人を褒める事のない千冬姉が山田先生をベタ褒めしたのを見て、俺は山田先生が難しい射撃を難なくこなした事よりも驚いた。

山田先生は武装をしまい、ずれた眼鏡をかけ直した。……ああ、この仕草はやっぱり山田先生だなあ。千冬姉に褒められちよっと照れているらしく頬が赤かった。

「さて、小娘どもいつまで惚ほけている。さっさと始めるぞ」

「え？あ、あの、二対一で……？」

「いやいや、さすがにそれは……」

「安全しろ、今のお前達では例え三対一でも、一撃すら当てられず負ける。そうだな、五分もつたら褒美でも考えるか」

千冬姉がニヤリと笑いセシリアと鈴を見る。

負ける、と言われたのがカチンと来たのか、セシリアと鈴はその瞳に闘志を燃やし、その身に覇気を纏う。

二人が纏うは『絶対強者』の存在感。二人が放つ凄まじい威圧感に

俺は思わず唾を飲み込んだ。

「いいでしょう…手加減はしませんわ！蹂躪なさい、ブルー・ティ
アーズ！」

「じょーとー、さっきのは本気じゃあなかったしねっ…！」

二人は武装を展開し脚部スラスタを吹かし上昇していく。

「い、行きます！」

言葉こそいつとの山田先生だが、その纏う雰囲気は一変した。

「あの二人、キツイかもな」

頬を赤くし、脚を震わせながら立ち上がった千春は飛び立った山田先生を見て呟いた。

「だ、大丈夫か千春？」

「んんっ……だ、大丈夫。」

千春の肩に触れれば、千春は身体をぴくんと跳ねさせてから頷いた。

「三対一…でもか」

千春は首のチョーカーに触れながらじょうつうつを見上げた。

そこは既に、戦場と化していた。

stage36 『元代表候補生』（後書き）

いやあ、随分と遅れました。
大変申し訳ないです。

さて、山田先生なのですが、私の中では、千冬姉も言ってくれましたが、世界に通用するレベルだと思っんです。

故にうちのSSでは山田先生はすごく強いです。千冬姉含め、学園の二番目に強いです。

感想待ってまゝです！

「ちいつ、なんで見えない砲撃を見切ってるのよっ！」

鈴は衝撃砲を放ちながら舌打ちした。

『衝撃砲』……空間に圧力をかけて砲身を作り出し、その余剰で生じる衝撃を砲弾化して打ち出す、第三世代型IS『甲龍』の特殊兵装。その特性は『見えない砲弾』『あらゆる射角に対応する』。しかし真耶は、見えないはずの砲弾を正確に回避していた。

「くっ、行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

セシリアが四基のビットを展開し、真耶を狙う。

ガガガガッ！

しかし、そのうち二基が連続で放たれた弾丸に撃ち貫かれ爆散する。

残った二基がレーザーを放つも、『急降下』と『急上昇』の連続使用で避けていく。縦にジグザグとした機動だ。

「すげえ……………」

俺は思わず呟いた。山田先生の動きを一言で言うなら、『基本』だ。

戦闘が始まり一分ほどたっただろうか。

その間、セシリアと鈴の熾烈な攻撃を一撃も受けず避けきっている山田先生。その機動に奇抜さはない。

だからこそその驚きだった。

『洗練された基本機動』それが山田真耶の機動だ。

「……………織斑先生」

「なんだ？ブリュッセル」

俺の隣で戦闘を見ていた千春が、千冬姉に視線を向けず、大空を見上げたまま声をかけた。

千冬姉の口元はニヤリ、と笑っていた。

「三対一でも……………と言いましたね？」

「ああ、言ったな」

「確かめても？」

「やってみる」

ふふん、と千冬姉が鼻で笑う。

どうやら千春が山田先生と戦いたがると予想していたようだ。

「『グラデーシヨン』！」

灰色の装甲を纏った千春は翼を広げ飛翔する。

「鈴！セシリア！加勢するよ！」

『千春さん！？』

『癪だけど、強いわよ山田先生』

「わかってるさ。セシリア！、ブルー・ティアーズは使わないで、
スナイプ狙撃に専念して！いちいちさん1・1・3の間隔で移動！ムーヴ」

『了解しましたわ！……っ！』

セシリアは弾頭型ミサイルのブルー・ティアーズを放ってから離脱。『スタ
ーライトmk？』を展開し狙撃のタイミングを待つ。

「鈴は突撃して！私が援護するわ！」

千春の纏ったISの装甲色が蒼く染まる。
中距離戦仕様のモード、ブルー・アース『蒼き水面』

「わかったわ千春！うりゃあああっ！！」

鈴が青龍刀を振り上げ突撃する。

『山田君』

「え？あ、はい。なんででしょうか織斑先生」

セシリアが放ったレーザーを避け、鈴の放った衝撃砲を盾で防ぎ、千春の放ったビームを避け、各人に弾丸を見舞っていた真耶に千冬から通信が入る。

『そろそろ五分になる。決めてしまえ』

あれから四分を過ぎたが、三人は一度も真耶に有効打を与えられていなかった。

「は、はい！」

真耶は両手に二挺の五十一口径アサルトライフル『レッドバレット』を展開し、

突撃した。

イグニッション・ブースト
「瞬時加速!？」

驚愕の声は俺か千春か。いや、二人同時にだろうか。

「貰います!」

瞬時加速で距離を詰めた山田先生が、二挺の銃口を千春に向けてト

リガーを引く

ズガガガガガッ！

アサルトライフルから無数の弾丸が放たれる。その魔弾全てが千春に降り注いだ。

ここで、一夏やセシリア、鈴ならばその弾丸の雨を浴び、撃墜されるだろう。

しかし『北欧の魔女』の名は伊達じゃない。

弾丸の雨を身体を捻るように回転しながら弾丸を回避して距離を取る。

「モードセレクト、『グリーン・ガイア深緑の大地』！」

千春の『グラデーション』が深緑に染まった。

実弾武装のみの遠距離戦特化モードだ。

ズガガガガガッ！

四十七口径アサルトライフル『スケアクロウ』を展開しトリガーを引く。

キンキンッ、と弾丸と弾丸が激突しあう。

そう、千春は放たれた弾丸を、『弾丸』をもってして防いでいるのだ。

目には目を、と言いが、弾丸を弾丸で打ち落とすのはどうだろうか。

だがしかし、彼女は確かに『ヴァルキリー』クラスの猛者だった。

「くっ、……もう見切られてきてる！」

山田先生は片手のアサルトライフルを狙撃ライフルに変え、的確に千春を狙い打つ。

千春は他人とは違い、数多くの回避パターンを持つ。そして千春はその数多の回避パターンの中で、最適な回避パターンを『意識的』に行うことが出来る。

回避パターンは詰まる所、回避する際の癖だ。

IS戦において相手の回避パターンを見極めるのは一つの大きなアドバンテージとなる。

何せ癖だ。直そうとしても簡単に直せるものじゃない。

それを千春は数多く持ち、不利な回避パターンだと理解すれば意識的に変えることが出来る。

そう、千春には数多くの回避パターンがある。

山田先生は、その数多くの回避パターンを『見切ってきている』

『千春！』

鈴が山田先生に衝撃砲を放ちながら千春を目指す。

しかし、山田先生は盾で衝撃砲を防ぎながらも減速せず千春を執拗に狙い続ける。

「指揮官を先に狙う、か。セオリー通りだな」

何故千春ばかり？と思った俺の質問に答えるように、その少女は呟いた。

「え？なんでだ？」

「馬鹿か貴様は。指揮官がいなくなれば指揮する者がいなくなるだろうが」

「あ、そっか。ありがとなラウラ」

「ふん、べつに構わ……………」

ラウラと目があった。

「ん？どうしたんだ？」

「ふんっ！こんな事も理解出来ん奴が教官の弟だとわな……」

ラウラは全力で俺を睨んでから離れていってしまった。

いや、わかってたんだが………すげえ嫌われてんな俺。

「はあ………デユノア、山田先生のISの解説をしてみせる」

千冬姉？今俺の事見てため息ついたな？こんちくしょう。

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明をはじめた。

「山田先生の使用されてるISはデユノア社製『ラファール・リヴアイヴ』です。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配置されているISの中では最後発でありながら世界第三位のシエアを持ち、七ヶ国でライセンス生産、十二ヶ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと、多様な役割切り替えを両立しています。こと操縦の簡易性においては、同種の開発思考の下に開発された『グラデーシオン』を凌ぎ、装備によって格闘・射撃・防御と言った全タイプに切り替えが可能で、参加サイドパーティーが多いことでも知られています」

「流石だなデユノア。ではブリュッセルのISの解説をしてみろ」

「えっ……僕が、ですか？」

解説をし終わったシャルルに、直ぐ様解説をさせようとする千冬姉。
マジ鬼畜。

スッパーンッ！

「ああ、『知っている』のだろうか？」

「……………有名、ですから」

出席簿で叩きながらも視線はシャルルに向けたまま。

つか突っ込まなかったけど、なんで野外授業で出席簿を……………外にも
安息の地はなかったか……………。

「えっと……………ブリュッセルさんのISはアイスランド開発の『グラ
デーション』。この機体の特筆すべき点は一点。ブリュッセルさん
自身が提唱・開発させた、エネルギー転換率の変加により、機体性
能を変化させる機構『モード・セレクト』にあります。

例えば緑色の装甲の時は『深緑の大地』と呼ばれています。『深緑
の大地』時は、エネルギーの多くをシールドエネルギーに回し、『
深緑の大地』時にのみ展開される二基の固定型部位のシールド
ーシオン』はエネルギーの大半をシールドエネルギーに回している
ためエネルギーを消費する光学兵装は使用出来ません。

また、遠距離戦仕様と名されていますが、その実、高度な電子戦が可
能な仕様で、ISのハイパーセンサーにまで影響を及ぼすジャマー

や高い索敵能力を有しています」

シャルルが空を見上げながら解説を続けた。

「ああ、いったんそこまでいい。……終わるぞ」

シャルルの説明に聞き入っていた俺は、戦闘がどうなっているのかを完全に忘れていた。

「くっ！？」

「……！」

二挺のアサルトライフルを連射しながら千春に肉薄する山田先生。

千春が回避しようとするが、回避先を完全に読まれた千春は、その弾丸をすべからく受ける。

勢いよく削られていくシールドエネルギーに焦りを感じる千春。山田先生から一瞬だけ視線を逸らし、シールドのゲージを見た。

だがしかし、それがいけなかった。

「！？また瞬時加速！！？」

ズガガガガガッ！！

懐に入り込まれ零距离で銃撃を食らう。

「しまっ……くそ！」

咄嗟に展開した近接ナイフで山田先生に攻撃を与えようとした千春。だが、ナイフを持った腕の肩を、伸ばした『脚』で止められ、攻撃できない。

ズガガガガガガガガガッ！！……………

ドオオンッ！

千春はそのまま連続で放たれた銃弾を食らい続け、最後にアサルトライフルのアンダーバルレルに付けられた発射口からグレネードを食らい爆発に巻き込まれた。

『千春！？……んのお！！』

『行きなさい、ティアーズ！』

鈴とセシリアが撃墜された千春の仇伐ちとばかりに突撃したが、それからは酷いものだった。

山田先生の射撃がセシリアを誘導し、鈴の死角に誘導されぶつかった所でグレネードを投擲。

爆発が起こり、煙りの中から二人が落下しそうになるも体勢を直し、直した瞬間、二挺に装着されたグレネードを各人にぶつけて無理矢理地面に叩き落とした。

「ぐえ……………」

「くっ、うっ……………まさかこのわたくしが……………」

「あ、アンタねえ……………何面白いように回避先読まれてんのよ、千春はあんなに避けれてたのに！」

「り、鈴さんこそ！近接格闘戦を挑むべき時に何故ばかすかと衝撃を撃つんですの！？」

「こっちのセリフよ！なんで千春に注意されたのにビット展開するのよ！ビット展開してる時はただの的じゃないのよアンタ！」

「なんですって！？」

「なによっちゃんの！？」

「ひでぶっ……………」

三人寄ればかましいと言っが……………ただ仲が悪いだけだなこりゃ。つか退いてやれ二人共、千春が下敷きになっちまってる。

stage37 『可愛い顔してエゲツない』（後書き）

山田先生の強さに皆さん驚きのご様子……ですのもっと驚いて貰うために強くしてみました。

これが世界最高クラスの操者だ！（笑）

更新が遅れた理由は夏風邪です。辛いです。基本ストックなんてない小説なので感想すら返信遅れて……死にたいッス。

いやいや！完結するまでは死ねませんがね！（笑）

明日中……今日か、今日中にはもう一本投稿してみせる！！

感想待ってまゝす！

「さて、これで諸君にも学園教員の實力は理解できただろう。以後は敬意を払って接するように」

ISを解除した千春、セシリア、鈴の三人が列へ戻ったのを見て、千冬姉は列に並んだ女子生徒達を見渡す。

「いやあ、強かった。当たらないの何のって、マジで山田先生強いよ」

顔を少し後ろに向け、俺に話しかけてきた千春は嬉しそうに笑いながら先ほどの戦闘の事を話す。

「三人でかかって一発も当たらないとかもう化け物よ」

「連携訓練を行っていないかったのも敗因の一つですわね」

「全方位から放たれた千春のビットを避けきった時は流石に驚いたな」

鈴、セシリア、篝も、腕を組み、頭を抱え、手を顎に添えて先ほどの戦闘を思い出していた。

「専用機持ちは織斑、オルコット、ブリュッセル、デュノア、ボー
デヴィツヒ、鳳^{ファン}だな。では10人グループになり実習を行う。各グ
ループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

千冬姉がパンパン、と手を叩き指示を飛ばした。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使ったISSの整備を行
うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と
自機の両方を見るように。では解散だ」

時間ギリギリとはいえ、なんとか全員が起動テストを終えた俺達一
組二組合同班は、格納庫にISSを移してから再びグラウンドへ。

なにせ本当に時間一杯だったので全員が全力疾走。

ここで遅ければ鬼教師に何を言われるかわかったもんじゃねえ。

そんなこんなで肩で息をしている俺達に、千冬姉は連絡事項を伝え
ると山田先生と一緒にさっさと引き上げてしまった。

「あー……。…つか疲れた…」

訓練機はIS専用のカートで運ぶのだが、動力という生易しいものはついていない。あえていうなら動力「人」である。

うちの班は、当然俺がメインになって訓練機を運んだのだった。

女子はみんな力仕事は男がして当然だと思ってるし、そうでなくても昨今の男の立場は弱いのだ。今はそういう風潮なのである。

(いや、まあ、男の俺が運ばないで女子に運ばせるってのも普通におかしいっていつかありえないからいいんだが………)

ちなみにシャルルの班は「シャルル君にそんなことさせられない！」と数人の体育会系女子が運んでいた。

俺と扱いが違う……。まあ別にいいんだが。むしろ礼を言いたい。

何て言っても、ISを運んだおかげで千春に、

カッコいいと言われたのだ。

さて、その時の再現VTRをどうぞ。

「こん…のお！」

ISが載ったカートを押しながら呻く俺。いや、マジで重いんだって。

「ちくしょう、マジで重たかったな……………？千春？」

格納庫にISをぶちこんだ俺は、今まさにISを運んでいる千春を遠目に見掛けた。

その千春の目からはタパー、と涙が流れていた。

「うひゝ、おーもーいーよ〜」

超ゆっくりとカートを動かしながら泣く千春。

「千春？なんで千春だけで片付けてんだ？他のみんなは？」

通常、カートは二・三人で運ぶ。俺の場合が普通じゃなかった。

「いや、それがさあ。『グラデーション』使って片付けようとしたんだが……………」

話を聞けば、ISを使って運ぼうと考えていたため、一人で大丈夫だと豪語した。

実際にISを展開してやろうとしたらどこからか千冬姉の出席簿が飛んできたらしい。

ISを展開するには様々な制約があり、授業外で無闇にISを展開をしてはいけないのだ。

仕方なくISを展開せず運ぼうとしてみたら予想以上に重く、時間がかかってしまったらしい。

「そっか、…………ん、じゃあ俺が手伝うよ」

そういつて千春の隣に立ちカートを押していく。

「ごめん、一夏………… うお！？カートが軽い！うひょー！我が世の春がキタワー！」

一緒にカートをおしながら千春が喜ぶように叫ぶ。

………やっぱり可愛いなあ、千春。

「いよっしゃあつ！任務完了だぜえ！」

格納庫に訓練機のISを入れて千春が飛び上がる。

「ありがとなー夏！助かったよお」

頭を掻きながら苦笑する。

「いや、気にすんなよ千春。ち、千春のためだったらこんなこと、朝飯前だからさ！」

千春から少し目を逸らしてしまう。俺マジヘタレ。

「にしても昔よりも腕力あがった？カートがすげえ軽くなったし」

「バイトしながらだけどちゃんと動いてたからな。まあ二年前よりかはあがってるな」

格納庫から二人でならんで出た時、千春が思い出したように聞いてきた。

そう、部活なんてしてなかったが、走り込みや腕立て、腹筋のような基本的な運動は毎日続けていた。

「そっか、いやあびっくりしたぜ？めっちゃ軽くなるんだもんな…

…
「

「カート押してた一夏さ、遅しくてカッコよかったぜ？」

その時、俺の世界が停止した。

「お、じゃあ先行くな？」

軽く手を振り走っていく千春を見て、俺は拳を高く振り上げ跳ぶ。

「いよっしゃああああああああッッ！！」

格納庫に俺の声が響いた。

Stage38 『跳躍、心からの咆哮』(後書き)

お姫様だっこイベント削除(笑)

いや、だって千春をだっこしないんですもん(笑)

ただお弁当イベントは起こります。次回をお楽しみに(笑)

感想待ってます！

「すまん山田君」

「いえ、三人相手でもなんとかまりましたし」

連絡事項を伝え職員室へ向かう途中、千冬は千春を乱入させた事を詫びた。

いや、三対一の状況で戦わせた事を詫びた。そう、『最初から三対一で戦う』事を伝えておいても、やはり三対一と言うのは辛いものがあるからだ。

ISスーツを着たままの真耶は首を横に振った。

「しかし…使いませんでしたね」

「ああ、何かしら使用条件があるのだろうか？」

「公開されている『グレードシヨン』には『赤い』装甲色のモードの情報はありませんでしたし……やはりブリュッセルさんの『グレードシヨン』にしかないと考えるべきでしょうか？」

「だろうな。……何にせよ、あのモードは危険だろう。もしブリュッセルが知っているのなら何故あのモードがあるのか。知らないで

いるのなら止めねばならん……後者はありえんだろうか」

千冬は腕を組み、クラス対抗戦の際、『赤い装甲色』の『グラデーシヨン』を思い出す。

「あの時、『絶対防御』……いえ、シールドエネルギーさえ展開された様子はありませんでしたしね。……ブリュッセルさん本人に聞いて見ますか？」

「はぐらかすだろうな。それに我々に強制力はない。仮に聞いたといえ、最悪『消される』ぞ？」

「え！？……消されるって……」

真耶は目を見開く。『消される』その意味を理解して、驚く。

「奴はあれでも、『世界最高』の大富豪、ブリュッセル家の一人娘だ。世界各国に貸しがあり、この日本も例外ではない。

そして奴は、『大切なモノ』を守るためなら……『世界さえ敵に回す』ような奴だ」

千春と別れ、着替えにアリーナの更衣室に向かっている途中に、
箒がいた。

壁に持たれ掛かり何かを待っていたような顔をしていた箒が、俺を
見受けて目を輝かせた……気がする。

「い、一夏っ、き、奇遇だな」

「おう……なんだ、待っててくれたのか？」

「ちっ、違う！奇遇だな、と言ったであろっ!？」

「あ、そっか。で？どうしたんだそんな所に突っ立って」

「ああ……うん、そのだな……」

箒が頬を掻きながら口ごもる。話しにくい話だろうか？

「そっだ」

突然、ピコーンと頭の上に電球が輝いた気がした。良いこと考えた！

「箒、今日の昼、予定空いてるか？」

「!?!?.....あつ、空いているぞ!そう、偶然、偶然私は予定が空いてる!」

「そりゃよかった。一緒に昼飯食おうぜ!」

「そりゃよかった。一緒に昼飯食おうぜ!」

篠ノ之箒は今まさに、歓喜の渦中にいた。

一夏が.....一夏が!

私を昼食に誘ってくれたのだ!

ここだけ(箒の内心)の話、正直に話そう。

なんと、私は一夏を昼食を誘うために更衣室前の通路で一夏を待っていたのだ!(バーン!)

先のクラス対抗戦の時から、ISの訓練こそ一夏とやって来たが、普通の会話はいくつかしたただけだった。

故に昼食に誘い、少しでも近付きたかった。

しかし、実際に誘おうとしてみると胸の高鳴りが言葉を邪魔する。自分の不甲斐なさに泣きたくなった時、件の一夏が、一夏の方から誘ってくれた……これほど嬉しいことがあるのか？

「ああ、ああっ！そうだな、それがいい！」

私は嬉しさに何度も頷き返した。

「よし、なら天気がいいから屋上で集合な？」

「ああっ！」

私は駆け出した。朝、一夏のために作った物が無駄にならずに済む。

ああ、今日はなんと良い日だろうか。

「……………どついでことだ」

「ん？」

昼休み、俺たちは屋上にいた。

ここE.S学園の屋上には、うつくしく配置された花壇に季節の花々が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が落ち着いている。

それぞれ円卓には椅子が用意されていて、晴れた日の昼休みともなると女子たちで賑わってたりする。

しかし今日はみんなシャルル目当てで学食に向かったのだろう。屋上には俺達以外誰もいなかった。

イエイ、貸し切り。貸し切り、イエイ。

「天気がいいから屋上で食べるって話したろ？」

「そうではなくてだな……………！」

ちら、と筈が横に視線をやる。そこには……………

。

「へえ、じゃあブリュッセルさんは自分のISのメンテナンスをしてるの?」

「まーね。改修とかじゃないしこれくらいわね」

「ホント、凄いわよね千春は。自分でISの調整まで出来ちゃうし」

「私自身が設計した機体だしね。そだ、鈴の『甲龍』^{シエンロン}の調整も私
がしよつか?……あ、いや、無理か、お国的な意味で」

「でしたら私の『ブルー・ティアーズ』を見ていただけませんか?。
少し気になる事があります……」

千春と鈴とセシリアとシャルルがいた。

stage39 『二人っきりのお昼頃』（後書き）

タイトル詐欺 W W W W W

篝ちゃんは子犬タイプにシフトしました。喜んでる時の篝ちゃんの尻尾は凄い勢いど振られて、落ち込んだりした時は耳と尻尾がへたれて……………あれ？可愛い？（笑）

そしてまさかの準シリーズ追加。

つまり、

【嘘予告】

千冬でさえ手を出さないブリュッセル家の闇とは！？

あの笑顔の奥に千春の本当の表情を見た。

「私はね？……………死ぬことが出来ない身体なんだ……………ずっと……………死ねない身体……………一夏……………一夏あつ……………助けてよお……………」

次回っ！【屋上のお弁当大戦】ツ！！

ホシた女を助け出せっ、一夏ッ！！

シリアルだ、と言うことです。（笑）

あ、誤解されるとアレですので言っておきます。ブリュッセル家の面々はどろがんばってもシリアルになるくらいの朗らかな人ばかりです。

感想まってまっす！

「焼きそばパン」

どろぞろの青狸のようにビニール袋から昼食を取り出した千春。

「え、えっと…か、カツサンド」

シャルルが顔を赤くしながら千春に続く。

「まあ及第点と言ったところか。ほんとはもっとダメ声なんだからね？」

「き、気を付けるよ千春」

あははは、とブロンド貴公子はカツサンドの袋を破きパンを取り出した。

なんか、千春とシャルルが仲良い。

「なにぶすつとしてんのよバカ一夏。ほらアンタの分の酢豚」

「…う、うるさいな。べつに…何も」

鈴がニヤニヤ笑ってる。なんかむかつかない。

まあ酢豚は貰うんだが……たが…酢豚オンリーと言っるのは中々大胆な発想だなおい。ちなみに鈴は自分の分のご飯は食堂で買ってきていた。相変わらず要領のいいやつめ。

「コホンコホン。一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か今朝早くに目が覚めまして、こつ言っものを用意してみました。よろしければお一つどうぞ」

バスケットを開くセシリア。そこはサンドイッチが綺麗に並んでいる。……のだが。

「お、おう。後で貰っよ」

俺の返事は些か引いている。

鈴はうわあ……って顔してた。くっ、こいつ、自分が食べるものじゃないからって対岸の家事状態だぜ。

「?どうかしまして?」

「いや!どうもしてない!」

……はつきり言おう。このイギリス代表候補生セシリア・オルコット、料理がからつきしダメなのだ。見た目は物凄く綺麗なのだが、味が凄まじくまずい。

何故自分の知らない調味料を適当にぶちこむのか一度真剣に聞いてみたい所だが、今のところその予定はない。……なんか聞いたらひどいことになりそうな気がするんだ。何故か。

まあ超金持ちのご令嬢ともなればこんなもんだろうな。お抱えのシエフだって何人もいるだろうし、包丁を握ったことがないどころか、自分で食材を選んだこともないんだろうな。

ちなみに、セシリアに聞いてみた所、セシリアが『超金持ち』ならば、千春の家は『超絶大金持ち』になるらしい。超絶大金持ちとか聞いたことねえよ。

俺達一般市民からしてみたらどんな呼び名になるんだろうか。

……普通に考えても高嶺^{たかね}の花、だよなあ。俺なんかじゃ……はあ。

それに引き換えシャルルならお似合いだよな、なんか王子様みたい

だし。

絶世の美女のお姫ちはる様にイケメン王子様。お似合いだよお似合い。

はあ、死にたくなってきた。

「……………何落ち込んでんのよ、アンタ」

「あ？……………落ち込んでなんかねえよ。死にたくなっただけだよ、はあ……………」

鈴が肘で脇腹を小突いて耳元で囁いて来た。

「どうみても落ち込んでるようにしか見えないわよ。……………アンタ、千春がお金とか、地位とか容姿で人付き合い決める女だと思う？」

「んな訳ねえだろ！むしろそうやって近づいてくる相手を嫌うくらいだ。経験者は語るぜ？」

「そう言えばあんた最初避けられてたっけ。……………そう、今の千春は外観で人の良し悪しを決めたりしないわ。今だって、シャルルの中身見ようとしてるだけなのよ？」

「あ……………」

「アンタが千春に言ったんじゃない、違う？なのに勝手にお似合いだとか考えて……………千春が怒るわよ？」

「……………そう……………だな……………けどなあ……………」

でもやっぱり似合って見える。こればかりは仕方ないんだもんだよ。

「安心しなさいって」

頂垂れる俺の頭をポンポンと叩く鈴。なんつーか、人が傷心の時はほんと優しいよな、鈴は。

「千春は、たぶん……………アン(t)r y」

「おおー！セシリアのサンドイッチつまそつだなー！なあなあなあセシリア、少し貰っていい？」

「えっと……………はい、いいですわよ、召し上がってくださいな（最初は一夏さんが良かったのですか…しかし、器量の小さい女と見られる訳にはいきませんわー！）」

「まつ、待て千春！」

慌てて止めようとするが間に合わない。ちくしょう！俺はいつも大切な人達を守れないのかっ！？（大袈裟）

「いったただつきまゝす！」

マミっ！
ほく

数秒間の静寂。

「……………セシリア」

「なんですの？千春さん」

「これ、味見した？」

「い、いえ…」

サンドイッチを半分くらい一気に口に含んだ千春。その顔は凄まじい速度で青くなっていく。咀嚼しながらセシリアを横目に見る千春はガタガタと震えだした。

「そう……じゃあ……いつペン食べてみんさい！」

「むきゅ!?」

バスケットから取り出したサンドイッチの一つをセシリアの口の中にぶちこんだ千春。一応自分が食べてる分はちゃんと食ってみたいだ。

「……………す、すみません、ですわ」

「まあ、あれよ。……今後、味見は絶対してね？」

「はい、以後、気を付け……………」

バタッ！

「せつ、セシリア!? セシリア!!」

突然仰向けに倒れたセシリア。その口からは泡が……泡がががが。

「み、味覚が耐えられなかったんだね。いわゆるカルチャーショック、……みたいな感じ、かな!？」

シャルルが慌てながらも状況を把握しようとしている。
まあだいたい合ってるんだろう。

「味見しないのは料理初心者のダメな点だな。私もそうだったし」

千春が気絶したセシリアの額をペチペチと叩きながらバスケットもサンドイッチを食う。あれを処理しきるつもりだ。

「ち、千春……大丈夫なのか？セシリアは気絶してしまっただが……」

「いや正直辛いッス。自分の黒歴史と同じ味がしやがるんだもん、精神的に来やがる。見かけが言い分あたしよりはマシだけど」

箒が心配そうに問うが千春の手は止まらない。いや、更に加速する。

「千は……」

「そんなに勢いつけて食べたら喉につまっちゅうよ？。ほら、お茶飲んでいいよ？」

「さんきゅ、シャルル。……んくっ、んくっ……ぶはあっ！……いやあ、胃袋が混沌と化してるよアハハ」

俺がペットボトルのお茶を差し出そうとしたら、シャルルが先に水筒からお茶を出し、千春に手渡していた。

先越された……ぐぬぬ

「む？一夏。何に憤ってるから知らんが、ぐぬぬは私の専売特許だぞ？」

「何が専売特許なのよ、てかぐぬぬって何よ」

「焼きそばパンが果てしなく美味く感じるよ。いや、ここの焼きそばパンは普通に上手いんだけどね」

口直しにもそもそもと焼きそばパンを頬張りながら千春が唸る。

「っ！……っ！？」

しかし、俺の目はリスのように頬を膨らます可愛らしい千春の他に、

胡座あぐらをかいた千春のスカートからストレートに見えるパンティを捉えていた。

だれだっ、チラリズムのないおっぴろげなパンティはエロスがないとか言った奴は！！チラリズムじゃなくても十二分にエロいじゃね

えかつ!!。

いや、まてよ?これにチラリズムが加算されると更にエロくなるってことか?……チラ…盗さ…いやいや、チラリズムは狙うものじゃない。チラリズムとは奇跡との遭遇!!

千春は最初こそ、女の子座り(正座を崩したみたいなやつ)でいたが、段々と座りかたを変え今じゃ胡座だ。シャルルを意識してたが、段々と面倒になり素の座りかたになったのだろう。

ちくせう、酢豚が鉄の味がするぜ。

「何鼻血垂れ流しながら食ってんのよ?……ッ!?あっ、ああアンタどこ見てっ!?!」

「いでっ!?!いでででっ、耳引っ張んなコラッ!」

俺の視線がどこを捉えてるのか知った鈴が顔を真っ赤にしながらの耳を引っ張る。

このちっちゃな身体のどこにこんな力がっ!

stage40 『ちなみに千春は純白です』（後書き）

登録件数500件突破！！いやっほうっ！！

いやはや、更新が遅くなり始めたこんな小説も500件突破ですよ奥さん。

もうあれかな？中堅クラスにレベルアップしたかな！？（笑）……

……調子に乗らぬよう頑張って行きます（笑）

今回は篝ちゃんのターン。日常パートでは空気の篝ちゃんですが、これからの戦闘パートでは問答無用の大活躍の予定です。むしろ活躍してくれないとキレた千春を止められなくなりますので………おっと、つい口が滑ってしまいました（笑）

感想待ってまゝす！

Stage 41 『胸関係の発言は彼女を修羅へと変えさせる』

「あ、そう言えばシャルルって専用機持ってたっけ？」

「え？あ、うん。デュノア社のラファール・リヴァイブのカスタム機がね」

「カスタム機……なんかカスタム機って良いね。私の『グラデーシオン』にもカスタムって付けようかな。『グラデーシオン・カスタムパレット』！なんて」

「でも、千春の『グラデーシオン』は千春専用なんですよ？」

「ん、……まあこの子は確かに私用に調整してるからね。ただ、それ以外は通常機と変わらないんだよね」

「仕方ないですわよ。千春さんの『グラデーシオン』はファースト・ソフト一次移行しないで高い性能を出す、と言うコンセプトがありますし」

「確かに、一次移行しちゃうと、その操者に合わせた『専用』機になるしね。……訓練機として考えたらこれ以上とない傑作機よね、『グラデーシオン』って。初期設定で専用機と互角に戦えるんだもん」

「いやいや、傑作って言われても凄く価格が高いし、問題は山積み

よ。当分は新型を作るよりも『グラデーション』のテストだね」

「新型？」

「そつ、新型。一夏と鈴とセシリア、三人の専用機見てたらアイデアが浮かんでね。設計図は半分くらいできてるんだ」

「設計図って……そんなことまで出来るの？」

「いやいや、『グラデーション』は私が開発した奴だし。」

「昔から何でも出来るわよね。千春ってば苦手な事とかないの？」

「虚空演算とか苦手だよ」

「あ、あれは人間の領域で出来るものではなくてよ？……」

「あとは……うーん…雷とかも苦手だね」

「え、えらく人間らしい苦手が来たね」

なんか専門的な話になってきた。今だIS初心者マークを貼っている俺こと織斑一夏にはなんの話だかわからん。いや、なんか難しい会話になって来た辺りから頭が理解するやめた。

「い、一夏っ。あの、だなっ」

IS談義に洒落込む四人の会話をBGMに酢豚を食べていた俺に、
篤が声をかけていた。

「ん？なんだ？篤。……あ、千春達の会話の意味がわかんないんだろ？安心しろ、俺もだ」

「ちっ、違うっ！」

え、違うのか？俺全くわからんのだが……。

「その、だな……。作り過ぎてしまっとな、よかったら、どうだ？」

やけに声を押し殺して篤が布巾で包まれた弁当箱を渡して来た。

「ほんとか！？いやあ、助かるぜ篤」

俺と言えば鈴の酢豚だけしか食べてないため腹が減っている。

結ばれた布巾を解き、中の弁当箱の蓋を明ける。

「おお！」

鮭の塩焼きに鶏肉の唐揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、ホウレン草のごま和えと言うなんともバランスの取れた献立の数々がソコにあった。

「いやあっ、これは凄いな！どれも手が込んでて旨そうだった！」

「っ、ついでだついで。あくまで私が自分で食べるために時間をかけただけだ」

「そうだとしても嬉しいぜ。箸、ありがとな」

「ふ、ふん……」

何でもないようにしながらも、どこか箸は嬉しそうな表情で自分の弁当箱を開いた。

あれ？

「箸、なんでそっちは唐揚げがないんだ？」

「！……こ、これはだな……。ええと……」

何故か視線が泳いでいる。どうしたんだ？聞いたらずい事だった

か？

「……うまく出来たのがそれらだけだから仕方ないだろう……」

「ん？……あれか？ダイエットか？」

「！？……そ、そうだ、私はダイエット中なのだ！だから、一品減らしたのだ！」

機を得たり、とおおきく頷いて箸が肯定する。

「そっか、……けど、別に太ってないだろ」

「たく、男ってなんでダイエット、〃太っているの構図なのかしらね」

「全くですわ。デリカシーに欠けますわね」

「いや、でも実際ダイエットなんか必要ないように見え」

隣にいた箸を見た。全体的に凹凸が目立つ。いわゆるボンツッキュッボンツ、と言う感じだ。

いや、まあよくわからんが。

「ど、どこを見ている！」

「ぐええ」

顔を思いっきり手で押し返された。首がっ、首が！

「私もしてみよっかな…、ダイエット」

千春が焼きそばパンを頬張りながら溜め息をついた。
焼きそばパン、なんとまだあったのだ。

「千春が？千春にこそ必要ないじゃない！」

「いやいや、最近胸が、ね…重いんだよ」

大きく溜め息をついた千春を、箒、セシリア…そして鈴が血涙を流した。

いくらで千春相手だからといっても、耐えられんのだろう。鈴…不憫な子！

千春は俺より身長が少し高く、モデル体型だ。スラッ、とした中にムチッ、とした肉感が情欲を誘う。

そして巨乳、その乳房に下品さはなく、形良く保った乳房は健全なエロスを感じさせる。

それでいて美人なのだ。鼻肩目を取り払っても、千春はこの学園でトップクラスの美少女だ。

もはやチートレベルである。

「千春は規格外だしな、いろいろと。……あきらメロン！」

バキッドスツベキッツー！

どうじこうげき！いちかは999のダメージをうけた！

stage 41 『胸関係の発言は彼女を修羅へと変えさせる』(後書き)

」どこを見ている!」

貴方のふとももです。

箒のあーん、イベントなんてなかった……
はい、タピオカです。遅れて申し訳ないです。

いやあ、本来なら23日に投稿出来たのですが、メモに保存し忘れ
一話丸々書き直しになりました (てへっ

……あれですね、一度経験してはいますがやはり辛い。特にテンシ
ョン復活が(笑) 今日中にもう一話上げたいです。
保険がないので直書きですがね。

Stage 42 『欠陥機』

「こう、ズバーッと行ってから、ガキーンッ!と言ったようにだな
!」

「なんとなくわかるでしょ? 感覚よ感覚。はあ? なんでわかんない
のよバカ!」

「防御の際は右半身を前方へ5度、回避の際は後方へ20度ですわ
!」

率直な意見を述べさせて貰おう。

「何がなんだかわからん!」

「はあ!? ちゃんと人の話を聞いてなさいよ! 分かりやすく言って
やってんじゃないバカ!」

「噛み砕いて教えてやってわからんとは……」

「お前は特に噛み砕き過ぎて擬音しかねえじゃねえか箒っ!」

「もう一度お教えしますわ、防御の際は……」

シャルルが転校してから五日が経って今日は土曜日だ。

IS学園では土曜日の午前は理論学習、午後は完全に自由時間になっている。とはいえ土曜日はアリーナが全開放なので殆どの生徒が実習に使う。それは俺も同じで、今日も三人の教官にダメな子のレポートを二重三重に貼られていた。

「外装こそカスタム仕様だけど中身は純正リヴァイブのOSを弄つた程度か。……データ上でだけど反応速度がコンマ0.2秒シャルルに遅れてるね。
イコライザ
後付武装を多くしたせいで整理仕切れてない残留片が疎らにあるせいで」
フラグメント

「えっと…どうにかなるかな？」

「整理するだけで済むから今直ぐに出来るよ？弄っていいならやっただげるし」

「うん、お願い出きるかな千春？」

「任せて任せて。っと、ピロピロピロ〜」

「にしてもやっぱり千春は凄いね、デュノア社の研究員の人達でも見つけれなかった不具合を見つけちゃうなんて……」

「そっかな？それほどでもないって、不具合ってレベルじゃなしに」

空中に投影されたキーボードを凄まじい勢いで叩きながら、同じく投影された、高速でスクロールされる文字の羅列を見て千春は笑う。

「ほいっと、整理完了！ただOS自体がシャルルの固有技能^{スキル}用には作られたわけじゃないから、飛躍的なスピードアップには繋がらないかな。感覚的なレベルだね」

「ありがとう、千春。少し動かしてみよっかな」

なんか、千春とシャルルが仲良さげに笑い合ってたんだが……。

「聞いてますのー!？」

「え、あ、聞いているぞ?……」

ごめんセシリア、聞いてなかった。

「一夏、ちょっと相手してくれる？白式と戦ってみたいんだ」

追及されそうになったときにシャルルが声を掛けて来た。
見慣れていながら別物にすら見える橙色のI.S。

「おう、いいぜ？。と、言うことでまた後でな！」

これでようやく三人から解放されるぜ…三人共、一人一人聞くなら
まだしも、三人同時に講義を受けるのはごめん被る。一人の言葉を
理解したら、全く別のアプローチを教えられるのだ。

足算を教えてもらいながら引算をさせられ、横から掛け算の仕方を
聞かれる、と言った感じだ。
事のカオスさは理解頂けただろう。

三人の不満げな視線を無視して『雪片・千秋』を展開する。

訓練だとしても、シャルルには負けられない……最初から全力だ！

《一夏》

雪片を構え、『疾風迅雷』疾風迅雷を発動しようとした俺に個人秘匿回線プライベート・チャンネル
で千春が声を掛けて来た。

《千春？どうかしたのか？》

《ん、シャルルとの模擬戦だがな、『疾風迅雷』は使わない方がいい》

まるで俺の行動を予見したような一言。今まさにやるうとしてました。

《えっと…理由を聞いても良いか？》

《トーナメントがあるだろ？多分一夏にとって難関は専用機持ちのセシリア、鈴、シャルル、ラウラ辺りだ。鈴とセシリアには『疾風迅雷』はバテてるけど、シャルルとラウラはまだ知らない。敵になるかもしれない相手だ、手の内は見せない方が賢明だぜ？》

《確かにな》

《それに訓練だ。『疾風迅雷』を用いずに何処までやれるか……なんてのも試せるだろ？》

《そうだな…よし、頑張ってみるぜ》

俺の言葉に首肯で答えた千春は俺とシャルルの戦闘の邪魔にならないようアリーナの壁際へ寄った。

「さて…行くぜ、シャルル！」

「うん、僕も行かせて貰うよ、一夏」

シャルルがアサルトライフルを構える。俺は雪片を下に構え、踏み込んだ。

「見てみて！織斑ちゃんとデュノアくんが模擬戦してるよ！」

「デュノアくんのISって、ラファール・リヴァイブよね」

「いいな、専用機！」

空中で剣撃と銃撃が交わる中、アリーナでは実習に励んでいた女子生徒達が小休憩を取り二人の男子生徒を見上げていた。

「へえ、やるじゃない一夏。まぐれっばいけど反応出来た、って言うのはデカイわよ」

「わたくしや鈴さん、篝さんとの模擬戦の成果ですわね」

「しかし押されているな。一夏の苦手な戦いになりつつある」

「シャルルのラフォール・リヴァイブには光学兵装がないからな。雪片の利点が全く生かせない相手、と言うのも大きいだろうな。基本^{ベース}本武装の殆どを外して、豊富な数と種類の後付武装^{イコライザ}があるんだが、その全てが実弾兵装だったんだ」

「いつの間にそんな事を調べあげたのだ？」

「さっきの残留片^{フラグメント}の整理の時？」

「先ほどの会話、一分も経っていませんでしたのに…」

「ま、一夏の為だしな」

千春と鈴、箒とセシリアは目でこそ二人の戦いを見ていたが、一夏の動き、シャルルの戦闘方法での議論が起こっていた。

「この戦い、一夏が不利だな」

「いや、基本的に一夏は常に不利、さ」

「それでも特に、ですわ。近づいては離れ……この動きは千春さんにも見られますわね」

「まったく、じれったいわね！あの分身しながら突撃するやつ使いなさいよ！」

「ん、……一夏には『疾風迅雷』を使わないで戦って貰ってるよ？」

舌打ちした鈴に苦笑しながら千春が答えた。

その言葉に鈴だけでなくセシリアや箒も驚いた。

「何故だ？負けてしまっても知れないではないか」

「負けてなんぼ、それに『疾風迅雷』に頼られたら一夏の成長が妨げられる。『疾風迅雷』なんて長時間使えないんだしさ……」

千春は苦笑しながら頭を掻いた。

「……あーあ、……多分今のままじゃ、あたし……一夏に負けるかも」

千春にしては珍しく弱気な呟きを三人は聞いた。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳フアンさんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？……俺としては一応わかっているつもりだったんだが……」

シャルルに手も足も出ずに負けた俺は、先ほどの戦闘に関するレクチャーを受けていた。

「うーん……知識としては知っているって感じかな。さっきも殆ど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……確かに『イグニッション・ブースト瞬時加速』数回使っただけで完璧に読まれるようになってしまったし……」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応出来なくても軌道予測で攻撃できちゃうんだ」

「直線的……か、千春にも言われたっけ」

瞬時加速を千春から習った時、瞬時加速を『教えたくない』理由として千春が言っていた。

そう言われたからこそ、『マルチトリガー多方向個別瞬時加速』を編み出したんだ。

いやホンと、シャルルの説明はわかりやすいぜ。ひじょーにわかりやすい。

「ふん、私のアドバイスはちゃんと聞かん癖に」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによあのバカ！」

「わたくしの理路整然とした説明の何処が不満だと言つのかしら」

あー……。自称、俺の専属コーチ×3が後ろでぶつくさ言っている。

ちなみに千春は、三人の説明を理解しながらも、俺にとっては無茶な説明だと知っていてか苦笑ぎみだ。

「そう言えば一夏の『白式』って後付武装イコライザがないんだね？」

おっと、シャルル先生のお話だ。心して聞こう。

同じ男というのがさらに理解を後押しする。

今の俺はまさに水を吸うスポンジ、木の蜜を吸うカブトムシ状態だ。ごめん、わけわからん。

「ああ、何回か千春に調べて貰ったんだけど、拡張領域パススロットが空いてないらしい。なんでもワンオフ・アビリティに容量を食われてるらしい」

「流石千春だね。うん、僕も千春と同じ意見だよ。……にしても普通は第二形態セカンド・フォームから発現するんだけどな……。それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから、それ以外の特殊能力を複数人間が使えるようにしたのが第三世代ISの武装。オルコットさんのブルー・ティアーズや鳳さんの衝撃砲がそうだよ」

「なるほどな。って、やっぱり初期状態から使えてたのは可笑しいのか？」

「初期設定の時に！？……可笑的い、ってレベルじゃないよそれ。異常事態だよ！」

「え！？そうなのか？」

「前例が全くないからな、しかも一夏がさつき使った単一仕様能力ワンオフ・アビリティは千冬先生と全く同じ能力なんだ。……今まで同じ能力が別の機体で発現した例がこれまた無い。無い無い尽くしの稀有なISだよ」

千春が俺とシャルルに近づいて来た。

「千春はどう考えてるのかな？……この件について」

「逆に問うぜシャルル。……単一仕様能力が発動する条件はなんだ？」

千春が指を立てニヤリと笑う。どこか先生のような所作だ。難しそうでその実簡単な答えを導き出せない生徒を見て面白そうに笑う先生のような。

「条件……唯一仕様能力は、各ISと操縦者が最高状態の相性になったときに自然発生する……………まさか、有り得ないよ」

シャルルが口に出してから顔を真っ青にして否定した。何をだ？

「有り得ない、なんて話は無いぜ？。もとよりISなんて、その実態の5%くらいしか解明出来てないんだ。少しばかりの異常、有ると思わないとやってられないさ」

「で、でも！…それでも有り得ないよつ。初期状態……………つまり、最初から一夏とそのISの相性が『最高状態』だなんて！」

ああ、そう言う事が。そりゃたしかに有り得ないな。
俺も今、事の重大かつ異常さが理解出来た。

「世界を騒がす程じゃないさ」

千春はクスと笑ってチャーカーに触れた。

「次は射撃武器の訓練だ。シャルル、的はつくるから武器を一夏に貸してあげられるか？」

「う、うん。ハイ、一夏」

そう言ってシャルルが俺に渡してきたのは、さっきまでシャルルが使っていた五五口径アサルトライフル『ヴェント』だった。

「え？他の奴の装備って使えないじゃなかったか？」

「普通わね。でも所有者が使用許諾アンロックすれば登録してある人全員が使えるんだよ。

うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しにうつってみて」

「お、おう」

初めての銃器は妙な重さを感じた。実際はISのエネルギーフィールドがあるので重たくは無いはずなのだが、初体験の武器なのでそう感じるんだろう。

「構えはこうでいいのか？」

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

ひょいっと俺の後ろに回ったシャルルは身長差がそれなりにあるものの、ISの特性で浮いてる事から自由な動きで俺の体を誘導する。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはISが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクはできてる？」

「銃器を使う時の奴だよな？さっきから探してるんだが……見あたらなんだよ」

高速状態での射撃なので、そこは当然ハイパーセンサーとの連携が

必要になる。ターゲットサイトを含む銃撃に必要な情報を操縦者におくるために武器とハイパーセンサーを接続するのだが、さっきから白式のメニューにはそれが無いのだ。

「うーん、格闘専用機でも普通は入ってるんだけど……………」

「千冬姉曰く欠陥機らしいからな、こいつ」

「100%格闘オンリーなんだね。じゃあ、しょうがないから目測でやるしかないね」

おおう、初めて銃を撃つというのになんと言うハンディキャップだ。しかし愚痴っても始まらない。とりあえず撃ってみよう。

「よし、じゃあ行くぞー！」

「うん、とりあえず撃つだけでもだいたい違つと思つよ」

感覚というのなやってみなければ絶対わからないものだから、シャルルの言う通りなんだろう。とりあえず俺は一呼吸してから、千春が空中に投影した的へ銃口を向け、ぐつと引き金に力を込めた。

バンッ！！

「うおおっ！？」

物凄い火薬の炸裂音に驚いてしまう。自分で撃つところも大きく感

じるのか。

「ほら、次だぜ一夏！」

「こんのっ!!」

バンツ!!バンツ!!バンツ!!

連続で投影された的へ銃口を向け、連続で引き金を引く。

的の中心点から離れた場所に風穴があく。

即興で使ったプログラムでここまで出きるって………すげえな千春。

「どっ?」

「お、おう…なんか、アレだな。とりあえず『速い』って感想だ」

弾丸の速度はかなり速いというのはもちろんわかってはいたが、自分で撃つとそれがよりわかる。

それに加えて体に来る反動。ほとんどが相殺されているとはいえ、刀とは全く違ってごたえに初めての体験ということもあり心臓がバクバクと鳴っている。

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分、より速いんだ。だから軌道予測さえあっていれば簡単に命中させられたり外れても牽制になる。一夏は特攻するときに集中しているけど、それでも心のどこかではブレーキがかかるんだよ」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

「うん」

……そうか、そうだったのか。だから格闘メインの筈はともかく、鈴やセシリアと戦うと一方的な展開になるのか。なるほどな、理解も納得も出来た。

「だからそうだと私が何度も説明したと……！」

「って、それすらわかってなかったわけ！？はあ、ほんとにバカねアンタ」

「わたくしははてつきりわかった上であんな無茶な戦い方をしているものと思っていましたけど……」

ああ、なんだろうな。呆れ声が聞こえて来た。

うん。会話って大事なんだな。

お互いを知るために、俺たちはもつと話し合おうべきだった。こんなにも認識が食い違っているなだから、そりゃあこっちもあっちも話しが伝わらないわけだ。

「ねえ、ちゅっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だっ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……………」

急にアリーナ内がざわつきはじめて、俺は注目的になっていた少女に視線を移した。

「……………」

そこにいたのはもう一人の転校生。

ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「おい」

オープン・チャンネル
ISの開放回線で声が飛んでくる。初対面があれだったのだからその声は忘れもしない。ラウラ本人の声だ。

明らかに俺へムケテ飛ばされている殺意と共に。

アリーナに緊張がはしる。

「……………なんだよ」

気が進まないが無視をするわけにもいかない。俺がとりあえずの返事をする、ラウラは愉悦の込められた笑みを俺に向けてきた。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば速い。私と戦え」

「いきなりなに言っつてやがる、バトルマニア戦闘狂かテメエは？……生憎お前とやり合う理由が俺にはない」

「貴様にはなくても、私にはある。貴様を滅殺する理由がな」

ざわり、千春にどす黒い感情が沸き上がる。

stage 42 『欠陥機』（後書き）

アニメ版の箒と鈴が可愛すぎるWWW

六話冒頭の、箒の擬音、鈴のバカ発言時が可愛すぎる。

おかげでそこだけリピートしてました（笑）

……はい、昨日までに上げられませんでした。フッフ……私の能力
は『ライワード虚言使い』っ!!！

……すみませんでした（笑）

感想待つてまゝす！

Stage 43 『存在の否定』

「貴様がいなければ…教官が大会二連覇の偉業をなし得たであろうことは用意に想像できる。だから私は　貴様の存在を認めない……ッ！」

「……やっぱりな、ドイツ、軍人…教官。お前、千冬姉の教え子ってわけか。納得したぜ、お前が俺に喧嘩を吹っ掛けるわけがな」

千冬姉はかつてある理由からドイツで教鞭を振るった事がある……
…ボーデイヴィツヒはその時の教え子だろう。
教え子ということ以上に、その強さに惚れ込んでいるのだろうな。
だから、千冬姉の『経歴』にキズを付けた俺が憎い、と。
まあ気持ちはわからなくもない。俺も正直に言えば、あの時の無力な自分が許せないのだから……。

「ラウラ・ボーデイヴィツヒ……」

「何！？アイツが一夏をひっぱたいたって言うドイツの転入生なの！？」

「一夏…お前とボーデイヴィツヒの間に何があったと言うのだ」

ドイツの転入生と一夏の間にある険悪なムードに、箒や鈴、セシリアだけでなく辺りの女子生徒達にまでざわつきが始まる。

「そうか、ならば剣を執れ。動かぬ的を砕いた所で、その行為に価値はないのだから」

「……………悪いな、気分が乗らない。個人別リーグがあるんだ。勝負はそこでつけようぜ」

「ふん。……………ならば 戦わざるを得ないようにしてやる」

言いが速いか、ラウラはその漆黒のISを戦闘状態へシフトさせる。

刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「ッ!」

マズイツ 俺のすぐ近くにまだ千春がいるッ!

万が一にでも千春にISの攻撃が当たったら……………間違いなく死ぬ!

「千春!」

ゴガギンッ！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようなんて、ドイツの人は随分と沸点が高いんだね？」

「貴様……ッ」

横合いから現れたシャルルが俺と千春の前に割り込むように立ちふさがりシールドで実弾を弾き、同時に右腕に六一口径アサルトカノン《ガルム》を展開したラウラに向けた。

「フランスの第二世代型アンティークごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルキよりかは動けるだろうからね」

互いに涼しい顔をした睨み合いが続いた。

しかし、その睨み合いも長くは続かなかった。

「……………認めない、だと？」

「え？」

気の抜けた声は俺だ。千春だ、千春が……………明確な敵意を込めてラウを見据えていた。

「ふざけるな……………ふざけるなよ、Schweinehund（クソヤロウ）！！……………織斑千冬がいなければ、一夏が誘拐される、なんて事はなかったんだッ！！そう……………いなければ良かったんだ！それがなんだ？存在を認めない、だと？……………口を慎め、でなけりゃ肉

片すら残さずぶち殺すぞ!!!?」

千春が何か英語のような言葉を使った。何を言ったのかはわからな
いが、その雰囲気から十中八九罵倒じちゅうちゅうめつたうたるう。シャルルがアサルトカ
ノンを構えながら驚いたように口を開けた。普段のニコニコしてい
る千春とは別人のような、殺意を剥き出しにしたその表情。俺に嫌
な予感が走る。

「……………貴様、死にたいようだな。……………よかろう、織斑一夏……
あの愚図より先に始末してやろう」

「慎めと言ったアアツ!!!」

千春が首のチョーカーに触れ、『グラデーション』を展開する。

その速度は刹那。かつてみた展開速度の比ではないほどの速さで展
開された。

そしてその装甲色は……、血のような

「紅い…装甲、あの時のつ……………<ruby><rb>鳳</rb></rt>>
<rp></rp></rt>>ファン
</rt>><rp>></rp>></rt>></ruby>!オルコット!」

「わかってるわよッ!、『ツェンロン甲龍』!」

「わたくしはラウラ・ボーデヴィツヒを！鈴さんは千春さんを！」

鈴とセシリアがISを展開する。

がしかし、展開し終わった時には既に始まっていた。

ガキインッ！！

「ラウラ…ラウラ・ボーデヴィツヒッ！！」

「閃撃のフレイヤ…ふん。親子二代で二刀流か、忌々しい…ッ」

千春が瞬時に展開した二振りの近接ブレードとラウラのISのレーザー手刀が切り結ぶ。

連撃。連撃、連撃連撃連撃連撃連撃連撃ッ！！

千春にラウラ、互いに目にも止まらぬ剣撃の応酬を繰り返す。

「やはり、疾はやい。閃撃の名に偽り無しか！」

一進一退の攻防、しかし、その均衡は傾いた。

「だが、閃撃と言えど…動けぬのならば意味は無い。我が停止結

界の前に敗れるのだ！」

ラウラが右腕を突き出した。そして、ピタリと、千春の動きが止まった。

「！……A I C……」

「流石に知っていたか……まあいい」

動きを止められた千春に向け、ラウラは左肩に装備された大型の実弾砲を向ける。

間に合わない。鈴とセシリア、シャルルはその光景を見ながらそう思った。スラスターをいくら吹かしても、千春は助けられない……
…… そう、三人は。

ザンツ！

ギィィンツッー！！

「織斑……………一夏っ」

「悪いなラウラ・ボーデヴィツヒ。大切な女性ひとをやらせるわけには
いかなくてな」

雪片で左肩の実弾砲を切り裂いた一夏は、ラウラと千春の間に立ち
塞がり、『零落れいらく白夜』を発動した状態で雪片をラウラの喉元に突き
つけた。

Stage 43 『存在の否定』（後書き）

紅い装甲、二度目の登場！！ 紅い装甲は一体どんな能力が！？
一夏が主人公らしくなって来たWWW

ラウラ好きの皆様、ただいまラウラ・ボーディヴィツヒは敵役に徹
しています。

攻略後にデレるのでそれまでお待ちください（笑）

感想待ってまゝす！

Stage 4 『緋色の思い』

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞き付けて来た担当の先生だろう。

「ふん……………今日は引く」

横槍を何度も入れられて興が削がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへ去っていく。その向こうではおそらく教師が怒り心頭で待っていることだろうが、あのラウラの性格からして無視してしまうのだろう。

「一夏、千春、大丈夫？」

「……………」

「ああ、なんとか」

深紅の装甲を纏ったままうつ向いた千春は、何も喋らず、シャルル

の問いかけにも答えない。

「千春？」

甲龍を纏った鈴が千春の元に駆け寄り、側に寄る。
そして鈴が千春の肩に触れようとしたとき、千春の静寂が止んだ。

「お願いっ、今は触らないで……！」

鈴に対する明確な拒絶。悲痛な声は、まるで怖がっているようだった。

「え……？……千春？」

鈴が後ずさる。

今まで……いや、今ではなかった拒絶に鈴が驚いたのだ。

「……………」

驚いたのは俺や鈴だけでない。箒もセシリアも、シャルルも驚いていた。

箒とセシリアは鈴と千春の仲の良さはよく知っていた。シャルルもこの五日で仲の良さは知ったはずだ。

周りから見れば千春が鈴に対し『依存』するかのような仲の良さを知っていた。

故の驚愕だ。

「……シャルル、今何時くらいだ？」

「え、え！？……あ、えっと……もう四時を過ぎてアリーナの閉館時間になるよ？」

突然投げ掛けられた言葉にシャルルが慌てながらもちゃんと答えてくれた。

「じゃあもうあがろっぜ、汗でびしょびしょだしな。……千春、夕飯は？」

「……………」

小さく。見落としてしまいそうになるくらい小さく、千春は首を横に振った。

「そっか、……じゃあ行こっぜ皆。また明日な、千春」

そう言つと俺は鈴と並び、ピットへ向け歩き出す。

「お、おいー夏……」

「ラウラの事も説明する、』行こっぜ』」

語尾を強調するように強く言う。
箒とセシリアはまだ聞きたがったようだが、溜め息をつき俺の後に付いてきてくれた。

「で？……何処までを話してくれるのだ、一夏？」

「推測でいいなら話すぞ？ラウラの事だけだ」

「千春さんの事は……話してくれませんか？」

「……………千春の事は……まあ……解る所だけな」

「紅い装甲の事は一夏も鈴も知らないんだよね？」

「ああ、詳しくは言えないけど、前に一度しか見たことがない。今日で二回目、だな」

ピットの前の通路で、俺たち五人は声を小さくして話し合っていた。

「では仕方ないな。…………ラウラ・ボーデヴィツヒのことを聞かせて

貰おう」

「悪いな、箒。……まず最初に、ラウラは千冬姉の教え子だ」

「教え子？」

シャルルが首を傾げる。

「ああ。と言っても学園でじゃなくてドイツの軍隊での、だけどな

「聞いた事がありますわ。織斑先生は引退前、ドイツ軍のIS部隊の教導をしてたと……」

「そつだ。千冬姉は俺が作つちまった借りを返すために、ドイツくんだりまで行き、そこでISの教導なんかをしてたらしい」

「借り……？……軍に対し借りとは、穏やかではないな、どんな借りだったのだ？」

箒が腕を組みながら眉をつり上げる。やっぱり食いつくよな。

「ちよつと待ちなさいよアンタ、……まさかあのラウラ・ボーデヴィツヒとか言うヤツ……そんなしょうもない理由で喧嘩吹っ掛けてきてんの!？」

過去に起きた事の顛末を知る者の一人、鈴は三人より一步先に理解した。

両拳は強く握られ、その瞳は怒りに燃えている。

「推測……だけどな」

「だから千春はあんなに怒って……っ、アタシも知ってたらあんなヤツ、ボコボコにしてたのにつ！」

「鈴さんは何かご存知なのですか？」

セシリアの言葉に、鈴はセシリアから目を逸らす事で答えた。「私が答える事じゃない」と、一夏を見て。

「俺が中学一年生の時だから、もう三年前になるのか？……モンド・グロツソがあつたよな？」

「第二回、モンド・グロツソだよね？。織斑先生の大会二連覇が掛かってた大会だったから僕も見てたよ」

「千冬さんが棄権し、騒ぎになったあの……だな」

よし、筈も知ってるな。なら話が早い。

「そう、その大会だ。……千冬姉が棄権した理由が、俺にあるんだ。当時、俺は突然現れた黒服の男達に気絶させられて監禁された。それを知った千冬姉が、大会を棄権してまで助けに現れてくれたんだ」

筈、セシリア、シャルルと三人が絶句した。

当時『世界』を大きく揺るがした、決勝戦を前にしての棄権の理由が、『誘拐された弟を救うため』だったなんて……誰も考えられるは

ずがなかったからだ。

「ラウラの言い分も一理あるんだ…俺がもう少し、少しでも千冬姉の弟らしく強かったなら……な」

「有るわけないでしょうが！このバカッ！！」

鈴が目尻に涙を溜めながらそれを否定した。

「なんで一夏が責められる必要があんのよ！そんな理由でっ、お門^{かど}違い^{ちが}じゃない！悪いのはアンタを拐った連中でしょ！？」

堪えきれず涙を流しながら叫ぶ鈴。

「……確かに、そうなんだろうけどさ。思うんだよ、俺が誘拐されず、千冬姉が優勝でもしてたら……千春が国に戻らず、IS操者になんてならなかったんじゃないか、なんてな」

「！……………」

「……だろ？あの時の千春を思い出したらな、俺が誘拐されたから、千春の人生を狂わせたんじゃないか、って思うんだよ」

「千春の、人生を？……………」

「ああ。筈、例えば筈が俺と同じ状況にいてさ、俺の事を、「守れるようになるから、ごめんなさい。ごめんなさい」って何度も呟き

ながら、泣く千春を見てさ、どう思う？」

「…………それは…………」

「しかもだ、それから一ヶ月もしない内に千春は逃げるように国へ帰っちまったんだ。ブローチを渡すのだってギリギリだったしな」

千春がIS操者、並びに研究者になったのは俺のせいだ。これは推測だろうが、絶対だろう。

「……………んで、俺が誘拐されていた場所の情報をいち早く掴んだのがドイツで、千冬姉はその情報を提供してくれたドイツに借りを返すためにドイツに行った……………ってところだろうな」

千春から話を戻す。

「俺がもう少し強くいれたなら、二人の人生を狂わせる事もなかったんだ。だから……………俺にも一因があるんだよ」

「……………」

無人、……無人になったアリーナ。そのアリーナ内で血溜まりの中に横たわり、身体中のありとあらゆる場所から血を流す人の影。

「……嫌われた…かな…」

千春だ。

ISを解除した千春が血溜まりにうつ伏せになりながら光を失った瞳で、懸命に空を見ようとする。

しかし見える筈はない。

両目は潰れたからだ。

うつ伏せになりながら腕を伸ばそうとする。

しかし伸ばせない。

腕はあらぬ方向に曲がっている。

うつ伏せになりながら立ち上がるうと脚を動かす。

しかし身動き一つ出来ない。

脚は骨が突きだし、血が溢れている。

痛みに叫ぼうとする。

しかし叫べない。

無惨に折れたあばら骨が内蔵を突き破り、喉から吐き出す血が助けを許さない。

死ぬの？

死ぬるの？

死ねないんだ

死なせてくれないんだ

「……………制服で来ててよかった、緊急用ISスーツは血で真っ赤だし、あのISスーツじゃすぐバレちゃってたし。……………はあ、嫌われたかな……」

数分もしないうちに千春は「立ち上がった」。

血溜まりの上に立ち尽くしながら千春は、一夏と鈴、二人に嫌われたか否かを心配していた。

はあ、と小さく呟いた千春は遥か彼方に見えた流れ星に、「どうか嫌われませんように」とお願いした。

夏の匂いが香る蒸し暑い夜風に栗色の髪が靡く。

Stage 4 『緋色の思い』（後書き）

過去話をちよつとだけ〜（笑）

とりあえず千春の過去の伏線はおびただしい数になってきてます。
回収出来んのかこれ（笑）

とりあえず次回はシャルロット党歓喜な回？（笑）

感想待つてま〜す！

「ま、ラウラのことはこれくらいだな。……憶測ばかりであれなんだが、まあ外れてないんだろな」

重くなった空気をどうにかしようと、出来るだけ明るく言ってみる。

「さ、着替えて飯食いに行こうぜ！いやあ、シャルルとやり合ったせいか腹が減ってさ！」

俺達はまだISスーツだ。早く着替えてしまいたい。シャルルの肩を軽く叩き、皆を見る。

「そう……だな、各自シャワーを浴びてから食堂に集合でどうだ？」
箒が乗って来てくれた。

「ではそれで。皆さん、先に失礼致しますわ」

セシリアは髪を靡かせながらさっさと行ってしまった。何を急いでんだ？。

「では私も行こうか」

「あたしも行くわ。一夏、アンタ遅れるんじゃないわよ?」

「シャワー浴びるだけだろ?そんなに遅れるかよ」

続いて鈴と篝も歩き出す。

さて、俺もさっさと着替えて食堂に行きますか。

「よしシャルル、さっさとシャワー浴びっか」

「え、あ…ああ。そうだね一夏。じゃ、じゃあ僕、先に部屋に戻ってるよ」

「は?…なに言ってるんだよシャルル。ここにもシャワーはあるじゃないかよ。ロッカールームのひとつが男子専用になってんだしさ、使わない手はないだろ?」

「え、ぼ、僕は部屋のシャワーが好きだから……」

慌てたように目を逸らす。

またこれだ。シャルルはこの五日間、頑なに俺と着替えようとしたりシャワーを共にしたりしない。ロッカールームのシャワー室なんだが、もともと集団で一氣に使う奴やので一人で使うには広すぎる。これが浴槽ならまだいいのだが、シャワーとなると一人は寂しい。折角の男同士、裸の付き合いつてのがあるんだし。

「シャルルってさ、俺と着替えたりするの嫌がるよな」

少しムツ、とした表情になってしまふのは許して欲しい。

これが五反田弾なら、互いの釣竿の大きさを一喜一憂したり他愛ない話をしたりするのだが、シャルルはそれをしてくれない。

男同士の気さくな付き合いがしたいんだが……………

「そ、そんなことないよ?…」

「そんなことあるだろ?たまには一緒に着替えようぜ」

「え、えと…」

「連れないこと言うなって!」

少々強引だが、シャルルの肩に腕を回す。これでもうシャルルは逃げられん!さてさて、シャルルの好みの女の子の話とか色々聞かせ!特に千春関係のだが。

ここでシャルルのタイプが千春以外なら俺はシャルルと親友になれる気がする。うん、気がするんだ。

「う……っ」

「うっ」

「うっ、うわああっ!!」
「のわっ!?!」

叫び出したシャルルが俺を突飛ばし、駆け出して行く。

「……………俺が悪いのか？」

それともあれか？男の俺に襲われるとでも思ったのか？

外国は日本よりそう言うのが多いらしいし……………だとしたら心外だ。
俺は男同士の友情を深めようとしただけだ！

けど、俺が悪いように見えるのは確かだな。

夕日が校舎の壁を緋色に変える中、俺はアリーナから寮への一本道を一人で歩いている。

一人、と言うのは色々な意味でもて余すものだ。考えたく、思いだ

そうとしないでも嫌なことを思い出す。

(貴様がいなければ…教官が大会二連覇の偉業をなし得たであろうことは用意に想像できる。だから私は　　貴様の存在を認めない……ッ!!)

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生。千冬姉の教え子。
俺の存在を否定する少女。

(…織斑千冬がいなければ、一夏が誘拐される、なんて事はなかったんだッ!!そう…いなければ良かったんだ!それがなんだ?存在を認めない、だと?…口を慎め、でなけりゃ肉片すら残さずぶち殺すぞ!!?)

千春・フレイヤ・ブリュツセル。アイスランドの元代表候補生。俺の初恋の相手。
俺の存在を全身全霊で肯定してくれる千春と俺と言う存在を否定するラウラ。

俺としてはラウラの気持ちもわかるから憎しみ合う関係にはなりたくないし、千春にはあんな顔をしてほしくない。

多分俺とラウラが和解すれば済むんだろうが………はあ、考え過ぎで頭が痛いぜ。どうすればラウラと和解出来るのかわからん。

「なぜこんなところで教師など?!」

「やれやれ……」

ふと、曲がり角の先から声が聞こえて、俺は注意をそちらに向ける。何せ知った声だったからだ。

一人は件のラウラ・ボーデヴィツヒ。そしてもう一人は千冬姉だろ
う。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。ただそれだけだ」

「このような極東の地で、何の役目が有ると言うのですか!」

あの氷の転校生ことラウラ・ボーデヴィツヒがこうまで声を荒げていると言うのは他にないだろう。

話の内容は千冬姉の現在の仕事についての不満や思いの丈をラウラがぶつけているようだった。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません
ん」

「何故だ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違い
している。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれる
など」

「そこまでしておけよ、小娘」

「っ……………！」

その千冬姉の覇気のある言葉にラウラはすくんでしまった。
言葉は途切れたまま、続きが出て来ない。

「少し見ない間に偉くなったものだな。十五やそこらでもう選ばれ
た人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……………」

ラウラの声が震えてるのがここからでもわかる。恐怖なのだろうか、
多分。

「さて、私は忙しい。寮へ戻れ」

「……………」

声色を戻した千冬姉がせかして、ラウラは黙したまま早足で立ち去っていった。

「ふう……………で、その男子、盗み聞きか？ 異常性癖は関心せんぞ？」

やっぱりバレてたか。つか異常性癖って！

「なんでそうなるんだよ、千冬姉」

「学校では織斑先生と呼ばんか馬鹿者」

「…………ラウラ・ボーデヴィツヒ。千冬姉がドイツに行った時の生徒なんだろ？自分を慕ってくれる生徒に、あの態度はないんじゃないか？」

「…………聞いたのか。…………人の事より己のことを気にした方が良いのではないか？なあ劣等生」

「うぐっ…………痛い所を」

「ふん、このままでは月末のトーナメントで初戦敗退だぞ？寮に戻り予習復習に励め」

「はいはい」

初戦敗退……確かに今のままじゃ負けちゃうな。鈴やセシリアになんて手も足も出せずにやられちゃうし……

「…………織斑」

「ん？」

「…………いや、なんでもない」

「?…………じゃあ行くぜ？」

「ああ、勤勉さを忘れるなよ？」

「あいよ」

夕日が落ち始め、空に黒が現れ始めた頃、俺と千冬姉は互いに背中を向け歩き始めた。

すっかり日も落ちた頃、俺は寮の自室に戻っていた。

自室と言ってもシャルルと一緒にのだが。

「ただいま」。シャルル、居るか？」

部屋に入ると同時にシャルルを呼ぶ。千冬姉との会話から部屋に来るまで、俺は新しい技の研究（妄想）をしていた。しかし特にこれと言った物が浮かび上がらず、俺以上に俺の癖からなにやらを理解しているシャルルに指示を仰ごうとしたからだ。

返事がない。まだ風呂か？そう言えばシャワーの音がする。今日はやけに長いな、いつもは鳥の行水並みに早いのに。

あ、そっか。ボディークリームが切れてたんだっけか、シャルルは慌ててるに違いない。

「シャルル、ボディークリーム無いだろ？昨日買って来てたの忘れてたぜ」

今更だが、寮の各部屋にはバスルームがある。浴槽のないシャワーームだ。

シャワールームは洗面所兼脱衣所とドアで区切られている。
そして洗面所とシャワールームを隔てるバスルーム特有の曇りガラ
スのドア。

俺はボディークリームを届けるためにその曇りガラスをスライドさせ
た。

「い、一夏？……ありがとう、洗面所に置いておい……て……」

シャア……

シャワーの音がやけに大きく聞こえる。

「え……シャ……ルル？」

「うっ、うわぁー！？」

顔を赤くし、すぐさま膨らんだ胸と股を腕と手で隠すシャルル。

『膨らんだ』……？

シャワーのためかほどいた金髪は長く、腰はくびれ、形の良いお尻は安産型だろうか。

いや、なに考えてんだ俺。

相手はシャルルだぜ？男のシャルルをまるで女の子を相手にするよ
うな反応するってどうよ？

正常な俺「いや、気づけって混乱した俺」

混乱した俺「何を気づけって言うんだいm y プラジャー」

正常な俺「混乱し過ぎだバカ。m y プラジャーだろうが」

混乱した俺「H A H A H A H A H A H A H A H A！まさかシャルルが男
の娘だったなんて！」

正常な俺「現実をみるバカ野郎！おっぱいだおっぱい！千春のと比較
べたら自己主張は小さいが、れっきとした女の子のおっぱいだ！つ
か普通の視点でみたら十二分に巨乳なレベルのおっぱいだぞ」

混乱した俺「まあ千春のあれは卑怯だよ」

正常（？）な俺「確かにな。一男だけを殺す兵器かよ！？《ビルギ
ット》って感じに狡いよな」

混乱から回復した俺「狡い狡い。……………さて、それらを踏まえた
結果、目の前にたってるボンツキュツボンツなシャルル似の女の子
は？」

正常な俺「シャルルだろ」

回復した俺「双子の妹説は？姉でも可」

正常な俺「ないだろ」

回復した俺「ですよー。……つまり、」

バスルームにいたのは……女体化してしまったシャルルだった。

正常な俺「違っただろ!？」

stage45 『シャワー・イン・レディ』（後書き）

盗み聞きから鉢合わせへの流れはアニメからアイデアを借りました。この流れは余分な物を省けるので楽でいいですね。アニメ的にも引きが作りやすい。

さてさて皆さんがシャルルの裸を幻視した所で続きです。生殺し？……ふふ、この程度、一夏の鋼の精神なら余裕で耐えられるくらいの生殺しです（笑）

前回のシリアスどこ行った（笑）

では感想待ってまゝす！

「あ、上がったよ……」

「お、おう」

シャワールームから髪をほどいたシャルルが現れた。服装はシャープなラインが格好いいスポーツジャージ。……のだが、女の子だと言うことがバレてしまったのだろうか、胸を隠すための特別製コルセットをしていない。その上で身体のラインがくつきりと浮かぶ服装をしているものだから、胸があることが思いっきりわかってしまう服装になってしまってる。

やはり、胸がある。

おっぱいが、そこにある。

「えつとだな……単刀直入に聞こう、シャルル」

「!……」

シャルルは自分のベットに腰かけて俺と向かい合い、俺から声をかけるとびくつと身を震わせた。

あゝあ、緊張しちゃって。仕方ない、シャルルの緊張を解^{ほぐ}すため、敢えて汚名を被るか。

「シャルルのスリーサイズって、いくつなんだ？」

変態と言う、ね。

「え？」

「いや、だからさ。シャルルって女の子なんだろ？実は」

「う、うん……今まで……騙してて……ごめ……」

「いやいや、千春と比べたらアレだが、中々のボンツキュツボンツ……だな、胸はまだ箒やセシリアに劣るが、総合的なパラメーターなら千春につぐ第二位だ！」

「……え？……」

「で、だ。幾つ……なんだ!？」

「な、なんでそんな事……聞くの？」

「そりやお前……俺が俺である事を確かめるためだ」

「ど、どどういう意味!？」

「いや、待てよ……シャルルって女の子なんだよな？」

「う、うん……今まで……騙してて……ごめ……」

「俺、シャルルのお尻見たよな？」

「え、……あ、あああ……っ」

シャルルの顔が真っ赤になる。さて、あともう一頑張りだけ。

「ぷるっぷるだったな……もうちょっと見ておくんだっ」

「いつ、一夏のえっち……！」

「なっ！？えっちって……せめて紳士と」

「なんでこの会話で紳士って呼べるの！？」

「ですよー……よし」

「な、何がよしの！？」

「そろそろ緊張も解れたろ？……よかつたら話してくれよ、シャルルが性別を偽ってまでここに来た理由を、さ」

「あ……一夏」

シャルルが申し訳なさそうな顔をする。

「『よかったら』だからな？無理して教えてくれなくていい。別にバラしたりしないからさ」

「……はあ、一夏って以外と細やかなんだね」

「俺は何時だつて細やかだぜ？」

「ふふ、ISを使うときはいつも大雑把なのにね？」

「うぐ、痛い所を……っ」

「……ありがとう、一夏。お陰で気分が良くなったよ。……じゃあ……話すね？」

「良いのか？」

「うん。一夏には知っていて欲しい……かな」

「わかった」

短く、かつ即座に頷いた。打ち明けようとするシャルルに不安さを与えないためだ。

「何から話そうかな、……僕が男のフリなんかしてたのは実家の方からそうしろって言われたからなんだ」

「実家ってというと……デュノア社の」

「そう。僕の父がその社長。その人からの直接の命令なんだ」

……？どうにも妙な違和感を感じた。特に実家の話を始めてから、シャルルの顔が顕著けんちょに曇りだした。

「命令つて……親だろ？なんで自分の娘にそんな」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

……絶句。俺だって普通に世間を知る十五歳だ。『愛人の子』という言葉の意味がわからないほど世間に疎くもなければ純情でもない。

「引き取られたのが三年前。ちょうどお母さんが病気で亡くなったときにね、父の部下がやって来たの。それで色々と検査をする過程でIS適応値が高い事がわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは、おそらくはいいたくないであろう話をそれでも健気に喋ってくれた。

だから俺は、ただ黙ってしっかりと話を聞くことに専念した。

「父にあつたのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人にね？殴られちゃってさ。『泥簿猫の娘が！』って。参るよね、母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにな」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだったが、その声は乾いていてちつとも笑つてはいない。俺も、流石に愛想笑いは返せない。

そしてそれはシャルルも望んでいないだろう。
沸々とわいてきた訳のわからない怒りを堪えようと俺は拳をきつく握った。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？だってデュノア社って量産機ISのシェアが第三位なんだろ？」

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ISの開発って言うのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があつてやっと成り立っているところばかりだよ。それでフランスは欧州連合（あひっせう）の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

そう言えばセシリアや千春が言ってたっけ、今、欧州では次期主力機の選定中だとか。セシリアがIS学園に来たのも実稼働データを取るためだ。……おそらくドイツからラウラが転入した来たのもその辺りの事情が絡んでいるのだろう。
ちなみに千春は欧州連合からの『イグニッション・プラン』参加の要請を無視してるらしい。『グラデーション』が次期主力機になんて祭り上げられたら、その設計者の千春は『国』に拘束されるかららしい。

「話を戻すね？それでデュノア社でも第三世代型を開発してたんだ

けど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、中々形にならなかったんだ。それで、政府からの通達で予算を大幅カット、それで次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

「なんとなく話はわかった。けど、それがどおしてシャルルの男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔、それに」

シャルルは俺から視線を逸らし、どこか苛立ちを含んだ声で続けた。

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね」

「それは……つまり、白式のデータを」

「そう、盗んでこいって言われてるんだよ。僕は、あのひとにね」

なんだ、これは。話を聞く限り、その父親はただ一方的にシャルルを利用しているだけだろう。たまたまIS適応があった、それなら使おう、と、それくらいにしか思っていないはずだ。

なんだよ、それは。

親だろ？親なのに…なんで自分の子供が、自分の親を他人行儀に見るような扱いしてんだよ。

「とまあ、そんなとかるかな。でも一夏にバレちゃったし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕に取ってはどうでも良いことかな」

「……………」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、……本当に、今までウソをついててゴメンね」

深々と頭を下げるシャルルを見て、俺は思わず問うた。

「それでいいのかよ」

「え……………」

「それでいいのかって聞いてんだ！いいはずがないだろう！？親がなんだ、親だからってだけで、自分の子供の自由を奪う権利があるのかよ！んな事おかしいだろうが！！」

「い、一夏……………」

シャルルが戸惑いと怯えの表情をしている。けど、…嗚呼、畜生言葉が止まらない、何より感情が止めどない。

「親がいなけりや子は生まれぬ。そりやそうだろよ、けどなあ、だからって親が子供に何してもいいなんて、そんな馬鹿な事があったたまるか！生き方を選ぶ権利は子供にだってあるはずだ、それを…親なんか邪魔されるいわれなんてないはずだ！…親だつたら…親だつたら！、子供の生き方を見てやれよつ！祝福してやれよつ！！なんで…なんでつ！」

俺と千冬姉を…捨てたんだよ。

そう、言っていて気づいた。…これはきつと、シャルルの事を言ってるんじゃない。おそらく自分の事を言ってるんだ。

俺が生まれて間もなく姿を消した両親。

まだ子供だった時に千冬姉に、『なんで僕にはお母さんとお父さんがいないの？』と聞いた時の千冬姉の顔が思い浮かぶ。

そして、千冬姉は俺のため『大人』であり続けた。まだ、当時今の俺よりも年が下だった千冬姉…千冬姉の『子供』を奪ったのは俺であり蒸発した両親だったのだ。

そう、俺は二度も千冬姉の人生を狂わせたのだ。

「ど、どうしたの？ 一夏、変だよ？」

「……悪い、熱くなっちまった」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「多分知ってるだろ？俺は 俺と千冬姉は両親に捨てられたんだ」

「あ……」

おそらく俺と接触する前に資料で知ってるだろう『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだ。親なんかは今さら会いたいとも思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうって…時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生を下ろされたよくて牢屋とかじゃないかな？」

「それで良いのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないんだから、仕方ないよ」

そう言ったシャルルの微笑みには、絶望すら通りすぎた諦観ていかんがそこにあつた。

「……だったらここにいれば良いさ」

「え？……」

「学園特記事項第二十一、本学園における生徒はその在学中においてはありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

そう、これは使える。そう思うと途端に頭が冷えて来て、暗記していたテキストの文章が気持ち悪いくらいすらすらと言えた。

「つまりは、だ。この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だろ？それだけ時間があればなんとかなる方法だって見つけれさ。別に急ぐ必要だつてないだろ？」

「……よく覚えられたね一夏。特記事項って五十五個もあるのに」

「勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。……ふふっ」

やっとシャルルが笑った。その表情には屈託がなく、歳相応しい少女の笑みだった。

「そうだ、千春に相談してみようぜ。千春だったら秘密にしてくれるからさ」

「え？…千春？」

「ああ、千春つてば色々コネがあるみたいだしさ、ちゃんと話したら協力してくれるさ」

また千春を巻き込んでしまつかもしれない。しかし、千春ならなんとかしてくれるだろう、なんて甘い考えで俺は提案した。後々後悔するのだが、この時の俺は最良の策を出したと息を巻いて喜んだ。

「……千春は、多分ダメだと思うな」

「は？…えっと、なんでだ？」

「一夏は千春の……ううん、『ブリュッセル』の裏の顔を知らないんだよな？」

「裏の顔つて……物騒だな」

「実際少し物騒だよ。世界最高の大富豪『ブリュッセル』。やろうと思えば、世界を裏から操る事も可能なんだ」

裏から操る…なんだか悪役みたいだな。

「アイスランドだって、実質の最高権力者は『ブリュッセル』だ。世界各国……特にこの日本は『ブリュッセル』の言葉には無下に逆

「出来ない。……そう言う家なんだよ？そんな家の出の千春が僕なんかを……」

「家は家だ。シャルルは、千春がお前を見捨てるようなやつに見えるのかよ！……」

「……少し、そう思ってる。千春は僕のラファールのデータを抜き取ってた。しかも、『データを抜き取った』と言う痕跡をわざと残してね。……今思えば千春には最初からバレてたんだろっね……」

「絶対に大丈夫だ。千春は誰かを見捨てるような奴じゃない」

自分でも少しムキになってるのがわかる。

「……わかった。一夏を信じるよ」

「シャルル……ああ、任せとけシャルル」

俺は力強く頷いた。

コンコン。

「一夏さん、いらっしやいますか？よろしければ食堂まで一緒に行きませんか？」

「「!？」」

突然のノックと呼び声に俺とシャルルは二人揃って身をすくませる。

「一夏さん？入りますわよ」

まずい。まずいまずい。それはとてもまずい。今のシャルルの姿を見たらどんなに鈍い奴でも女だとわかってしまうだろう。(つまりは一夏でもわかる)

「ど、どうしよう一夏？」

「何かないか何かないか」

俺はどこかの青狸の困った時の常套句を呟きながら辺りを見回して思考をフル回転させる。

「と、とりあえず身を潜めて」

「だあつ！なんでクローゼットなんだよっ。ベッドベッド！布団の
中で大丈夫だ！」

「あ、ああつ、そっか！」

ばたばたとあわただしく動く俺&シャルル。
ガチャ。ドアが
開く音がした。

ヤバイ、間に合わん！

「待ったセシリア！、い、今シャルルが着替えてんだ！」

咄嗟に出た言葉、我ながら秀逸だと思つぜ。

「あ、あら。それは仕方ないですわね」

何が仕方ないのかわからんが、どうやら部屋に入るのを諦めてくれたらしい。

「シャルル、今のうちに着替えるっ」

「う、うんっ！」

「ば、バカっ、ここで着替えるなよっ！」

「う、ゴメンー夏っ」

ISスーツと制服を持ってシャルルが脱衣所に向かう。

前途多難、だな。

ドアから出た俺とシャルルを待っていたのは、

「な・ぜ、食堂で集合のはずなのにお前がここにいる？」

「篝さんこそ、ここにいらっしやるのかしら？」

互いに睨み合う修羅二人。

この後、二人に両腕を絡め取られ、エスコートと言う名の、衆人環視の中の羞恥プレイを強制され、食堂に着いたときに身動き出来ない俺の顔に、鈴が飛び蹴りを放ち意識を掠め取られた事をここに記載する。

ああ、不幸だ。

stage 46 『デユノア』（後書き）

皆様お待たせしました（待っていてくれていれば嬉しい限りです）
二泊三日の旅行に出掛けてました。仕事メインで（笑）温泉地に行
ったのに温泉に浸かったの三回だけとかwww……………

さて、気をとりなおして、今回は問答無用のシャル回！。こんなこ
とになったら絶対一夏に惚れるって。

……………さて、シャルロッツ党の皆さんを敵に回すような発言になり
かねませんが、
当方あまりシャルが好きじゃないです。書いてて理解しました。
なのでシャル関係のイベントは原作沿いになりそうです。（原作で
優遇されてるから帳尻が合うかもです）

シャルだけでなく、一夏と のこんなイベントが見てみたい！と
言うお方がいらっしゃったら当方にアイデアを授けて欲しいです。

私の情熱に炎を灯したアイデアは確実に起こるでしょう（笑）

では感想待ってます。

stage47 『騎士の誓いと死闘のゴング』（前書き）

「よっ、一夏」

「ち、千春？」

月曜の朝、部屋を出た俺とシャルルに千春が声を掛けてきた。

「お、おはよう千春」

「ああ、おはようシャルル。昨日は悪い事したな、折角尋ねて来てくれたのによ」

「気にしないでくれ千春。それより身体は大丈夫か？」

「ん、一日休んだら治ったよ」

昨日の日曜日、俺たちは早速千春に力を借りようと千春の部屋を尋ねたのだが、千春は体調を崩していたのだ。同室の三浦さん（stage3でみうつちと呼ばれてた文系の女子）が看病していたらしい。

「で、用ってなんだったんだ？」

「ああ、それなんだが……少し時間を取らせちゃっけど、いいか？」

「構わないさ。シャルルも？」

「シャルルの事で、相談があるんだ」

そこで、千春の目が細くなり、千春はシャルルを値踏みするように見た。

「……よし、ご飯の前に済ませちゃおうか」

千春が首のチョーカーに触れ、ISを部分展開した。その装甲色は深緑。

「千春？」

「盗聴防止。辺りに気をつけて話せばバレないぜ？」

千春は展開したISの腕部をコツコツと突けばニヤリと笑った。

「で？相談ってなんだ？新型の設計図か？」

「いやいや、違う違う。実はな、シャルルは」

「一夏、僕が自分で話すよ」

「シャルル？」

「僕自身が話さないとダメな事だから……」

「……わかった」

シャルルがやけに真剣な表情で俺を制した。

「千春、実は……僕は女なんだ」

そうして、シャルルは自分自身の事を話し始めた。

「……つまりは、だ。……シャルル、君は自分と自分の身内とのゴタゴタや、これから起こるであろう罰から逃れたいから………私を………いいえ、『ブリュッセル』を利用しようか？」

シャルルが話し終わった後、間を置いて千春がシャルルに聞いたです。

その表情はとても、冷たかった。

「っ………うん………間違っ………ない」

「そっか。……で？」

「……え？」

「私にメリットは有るの？」

「……」

「私は別に構わないわ。オーケー、圧力でもなんでもかけてあげる。……だけどねシャルル、……私は貴女の事も『別に構わない』のよ。寧ろ、一夏を利用してたんだもの、会社ごと潰してやるっかと私は今思ってる」

「……千春っ」

「ゴメン、今は一夏は話さないで。……で？シャルル、貴女を助ける事が、私のメリットになるの？」

千春はどこまでも冷たく、言い放った。

「……なら……ない」

「ん。その通り。別にデュノア社なんか興味無いし、シャルルなんてもっと興味ない。助けても貴女から私に出来るような事なんて、何も無いんだもん」

「……」

シャルルはうつ向きで黙り込んでしまった。恐怖を覚えたように肩を小刻みに震わしながら。

世界最高の大富豪『ブリュッセル』全世界の国に莫大な『貸し』を持つ家。

例えば、ISが登場する以前大赤字だった日本に、道楽と趣味のため、黒字になるほどの資金を私的に貸し与えたりなど。

各国に赴けば国の主要人物が頭を下げて迎えるほどの家なのだ。それほどの大きな相手に『興味がない』と言われているのだ。

「一夏、少し離れてて貰っていい？二人で話したいの」

「二人でって……千春っ」

「安心して、一夏。シャルルは助けてあげる。ただ、私からの『お願い事』を言うだけだから」

「……………わかった」

そう言つて、俺は二人の会話が聞こえるか否かくらいの位置に立ち、壁にもたれ掛かった。

「……そう、貴女が私にして欲しい事なんてない。けど、私が貴女にして欲しいことが一つだけある。それを交換条件に、私……『ブリュッセル』は貴女と言う存在を庇護しましょう」

「交換……条件？」

「そう。……私にとって……何よりも大切な事……」

「それは……何なの？」

千春はクス、と一度笑ってから答えた。

「シャルルには……一夏を守る騎士シュヴァリエであって欲しい」

「え……千春……？」

「……一夏はすぐにでも強くなって遠くに行っちゃうだろうから。私なんかより遠くに、ね。だからシャルル見たいな強い人に一夏を守って貰いたい。ダメ……かな？」

「うん。……僕も一夏の為に、一夏を守るために戦いたかったから」

「そっか、お願いするまでもなかったんだ。安心した」

「うん。……だけど、僕は誓うよ」

シャルルは膝を付き、

「例え一夏が世界中の敵になっても、僕だけは一夏の味方であり続ける。それが僕の騎士道だ」

騎士の誓いを誓った。

その誓いは、かつて千春が誓ったものと同じとよく似ていて、それでいて千春が誓った思いよりも眩しい物、と千春は思った。

Stage 47 『騎士の誓いと死闘のゴング』

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

千春とシャルル、そして俺。三人連れだって教室に向かっていた俺達は廊下にまで聞こえた声に目をしばたたかせた。

「なんだ？」

「さあ?」

「……何か面白い事が起こってる!？」

ピキーンと目を輝かせた千春、どこからともなく、一人一人が入れるくらいの段ボールを取りだし、それを被り教室に入って行った。

なんで段ボール？

「本当だつてば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき」

「俺がどうしたつて?」

千春の後に続き教室に入り、話題の中心らしき田島さんが俺の名前

を言ったので、俺はちょっとした好奇心から聞いてみた……みたんだが……

「「「 きゃあああつ！！？ 「「「

な、なんなんだ？クラスに入って普通に声をかけたつもりだったんだが、返ってきたのは取り乱した女子達の悲鳴だった。ここからはしたないぞ。

「で、何の話だったんだ？俺の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴とセシリアはあははうふふと言いながら話を逸らそうとする。なんだよ、聞いたらずいことなのか？アレだ、女子達の中だけで伝えられる伝説とかか？

死神の話とかならちよつと聞いた事あるぞ？

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！わたくしも自分の席につきませんと」

どこかよそよそしい様子で二人はその場を離れていく。

その流れにのってか、何人が集まっていた他の女子達も同じようにそそくさと自分のクラス、席へと戻っていった。

「……なんなんだ？」

「さあ……………」

ガサゴソ、ガコツ

「待たせたなっ！」

「HRを行う、自分の席につけブリュッセル」

スッパーンッ！

段ボールを放り投げて立ち上がった千春に千冬姉の出席簿が降り下ろされた。

(どうしてこうなった!?)

教室の窓側列で表面上平静を装えず、頭を抱え机に突っ伏していた
篤は、心の中で叫んでいた。

近頃何か、月末の学年別トーナメントに関する噂が流れているのは
知っていた。しかし問題はその内容だった! その内容とは……

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』。

(そ、それは私と一夏だけの話だろう!?)

一夏が言い触らしたとは思えないので、どこからか情報が漏れたの
だろう。

今にして思えば、あの時の声はやや大きかったかもしれない。それ
でも二人だけの秘密と言うことで安心していただけ面もあった。

「……………」

しかし、実際にはもう殆どの女子生徒が知ることになっているらし
く、さつきも教室にやって来た上級生が『学年が違う違う優勝者は
どうするのか』『授賞式での発表は可能か』などとクラスの情報通
に訊きに來ていた。

(まずい、これはひじょーにまずい……)

もちろん自分以外の女子が一夏と付き合うことにも激しい抵抗感が
あるのはいうまでもない。

篤は自分が一夏と付き合い出した時もあったと言つ間に学園中に広ま
つてしまつたのである。事に頭を悩ませていた。

正直に言おう、篤は『恋人との二人だけの秘密の関係』と言つもの
に年相応 + の魅力を感じているし、夢想も抱いている。

例えば、だ。

教室でちよつと視線がぶつかり、にこりと微笑み返してくれる一夏。

更には二人だけの秘密のサインなんてのも良いと思つてる。

右目でウインク二回は『今日は寝かせないぜ?』のサインとか。

「うへへへ………」

いつしか篤は、学年別トーナメントの事など忘れて、一夏との新婚
初夜の妄想に入り浸っていた。

まだ純な篤の性知識は乏しく、一番えっちな行為が耳を舐められる
と信じる篤。

新婚初夜の妄想も、ベッドの中で抱き合うだけと健全なものだった。

「「あ」「

セシリア・オルコットと鳳・鈴音ファン・リンインの二人は、揃って間の抜けた声を出してしまった。

時間は放課後、場所は第三アリーナ。人はまだ鈴とセシリアだけだった。

「奇遇じゃない。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも同じですわ。本当に奇遇ですわねえ」

二人の間に見えない火花が散る。どうやら互いに狙ってるのは優勝いちがのようらしい。

「丁度良い機会だし、この前の実習の事も含めてどっちが上か白黒ハッキリさせとくつてのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらがより強く、より優雅であるか、……この場所ではつきりさせましようではありませんか」

二人ともメインウェポンを呼び出すと、それを構え対峙した。

纏うは『絶対強者』の覇気。その一挙手一投足が相手の警戒を強めさせ、そして互いにそれが挑発になる。視線から呼吸までもが相手にプレッシャーを与える。

鈴が双天牙月を連結させ、セシリアが『スターライトmk?』を構え……

突如飛来してきた超音速の砲弾を迎撃した。

「なに？どういつつもりよアンタ。いきなりぶっ飛ばして来て横槍かますなんて……いい度胸じゃない」

「決闘の邪魔とはとことん不粋ですわね。まずは貴女から風穴を開けてあげましょうか？ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

鈴は双天牙月で払うように、セシリアは『スターライトmk?』で砲弾の射線をずらし、横をチラとも見ずに防いで見せた。

超音速で放たれた二つの砲弾がやかましい音を立てて地面に落ちた。

「中国の『甲籠』^{メイロン}にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……………ふん、搭乗者のせいかデータで見たときの方が幾分か強そうではあったな」

漆黒の機体、『シユヴァルツェア・レーゲン』そしてその搭乗者。ラウラ・ボーデヴィツヒが腕を組んでつまらなそうに言葉を吐き捨てた。

「なに？アンタやんの？わざわざドイツくんんだりからやって来てリソチされたいなんて大したマゾヒストっぷりね。それともあれ？千冬さんのいる学校だからってカツコ付けたいって？ガキじゃないんだから大人しくじゃがいも畑で働いてなさいよ」

「まあまあ鈴さん、こちらの方はどうも言葉が伝わってない様子。あまりいじめるのはかわいそうですわよ？」

ラウラの全てを見下すかのような目付きに並々ならぬ不快感を二人はいだきながら、どうにかその怒りの捌け口を言葉に見いだそうとしていたが……………それは全くの無意味に終わる。

「三人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たため者が専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数しか能のない国と、古さだけが取り柄の国、ここにはいない『一代替え品』は特にな」

二人の雰囲気が変わる。180°、全く別の雰囲気へと。

「セシリア、あたし殺っていい？半分に叩ききるだけだからさ」

「わたくしから先でよいでしょう？頭を吹き飛ばせば私の用件は済みますし」

鈴とセシリアは装備の最終安全装置を外した。

競技としてではなく、戦闘を行うからだ。

「はっ、二人がかりで来たらどうだ？一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬を取り合うメス共にこの私が負けるものか。そう、憎き妖精の羽をむしり取り、あの織斑一夏を処断するより先に貴様らを下し、私の力を見せてやろう」

「今… なんつった？つくづく…度しがたいバカね、アンタ
ッ！！」

「この場にはいない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生
として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬように今こ
こで叩いておきましょう」

得物を握りしめる手に力を込める二人。それを冷ややかな視線で流
すと、ラウラはわずかに両手を広げ、自分側に向けて振る。

「とつとと来い、貴様ら相手に赴いてやるのも面倒だ」

「舐めんじゃないわよッ！！」

「撃ち貫きますわ!!」

赤と青、そして黒の戦いが始まる。

stage47 『騎士の誓いと死闘のゴング』（後書き）

皆さんの案、中々びびっと来ました。

半分くらい（特に買い物や水着イベ）は書けるだろうと思うので頑張ろうと思います。
それにしても皆さん一夏と千春との絡みを御所望な様子、千春が人氣で当方嬉しいです。

ところで、本文でラウラが量産機に負ける程度の力量、と言っていますが。

このSS内では、ラウラとその他代表候補生の力量の差はそれほどないです。

実際ラウラが真耶と戦ったら同じ結果になりますし。
秒殺&地面へたたきつけ。

と言うより、同じ機体ならあの生徒会長すら圧倒しますからうちのやまやーは（笑）

千冬さん？……………多分押さえ込むくらいなら……………（笑）

感想待つてまーす

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。確か今日使えたアリーナは」

「第三アリーナだ。千春が先に行っていてくれと言っていたぞ？」

「「わあ!？」」

廊下でシャルルと並んで歩いていたのだが、そこにいきなり予想外の声飛び込んできて俺達は揃って声を上げた。

その一緒ぶりが気になったのか、いつの間にか横に並んでいた三人めこと等は眉をひそめる。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりなことではびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

折り目正しく頭を下げるシャルルに流石の箒も氣勢を削がれてしま
う。

そして謝らせてしまったことを恥じるかのように、「ほんと話を逸
らす咳払いをした。

「ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ？。今日は使用人数が少ないと千春から聞いている。早くにつけば模擬戦も出来るだろう」
それは非常に助かる。なんだかんだでISの実力は実稼働時間に正比例するのだから、わずかな時間でも実践同様の訓練を行えるのは有り難い。

「……ん？」

「どうして千春は遅れるんだ？なんか用事か？」

「それなのだが、どうやらISの受領らしい」

「え…：装備じゃなくて…：ISの！？」

「私も、詳しい事はわからんがな。………ん？」

俺達がアリーナに向かっていると、そこに近づくとつれ慌ただしい様子が伝わってくる。さつきから廊下を走っている生徒も多い。どうやら騒ぎは第三アリーナで起こっているようだった。

「なんかあんのか？」

「なにかあったのかな？こっちで先に様子を見ていく？」

そうやってシャルルは観客席へのゲートを指す。確かに普通にピットへ行くより早く様子を見ることが出来ると思って、俺は頷いた。

「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。でもそれにしては様子が

「

ドゴオン！

突然の爆発音に驚いて視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出してくる。

「鈴！セシリア！」

特殊なエネルギーシールドで隔離されたステージからこちらに爆発が及ぶことはないが、同時にこちら側からの声も聞こえない。

二人は苦い表情のまま、爆発の中心点へと視線を向ける。

そこにいたのは漆黒のIS『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラの姿だった。

「終わりか？ならば… 私の番だ」

ニヤリ、と口元を大きくつり上げたラウラ。その表情には余裕が見て取れた。

「こんのおおおっ！…！」

連結した双天牙月をまるでブーメランのように投擲する。それはあらゆる方向に飛んで行った。

「何を可笑しな事をしてらっしゃいますの!？」

特殊レーザースナイパーライフル『スターライトmk?』を構え、ラウラを狙撃するセシリア。その頬に汗が伝う。

「うっさいわよ!気が散るじゃない!」

衝撃砲をばら蒔くように連射しながら鈴は次の二式目の双天牙月を連結する。

「この程度の練度で代表候補生だと?全く、同じ代表候補生として見られるのが憤慨だな」

「はんっ!そのこっぱづかしい眼帯をもう片方にも付けさせてやるわ!」

「やってみろ、この私に対して」

ジャケット、と鈴のIS『甲龍^{シエンロン}』の両肩に浮かぶ非固定部位。第三世代型空間圧作用兵器・衝撃砲『龍砲』の最大出力を放つ。訓練機程度の装甲ならば一撃で吹き飛ばせるであろう一撃。牽制ではなく、本気で狙った衝撃砲の一撃が、右手をかざした『シユヴァルツェア・レーゲン』に意図も容易く止められる。

空気を圧縮して放たれた砲弾は、圧縮していた楔をほどかれ衝撃波になって四散する。

「無駄だ、このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな
「ここまで相性が悪いだなんて……なら、これならどうよっ！」

衝撃砲を止められた鈴は舌打ちと共に連結した双天月牙をぶんぶん
と振り回し、回転力を付けて投擲する。今度はラウラ目掛け真っ直
ぐ飛んで行き、……。

ガキインツッ!!

先程投擲していた一式目の双天月牙とぶつかり合い弾けるように互
いに飛んで行った。

「何を遊んでいますの鈴さん!？」

「うるっさいわね!アンタは黙って狙撃してなさいよ!」

「もう見ていられませんわ!行きなさい、『ブルー・ティアーズ』
!」

セシリアが『スターライトmk?』での狙撃ではなくビットでの攻
撃を開始する。

カシュッ、ヒュンヒュンヒュン!

四機のビットがランダムパターンでレーザーを撃ちながらラウラ目
掛け飛来する。

そしてセシリアは、スラスターを噴かし、加速しながらメインウエポンである『スターライトmk?』を『サブマシンガン』へと変える。

銃身がスライドして現れたのは、本来の姿の約半分程の『スターライトmk?』。

サブマシンガンとしては大型だが、近距離ではその高い連射力を発揮する。

ビットのレーザーと、レーザーマシンガンの二つの攻撃で牽制をかけながら攻撃を行う。

千春が考案したビットのランダム射撃により、目標を設定するだけでビットが目標を攻撃してくれる。故にセシリアは最低限の処理をするだけで千春に近いBT兵器の運用が可能になったのだ。

「ふん、理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度で第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアのビットによる視覚外攻撃と精密な射撃を事もなげに避けていくラウラ。

またさっきのように腕を伸ばしたラウラの視線の先には、近くを飛来したビットが、なにか見えないものに捕まって空中でその動きを停止していた。

「動きが止まりましたわね！」

セシリアは、その『スターライトmk?』をスナイパーライフルモードに変更し、ビットを止めるため静止していたラウラへ銃口を向けた。

「止まっているのは貴様もだ」

「なっ!?!」

シュヴァルツエア・レーゲンの両肩に搭載された刃が左右一対で射出され、セシリアのISへと飛翔する。それは本体のブレードとワイヤーで接続されているためか、複雑な軌道を描いてビットの迎撃射撃をくぐり抜け、『スターライトmk?』を捕らえる。

「準BT兵器の『インコム』!?!」

「限られた者しか扱えないならば『ビット』も単一仕様能力と大差ワンオフ・アビリティがない。真の兵器とは汎用性にこそある!」

『スターライトmk?』に絡み付いたブレードワイヤーをラウラが軽く引く、その動作によりワイヤーが高速で巻き戻り、『スターライトmk?』の銃身が簡単に切り裂かれた。

「きゃあああっ!?!」

『スターライトmk?』のジェネレーターが爆発し、軽く吹き飛ばされたセシリアの横を通りすぎるように鈴が肉薄する。

「貰ったわよ!?!」

三式目の双天月牙、二振りの刃を構えて突撃する。

ワイヤーブレードを収納仕切った瞬間に双天月牙が振り下ろされる。

ギィィンツッ！！

刃と刃の衝撃音。振り下ろされた二振りの刃を、ラウラは片腕のプラズマ手刀により防ぎきる。

「捕らえた……『停止結界』！！」

鈴の眼前に突き出された腕から、視覚出来ない無形の鎖が放たれる。

双天月牙を振り下ろした姿のまま、指一つ動かせなくなる。

「終幕だ。これで」

「あたしの、勝ちね？」

「……？……しまったっ！！？」

勝利を確信したラウラに、鈴は勝利の確認をとった。

その言葉と勝ち誇った表情を見て、ようやく気づきラウラは戦慄した。

ブオンブオンブオンブオンブオンブオンブオンッ！！

轟音を響かせながら互いに引き合うように、『中心点』にいるラウラへ飛来する二式の双天月牙！

あらぬ方向へ飛ばしたのも、一投目の双天月牙にぶつけたのも、連結せずに切りかかったのも、この時のため。この一撃のため。

左右からの同時攻撃、そしてそれを避けさせず、防がせないために本体である鈴自身が囷となる！！

（貰ったわよ！！）

鈴は心の中でラウラにざまあ見ろ、と叫んだ。

「それでも騒ぐと思ったか？」

右肩のレールカノンを至近距離の鈴にぶちかまし、『AIC』を解

いて両腕のプラズマ手刀で飛来する双天月牙を防ぎ止める。

「ぐぐううっ!!」

レールカノンの一撃をまともにくらい吹き飛ばされた鈴、ISの装甲の各所に傷が見える。

「はっ、やはりこの私とシュヴァルツエア・レーゲンこそが最強! ……出来ない第三世代型共とは訳が違う!」

「こんっのおおおっ!!」

上手く態勢を整えた鈴にラウラが追従するかにように迫る。

全身から六機のワイヤーブレードを射出しながらラウラがプラズマ手刀で猛攻撃を仕掛ける。

いくら鈴のISが格闘戦に優れていたとしても、これら全てを防ぐのは不可能だ。

やがて、片方の衝撃砲が破壊された。

「くっ!」

「甘いな。この状況下でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

その言葉通り、衝撃砲はその弾丸を射出する瞬間にラウラのレールカノンに貫かれ爆散する。

「あ………がつ!?!」

肩のアーマーを吹き飛ばされて大きく体勢を崩した鈴に、ラウラが
プラズマ手刀を振り下ろす。

「させませんわ!」

間一髪のところでは鈴とラウラの間に割り入ったセシリアは、『イン
ターセプト』を使い、必殺の一撃を逸らす。

それと同時にウェイト・アーマーに装着された弾頭型ビットをラウ
ラへ向け射出させた。

ドカアアアアッ!

半ば自殺行為ですらある接近戦でのミサイル攻撃。その爆発は鈴と
セシリアも巻き込み、二人は地面へとたたきつけられる。

「無茶するわね、アンタ……………」

「苦情は後で。けれど、これならば確実にダメージが」

セシリアの言葉は途中で止まる。

「終わりか？ならば… 私の番だ」

霧が晴れ、そこに佇んでいたのはラウラだった。至近距離での爆発ですら、ダメージは殆ど効いてなかったかのように宙に浮いている。ラウラは前傾姿勢になると、『イグニッション・ブースト瞬時加速』により高速で鈴に接近、鈴を蹴り飛ばし、セシリアに至近距離からの砲撃を当てる。

「あれはっ、『瞬時加速』!？」

「千冬姉の教え子だもんな、出来て当然だよなっ……………」

箒がラウラの『瞬時加速』を見て叫ぶ。俺の十八番、『瞬時加速』は千冬姉が最初に編み出した技法だ。千冬姉を慕うラウラなら確実に取得してるだろうと思っただけ……………。

ラウラはさらにワイヤーブレードを飛ばし、二人の体に巻き付けさせて拘束し、ラウラの元へ手繰り寄せさせる。そこからはただの一方的な暴虐が始まった。

二人のその腕に、その脚に、その身体に、ラウラの拳や蹴りが叩き込まれる。

シールドエネルギーはあつというまに減って機体維持警告域を越え、デットゾーン操縦者生命危険域へと到達する。

「ああつ！オルコットさんと鳳さんがっ！」

シャルルがその惨状を見て悲痛な声で叫ぶ。当然だ。このまま行けば、ダメージが増加しISが強制解除されるだろう。そんなことが起これば冗談ではなく命に関わる。

しかし、ラウラは攻撃の手を止めない。ただ淡々と鈴とセシリアを殴り、蹴り、ISアーマーを破壊していく。

鈴とセシリアは大きな怪我でもしたのか、ぐったりとした様子でそれをただ受けていた。

ラウラの無表情な顔に、愉悦の笑みが確かに見えた。

『やめろおおおおおおおおおおおッッッ!!!!!!!!!!』

気付いた時には俺は白式を展開し、アリーナに張り巡らされているエネルギーシールドを『零落白夜』を発動した雪片で切り裂いていた。

オープンチャンネル
開放回線で咆哮した一夏は、ワンオフ・セカンドアビリティ 疾風迅雷』を発動、サブ・ライト・ペロシテイ 最大稼働、亜光速で飛翔しセシリアと鈴を捕らえていたワイヤーを叩き切り、次いでラウラのレールカノンの砲身を切り裂いた。

「なにっ!？」

ラウラが目を見開く。当然だ、俺は叫んだのと『ほぼ同時』にラウラのワイヤーとレールカノンを切り裂き、されでいてラウラの喉元に雪片を突き立てているんだから。

「うっ……っ、一夏……?」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな。……シャルル!二人を頼む!」

「え………あっ、うんっ!」

シャルルが遅れてISを展開し二人を抱き抱えピットへ飛ぶ。

それを確認してから俺は、ラウラを睨み付けた。

「どういうつもりだ、ラウラ・ボーデヴィツヒ。……テメエ今、殺^やろうとしたな？」

『疾風迅雷』と『零落白夜』を解除し、雪片を量子分解する。

「……ふん、さてな。なんなら試してみるか？あの状態のまま続けていたら死ぬか否かを。……もちろんモルモットは貴様だがな、織斑一夏」

「ああ、よくわかったよコノヤロウ……お前には俺を怒る権利もあって、俺も千冬姉の弟である権利もねえことはわかった。………ただけど……ただだよ、お前は……お前はやっぱりいけねえことをした」

嗚呼、これほどの怒りはいつ以来か、自分の醜さを突きつけられたように吐き気がする。

「よくも俺の身内^{ルール}を傷^{やぶり}付けやがって……」

雪片を掴む拳に力を込める。怒りで身体が暴れないようにするためだ。

「だったらどうするのだ？……今ここで殺り合うか？」

「お前との決着は学年別トーナメントで付ける……だろ？千冬姉」

「ああ。模擬戦をやるぶんには構わん。　　が、アリーナのバリ
アーまで破壊される事態になられては教師として黙認しかねる。こ
の戦いの決着は学年別トーナメントまで預からせて貰う」

普段通りスーツ姿の千冬姉はいつの間にか現れていて、俺とラウラ
の合間に立ち宣言する。

「教官がそう仰るなら」

素直に頷いて、ラウラはISの装着状態を解除する。
アーマーが光の粒子となり、弾けて消えた。

「では、学年別トーナメントまでの私闘の一切を禁止する。解散！」

パンツ！と千冬姉が強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く
響いた。

Stage 48 『飛翔・接敵・宣戦布告』（後書き）

お待たせしました。48話です。

鈴の鶴翼三連モドキとか、セシリアの『インコム』発言とかDDDの台詞など少しふざけちゃいました。テヘっ

……あー、えっと……すいませんでした、いろいろ（笑）

コンピューター制御でビット簡略化とかなんではないんだろうと思ってみたりしてセシリアに搭載。原作（二巻時点）より原作キャラが総じて強くなってて不安です。うちの子が目立たないっ！

まあまだ目立たせませんけどね（笑）

そろそろ学年別トーナメントに突入です。

では感想まっくす！

Stage 49 『カウント・ダウン』

「……………」

「……………」

場所は保健室。第三アリーナの一件から一時間が経過していた。ベツドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむっすーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けられなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝ってましたのに」

感謝するかと思えばこれである。いや、まあ感謝されたくてやったわけではないので別にいいが。どちらかと言えば俺が切れて乱入しちまった訳だし。

「いやいや、二人ともたいした怪我がじゃなくてよかったよ。箒が知らせに来てくれた時は驚いたんだから」

煤やオイルで汚れたつなぎを腰から上をはだけ、上はタンクトップ一枚と整備士見たいな服装の千春が苦笑ぎみに笑う。

タンクトップを湿らす汗のせいで、タンクトップが胸にピチピチに張り付き、大きく、それでいて美しい胸の形を遺憾なく、問答無用

に発揮する。

ちくせう、この飾りつけなさが逆にエロいぜ千春!!

「こんなの、怪我のうちに入らな　　いたたっ!」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味で　　つう
うっ!」

……バカなんだろうか。

「バカつてなによバカつて!バカ!」

「一夏さんこそ大バカですわ!」

酷い反撃を受けた。しかも俺は口に出してないんだが……つか怪我
人が大声出すなって、傷に響くぞ?。………ほれ、痛みで悶えて
ら。

「にしてもだ。ラウラ・ボーデヴィツヒにはほんとに困ったもんだ
な」

千春が髪を掻き上げながら溜め息を漏らす。

「確かに、奴をこのまま捨て置けば大きな問題になるだろうな」

箒が壁にもたれかかりながら同意とばかりに頷く。二人の目は戦士の
眼力を放っていた。

「学年別トーナメントで叩き潰す敷かないわね。……あゝあゝ、もうつ。『アヴァロン』をもう少し早く作っとくんだったよ」

頭を掻きながら二度目の溜め息を漏らした千春からは聞き慣れない単語が出た。

「アヴァロン？……確か妖精が住まうって言う理想郷の名前だったね？」

「それが受領したと言うISか、千春？」

シャルルが飲み物を買って戻って来た。鈴とセシリアにそれぞれ烏龍茶ロウと紅茶が入ったジュース缶を手渡しながら千春の言った単語に首を傾げる。

シャルルと篝の二人の問いに頷いた千春はまだ両手につけていた煤けて汚れた軍手を取り、それをポケットに突っ込んだ。

「そ、私が考案した新型ISだよ。『グラデーシオン』が3.5世代型なら、『番外世代型』……って感じになるのかな？。……なにしろどの世代ISにも合わないからな」

汗で濡れ、身体に張り付いたタンクトップを指で軽く引っ張りながら千春はどこか疲れたように答える。

「番外世代型……？」

これまた聞き慣れない名前だ。千春は俺の言葉にもコクリと頷く。

「ISの為のIS……って所かな？。ま、お披露目はまだ後だね」

そうニヤリと千春が笑ったのとほぼ同時に、

ドドドドドドドッ………！

地鳴りのような音が聞こえた。地鳴りに聞こえるそれは、どうやら廊下から響いて来ている。しかも段々と近づいて来ているように思うのだが………多分、気のせいじゃないんだろうな　！？

ドカーン！！

瞬間、保健室のドアが吹き飛んだ！

いや……本気で吹き飛んだんだ。本当に……

「織斑君！」

「デュノア君！」

入ってきた　　なんて生易しい表現では現せられない。

文字通り雪崩込んで来たのは数十名の女子生徒だった！

ベッドが五つもある広い保健室なのに、室内はあっという間に人で埋め尽くされた。しかも俺とシャルルを見つけるなり一斉に取り囲み、まるでバーゲンセールを取り合いが如く手を伸ばして来たのである。

………うわぁ、軽いホラーだぞこれ。

人垣から伸びる無数の手、手、手。普通に怖いわ。

「な、なんだなんだ!?!」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちよつと落ち着いて」

状況が飲み込めない俺とシャルルに、バシィッ!と女子生徒一同が差し出して来たのは学内の緊急告知文が書かれた申込み書だった。

「あゝ、なにになに?……」
『今月開催する学園トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締切は』

「ああ、そこまでいいから!とにかくっ!」

申込み書を引ったくられた。し、締切はいつまでなんだ!?

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、デュノア君!」

どうして学年別トーナメントの仕様変更があったのかわからないが、ともかく今こうしてやって来ているのは全員一年生の女子だ(リボンの色で学年がわかるのだ)。学園内で二人しかいない男子である俺とシャルルと組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫ってきているのだらう。

しかし、

「え、えっと……」

そう、シャルルは実は女の子なのだ。
だから誰かと組むというのは非常にまずい。

今後ペア同士での特訓も行うだろうし、いつどこで正体がバレてしまつとも限らない。

そう思つてシャルルを見ると、数秒間だけ困り果てた顔でこっちを見たのがわかつた。

俺と視線が合うと、助けを求めているのがわかつてしまつと思つたのだらう、すぐに視線を逸らしてしまつた。

相変わらずこの遠慮深さはどうにかならないもんか。いや、そこがシャルルの美德なのだらうが、な。

「悪いな、俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

わあわあと騒ぐ女子群に聞こえるようにきつぱりと大きな声で宣言した。

シーン……。いきなりの沈黙に俺は気持ち少し後ずさる。
や、やっぱりまずかつたか？

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりは……」

「男同士っていうのも……いやむしろ……ウヒヒ」

おい、最後。何ケタケタ笑いながらGペン持ってやがる。あつ、こら！今コミケつつたな！？

まあ……なんだ。取り合えず納得してくれたようだ。女子達は各々が仕方ないかと口にしながら、一人また一人と保健室を去っていく。今年の夏には薄い本が繁簡しそうだ、主に学園内で。

「ふう……やっと行ってくれたな」

「あ、あの、一夏」

「一夏っ！」

「一夏さんっ」

安堵の溜め息をついた俺にシャルルが声を掛けようとして、それを上回る勢いでベッドから飛び出た鈴とセシリアに遮られた。

「あ、あたしと組みなさいよ！幼馴染みでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

そんな怖い表情で詰め寄られもダメなものだ。

しかし、正直どうしたもんかね。先程の女子生徒達とは違って、こっちは説得するにも一苦労しそうな気配がビンビンする。

はあ、不幸だ。

「いや、ダメだな」

しかし、千春が掌サイズの端末を操作しながらそれを一言で否定する。

「これは…先程の戦闘の映像…か？」

「うん。視認でだけど二人のISの損傷率はダメージレベルCを越えてると思うね。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥が生じる。ドクターストップって訳じゃないが………学年別トーナメントの参加はやめて置いた方が無難だぜ？」

端末の画面に写しだされたのは先程の三人の戦闘。それを見ながら千春は二人を説得する。

いやしかし、そんな説得でこの燃え上がる代表候補生×2が納得するのだろうか？多分無理だぞ、千春？

「うっ、ぐっ………！仕方ない…わよね」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！不本意ですが！……トーナメント参加は辞退しますわ」

あれ？すごいアツサリ引き下がった。……なんでだ？

「一夏、IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だ」

え？あ、あー…えーと……。

「……『ISは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ISのダメージがレベルCを越えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある』」

「おお、それだ！さすがシャルル！」

篤の言葉に、なかなか答えられない俺に代わって、シャルルがすらすらと説明してくれた。

つまりはアレだ、『骨折している時に無理をすると筋肉を痛める』って感じだろう。

この解釈で間違えないはずだ。

とりあえず話も纏まったところで、俺はかねてから疑問に思っていたことを二人に訊いてみた。

「しかし、なんだってラウラとバトる事になったんだ？」

「え、い、いやそれは……」

「ま、まあ。なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「ふうん？」

何故二人とも言いにくそうにしているのだろうか？。まあ何かしらの挑発行為があった上でのバトルだったのは間違いないようだ。

しかし各国の代表候補生なんだからちょっとくらいの挑発にほいほいのつたらヤバいんじゃないか？うーむ……

「もしかして、一夏の悪口」

「あああつ！たくつ、アンタはほんつと一言多いわねえ！」

「そ、そうですね！全くです！おほほほほほ！」

何かティーン！ときたらしいシャルルを、二人が勢いよくベッドから飛び出し取り押さえた。二人から口を覆われてシャルルは苦しそうにもがく。

「おい、二人ともやめろつて。シャルルが困つてんだろうが。それにさっきから怪我人のくせに身体を動かさすぎだぞ、ホレ」

一回冷静になれよとばかりに俺は鈴とセシリアの肩を指でつついた。

「「びぎいっ！」「」

案の定痛みが走ったらしい。二人ともおかしな言葉かつ甲高い声をあげてその場で凍りついた。

「
……………」

「あ、……………すまんそんなに痛いとは思わなかったんだ。悪い」

二人の恨みがましくも痛みに悶えてるその表情を見れば、それがどれだけ痛かったのかおおよそ理解できた。

「い、い、いちかあ……………あんたねえ……………っ」

「あ、あと、で……………おぼえていらっしやい……………」

うわぁ……………たぶん体が元気なら二人とも俺にためらいなく鉄拳をふるまっていることだろう。しかもフルコース。断つてもデザートが着いてくるに違いない。ドリンク？勿論飲み放題だばか野郎。

6月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。その慌ただしさは予想よりも遙かにすごく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行った。（余談だが、来賓の誘導をしていた中に千春を見掛けた。どうやら来賓の方々に大人気なようだ。良い歳したオッサン達が見開いて千春の巨乳をガン見する。あからさまに見すぎているのだが、その気持ちはよくわかる。俺だってガン見する。誰だってそうする）

それからやっとな開放された生徒たちは急いで各アリーナの更衣室へと走る。ちなみに俺達男子組はアリーナ外のトイレを貸しきって急場凌ぎの改造をした簡易更衣室に詰められていた。トイレと言っても毎日四回清掃のお姉さん方が余すところなく綺麗に磨きあげたトイレは清潔そのもので、フローラルな香りがトイレと言つ固定概念を払拭してくれる。

いや、まあトイレなんだけどね。

「すごいなこりゃ……」

そうそうに簡易更衣室から出た俺とシャルルは、生徒の第二待機室のモニターから観客席の様子を見る。

そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一同に会していた。

「三年にはスカウトが、二年生には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。まあそれ以外にも思惑はあるだろうけど……」

…あつ」

「ん？どーかしたか？」

「ほらほら、千春だよ？相手の人は………っ！」

俺がモニターの中の千春を注視した辺りで、シャルルが絶句した。

「ん？千春の隣にいるのは確か千春の執事さんだったな。……千春と話してるのは……誰だ？」

俺が首を傾げた所でシャルルが溜め息を漏らすように吐き出した。

「デュノア社の……社長だよ」

「え……っ」

今度は俺が絶句する番だった。

デュノア社の社長と言えばシャルルのお父さんだ。

そのシャルルのお父さんと、ニコニコと笑みを絶やさない千春が歓談していた。

「小型ディスプレイの携帯端末？」

「え？」

シャルルが千春の手元にあった半透明の板のようなものに気づいた。モニターから見たんじゃないやそれが何を写してるのかは、全くわからなかった。

「何の話をしてんだろうな……」

「うん。……千春……」

嘘だ。俺とシャルルは知っている。いや、多分、だが……憶測と言えど多分間違っていないだろう。

シャルルの事だ。

「まあ、なんだ。多分千春なら大丈夫さ。それより今は集中だ。いつ試合になるかわかんねえんだからさ」

「ふふ、ありがとう一夏」

モニターが他の場所を写したのを見て、俺は気分を変えようと明るめの声でシャルルの肩を軽く叩く。

シャルルは俺の考えていることが筒抜けだったらしく、くすつ、と笑われてしまった。

「気にすんなって。……さて、俺達の対戦相手は誰なんだろうな？」

モニターがあるこの待機室にも他の女子が集まりつつあった。アリーナの正規の更衣室にもモニターはあるのだが、息を抜きたい生徒達は談話室のようなこのスペースを利用する。

周囲の女子生徒達を見ながら俺の脳裏にはラウラ・ボーデヴィツヒの姿が映る。

早く、アイツと戦ってみたい。

その言葉が浮かび上がってくる。前にラウラ・ボーデヴィツヒに対して戦闘狂と言ったが、どうやら俺もその口らしい。

モニターがアリーナからトーナメント表のようなものに写り替わった。

「あ！一回戦目が決まるわ！」

待機室にいた女子生徒が声をあげる。それに呼応するかのようにな

数の視線がモニターに注がれる。

一回戦は……………

相川清香、

千春・フレイヤ・ブリュッセル組と

篠ノ之箒、ラウラ・ボーデヴィツヒ組だった。

Stage 49 『カウント・ダウン』 (後書き)

お待たせしました、49話でございます。

夏バテやらブーム再炎やらで時間がかかりました。

次回からはバトルです！見所は筈ですね。ヤバいです。

では感想まっけてます

stage50 『ダンシング・アサルト』

学年別トーナメント第一回戦。選手が発表されてから15分後、アリーナの中で『打鉄』を纏った箒が腕を組んでいた。

(初戦の相手が千春とは………なんと言う組み合わせだ)

箒は静かにまぶたを閉じながら、その心中は穏やかではなかった。

千春と戦うのはまだ良い。箒にとって千春は友であり師であり恋敵であり良き理解者だ。

彼女との戦いは心踊るものがある。彼女に自分の技術が何処まで通用するのか………それを確かめてみたい。………みたかった。

今や箒の事など千春の頭にはない。ラウラ・ボーデヴィツヒもまた然り、箒や千春のパートナーの相川さんに意識を向けていない。

ただただ互いに凍てつく殺意を放ってる。

試合開始のゴングを待たず死合いを始めてしまいそうな、そんな雰囲気さえある。

(真つ当な試合は望めん、か)

やれやれと溜め息をついた箒の視線の先は灰色の装甲を纏った千春からラファール・リヴァイブを纏った相川さんに移された。

来賓用の観客席にどよめきが走った。

「……………」

カツカツと靴音を鳴らしながら視線をある一点に定めながら織斑千冬が歩いていった。

突然のブリュンヒルデの登場に一部を除き来賓者達は皆一様に驚いた。

「あら？……あらあら？」

そう、一部を除いて。

ニコニコと笑みを絶やさないう女性が千冬に気付き立ち上がる。腰元まで延びるその髪の毛は淡い栗色だった。

「お久しぶりです。マリアンヌ・ブリュンヒルダ。三年前から変わ

りなき様子、安心しました」

「貴女もお元気そうで良かったわ。会えて嬉しいわ。『ブリュンヒルデ』、織斑千冬」

立ち上がった女性の前で立ち止まりどちらかともなく手を差し出し、そしてその手を取り握手で返す。

「貴女にブリュンヒルデと言われるとバチが当たりそうで怖いな。戦乙女の巫女はこの名を許容してくれるのか？」

「許容も何も、その名は称号のようなもの。称えこそすれ否定する要素は何一つないと思うのだけど？」

「そう言って貰えると嬉しいよ。いや、……嬉しいです、か」

苦笑気味に笑う千冬の様子を見て、女性は口を手をあて、くすつ、と小さく笑った。

「うふふ。やっぱり慣れない事はしない派ね、千冬ちゃん」

「すまんなマリア。今日は千春のか？」

「アイスランドの国家IS操縦者として召喚されたわ。個人的には千春さんに頑張っただけなのだけれど……」

頬に手をあて溜め息をつくこの妙齢の女性、名をマリアンヌ・ブリュンヒルダ。

『閃光のマリアンヌ』と呼ばれ各国の国家代表IS操縦者達に恐れられているヴァルキリーだ。

三年前、第二回モンド・グロツソにおいて千冬と並んで優勝候補と呼ばれたIS操者で、

彼女と千冬との試合は奇しくも彼女たち二人が始めて顔を合わせた第一回モンド・グロツソと全く同じ、準決勝戦。

二度の敗退を繰り返しながら、『唯一』織斑千冬に拮抗した英雄としてアイスランドでは絶大な人気を誇るIS操縦者だ。

「随分と余裕なのだな、アイスランドは。確かに、今年のモンド・グロツソでお前と渡り合えそうな選手は少ないが……」

「そうなのよ。けど外交のためって押し切られちゃって…困ったわあ」

はあ、と間延びした溜め息をしたマリアは視線をアリーナへ戻す。

「千冬ちゃんはいいいのかしら？もうすぐ始まりそうよ？」

「山田君に任せて来たよ。彼女は優秀だ、安心しろ」

「ああ、ヤマヤちゃんね？懐かしいわあ」

くすくすと笑うマリア。……そう、山田先生が『ヤマヤ』と言うあだ名を拒絶したのは彼女、マリアンヌ・ブリュンヒルダが関わっていたのだ！！

「彼女の前で言ってやるなよ？」

「うふふ、気を付けるわあ」

微笑みを絶やさないマリア。当年今年で34歳。しかし、歳を感じさせない不思議な雰囲気纏っていて、二十代前半と言ってもまだまだ信じられる容姿をしている。

(一夏がいたならば解説してくれるだろうが今は待機室にいるので彼女のエロスはまたの機会に)

「さて…どちらが勝つと思う？」

「うーん…悩むわあ。……けど、そうね…あの子が勝つわ」

アリーナの上空に投影されたカウントを見ながら千冬は問う。

マリアは困ったように眉を八の字にし、アリーナの中心を指差す。

「……………理由を聞いても良いか？」

「ええ、構わないわよ？」

くすくすとマリアは笑いながら指を降ろした。

「あのポニーテールの子、あの子から初めて貴女と相對した時と似たような感覚を覚えたの。間違いなく、千春さんは負けてしまうわね」

上空のカウントが三を切った。

「……………」

千春が腰を低くし、地面に両手を付いた。まるでクラウチングスタートだ。

二…。

「千春・フレイヤ・ブリュッセル。踊る妖精よ……今日、ここで貴様を叩き墜としてやるう」

「やってみるよ欠陥品。全力で来い、死力を尽くせ、……でなければお前が死ぬことになるぞ？」

—……

「千春……」

—夏は自分の手が真っ白になるほど強く、握りしめていた。

零……！！！！

「……モード選択『スカーレット・ペイン 紅き痛み』……」

グラデーション
色彩が、紅く染め上がる。

ギイイイインツ！

ガキイイインッ！

加速音と全く同じ瞬間に刃と刃の衝突音が鳴り響く。

千春が試合開始と共に仕掛けた『イグニッション・ブースト瞬時加速』を用いた奇襲を、ラウラは糸も容易く防いでしまった。

「はっ、単調な動きだなカレンデュラよ。その程度で私をやれるとでも？」

「思っちゃいないさ。腕の一本くらい落ちて欲しいと願ったがね」

ガチャガチャと音を鳴らしながら鏢迫り合いが続く。ラウラはレーザー手刀で、千春は近接ブレードを両手に持って拮抗していた。

しかし、その拮抗を崩す。

ヒュンヒュンッ……………バシユバシユッ！

「ビットだと！？……………ちいっ！」

弾かれるように千春から離れ、全方位から降り注ぐレーザーの雨をラウラは舌打ちをしながらも掻い潜る。

「ビットを展開しながらそれを隠すため瞬時加速で接近戦、やるな」

「何上から目線で余裕ぶっこいてんだよ！！」

両手の二振りの近接ブレードを二挺のビームライフルに変え、距離を取ったラウラにビームの連射を浴びせる。

「さて…貰ったぞ？」

「！？」

ラウラの口元がつり上がる。

刹那、ライフルにワイヤーブレードが巻き付く。千春は瞬時にライフルを離し、ワイヤーが巻き付いたライフルを片方のビームライフルで撃ち抜いた。

ドオンッ！

ライフルのジェネレーターを撃ち貫き爆散させる。そしてその爆発に巻き込まれワイヤーブレードが一基使用不可になる。

「まさかワイヤーブレードを一基潰されるとはな。……しかし、それでいい。弱者を蹴り殺すのは趣味に合わん」

「ちい……っ」

ガキン！ と巨大なバレルの回転音が轟く。

左肩の大型レール砲が砲弾カノンを装填する。それを見るや千春は六枚のスラスタウイングを広げ、自分の領域である天空へ飛翔した。

ドンッ　　！

大型レール砲カノンから音速をもつて放たれた砲弾は回避に専念した千春を捉えられずアリーナのシールドバリアーに直撃し爆発を起こす。

「フン。墜とし甲斐があると言つものだ！」

レール砲カノンに次弾を装填したラウラは五基のワイヤーブレードを連続投射。

それぞれが三次元躍動機動で千春に迫り、そのことごとくが千春に避けられていく。

加速中に急激な停止、停止直後に身を振りながらのクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回で引き離す。

ガチャッ！　ヒュンッ……。

二挺のアサルトライフル『スケアクロウ』のアンダーバレルに装備されたグレネードを下方、ラウラに向け放つ。

ドオオオンッ　　！

ラウラが放っていた対ISアーマー用特殊徹甲弾とグレネードが衝突。大爆発を起こした。

「間違いない。……あの紅い装甲のモードは三種のモードを一括に纏めた特殊なモードだよ」

「何かわかったのかシャルル？」

モニターを食い入るように見ていたシャルルが座席にもたれ掛かり、こめかみを抑えながら溜め息をついた。

「何かわかった………と言うよりコレしか考えられないんだよ。――夏、千春の『グラデーション』の主な特徴は何？」

「へ？ えー………と。………三つのモードに変更できる事………か？」

突然の問いに変な声を出してしまった。

「そう。各距離に特化した三種のモードに、戦闘中に変更できる事。それが『グラデーション』の強みだよ。そしてそれが弱みでもある

んだ」

「なんでだ？どんな距離にも対応できるなら弱点なんてないだろ？」

「『グラデーシヨン』は各モードで使える武器を制限してるんだよ。各モード毎にエネルギー効率は全く違ってているからね。遠距離特化の深緑の大地が実弾兵装しか使えないのも、深緑の大地がエネルギーの大部分を強固な守りにするためシールドエネルギーに回してるから、エネルギーを消費する武器を使うと、すぐにエネルギーが切れちゃうんだ」

「そうか、各色毎に使う武器や戦い方があるから…色で自分の弱点を晒してることになる！」

「正解だよ一夏。……だけど今のあの紅い装甲の『グラデーシヨン』は全ての武装を使えている。BT兵器とエネルギー兵器は『蒼き水面』、実弾兵装は『深緑の大地』。そしてあの高機動は『黄色の閃光』……全てのモードを一纏めにしたようなモードじゃないと、あんな事は出来ない。」

「確かに……けどそれっておかしくないか？」

そう、おかしいのだ。

全てのモードを一纏めに……つまりは全距離対応機だ。そんなモードが出来るなら、……元からこのモードにすれば良いんじゃないか。

「そこ、そこなんだよ一夏。……多分あの紅い装甲にはまだ何か……
…うっん、『グラデーション』自体に何か裏があるんだよ」

アリーナでは、紅い装甲を纏った千春が踊るように空を翔んでいた。

ガチィッ…ドドドドドドッ

!!

一瞬の間を見つければ千春は六連ミサイルランチャーを展開、ラウラに
狙いを定めそれを放った。

「はっ、この停止結界の前ではそんな攻撃は届かんぞ？」

しかし、右腕を伸ばしたラウラの目の前でピタリ、と放たれたミサ
イルは止まってしまふ。

ヒュンヒュンッ！…バシユバシユッ！

「爆発なんかは、その停止結界で防げるの？」

「!?!」

A I Cで停止させたミサイル達がビットから放たれたレーザーに貫かれる。

ラウラは瞬時にA I Cを解除し腕を交差させる。

ドドオオオンッ！

「くっ…やっってくれるッ！」

爆発に巻き込まれたラウラが舌打ちする。大した損傷はなかったがシールドエネルギーをこっそりと持っていかれた。

「奴は…上か!?!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおッッッ!?!」

爆煙が晴れ、ラウラが見たのは先程までいた場所、いや視界内から忽然と消えた千春。

ふと、自分の頭上に影が落ちたのに気づいたラウラは大型レール砲カノンに徹甲弾を装填、頭上を見上げる。頭上からは、双剣を手に持った千春が一直線に『落ちてくる』。

「喰らえッ

」!

頭上の千春に向け徹甲弾を放つ。

ドンッ
！

当たる。この距離なら当たると踏んだ一撃はは、

キンッ
！

そのブレードによって叩き切られた。

ドオオオンッ
！！

真っ二つにされた徹甲弾が千春の後方で爆発する。
必殺の一撃を凌いだ代償はブレード。近接ブレードは刀身の調度ま
ん中辺りから剣先にかけてが吹き飛んでいた。

半分に折れたブレードを投げ捨て、もうひと振りの近接ブレードを
ラウラに向け振り下ろす。

「おのれっ…！」

紙一重でブレードの斬撃を避けたラウラ。

避けると同時に距離を取ろうと後ろへ下がる。ラウラは格下と見ていた相手に危なげな戦いをする自分に苛立ちを覚えた。

「逃がさないッ!……」

そしてそれを追撃せんと肉薄する千春。威力を込めるため、ブレードを大振りに振り下ろす。

ガキイイッ!

『シユヴァルツェア・レーゲン』のレーザー手刀と『グラデーション』の近接ブレードが激突する。

「……ふ、ふふふ…終わりだカレンデュラ!」

左腕のレーザー手刀で近接ブレードを抑えれば、右腕が空く。その右腕で、アクティブ・イナーシャル・キャンセラAICを発動して千春の動きを止めた。

ガキッ!

大型レール砲カノンに次弾が装填される。そのレール砲の砲口が千春を捉えた。

「!?!」

突如、ラウラの視界の中に何かが飛び込んで来た。

それは、先程千春が投げ捨てていた折れた近接ブレードだ。それを認識するのに一瞬、意識を向けてしまった。

停止結果…AICを発動させるには高い集中力を必要とする。
しかし、視界に飛び込んで来たソレに意識を向けたため、集中は途切れ、AICの効力が四散してしまっただ。

ビットが飛来してくるならまだわかる。しかし飛んで来たのは真つ二つに折れたブレードの片割れ、何故それなのか？と言う思慮も集中を途切らせる要因にもなった。

「……………」

してやったり、とでも言わんばかりに口元を大きくつり上げた千春。その表情は勝利を確信した愉悦そのもの、近接ブレードを振り上げ、真つ向から両断しようとして振り下ろす。

（な…んだと！？…私が…私が……負ける！？）

レーザー手刀もAICも間に合わない。後ろに下がろうとするも間に合わない。何もかも、何もかもがラウラには間に合わなかった。

「私を忘れて貰っては困るぞ、千春」

ガキイイインッ
！！

観客までもが千春の勝利を確信した時だった。
耳をつんざくような鋼と鋼の衝突音がアリーナに響き渡る。

「!!!?.....邪魔をッ」

「するなど?.....生憎、タッグ戦だな。邪魔をしてはいけない、な
どと言う規約はないぞ?」

剣撃を防がれるや否や、弾かれるように距離を取った千春が表情を
怒りに染め、憎々しげに歯を食い縛る。

「すまん千春。私の相手もして貰うぞ?」

第二世代型IS『打鉄』を纏い、近接ブレードを構えながら、篠ノ
之箒は不敵に笑った。

stage50 『ダンシング・アサルト』（後書き）

千春無双回。……無双？因みに千春のエロスーツは二代目です。レオタードタイプに、背中が大きく開いたあの、です。

ついに新キャラ登場！学年別トーナメントも熱くなってまいりました。

ラウラが弱い？ノンノン、紅い『グラデーション』が強いんです。

次回、無双回？ 感想、お待ちしております！

Stage 51 『幕の切り札』

「くっ……キヨちゃっ……」

千春の見る先には悔しげに下唇を食い縛る相川さんの姿。その瞳は悔しさに滲んでいた。

（試合開始から六分と二十秒、……キヨちゃんのせいじゃない、キヨちゃんは頑張った。一夏との特訓で箒自身も強くなった。接近戦に限れば鈴と互角に渡り合うほどに。むしろその箒を五分以上抑えていたんだ、褒めこそすれ責める理由が見当たらない！………私………私が五分以内に仕留めきれなかったせいだ………）

相川清香を、『使えない』と思つた心を刹那の内に切り殺す。

そんな事あるものか、相川清香は頑張った。

箒はもはや一般生徒の枠を出た技量を持っていた。

いや、もともと才気があるのは知っていた。ISランクがこと言う事実に疑念を抱くほどに……。一夏や私と特訓をして、箒はメキメキと力を付けていった。一夏の成長速度にも舌を巻いたが箒のそれは戦慄さえ覚えた。

その箒にだ、『五分』耐えたのだ。これを上出来と呼ばずなんと

う？。

全て至らぬは私の責任。……相川清香の頑張りを無駄にした私の……

……

「篤いッ！！」

『フェザー』を六基、全基で殲滅する。

確かに篤は強くなったさ。……だけど私はやられてあげられない。
まだ、まだ……篤には負けてあげない。

だつてそうだろう？鈴にシャルルはまだわかる。だけど……専用機
でもなくて……起動時間が三桁にも行つてない、篤なんかには負け
たら……

私の意味がなくなってしまう！！！！

私の二年間が、一夏を守るためのこの二年間が……全くの無意味に
なってしまう。

いやだつ、いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
やだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
やだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
やだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
やだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
やだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
やだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
やだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ

やだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ……
いやだッ!!

まだ! まだ一夏の隣に居たい! まだ一夏の近くに居たい!!

まだ……

貴女にとなりにはいさせはし一夏は守らせないッ!!

展開された『フェザー』が鎌首をもたげる。優美な姿のその兵器は、
その実蹂躪するだけの武器だ。計六門の砲口が箒を捉え、ソレを蹂
躪するためレーザービームを吹き出した。

「くっ! ……激しても的確か…正直羨ましいな…ッ」

まるで暴風雨のように降り注ぐビームの雨に曝されながら、箒はその全てを捌き切っていた。回避し防ぎ、回避し防ぎの繰返しだ。だが確かに、箒はビームの射線を見切りの確かな拳動で損害を最低限に抑えていた。

（切り札は二つ、そして鬼札は一つ………鬼札を切るタイミングは確実に勝利するとき、でなければ全くの無駄になる………故にッ）

「切り札、その一だ！」

箒は近接戦仕様のIS、『打鉄』を纏っているながら、千春との距離を取った。

「距離を取った………なんで？」

「わかりませんわ。ただ、鈴さんも知っての通り、中距離は千春さんの得手分野………箒さんに何か手が………っ！」

アリーナの観客席で箒が距離を取った様子を見て鈴とセシリアは並んで疑問に思った。

そしてその二人に答えを出すように、箒はISの武装を展開する。

それは、機械的な大弓だった。

「……ほう、珍しいモノを使う……」

「あらあら、イチイチシキ カミクスン『神崩し』じゃない。懐かしいわあ」

「たしか第一回のモンド・グロツソで使っていたか？」

「ええ。千冬ちゃんにはどの距離も無駄と知ってからはやめたわ」

イチイチシキ
フリセット『イチイチシキ神崩し《カミクスン》』。防御型のISである『打鉄』の初期装備として開発された大弓。威力こそ高水準を叩き出したが、エネルギー消費を必要とするビーム兵器なため、威力に見合わない高い消費エネルギー、取り回しの悪さ、連射性、命中精度など、多くの問題点を残した失敗作。

公式記録では六年前、第一回モンド・グロツソ以降公式戦で使用さ

れた例がない武器だ。

ギ……ギギギイイツ……

箒が弓を引き絞る。凝縮されたエネルギーは強い光りを放つ。

「……疾ッ！」

ブンッ
！

引き絞った光り輝く矢^{ビーム}を放つ。
弓から放たれたそのエネルギーは、放たれた瞬間に無数の光の矢と
なった。『散弾』、だ。無数のビームの奔流が千春目掛けて迫る。

避ける、避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避けるッ！！

当たるわけにはいかない。そう、絶対に一撃たりとも当たるわけにはいかない！。

千春は『イグニッション・ブースト瞬時加速』で大きく後退してから、『瞬時加速』の速度のまま散弾を『無理矢理』避けて行く。

ミシリッ……。

腕の、脚の、腹部の…全身の骨が悲鳴をあげる。

『サークル・イグニッション曲線の瞬時加速』により全身を潰されるような痛みが走る。本来心の中であるはずのセーブを取り除いた瞬時加速。

それは、速さの代わりに身体を潰す諸刃の行為。いや、リスクの方が勝ちすぎている。

それでも、千春はやめなかった。

『当たるわけにはいかない』と、何度も何度も眩きながら、激痛を耐えながら飛翔する。

ミシリッ……

バキッ……!

。

左腕が折れた。

ひどく呆気なく折れた。

しかし千春はそんな事に構わず加速する。

そんな事では止まらない。

「う……ぐっ……あああッー!!」

近接ブレードを展開。

痛みで思考出来なくなったわけじゃない。

愚行としりながら愚考する。このままでは全身の骨が折れ、一夏に『バレて』しまう。

それはダメだ。故に決着をつける。

ベキベキツ……！

更に無茶な加速をして肋骨が砕けた。

けど止まらない。絶え間なく放たれる散弾を身をよじり、『曲線の瞬時加速』で身に降りかかるその全てを避け尽くす。

距離は中距離を越え近距離、一步踏み出せば白兵戦^{インファイト}。折れた筈の左腕でブレードを横薙ぎに振り抜いた。

斬ッ！

『神崩し』を叩き切る。真っ二つになった『神崩し』を捨て、筈が近接ブレードを展開する。

まともに打ち合う必要はない。近距離瞬時加速ショート・イグニッションで距離を取り、また瞬時加速で接近し振り抜けば……………

「切り札、その二だッ!!」

筭は近接ブレードをすぐさま量子分解し、収納した。

近接ブレードは千春に『近距離内での回避、又は距離を取る行動を起こさせるための罠フエイク』。『打鉄』の近距離武器が近接ブレードだけだと思ひ込んでる千春に一撃与えるための罠。

ISの倍以上はあるその薙刀を振り下ろした。

stage 51 『幕の切り札』（後書き）

や、やり過ぎた！（笑） 幕つええ…量産機、つまりザクでガンダムを追い詰めるとか赤い人だけで充分だって！（笑）

ラウラが弱いわけではありません。あれですよ、ウォーター7のウソップ現象です。相手をよく知ってるからこそ、のね………言い訳にしかないですね、ハイ。

後近接ブレードだけじゃ流石に勝てないならって追加した武装…つまり切り札のお陰ですね。

感想待ってまゝす

ガキインッ!!……………。

「……………何故だ」

「……………ふん。こいつは私の獲物だ。手出しをするなら貴様も一緒に相手をしてやるう」

「先程までやられてよく言える……………」

シン、と静まりかえったアリーナ。終始押されぎみだった筈の逆転攻撃。それにより決着が着くだろうと思われていた試合はまだ、決着がついていなかった。

「……………どういう…事よ。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

避けられない。と、最悪の事態を想定していた千春は、訳がわからない、と表情に出して問う。

筈が降り下ろした薙刀を、そのレーザー手刀で受け止めたラウラに。

「……………有り体に言えば甘く見ていた……………とでも言うのだろうか。貴様の戦闘レベルを修正する。……………貴様を、この私とシュヴァルツェア・レーゲンの敵であると認めよう」

ラウラはレーザー手刀を納め、右腕を左目を隠すように翳す。

「!?!?」

咄嗟に瞬時加速で千春がラウラから離れる。その表情は後悔が見てとれる。

「やはりな。……私のこの瞳を…知っていたな？」

ラウラの左目を覆っていた眼帯はなくなっていて、代わりに見開かれた金色の瞳が異彩を放っていた。

「なればわかるだろう。これで貴様の勝利が万に一も無くなった事が……これが、私の本気だ。その翼有る限り凌いでみせる」

千春を過去最大の敵と認め、油断や慢心をラウラは棄てた。

「この瞳を使わせた……それを誇りとし墜ちるがいい」

左肩のレール砲が唸りをあげる。

「何事だ真耶？」

携帯端末に振動がおこり、それを千春は懐から取り出した。相手は山田真耶。アリーナの完成室にいるはずの彼女からの呼び出しだ。

「た、たたた大変です織斑先生！！緊急事態です！！」

端末の向こう側から真耶が声を張り上げて叫ぶ。

「緊急事態？……」

『はい、そうなんです！先程から試合を終わらせるブザーが鳴らなくて……！』

「？……わからんな。そもそも何故試合を破棄するのだ。まだ続けているが？」

千冬は眉をひそめる。視線をアリーナに向ければ空を千春が飛び、それを捕らえんが如くラウラのワイヤーブレードが飛び交っていた。

『ブリュッセルさんはっ、もう試合ができる身体じゃないんです！
ISからの情報では、千春さんの健康状態コンディションはステージレッド！今すぐ緊急入院しないと…いえ…しても助かるかわからないくらいの状態なんです！』

絶句。

絶句した。『ステージレッド』、それはISから送られる情報信号の一つで、IS操縦者の『操縦者危機的瀕死域』。操縦者生命危険域を越える危険な状態だ。

目の前で行われていた試合が、人命にかかわるほどの大事になっていたのだ。

「わかった、今からそちらへ向かう。……………しかし解せんな…なぜ、その瀕死状態でブリュッセルがあそこまで戦えているのか……」

「あら？……なぜ、そこで私を見るのかしら？」

「貴様も解せんからだ。……………何故、自分の『娘』が死にそうになっていると言うのに平気な顔をしていられる」

端末の通話ボタンを切り、隣にたたずむマリアを見据える。

当のマリアは歳に似合わぬ、しかし容姿には似合う少女のような笑

みを見せる。

「案外平気じゃないのよ？我慢してるだけよ」

「やはり知っていたか」

「あら…引っ掛けなんて酷いわ」

「……………解せんな」

「何かかしら？」

何かに気づいたらしい千冬が憎々しげに呟く。

「貴様、自分の娘にナノマシンを投与したな？」

「っ!?!?.....」

今のは危なかった。あの瞳を使っただけから、ラウラの動きが変わった。ラウラの動き一つ一つがこちらを倒すための動き。こちらの動きに対応し最善の動きで返してくる。

「これで二基目…あと四基だ」

既に二基の『フェザー』をワイヤーブレードで破壊された。腕を組んだままワイヤーブレードだけを飛ばしてくるラウラに舌打ちし、ビームライフルを連射する。

斬ッ!.....

「ぐっ!.....」

「貰った!」

連射を続けていたライフルを薙刀で叩き切られる。箒だ。箒はラウラが展開したワイヤーブレードの包囲網の合間を器用に潜り抜けながら接近してきたのだ。

「甘いよ、箒！」

しかし奇襲でもない接近戦など恐るに足らず。回し蹴りを見舞い、アサルトライフル『スケアクロウ』を構え弾丸を乱射する。

それと同時に、展開していた『フェザー』で箒を囲むように『全距離攻撃』を行う。

「当たらなければ…どうと言う事はないっ！」

回し蹴りを喰らい、体勢を崩しかけた箒は三次元躍動旋回で体勢を整えながら四方から放たれるビームを紙一重で避けて行く。

……………強くなっている。

先程まで防御の姿勢を取りながら捌いていた『フェザー』を、今はまるで『未来予知』を行ったかと思えるほど完璧に避けている。

『フェザー』の数が減ったから？　まさか…その程度でこんな真似出来るわけがない。

ビームが放たれるより早くビームの射線軸からの回避を成功させるなど不可能だ。

ラウラでさえ、発射後のビームを『見』切っているのだ。

もし、箒が専用機を持ったなら……私は既に負けていた。

がしかし、幸か不幸か箒は専用機を持っていない。

……そして私には奥の手がある。必ず、必ず箒の動きを一瞬だけ止める秘策が……

「まだ……箒には負けてあげられないんだよ！」

「私にも、負けられない理由がある！勝たせてもらうぞ、千春！」

薙刀を量子分解し、ビームの雨を掻い潜りながら箒が迫る。

徒手空拳の状態で迫る箒を見て、千春は確認した。

箒が狙っているのは居合い……勝機だ！

ラウラとの一騎討ちには箒は邪魔になる。……まず、箒を打ち倒す！

展開していたビットを戻し、手にアサルトライフルを構え迎撃する。

ガガガガガガッ！

アサルトライフルが火を吹く

箒が『打鉄』の実体シールドを展開し、銃弾を弾きながら迫る。

「貰うぞ、千春！」

箒は居合いの構えを取り、イグニッション・ブースト瞬時加速駆ける

フォンツ ……

ザシユツ…

「!?!?…なっ…ちはっ…」

「墜ちろ、箒」

エネルギーシールドにぶつかるはずだったブレードは、千春の左肩を切り裂いた。

傷は浅い。だがしかし、『ISを装着された人間に対し、通常の装備での直接攻撃は出来ない』と知っていた箒は思考能力を一瞬奪われる。

そこが狙い目。勝機。

『フェザー』を展開と同時に箒の腹部に蹴りを放つ。もちろんエネルギーシールドにぶつかり箒自身にダメージはない。

蹴りにより距離が開く。

箒が体勢を整えるよりも速く、四基の『フェザー』はビームを放つ。

「ぐっ……ここまで……か……！」

『打鉄』のエネルギーが尽き、箒は戦闘行動が不能になる。
IS戦においてエネルギーが尽きた者が基本的に敗けとなる。
箒には勝った、後は……。

シユルルツ…… ゲンツ！

「しまっ ！？」

『グラデーシヨン』の脚にワイヤーが三本絡まり、思い切り引っ張られる。

箒を倒した一瞬の気の緩みを突かれた。

ダアンツ！！

「ぐうっ！……！」

ワイヤーに引かれ、地面にうつ伏せに叩きつけられる。
全身を襲う衝撃に一瞬意識が遠ざかる。
それを無理矢理制し、ラウラへ視線を……、

ガシャンツ！！

「っ!？」

背中から衝撃が伝わる。それは、ラウラが私を踏みつけた衝撃だった。

「ふん、奴め…私と貴様との戦いに横槍を入れよって……………」

ギリギリと力を込められ、私は押し潰されていく。

「ふ、フエ…」

「翅など使わせん」

ビットで射撃をするより速く、ラウラの放ったワイヤーブレードがビットを貫く。

689

「これで、私の勝ちだな。武装も近接ブレードしか残っておるまい。……選べ、ここで無惨に破れるか、自ら敗けを認めるか…な」

ラウラが『グラデーシヨン』の固定部位のスラスターウイングを掴む。

「ふ…ざけ…っ、私はっ!!」

起き上がるつとすも、『動きを止められて』は動けない。

片手で翼を掴み、もう片手でAICを発動。

万事休す。どうしようもならない。だがしかし、今の千春は自分から、負けたとは言えなかった。言いたくなかった。

まだ武装はある。近接ブレード一振りだとしても、だ。まだ動ける。シールドエネルギーが尽きるまで。例え残りが少なくても、一夏を馬鹿にしたラウラに、言いたくなかった。

「そうか、そうでなくてはつまらん。………しかし、今回は私の勝ちで終わりだな」

ビシッ、…バキィッ！…ブチブチ…

スラスタールウイングが引き千切られる。内線が音を立てて切れていく。

「翅を失い、それでも翔べるか、妖精よ？」

バキィィィッ！！！！

とても綺麗な妖精は翅を奪われ、地面に這いつくばせられてしまいました。

stages 2 『翅』(後書き)

シリアスは苦手です。ちくせう、速くお買い物イベントをしたい！

さて、箒が強すぎると思う人挙手！

ノノノノノノノノノノノノノノ

うははは！強すぎるよ箒！いや、まあ予定通りなんですけどね！

感想待ってま〜す！

今は学年別トーナメント一日目夜の8時だ。千春達の戦いから既に六時間もたっていた。

「いやあ、心配かけてわるかった！」

ばあんっ！、と上半身だけ起き上がり、両手を合わせて頭を下げた千春が保健室に居た全員に謝った。

メンバーは俺に篤、鈴にセシリアとシャルルと何時もの面子だ。

先程まで相川さんが居たが千春と少し話してから嬉しそうに笑いながら寮へ戻っていった。千春が心配だったのか目元には涙が溜まっていた。

「心配かけた、と……………」

「言われてもねえ？……………」

「千春は別に何も悪い事はしてないじゃない」

セシリアと鈴が顔を合わせ、シャルルが二人の言葉を代弁する。

「む……………」

それに反応したのは箒。千春の腕に巻かれた包帯を見て、口を尖らせた。

試合後、傷口から血を流しながら気絶してしまった千春は担架に運ばれ保健室へ。ここの保健室、医療道具が揃っていて、医療室としても使えるのだ。

千春は先程まで気絶していたらしく、漸く面会が出来たのだ。

「いやいや、箒は悪くないって。私が裏技使って自滅しただけだから」

いじけていた箒に苦笑した千春が包帯の上から腕を突ついた。

傷は浅いものだったが、痛みは酷く、それで気絶してしまったらしい。

「わざとくらってビックリさせないと私がやられちゃいそうになっちゃったからさ……いやしかし、箒ってばすごく強くなったね。次やったら私の負けだね」

頭を軽く掻きながら千春が溜め息を漏らした。

「ほんとほんと、どうしちゃったわけ？あんだ。前にIS乗った時は一夏にも負けてたのに」

鈴が千春のベッドに腰掛け不思議そうに問う。

そう、トーナメントの数日前。アーリーナの使用が出来る最終日に俺と箒が戦った時は俺が勝った。

それより以前に技に破れた俺は、箒の技を警戒しながら戦い勝利を納めた。

やはり箒も俺と同じく千春に勝てなかったのだが……。

「むう……………」

箒はなにやら面白くないような表情をしていた。

「箒？……………どうかしたのか？」

「ああ、すまん。……………それなのだが…私にもわからなくなてな」

腕を組んだ箒は両目を瞑り、うーん、と唸りだした。

「わからない？」

これに首を傾げたのはセシリア始め箒以外の皆だ。

「ああ、なんと言うかだがな……………身体が勝手に動いた、と言うか…
なんとなく攻撃の来るばしょがわかったと言うか」

またうーんと唸りながら箒は考え込む。

「あの弓や薙刀は、対千春用に用意したんだろ？」

「一夏、流石にそこまでなんとなくで用意はせんぞ？」

箒が憤慨したように口を尖らせる。

まあ確かに、千春の動きを録画した動画を何度も何度も見てたしな、
箒。対策を練って向かったのは確かだろう。

「ま、なんにせよ一夏とシャルルも一回戦を突破して二回戦目だ。
箒共々頑張れよ?」

「ラウラと箒に当たるまでは負けたりしねえさ」

千春が突き出した拳に軽く拳を当てる。

ガラガラガラ!.....

拳を当てたのとはほぼ同時に、保健室の扉が音を立てて開けられた。

「お前は!」

箒が思わず身構える。扉を乱雑に開けたその人物は、.....

「居たか、千春・フレイヤ・ブリュッセル」

千春を倒したラウラ・ボーデヴィツヒその人だった。

ガタッ！

「どういづつもり、アンタ？病室でやり合おうってゲせた考えを持つてるわけではないわよね？」

「何用ですか？ラウラ・ボーデヴィツヒ。お相手でしたらわたくし達が承りますわ」

ラウラの登場に鈴とセシリアが怒り立つ。先日の件もあり二人はラウラに対してあまり良い心象を持っていない。いやまあ俺やシャルルも持っていないが。

「愚かものが……私は貴様ら有象無象に興味はない、黙っている」

鈴やセシリアを見ずに切り捨てる。その態度に鈴の堪忍袋の緒が切れる。

「アンタねえッ！……」

「鈴、押さえて……ラウラも、私に用があるんでしょ？なら皆を刺激しないで。それに大切な人を侮辱されたら、私も冷静でいられなくなる」

ISを部分展開しようとした鈴を押さえたのは千春だった。

フン、と鼻を鳴らしたラウラは千春の目の前まで近づいた。その所作は軍隊の上官が部下の値踏みをするようだった。

「千春っ……」

「大丈夫だ、一夏。戦りに来たわじゃなさそうだから」

ベッドに腰かけたままの千春が俺の言葉を制し、ラウラを見る。そのラウラは、ニヤリと笑った。

「千春・フレイヤ・ブリユッセル。我が『黒ウサギ隊』シュヴァルツェ・ハーゼへ来い。貴様を最上級の歓待を持って迎えよう」

相変わらず見下した態度のラウラが、なんか言った。しゅば…なんだって？

「は？……シュヴァルツェ・ハーゼとはなんなのだ？」

「なんですってっ！？」

「ざけんじゃないわよッ！」

「ウソ、あの黒ウサギ?…」

四者一様、ラウラの言葉に驚いていた。

シュヴァルツェ・ハーゼ…か。どういう意味だ？。

「フン、私は千春・フレイヤ・ブリュッセルに問いている。黙っている」

鈴やセシリアが騒いだのを一瞥して吐き捨てる。言っている事は正しいが態度が気に入らないと、鈴は殺気を容赦なく放ちながらラウラを睨み付ける。

しかしラウラは涼しい顔でスルーだ。すげえ、肝が据わってやがる。

「……私が、ねえ。……理由を聞いても？」

ラウラが待つてましたと言わんばかりにニヤリと笑う。

「貴様の操縦技術には特筆すべき所が幾つかあり、その一つは突撃力。二つにISの深い知識による瞬時の状況判断だ。そして二つ目の突撃力は我が部隊に欲しいモノでもあり…… いや、これも上層部を説得するための後付けだな。……貴様は私と私のシュヴァルツェア・レーゲンに唯一拮抗し、何より私に越界の瞳を使わせた。それが何よりの理由だ」

ラウラは眼帯を取り千春を見た。
千春は、頬を掻きながら溜め息をついた。

「今すぐに答えは出せない」

「……………織斑一夏がいるからか？」

千春が首を横に振ったのを見ればラウラは怒りを込めた目で俺を睨み付けて来た。

いや、なんでそこで俺を睨むんだ？。

「…………よかろう、学年別トーナメントにて織斑一夏、貴様を完膚無きまでに叩きのめしてやろう」

そう言えばラウラは長い銀髪を靡かせ、小気味良い靴音を鳴らしながら保健室を退室していった。

「な、なんか、嵐見たいな人だね、ボーデヴィツヒさんって」

静まり切った保健室の中、シャルルは暗い空気を無くそうと努力したが、思いつきり外した。ドンマイ、シャルル。

「ふふふ、それにしても予想が外れちゃったわねえ」

アリーナの管制室、そこでキーボードを叩くマリアの姿があった。その膝の上にはプルプルと泣き出しそうになりながら耐える山田真耶がいた。時たま真耶の豊満な胸に触れ、真耶の声や反応を楽しみながらタイピングを続ける。

「元より私より貴様寄りだったじゃないか。『神崩し』に薙刀、戦い方も貴様の戦方を篠ノ之なりにアレンジしていたからな」

そんなマリアの変態行動を半ば諦めたように眺める千冬は、後輩の助けを無視しながら管制室の大型モニタに視線を移した。

助けたら魔の手がこちらに延びてくるからだ。流石に後輩の前で恥

態は見せられない。まあ人身御供には山田くんは適している、と自分に言い聞かせながら千冬は砂糖を四杯、ミルクをたっぷり入れた甘々なコーヒートを味わっていた。

「あら、だから負けて当然だと？意地悪ねえ、千冬ちゃんは」

あひゃあ！と、山田くんの嬌声が響く。

「……私はそう言う意味で言ったわけではないのだがな」

「あらそう？……っと、これでお仕舞いよ？。千春さんにしては随分と簡単なプロテクトだったわあ」

マリアが立ち上がり、山田くんがチェアに座る。背もたれに寄りかかる山田くんの息は荒い。

「すまんマリア」

「気にしないでいいわ。楽しませて貰ったし」

そういつてマリアが見たのは山田くんだ。

「じゃあまたね千冬ちゃん」

そういつて軽く手を振ったマリアは管制室を後にした。

「……………」

マリアに解いて貰ったのはブリュッセルが仕掛けたトラップ。
戦闘中に止められないように細工したものらしい。

「全く、親子ともども問題しか持ってこんな」

私は山田くんの肩を軽く叩きながら溜め息をついた。

ビクンッ！と大きく肩を震わせて山田くんは気絶した。

「……………少しは自重しろ、親子ともども……………」

私はまた大きな溜め息を漏らすのであった、まる

stages 『黒ウサギ』（後書き）

ラウラ、勧誘しにくるの巻き。

どうやら好敵手と認められたようですよ奥様！

うひひ、これで黒ウサギ隊のミニスカ軍服着た千春が……眼帯着けて喜んでる姿しか見えねえwwww

しかしまあなんです、オリ主のくせに弱くないか？と言つ言葉をよくメールで頂きます。そんな弱いかな、うちの子？。寧ろ強さ以外がチートなんだからこれくらいで十分かと思えます。エロいし。

ああ、後一つ。この話数には性的な描写っぽいのが含まれてまくがあれはくすぐってただけです。お股に手なんか伸ばしてないし、差し込んでもしません。とつてもKEN ZENです。ただちよつと揉みしただけです。くすぐつたくて気絶しちゃったわけです。

皆様本当にすいませんでした。ヤマヤのアダ名辺りからこんな感じなの妄想してたので出しちゃいました。

感想、お待ちしてます！

「じゃあな一夏、明日の試合は見に行くからな？」

「いや、ダメだろ！？安静にしてなきゃ！」

「あ、そっか」

明日も学年別トーナメントがあるから、と千春に促され、俺達は保健室を退室する。

「ちゃんと静養していてくれよ？」

「わかったわかったって、お休み一夏」

出る間際、軽く釘を刺すと千春は両手を広げお手上げのポーズを取る。

患者着の袖口（半袖）から脇と横乳がツ！！？

吹き出そうとする鼻血を押さえいそいそと退出する俺、情けねえ。

「何前屈みになってんのよこのバカッ！！」

丁度前屈みになった姿勢が幕のスカートを覗き込もうとした体勢なっていたらしく、鈴の声に気づいた時にはもう、への字になって空中に浮いていた。……つまりはまあ屈んだ所に、蹴りあげを食らっただけなんだけとね。

「ぐっ、うおおっ、……鈴、てめっ、げふう」

食らっただけと良いながら、身体が浮く程の衝撃だ。正直死にそうなくらいいたい。膝についてorzの体勢で見上げようとして、鈴の足で頭を踏まれた。

グニグニと痛くない程度に力を込められている。……いるんだが……この体勢だと広げた足のせいでスカートの中の下着丸見えだぞ鈴？。なんてったってあれだ、港で足置いてかっこつける体勢で俺の頭を踏んでんだから。スカートの端で下着を隠そうとするくらいならやめろよ鈴……

「そっだぞ鈴！一夏だって健全な青少年なのだぞ？……わ、私の下着くらい盗み見たくなるのは必然と言っただな……」

「じゃ、じゃあアンタ、このバカがセシリアのスカートに顔突っ込んでたらどうよ」

「滅殺、だな」

「こええわっ！ 付けんな星を！」

踏まれながら最後の抵抗を試みようとする俺。
そうなのだ、俺はかつてセシリアの脚に顔を埋めた事がある。あの時の再現は困るのだ。

「何を仰いますか箒さん！一夏さん、は健全な青少年なのですよ！？いくらわたくしの魅力的な脚線美に惹かれ顔を突っ込んだとしても、それを咎めるのはおかと違いなのではありませんこと？」

「な、ななならアンタ、この…バカが箒の胸に顔埋めたらどうなのよ？」

顔赤くしてもじもじするくらい恥ずかしいならやめろって鈴！俺もやんわり心が痛いし！。これをご褒美と可言える奴らはすげえな。
…けど俺も千春だったら大丈夫だろうな。

あ、このっ、スカートから手離しやがって！

丸見えじゃねえか鈴！少しは隠せつつの！

俺以外の男子がいたら……あ、ここ女の子しかいなかったっけ。

「それはもう……撃滅、ですわ」

「笑顔でサラッと怖い事言ったって！」

いや、一応男子は他にもいたか。

……あれ？

「シャルルはどこだ？」

さっきまでは確かにいたんだが…さきに行ったのか？。

「やっぱり来たかシャルル。一夏達は？」

「先に帰ったよ、千春」

保健室には、立ち上がっていた千春とシャルルがいた。

「まあなんだ、長話になるかもだから……」

ニヤニヤと笑いながら千春は、フィンガースナップをする。

パチンっ！

「お呼びでしょうかお嬢様」

ドアを引いた音もなく、シャルルの後ろに現れたのは燕尾服を纏った180cmはあるだろう老年の執事。左目にはモノクル（片眼鏡）を付けたその老人は、柔らかな笑みを浮かべていた。

「何か飲み物をお願いできる？」

「畏まりました。少々お待ちを」

そしてまた、引戸を音を鳴らさずに開け、一礼して閉めた。

「……今の人は？」

「うちの執事唯一の『セバスチャン』、倉木順一郎。父様が小さい頃から私に付けてくれた、物凄く優秀な執事だよ」

苦笑しながらベットに腰かけた千春はシャルルにも椅子に座るよう目で促す。

「で、何から聞きたい？」

シャルルの表情が強張る。やはりバレていたか、と大きく溜め息を

漏らす。ニヤニヤしてる理由はこれか、と思い知る。

「単刀直入に聞くよ千春」

「ああ、いいぜ？。皆がいるときに聞いて来なくて助かったからな、大体の事は話すよ」

「ありがとう、千春。……それで、あの紅い『グラデーション』は、ちゃんとエネルギーシールドが発動してるの？」

沈黙、今度は千春の表情が強張った。

「ああ、スカーレット・ペイン『紅き痛み』はシールドが張れない仕様になってる。シールドが発動するとエネルギーがすぐ尽きるからな、回避する事を前提にした高機動特化のモードだ」

「『紅き痛み』って言うんだ、あれ。『紅き痛み』、多分だけど、あれが本来の『グラデーション』姿だよな？」

「……クククツツ…良く解るなシャルル。そうだ、『グラデーション』は本来『モード選択』なんてもの、搭載する予定はなかった。モード選択は後々に搭載したシステムだよ」

千春は自分が愉快になってるのに気がついた。このまま全て話してしまおうかと思っただ程に。

「『モード選択』が…主軸のISじゃあなかったの!？」

「あんなものは『世界』を欺くための隠れ蓑さ。『紅き痛み』……いや、『ペンドラゴン』は本来、完全な第三世代型なのさ」

首につけたチョーカーを軽く突つき、千春は愉快げに笑う。

それに対しシャルルは驚きを通りすぎて唾然としていた。

画期的なシステムをあんなもの、と切り捨てる千春。世界を欺く、とは穏やかではない。

「『ペンドラゴン』の本来のシステムは……『思考可動』。完全なる思考によるISの操縦だ」

あーあ、と千春は内心舌打ちした。打ち明ける相手が欲しかったのはわかるが……と。

「思考可動?……」

「簡単な話しだシャルル。例えば……四肢が潰れようが思考できる脳と心臓があればISを動かせるって寸法さ。本来ISを動かすには、腕を、脚を動かす事が必要だったろ?補助装置により自分自身の身体のようにISを動かせたが、『思考可動』は自分の身体以上の早さで四肢を動かせる。いや、四肢がなくなるとも動かせる……これが『ペンドラゴン』の第三世代型のイメージインターフェースを用いた特殊兵装、『思考可動』だ」

「……それじゃあ、千春」

「ああ、明日は頑張れよシャルル」

あれから話を続け、今は九時過ぎ。もう少しで十時になると言った時間だ。消灯時間は過ぎている。

軽く手を振りながら見送れば、千春は盛大な溜め息をついてベッドに寝転がった。

「お嬢様、よろしかったのですか？」

ティーセットを片付けていた倉木が、その笑顔を崩さぬまま問う。

「大丈夫よ倉木。シャルルは多分言わないし……織斑先生が黙っていてくれれば、外には漏れないわ」

寝転がったまま、『保健室』の外で聞いていただろう織斑千冬に意

識を向ける。

「すまん。盗み聞きするつもりはなかったのだがな」

「そう言うつくせにちゃっかり倉木の紅茶は飲んでるくせに…いつからいたんですか？」

「ご老人がティーセットを器用に片腕で持ってくるのを見たくらいだな。中々美味しかったな」

「お褒めに預かり光栄です」

保健室の開いた扉からはカップをもった千冬の腕が見えた。

「シャルルが気づかないくらい気配を消してたと思ったら…なんで気配を現したんです？」

「いや、おかわりを貰おうと思ってな」

千冬は持ったティーカップを軽く突きだした。どうやらおかわりらしい。

Stage 54 『思考可動』（後書き）

ついにグラデーシヨンの秘密が！？そして次回、ついに一夏とラウラが激突！？

鈴のおばんちゅ画像欲しいな、と思う今日コノゴロ

黒ウサギの軍服が思わぬ好感触。 皆さん軍服好きなんですな

感想待ってまゝ！

「ようやく貴様を滅殺できるというものだ。待っていたぞ、この時を」

「そりゃよかったな。俺も、お前を倒してみたかった！」

学年別トーナメント第二回戦、 ついに俺たちと、ラウラと箒の二人組が戦うことになった。

「一夏、落ち着いてね？」

「わかってるさシャルル。冷静に行けば勝てるんだろ？」

「多分ね」

「1%でも勝てる確立があるなら十分だぜ」

シャルルと俺は横に並び、箒とラウラを見る。

ラウラは左目の眼帯を外していて、箒は薙刀を持っている。二人とも本気だ。こっちも本気で行くぜ！

《ソノフ・セカンドアビリティ
《準単一仕様能力『疾風迅雷』使用可能》

白式が情報を掲示する。

「行くぞ、一夏！」

箒が薙刀を構え、突撃の姿勢を取る。試合開始と共に切り結ぶらしい。

真っ向からの一騎討ち。悪いがそれには応えてやれない。

試合開始のカウントダウンが三を切った。

二、……一、……！

零ッ！

ガチャンッ…ドンッ！！

試合開始と共にラウラの左肩の大型レール砲が火を吹く。
放つは対IS用特殊徹甲榴弾。

「やらせないよ！」

シャルルが俺の前に出て実体重シールドを展開する。
重シールドに徹甲榴弾が突き刺されば、シャルルはそのシールドを
蹴り飛ばしショットガンを展開し爆散させる。

その爆発により生じた爆煙から俺が飛びだし、ラウラに迫る。

「くっ！…私と戦え一夏！」

それに割って入ったのは箒。薙刀を大きく振るい、それを間一髪で
防いだ俺は吹き飛ばされる。

「箒っ！」

地面と激突する直前に体勢を整え、俺は雪片を展開する。

箒はそれを見てニヤリと笑い、薙刀を横に構え、脚部スラスタを
吹かす。

一瞬で近づいて来た箒は薙刀を振り上げ、それを俺に向け振り下ろ
す。

ワンオフ・セカンドアビリティしゅがうじんらい
《準単一仕様能力疾風迅雷、発動》

全身から出露した小型スラスターによる高速機動、そしてスライドした装甲から放出された熱量とエネルギー余剰出力が残像を生み出す。

ブオンツ！！

箒が白式を纏った俺の残像切り裂く。

そう、残像を囿にし背後に回り込み切り捨てる『影討ち』だ。

残像が切り裂かれたの同時に俺は箒の背後から雪片を振り抜いていた。

今では呼び出すのに声を必要としないくらいはやくなった。

「私を甘く見るなよ一夏！」

箒は取り回しの難しい長柄の薙刀を捨て、振り向くと同時に近接ブレードを抜く。

『居合い』だ。その剣速は後から出たに関わらず俺を切り裂いた。

「！？」

俺は上空から迫り箒に向け『零落白夜』を発動した『雪片・千秋』を振り下ろす。

「くうっ!？」

仕留め損ねた!直撃すればシールドエネルギーを根こそぎ奪い去る『零落白夜』を、箒は紙一重で避けた。いや、避けたと言っても直撃をだ。ダメージは与えエネルギーを半分以上奪っただろう。今の一撃で切り裂かれた実体シールドを破棄し箒がまた接近する。

「うおおおおッ!！」

全身のスラスターを稼働させ、光速一步手前の速度で突撃する。『零落白夜』を発動した雪片を突きだして、だ。

キイイイインツツ!!

弾丸の速度を超越した神速を持つての突き。それを箒は、受け止めた。

「きゃあああっ!?!？」

真っ向から近接ブレードで受け止めた箒。近接ブレードは砕け、箒もアリーナのエネルギーシールドに激突したが、一夏は戦慄した。

(……冗談だろ、おい。……なんで亜光速を見切れるんだよ!)

避けようとしていたなら一撃を与えられた。それを箒は真っ向から向かえ打ったのだ。完全に見切れるのは千冬だけだろうと思ってい

た一夏は筈が完全に見切ったのを見て驚嘆よりどこかおかしさを覚えた。

(偶然だ。……絶対に偶然だ)

ともかく筈は武装を一つ失った。シールドエネルギーも切り裂いた。上々の戦果だ。

一夏は意識を筈からラウラに向ける。一步も動かずシャルルの猛攻を凌いでいる。

「……………」

ラウラが俺に目を向ける。その口元はニヤリとつり上がっていた。

お前も来い、相手をしてやる。と目で語る。

「うおおおおッ！」

『疾風迅雷』と『零落白夜』を解く。今の亜光速での突きを見られただろう。見られた以上すぐには使えない。『停止結界』で止められてしまえば、一撃くらって即エネルギー切れになりかねない。今もエネルギーが640あったのが413まで減っている。そう何度も使えない。

『瞬時加速』で俺はラウラに接近する。

ガキーンッ！

ラウラのレーザー手刀と『雪片』が激突する。

「っ……く、調子に乗っていた、という事が……」

アリーナのエネルギーシールドに激突し、壁にもたれ掛かるように倒れていた筈は舌打ちをした。格上の相手である千春と互角の戦いをしたと言っ自身がそのまま傲りになったと自認したからだ。私なら一夏に勝てる……と。それがこのザマだ。

「シールドエネルギーは……94、だと？……一撃食らえば終わりではないか」

打鉄のエネルギー総量は500程度だ。それが一気に400以上削られるとは……アリーナに激突したのも大きいだろうが、やはり『零落白夜』だろう。

「だが、まだ動け……………！……………なんと、動くのもままならんとはな」

箒は思わず苦笑した。打鉄の脚部や腕部装甲からバチバチと電気が弾けていた。

「く……………」

よろよろと立ち上がる。ギギギ……………、と装甲と装甲が擦れあい不快な音を鳴らす。

武装は今無い。アリーナの中心で転がっている薙刀だけだ。

一歩一歩を踏み、箒はアリーナの中心へ向かう。

まだエネルギー切れによる戦闘不能は起きていない。なればまだ戦うだけだ。箒は奥歯を噛み締めた。

「待たせた、シャルル！」

「一夏！篠ノ之さんは？」

「とりあえず戦えそうにはない！」

放たれたワイヤーブレードを弾きながらアサルトライフルを打ち続けるシャルルに近づく。

「そつか！流石一夏だね！」

「『疾風迅雷』を使って無理矢理終わらせたただけだ！褒めらるような終わらせかたじゃねえさ！褒めても何も出ないぜ！？」

六基のワイヤーブレードの猛攻を掻い潜り、もう一度接近したいのだが……。

ドンッ！

「あぶねっ！」

接近しようとするすると左肩のレール砲から徹甲榴弾が放たれるのだ。

そしてまたワイヤーブレードに動きを封じられる。

「ちっ、連続で使うまいつて決めておいて…これしか手がないうんてなっ！」

ワイヤーブレードを一基切り裂いて距離を取る。大型レール砲が俺を捉えるより早く、俺は雪片を構え、発動する。

「疾風迅雷っ！！！」

全身の装甲がスライドし、小型スラスタが出露する。

「ふん、………来い！」

ラウラは金色の左目を見開いてレール砲から徹甲榴弾を撃ち放った。

stages 5 『神速』(後書き)

無理です。千冬姉でも見切れません。 箒やべえ(笑)

さて、箒が脱落し孤軍奮闘のラウラ。でも無双。一夏とシャルルでラウラを倒せるのか!?

感想待ってまゝす

「千春!? 大丈夫なの?」

「大丈夫、許可も得て出てきたから安心して」

アリーナの観客席、空いていた鈴の横の席に千春が現れ座った。腕に巻かれた包帯を見ながら心配そうな目で自分を見る鈴に、千春は嬉しく思った。

「状況は?」

「篠ノ之さんがほぼ戦闘不能ですわ」

「一夏にやられたの?」

「開幕直後に、ね。戦闘ログ撮ってあるけど見る?」

「ありがとう鈴。見せて貰うわ」

鈴が差し出した携帯端末からデータを受信。リアルタイムで更新されて行く動画を再生する。

「へえ…二段構えの『影打ち』か…。…!??……………」

千春の表情が曇る。携帯端末に写るのは一夏の神速の突きを箒が迎

え撃った場面だ。

ピ、ピ、ピ...

ピ、ピ、ピ...ピ、ピ、ピ...ピ、ピ、ピ

巻き戻しては再生し、巻き戻しては再生し.....なにかを確認するかのようにその動作を繰り返す。

「千春さん？」

セシリアの声も聞こえないくらいに集中力で、千春はその動作を繰り返す。そして。

「何を...『視ていた』んだ...」

信じられない物を見たような表情で、千春は視線をアリーナへ向ける。そこでは、激戦が繰り広げられていた。

「こんのおおおおッッ!!」

五基のワイヤー全てが俺を目掛け飛来する。その機動は二次元躍動だ。

徹甲榴弾を切り裂いて突撃した俺を待っていたのは網のように絡めとるワイヤーだった。

「なんで…捉えきれてんだよオツ！」

『疾風迅雷』を発動しているというのに、ラウラは分身に惑わされず的確に俺を狙ってきていた。

「一夏!…うわあッ！」

シャルルが援護に入ろうとしたが、ラウラの徹甲榴弾を喰らい吹き飛ばされる。

「シャルル!!!…のわあッ!?!」

肩を掠めたワイヤーブレードを切り裂いて、俺は飛翔した。

ガチャン、ドンッ!!

距離が離れた途端にワイヤーブレードを納め、ラウラは大型レール砲を用いての砲撃戦に変えてきた。

「行くぜ白夜いッ!!」

『零落白夜』を発動し、俺は地表へ向け加速した。
ラウラが俺に向け右腕を突きだした。……………

来る！。

「A I C? ……なんだそりゃ」

鈴とセシリアからラウラと戦った後に聞いた話だ。

「シュヴァルツエア・レーゲンの第三世代型兵器よ。アクティブ・
イナーシャル・キャンセラーの略。慣性停止能力」

「ふーん」

「ちなみに一夏さん、P I Cはご存じですわよね？」

「……………知らん」

「はあっ!? バカじゃないのアンタ! I Sの基本でしょうが、基本
!! 全てのI Sはこのパッシブ・イナーシャル・キャンセラーによ
つて浮遊、加速、停止、そして同時に空力制御を行ってんのよ。こ
れがないとアンタ、身体が潰れんのよ?」

「あ、どっかで聞いた事あったと思ったならそれなのか」

「アンタねえ……」

「はいはい、漫才はそこまでにして、対策を考えますわよ。……正直、わたくしも実物を見るのは初めてでしたが、あそこまでの完成度を誇っているとは思っても見ませんでした」

「あー、確かに、あたしも同意見だわ。あそこまで衝撃砲と相性が悪いとはね……」

「ところでよ、理屈としては衝撃砲とおなじなのか？エネルギーで空間に作用を与えるっていう……」

「ああ、そうね。大体同じだと思うわ。厳密には違うんですけど、空間圧作用兵器と似たようなエネルギーで制御してるはずよ」

「じゃあよ、アレも斬れるのか？」

「出た、切り裂き魔発言」

「うるせえな！じゃあどうしろってんだよ！」

「それを考えるのがアンタの役目でしょうが！」

「……ごもつとも」

結局、その時は確実な手段で慣性停止能力を破る方法は思い付かなかった。

しかし、千春が気づかせてくれた。

「うおおおおッ！！」

サブ・ライト・ペロシナイ
亜光速での突撃だ。刹那を超越した一瞬の速さ。

しかしそれはラウラの眼前で、見えない鎖に絡め取られ止まってしまった。

やはり、AICを切り裂くことはできなかった。

「貰ったぞ、織斑一夏……」

右腕を突き出したラウラの口元が愉悦に歪む。

徹甲弾を大型レール砲に装填し、それで俺を撃つつもりだろう。いや、この状況でそれ以外があるなら知りたいぜ。

勝ち誇ったラウラを見て、俺はクス、と笑ってしまった。

「何がおかしい？……気でもふれたか？」

「ひでえ言い様だなおい！……つかラウラ、お前気づいてないんだ

な？」

愉悦の表情をしていたラウラに苛立ちが見えた。

「なんだと？……」

「だってそうだろ？……お前、『後ろにシャルルがいるのに』気づいてないじゃないか」

「何！？……ぐあつ！？」

ラウラが振り向くよりも早く、シャルルが放った弾丸がラウラに襲い掛かる。

ガガガガッ！

シールドエネルギーが消費され、なおかつラウラのシュヴァルツェア・レーゲンに衝撃が走る。そこで……不可視の楔がほどかれた！

「お待たせ、一夏！」

「シャルル！この勝負、勝てるぞ！」

そう、今ので確信した。A I Cには致命的な弱点がある。それは『停止させる対象物に意識を集中させていないと効果を維持できない』だ。

千春戦で、折れたブレードがA I Cを発動していたラウラの視界に入った途端にA I Cが切れたのはこれが理由だ。

シャルルの攻撃がラウラの集中力を奪い、俺は解放された。

「この……死に損ないがあツツ!!」

ラウラの咆哮とともに、シュヴァルツエア・レーゲンの大型レール砲がシャルルを捉え、轟音と共に徹甲弾が放たれた。

「やらせるかよ!!」

シャルルの前に仁王立ちした俺は雪片で徹甲弾を叩き切った。

ドオオオンツ!!

両断した徹甲弾が爆発し、俺とシャルルが爆煙に包まれた。

静寂は一瞬、煙幕の中からシャルルが飛び出す。

飛翔しながらシャルルはアサルトライフルをラウラへ向け放つ。

ガガガガガッ…

銃撃が止んだと思ったら、持っていたアサルトライフルが、一瞬にしてスナイパーライフルへと姿を変えていた。

高等技能『ラピット・スイッチ』。武装の量子化、収納、違う武器の展開、の三つのプロセスを、一瞬にしてこなすという離れ業。シャルルが持つ技能だ。

「く!…しかしこの距離ならば我が停止結界で…!？」

左腕を振り上げたラウラは、この時間違えを犯した事に気づいた。

爆煙の中からこちらへ迫る純白の機体。

『白式』が、腕を振り上げた懐へ潜り込んで来たのだ。

…しかし、まだ終わりではない。ラファールをAICで止められずとも、この憎き織斑一夏を仕留めることは容易。もうこいつに多くのエネルギーは残っていない。一撃加えれば充分だ!右腕のレーザー手刀で終わらせる!…。

ラウラはレーザー手刀を展開した腕を突き出した。

ダンッ!…。

カランッ…カランカラン…

鳴ったのは銃撃の音と、落ちた葉莢の音。

「…忘れたの?それとも知らなかったのかな?…僕たちは 二人組なんだよ?」

スナイパーライフルから放たれた弾丸はシュヴァルツエア・レーゲンの腕を弾くには十分な威力を有し、一夏もまた、『零落白夜』を発動するエネルギーは無いが、エネルギーを使用せずに大打撃を与える武装を『今この時』有していた。

それは純白の装甲に不釣り合いな緋色の大楯。まるで、相棒シャルルの腕につけられていた武装一体の大楯を剥ぎ取ったような装備。抱えたそれを腕に付け、その腕を『引いた』

カシユツ…

軽い、空気が抜けるような音とともに破棄バージされた大楯。

その大楯から覗いたのは、リボルバーと杭が融合のような形の武器。単純な威力ならば現IS武装最強と謳われる………巨大釘打ち機パイルバンカー。

六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻グレー・スケール』。通称、

「喰らえ！『盾殺し』！！！」
シールド・ヒアース

一夏は引いた腕を勢いを付け突きだし、パイルバンカーの銃剣をシュヴァルツエア・レーゲンへと突き立てた！

「一夏の言う通り、僕たちの勝ちだね」

シャルルはニコリと笑った。それは天使のような美しい笑顔でありながら、絶望を届ける死神の笑みのようでもあった。

stage56 『負け!』(後書き)

まず皆様に謝らなければいけないことが………いつもの事ながら描写不足で申し訳ないです!(皆様の想像力に頼ってばかり…)

そして第二に、今回の戦闘、自分で書いていながら詰まんないなと染々思いました。

自分ですら面白くないと思った戦闘を書いてしまい申し訳ないです!

反シリアスな私、早く水着回を描きたいがために微妙な戦闘に……

……本当に申し訳ないです!

さて、今回のパイルバンカーですが、銃が使えるならパイルバンカーも外して渡せば使えんじゃね?と思い使いました。パイルバンカーは男の浪漫。やはりパイルバンカーを使うのは股間にパイルバンカーを持つものだけ………って下ネタすみません(笑)

エロを書きたい反動が後書きにまで来やがった………(笑)

ではまた次回。感想待ってまゝす!

ズガンッ!!!

「ぐうっ!?…」

ラウラの腹部に、パイルバンカーの一撃が叩き込まれる。ISのシールドエネルギーが集中して絶対防御を発動して防ぐものの、そのエネルギー残量をこっそりと奪われる。しかも相殺しきれなかった衝撃がラウラの身体を深く貫いた。ラウラの表情は苦悶に歪んでいた。

「これは……セシリアの分!」

だがしかし、これで終わりではない。《灰色の鱗殻》はリボルバー機構により、高速で次弾炸薬を装填する。つまり、連射が可能なのだ。

ズガンッ!

「これは鈴のッ!」

ズガンッ!!!

「これはシャルルの分！」

続けざまに三発を撃ち込まれ、ラウラの身体が大きく傾く。その機体、シュヴァルツェア・レーゲンにも紫電が走る。

「後の三つは……！」

ズガンツズガンツズガンツツ！！！！

「千春の分だああああツツ！！！！！！」

パイルバンカーの連続射撃。その全てを喰らったラウラはアリーナの壁に叩きつけられた。

計六発、パイルバンカーの全弾を撃ち尽くした一夏は、パイルバンカーのシリンダーを出し、薬莖を排出すした。

カランカランカランツ……………。

「俺の分は……………まあなんだ、次回にでも貰うさ」

壁に激突したまま動かぬラウラを一瞥し、一夏は言い放った。

突如アラームが鳴り響く。それは勝利を報せる音ではなく、『緊急事態』を報せる警告音だった。

「何……あれ……」

アリーナ内で起こっている現象を目の当たりにして、鈴が呟いた。

それは観客席にいる多くの生徒の代弁をしたであろう。

「！……なんつーもんを……」

勢いよく立ち上がった千春が苦虫を噛み潰したような表情で呻く。

「千春さんは、あれが何か知ってますの？」

千春の言葉に反応し、セシリアが鋭い目で千春に問う。しかし、それを制し千春がセシリアに手を伸ばす。

「武器を貸して、セシリア！」

その切羽詰まった顔を見て、鈴とセシリアは追求できなかった。

《Valkyrie Trace System》……
…boot、

「あ、っああああっ……!!」

ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。と同時にシュヴァルツエア・レーゲンから激しい電撃が放たれた。

「なっ！……一体なんだ！？……！！」

「一夏！……え…？」

俺もシャルルも目を疑った。その視線の先では、ラウラが……いや、そのISが変形していた。

いや、変形なんて生易しいものではない。装甲を型どっていた線はずべてぐにやりと溶け、どろどろのものになって、ラウラの全身を包み込んでいく。黒を越えた黒、深い闇がラウラを蝕んでいく。

シュヴァルツエア・レーゲンだったものはラウラの全身を包み込むと、その表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のように脈動を繰り返す。

途端、脈動が収まると、倍速再生を見ているかのようにいきなり高速で全身を変化、成形させていく。

泥のようなものは人形の……いや、黒い全身装甲フルスキンのISに似た『何か』になった。

あれは……あれは！！？

「千冬姉の……『暮桜』！？」

かつてモンド・グロツソで活躍した名機。千冬姉のためのワンオフ機。

その形状に酷似していた。暮桜は赤を基調とした機体だ。

そしてその手に握るは『雪片^{いちしき}吉式』

暮桜のための…『零落白夜』を運用するために開発された初代雪片。

俺は無意識の内に『雪片・千秋』を握っていた。

刹那、黒い暮桜が俺の懐に飛び込んでくる。居合いに見立てた刀を中腰に構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。それは紛れもなく篠ノ之流古武術の技、千冬姉が得意とする技だ。

雪片を構えようとした腕が上に弾かれる。万歳をしたような姿になっってしまった。そして敵はそのまま上段の構えへと移る。これは

まずい！！

「！」

縦一閃、落とすような太刀筋の斬撃が俺に襲い掛かる。もちろん腕を引き、刀で受けるなんてことは出来ない。それはもう間に合わない。

斬！…

「ぐうっ！？…」

来るとわかっていいたから、かすり傷で済んだ。

暮桜の放った剣撃を身をよじり無理矢理避けようとして、左肩を少し切られた。

しかし、エネルギーが底をついてしまった白式は光とともに俺の全身から消えた。

「……………がどうした…」

だが、今の俺にはどうでもよかった。

「それがどうしたあああっ！！！」

てめえ、よくも逃げやがったな！？俺と戦ってるのはてめえだ！、偽者の千冬姉じゃねえ！！
それなのに逃げやがったんだ！んなの許せるかよ！！

白式は呼応しない。限界までエネルギーを使いつくし休止している。

黒い暮桜が雪片を振り上げる。

ISすら纏っていない今の俺は死ぬだろう。しかし、俺は目を逸らさなかった。

「一夏！何やってるの！？逃げて！」

シャルルが『瞬時加速』を使って急速に接近してくるが間に合わない。銃弾はISの真下にいる俺に当たるかもしれない、と撃てないようだ。

雪片の刃が俺を捉える。

一拍おいて、雪片が振り下ろされた。

ガチャッ、バシユッ… !。

突如放たれたレーザーを、黒い暮桜は紙一重で避け俺から離れていた。

今のレーザーは……ブルー・ティアーズの『スターライトmk?』!?。俺はレーザーが放たれた方向を見る。

「待たせたな一夏。……助けに来たぜ？」

セシリアのように『スターライトmk?』を構えた千春が俺にウィンクをした。

今の絶対俺にウィンクしたから! ……はあ!? ぜってー俺だし!

「偽物とはいえ、織斑先生が相手か…たく、面倒なことこの上ないな…」

首をコキコキと鳴らしながら『スターライトmk?』を構え治した千春は、『色彩』^{グランドシューン}を青い装甲から黄色の装甲へと変更した。昨日ラウラにもぎ取られたその翼は、パーツが余っていたのか新しい翼が付いていた。

「けど……退けないんだよね！」

千春はライフルモードからマシンガンモードへ変え、レーザーを乱射しながら暮桜へ突撃する。

暮桜が刃を下段に構え飛翔する。

「ちくしょう……俺に力があれば……！」

右腕に待機状態である白式を見ながら俺は舌打ちをする。

怪我人の千春に戦わせるなんて俺は何をやってんだよ！女の子に守られるだけなんてのは嫌だ……守る男でいたいんだよ、俺は！。特に、千春は……！！

「ぐう！？……このっ、バケモンかよ、強すぎ ……きゃあぁっ！！」
「？」

『空中戦』を繰り広げていた千春が押され始め、今では完全に劣勢。『スターライトmk?』を叩き切られ蹴り飛ばされる。

「ちいつ…くやしいが、任せる…しかないか…。箒！、箒！！」

逃げに徹した千春が箒を呼ぶ。

「千春？…何故お前が…？」

気絶していたのか、空を見上げた箒が問う

「怪我はない！？、まだ戦える！？」

箒の質問を制し千春が言葉を続ける。気遣ってられない、焦りが感じられる。

「私は無事だ！しかし…『打鉄』が…」

「これがある！」

千春は『瞬時加速』を使い地面へと加速する。

ガガガガガガガッ！！

地面に激突する瞬間姿勢を起こし、土埃を上げ地面を滑りながら着地した。

「早く乗って、箒！」

滑りながらも『グラデーシオン』から降りた千春が前転して受け身を取り、箒を促す。

「千春！？……く、私ではもて余すぞ！？」

「箒のデータを入れといた！後は戦いながらデータを更新して！」

「私はお前のように器用ではない！自分でも嫌になるがな！」

千春の行動に箒が文句を言いながらも、目の前でズシャア…！と音を立てて止まったグラデーシオンに乗り込む。

グラデーシオンが起動し、灰色の装甲が黄色に染まり、手に近接ブレードを持つ。

「頼んだ！」

「応！」

『グラデーシオン』を纏った箒が千春に向け飛来した暮桜を迎え打つ！

「箒！……くそっ…俺は何も出来ずに…見てるしかねえのかよ！」

箒は戦っている。なのに俺は拳を握るだけしか出来ない。

「白式のエネルギーがあれば……っ！」

歯を噛み締めガントレットを見る。当然、白式は全く反応しない。

「一夏！速く逃げるぞ！」

千春が息を切らし駆け寄って来た。

「……ダメだ。俺は……逃げたくない」

「は？……一夏、ISが動かない以上、攻撃を食らえば死ぬんだぞ？」

「わかってる。……だけど、俺は逃げたくない。ラウラの奴を一発殴らないと気が済まない」

千春の言葉を真っ向から拒否する。千春は俺が好きな女の子だ。だがしかし、その好きな女の子の言葉とて聞けない時がある。

これは俺のプライドの問題だから。

「アイツは俺の数少ない逆鱗に触れた。許せねえ」

ちなみに俺の幾つかある逆鱗の中で最上位に当たるのは、『千春をナンパした』だ。

いやらしい事とか口走りながらナンパした際には全力でボコボコにする。

「……………はあ、…まあ一夏が望むなら応えるさ。急ごつ、幕を待たせちゃ悪い」

「僕のリヴァイブだね？」

「ああ、シャルルのリヴァイブならエネルギーバイパスを通して白式にエネルギーを渡すことも可能だ」

「本当か！？だったら頼む！早速やってくれ！」

「けど！」

シャルルが俺にびしっと指を指して言う。
珍しくその言葉は強く、有無を言わせぬものだった。

「けど、約束して。絶対に無茶しないって」

「善処、……………します」

なんかダメな政治家みたいだな。

「ダメ！無茶したら明日から一週間一夏は女の子の制服で通ってね？」

「え、っ、いやそれは……ああ、もういい！とりあえず頼むシャル！」

恥を忍んで頼む。多分絶対無茶をしそうだから。

「じゃあ、はじめよ。……リヴァイブのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可。……一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」

「おう、わかった」

リヴァイブから伸びたケーブルは籠手状態の白式にと繋がれ、そこにエネルギーが流れ込んでくる。ふつふつと沸き上がる力の奔流。それを感じながら、俺は不思議な感覚を受け止めていた。

(これは…あの時、初めて動かした時と同じ感じだ…)

まるでずっと昔から知っているような、不思議な一体感と懐かしさ。そして新生する世界を垣間見たような悟りの境地。

「……………」

これがなんなのか、とりあえずそれは今はいい。それよりも目の前の事だ。

「もう少しだからね、一夏」

「わかってる。頼むぜシャルル」

両目を閉じ、呼吸を整える。肩の傷の痛みが和らいだ気がした。

ガキインツ!!……。

これを持って十七合、黒いISと剣撃をぶつけあった。

届かない。このままでは届かない

千冬さんの偽者はとてつもなく強かった。迫力や何かはないが、やはり太刀筋は千冬そのものだった。

届かない。こんな力じゃ届かない

かつては早すぎると思った『グラデーション』の反応速度が遅く感じるのだ。

白兵戦特化の『黄色の閃光』イエロー・フライトニングでさえ、今の私の反応速度に付いて来れない。

私は確信していた。

私は強くなった。強くなったのだ。

私に専用機があれば、今では千春すら凌駕出来ると自負している。

そう、専用機が欲しい。そして、一夏の力に……いや、一夏に頼りたい。

だから私は…… 千冬さんの偽者を倒す為に……これ以上の力を欲した。

「千春っ！！」

千春が見上げ私を見たのを確認し、私は飛翔する。

「あの紅い装甲色モトっ ツ、私が乗っていて使えるかっ！！？」

飛来する黒いISの剣撃を回避しながら私は叫んだ。

stage57 『偽物』（後書き）

皆さんお待ちたせしました。遂に学年別トーナメントも佳境！次回で終るか！？

これが終わればエロ回まっしぐら、皆様、よくぞここまで耐えました！あえて言おう、千春は巨乳を越え、爆乳すら凌駕する存在だ！！つまりエロい。

シリアス続きで可笑しくなりつつあります。

では感想お待ちしてます！

「!?!?.....」

千春の表情が強ばったのを俺は見た。

「千春！ 箒には「スカーレットベイン紅き痛み」はっ.....」

「わかってる。けど、そうでもしないと箒がやられる。それに箒なら使えると踏んで、準備は出来てる。..... 箒！ 私に続けて！.....」
code of pendragon「!」

シャルルの言葉を首肯で答え、千春は声を張り上げて叫んだ。

「わかった！.....」code of pendragon「!」

箒が千春に続き、『グラデーシオン』のシステムが作動する。

投影型ウィンドウが箒の視界の隅に現れ、何かの言葉を待つ。

「.....っ、... 『スカーレットベイン紅き痛み』だ!!!」

一度躊躇し、しかし見上げたまま、千春は続けた。

「くっ！……行くぞ、モード選択、スカーレットペイン『紅き痛み』！！」

鋭い剣撃を紙一重で避け、距離を取って箒は唱える。

刹那、黄色の装甲が血を吸ったように紅く染め上がる。

「ぐうつ！？……」

突如流れ込んで来た、膨大な量の情報の奔流を処理しきれず、頭に走る痛みに呻く。

(これが…『グラデーション』の本来の……)

その情報の中で、私は千春や『グラデーション』……いや、ペンドラ『騎士王』の起源に触れた。

これは千春のための兵器だ。千春でなくては本来の力を出しきれない。

そう『身体がぐちゃぐちゃになっても直ぐに再生するような身体』でなくてはこの機体は扱えない。

わかったのだ。本来セシリアや鈴達代表候補生に届かない千春が、何故ラウラと戦って互角に渡り合ったのか……………それは、痛みを恐れず、むしろ痛みを力に変えたから。

常人では耐えられないような加速、停止。そしてどうやらP.I.Cの一部も稼働してない。これでは襲いかかるGで身体が潰れてしまう。しかし千春ならば身体が潰れてもすぐに再生できる。

「……………見える！」

黒いI.Sの剣撃を、先手を打って制する。黒いI.Sが打ち込む前に打ち込み、やがて攻防が逆転する。

「これが『紅き痛み』！……………これならば……」

私は黒いI.Sに一撃叩き込み、距離を取る。刀身で防がれたが、威力を込めた一撃なため、一瞬の隙を作ることが出来た。

「完全な形で鬼札を切れる！」

「完了、リヴァイブのエネルギーは残量全部渡したよ」

その言葉通り、シャルルの身体からリヴァイブが光の粒子となって消える。

それに合わせ白式は再度俺の体に一極限定モードで再構成を始めた。

「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」

「ちくしょう、せめて空へ上がれなきゃ……………」

俺が舌打ちをして空を見上げたとき、俺の視界に影が落ちた。

「だったら、私が空まで運んで上げるわよ？」

フフン、と鼻を鳴らしてどこか偉そうに言ったそれは、俺に手を差しのべた。

「ほら一夏、さっさと乗りなさいよ!」

それは、まだ完全に治りきっていない第三世代型IS『シムロン甲龍』を纏った鈴だった。

「鈴!?大丈夫なの?」

「損傷レベルはBまで下がったわ。それに黙って見てるなんて、あたしも、あいつも嫌なのよ」

千春の言葉にニカッ、と笑って答えた鈴。俺は鈴の腕に乗り、雪片を握りしめた。

「頼む！」

「任せなさい!!」

高速で飛翔する『甲龍』。俺は振り下ろされないように掴まる。

見上げた先では剣撃を繰り出し合う筈と黒い暮桜が見える。

ヒュンヒュンッ… バシユッ!

高速で飛び交うそれは、筈が作り出した隙を正確に狙い、暮桜に標準を合わせレーザーを放った。

「これは!?!…セシリアか！」

「援護しますわ! 筈さんは一夏さんのために突破口を開いて下さいますか?」

四基の青いビット、『ブルー・ティアーズ』が暮桜へ向け迫る。

放たれたレーザー全てを糸も容易く避けていく暮桜。流石は千冬さんの動きだ。

「関心してる場合ではなかったな」

見れば鈴の腕に乗り、一夏が空まで上がって来た。その手には雪片……零落白夜を当てるつもりか！

「突破口…か。その任、任された！」

襲ってくるGに軋む身体を無視し、箒は近接ブレードを上段に構え、暮桜へ向け『瞬時加速』を仕掛けた。

ギイイインッ！！

加速によるGが容赦なく襲いかかる。しかし、奥歯を噛み締めそれに耐える。

暮桜が雪片を上段に構え、直進する箒に向け振り下ろす。

『瞬時加速』中の箒は避けられない……。

一閃。

例えそれが偽物だったとしても、千冬姉の剣技を持つそれは、最強の剣技を持つに等しい。

振り下ろしただけ？馬鹿言え、踏み込みと同時に放たれる振り下ろしは刹那を凌駕する速度で振り下ろされる。

瞬間的な速度なら、『疾風迅雷』と互角だ。

そんな一撃を、箒は『瞬時加速』中でありながら真横に向け『瞬時加速』を使う事により回避した。

『一多方向個別近距離瞬時加速《マルチトリガー・ショートイグニッション・ブースト》』だ。

白式と同じくスラスターウィングを持つ『グラデーション』なれば回避技。

しかし箒は回避しただけでは終わらなかった。

「はあああああッッ！！」

片翼での『瞬時加速』で真横に回避し、剣撃を避けた箒。しかし箒は、さらにもう片翼のスラスターウィングで体勢を整え、脚部スラ

スターで瞬時加速を使った。

イメージとしては反復横とび。横に飛び直ぐ様元の基点へ戻る。そんな感じの動き。

視界から消えたと思ったら真横から奇襲されると言っただ感じだ。

がしかし、簡単に言っただがこれはもの凄く難しい。俺が考えた一多方向個別近距離瞬時加速《マルチトリガー・ショートイグニッション・ブースト》は一方通行だ。真横に避けるだけ。近距離で使えば追撃が難しい。

千春もかつて俺に使っただが、実はあれ小威力の加速ブーストでの擬似的な再現だったのだ。

千春曰く、

「一朝一夕じゃ流石に無理だっけ」

とのこと。いや、擬似的にでも再現するのはどうよ……………。

篤が使ったのは全力の『瞬時加速』だ。

あれが俺の『一多方向個別近距離瞬時加速《マルチトリガー・ショートイグニッション・ブースト》』を近接戦に用いた際の完成形。

「これが…………『瞬時加速・了の型』だッ！」

近接ブレードを振り抜き、暮桜の両腕を切り裂いた篤が叫ぶ。

たしかに、『了』の文字そのまんまの機動だが……なんつーか、必殺技みたいな感じだなおい。

切り裂かれた腕が一拍置いて再生しようと蠢く。

逃すかよ、筈が切り開いてくれた突破口を！。

「今よ、一夏！」

「零落ッ……」

手に持った雪片が青い刀身を展開する。

俺は鈴の腕から跳び、黒い暮桜へと飛び掛かる。

「びゃくやああああッッ……」

咆哮に呼応するように雪片の刀身が煌めいた！。

ブウン……

スバアッ……！！

黒い装甲を切り裂いて、そこから見えたラウラの腕を、エネルギーが切れて一極限定モードすら出来ずに装甲が消えた右手で掴む。

「来い！ラウラッ！」

エネルギーを消滅させられ、崩れゆく黒いES。そこから伸ばされたラウラの腕を引っ張り上げる。

グボッ！……

不快な音を立てラウラから離れた黒い塊。それは重力に引かれアリナナの地面に激突した。

「ふう、助かったぜ箒」

「気にするな一夏」

ラウラを抱えたまま落ちるかと思われた俺は箒が纏う『グラデーション』が伸ばした腕に足を着いていた。あれだ、鷹とかを腕に乗せるような感じだ。

「にしても……」

抱えたラウラの寝顔……気絶してるのは寝顔なのか？。いやまあいい。ラウラの寝顔を見て俺は小さく溜め息をついた。

「ムカついて、一発殴らなきゃとか思ったんだけどな……こんな顔見せられたら、んなことできねえよ」

子供のような、安心しきった表情で眠るラウラは、年相応の少女だった。

「う、あ……………」

ぼやっとした光が天井から降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「気が付いたか」

その声には聞き覚えがある。聞き覚えがある。どころではない。どこで聞こうと一瞬で判断できる、自らが敬愛してやまない教官と織斑千冬だ。

「私は……　っ!？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と軽度の打撲、それにこれも軽度だが骨への多少のダメージがある。しばらくは自由に動けないだろう、無理はするな」

起き上がるうとして痛みを歪めたラウラ。千冬はそれとなくはぐらかしたつもりだったが、そこは流石にかつての教え子。簡単に誘導されてはくれなかった。

「何が……起きたのですか……？」

痛みを堪えながら無理して上半身を起こしたラウラ。眼帯が外されていた左目が千冬を見つめていた。

「……ふう、一応、重要案件である上に機密事項なのだな」

しかし、そう言って引き下がる相手でない事もわかってる。

千冬はここだけの話であることを沈黙で伝えると、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「VTシステムを知っているな？」

「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。過去のモンド・グロツソヴァルキリーの各部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは……」

「そう、IS条約で二年前に追加され、現在どの国家・組織・企業

においても研究・開発・使用全てが禁止されている。それがお前のISに積まれていた」

「……………」

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……………いや願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

千冬の言葉を聞きながら、ラウラはぎゅっ、とシートを握りしめた。その視線はいつの間にか俯き、眼下の虚空をさまよっていた。

あの時…多分取り込まれ意識をなくす直前に何者かから問われた言葉を思い出す。

力が欲しいか？…………と。己の確変を、より強き力を望むか？と。

「私が…………望んだからなのです…貴女に、なりたいた」

ポロポロと瞳から熱い何か零れ出した。

それが涙だとわかったのは千冬がラウラの頭を優しく撫でた時だった。

「きょう…かん？」

「人は誰しも、何かに憧れる。それを悪い事だと誰が言えようか。しかしなラウラ、憧れるだけではダメだ。『お前自身』を忘れては

本末転倒だ」

ポンポンと頭を軽く叩き、千冬はベッドの横に置いてあった椅子から立ち上がった。

「『お前』は誰だ？と問われた時、貴様はどう答える」

「え、わ、私は……………ラウラ・ボーデヴィット」と

「その通りだ小娘。貴様は貴様の道で、私の元までたどり着いて見せる。他者の真似などと言つ安易な方法で生きよつとするな」

そこで千冬はどこか自嘲と諦めを含んだ笑みを見せた。

「でないと…やつ……一夏が怒鳴り込んでくるぞ？」

ドキッ、とした。

「き、教官！」

保健室を後にしようとした千冬をラウラが止める。千冬は背を向けたまま言葉を待った。

「あ、あああいつにつ、織斑一夏に、……………すまなかった…と伝えていただけですか？」

何故か赤くなる顔と、動悸が激しくなる胸を押さえながらラウラは言った。

「馬鹿者、己で伝えんか」

「そつ、そんな！教官！」

ガラガラと音を立てて閉じられた扉にラウラの悲痛な叫びが飛ぶ。

「馬鹿者が……また落としたか」

千冬は溜め息をつきながら保健室を後にした。

トーナメントは事故により中止となりました

と言つのが学園側の発表だった。

「シャルルの予想通りになったわね」

鈴が醤油ラーメンをずると啜る。

「まあある程度予想出来ますしね」

セシリアがパスタをちゅるっ、と食べる。

「そうだねえ。あ、一夏、七味取ってくれる？」

シャルルがうどんの上の油揚げをスープに浸しながら視線の先の七味を欲する。

「はいよ」

「ありがとう一夏」

当事者達がこんなのにのんびりとしていいのか、とどこからか批判が来そうだが、ついさっきまで教師陣から事情聴取されていたのだ。これくらいはゆるしてくれ（ちなみに千春は面倒だからと言ってバツクれていた）

「いやしかし、まさかVTシステムと互角にやりあうだなんてな。箒ってばやつぱ才能あるよ」

醤油ラーメンと餃子と炒飯と言った、中華料理屋フルコースをペロリと食べながら千春は箒に視線を向ける。

「VTシステム？」

聞きなれない単語を聞き、箒だけでなく皆の頭にクエッションマークが浮かび上がる。俺も然り。

「簡単に言えばヴァルキリークラスの人間の動きをトレースするシステムだよ。あれは第一回モンド・グロツソの動きだな、第^二回の『瞬^イ時加速・了の型』に反応できなかったし」

「え？なんで反応出来ないと第一回ってわかるの？」

スープを飲んでいた鈴が首を傾げる。

たしかに、なんでそれだけでわかるんだ？

「いや、一多方向個別近距離瞬時加速《マルチトリガー・シヨートイグニツション・ブースト》なんだが……あれ実はお母さんが先んが初めて見せた『瞬時加速』をその場でコピって、応用として『了の型』で一撃与えたんだよ。まあ母さんは背部ウイングスラストーのない『打鉄』の脚部スラストーで無理矢理やったんだけどね。第二回では見切られてたからあれは第一回のデータだな」

さて、突っ込み所は何カ所でしょうか？

「……………オリジナルじゃ…なかったのか。そうか、だから千冬姉は亜種って……………」

「……………イグニツション・ドライブ…！なんと言っ甜美的響きか！」

「……………子が子なら親はそれを上回るデータラメさですね！」

「コピったって……………ねえシャルル、アンタ出来る？」

「うつぶ。篠ノ之箒ちゃん……だったかしら？彼女、本当にすごいわね？」

アリーナの管制室に現れたマリアは、大型モニタを眺めていた千冬に声をかける。

「貴様がマリア……ふん」

千冬はあからさまに機嫌が悪く、マリアを一瞥すれば不満気に溜め息をついた。

「あら？……偽物とはいえ、自分の技が見切られたのがそんなに悔しいの？」

「ふざけるな。その程度で私が悔しがると思うか？」

「結構負けず嫌いじゃない？貴女。……となると……なにかしら？」

「とぼけるつもりか？……教師用のISに細工した理由と貴様が出なかつた理由を答える」

「うつぶ」

千冬の言葉に、マリアは可笑しな事を聞いたとばかりに笑った。少女のような、あどけない笑みで。

「わからない？それともわからないふりをしてるのかしら？」

「貴様……………」

今や千冬の表情は戦士のそれだ。マリアを戦友ではなく、敵として見ていた。

「篠ノ之箒ちゃん…………彼女のちからを計らせて貰ったわ」

千冬にしか聞こえないような声でマリアは囁いた。

「!!!？」

「随分面白い結果が見れたわ。この数値を見ると、IS適性値理論を信用出来なくなるわねえ」

携帯端末を操作するマリアは苦笑する。篠ノ之箒のIS適性値はC。どちらかと言えば低い物だ。そう、IS学園に入学するには低い物だ。

適性値Bが普通と呼ばれるこの学園に入学出来、入学してからたった数ヶ月で代表候補生クラスのIS操縦者と互角に渡り合うなんてことは可笑しすぎる。

「彼女の何処を見たらIS適性値Cなんて言えるのかしらねえ千冬ちゃん?…………親友の妹さんを、世界から守りたかったの?」

ふと、マリアの表情が慈愛に変わる。全てを慈しむその微笑みは千冬に向けられている。

「……それとも……嫉妬したのかしら？」

クスリ、と笑ってマリアは携帯端末が示す文字を見た。

「私や貴女、IS適性値『S』を持つ者達でさえたどり着く事が出来なかった領域……『SS』へ目覚める可能性を持つ、『彼女』に……」

携帯端末は『S』の文字を示していた。

「偽物とは言え貴女の剣技を凌ぎ切り、あまつさえ攻撃を直撃させた。……その方法が私と一緒にだったのは驚いたけれどね」

クスクスと笑う彼女は、とても嬉しそうだ。

「けど私も彼女が羨ましいわあ。嫉妬、しているわね、私も……
そう、未だ未熟ながらも『未来予知』なんて言う破格の能力を得た……彼女にね」

あの後、ようやく解禁された大浴場でシャルルと裸の付き合いをしてしまったりしたといういろいろな事があったが、その翌日、朝のホームルームにはシャルロットの姿がなかった。

あ、シャルロットって言うのはシャルルの本名な。二人きりの時はこの名で呼んで欲しいらしい。

先に行っていてと言うので食堂で別れたのだが、何かあったのだろうか？。

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入って来た山田先生は何故かふらふらしている。朝っぱらか

らどんなダメージを受けたのだろうか。千冬姉もいないし……

(実は、マリアが山田先生の部屋に泊まると言い出し、飛び火が怖い千冬が一に二もなく了承し、朝までマリアとベッド上で受け攻めを繰り返していたのだ。千冬は本来山田先生が処理する案件を朝まで処理し、こちらはこちらでダメージを受け保健室で仮眠中だったりする)

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、既に紹介は済んでるといいますか……ええと……」

何やら山田先生の説明はよくわからないが、……何？転校生？

クラスのみんなもそこに反応したらしく、一斉に騒がしくなる。今のこの時期、というより今月は二人も転校生が来ているのにまだ来ると言うのだろうか。

一体どうなってんだ？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

え………？この声って……

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ぺこり、スカート姿のシャルロットが礼をする。俺を始めクラス全員がぼかんとしたまま、これはどうもご丁寧にと言わんばかりにぺこりと頭を下げ返す。

「ええと、デユノア君はデユノアさんでした。と言うことです。はああ………また部屋割りの組み直し作業が始まります………」

なるほど、山田先生の憂いはそこにあつたか（実は追い討ちだったりする）

……あれ？……待てよ？

「え？……え！？デユノア君って……女の子だったのおっ！！？」

「おかしいと思った！！美少年じゃなくて美少女だったわけね！？通りで肌がきめ細やかだと思ったわ！」

「って、織斑君！同室だから知らないってことはないわよね！？」

「ちょっと待った！確か二組の子が、昨日大浴場から二人が一緒に出てきたって所を見たって………」

ザワザワザワツッ！

教室が一斉に喧騒に包まれ、それはあつと言う間に溢れ変える。

あ、まずい。まずい気がする。だってこれだけ騒げばシャルロットが女だったって伝わってるはずだ。

で、一緒に出てきた所を見たのは二組の子で………ほら、殺気がこっちに向かって来て………？何故かこのクラスにも殺気が………？。

バコオオオンツツ！！！！

突如、一組の黒板が爆発した。

「iiiiiiiちいいかあああああツツツ！！！！！！」

うわあああああっ！！来たっ！来た来た来やがった！

マジ切れモードの鈴が来やがった！！

黒板が爆発した所から現れた鈴は猫科の動物のような鋭い目を俺に向けて来た。

やべえ、額に青筋が浮かんでやがる！

クラスが喧騒から混沌に変わる。皆、一様に自分の命が危ないと知り、ワー、キヤー、と喚きながら逃げようとする。

「しねええええつ!!」

非固定部位のスパイクユニットが唸りをあげる。衝撃砲の最高出力だ。

死ぬ!マジ死ぬっての!ちくしょう!せめて皆逃げてくれ!

……ああ、最後に千春に告白しとくんだったぜ。

俺が死を覚悟し、走馬灯を見てから数秒、まだ衝撃は身体を襲ってこない。

恐る恐る目を開けた俺の目に入って来たのは黒い装甲のIS、『シユヴァルツェア・レーゲン』を纏ったラウラだった。

「た、助かったぜラウラ、サンキユな。……っていかお前のISもう直ったのか?すげえな」

「……こ、コアは無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー。そうなん　うおっ!?!」

いきなり、である。いきなり腰に手を回され抱き寄せられたのだ。顔がちげえ。

「そ、その、だ。私は貴様に謝るぞ。いろいろとすまなかった。……教官の時のことも、……私が戦いから逃げた時のことも……」

「え？……」

「貴様の声が聞こえた。そう、お前と戦っていたのは私だった。それなのに、私は私でない何かになってしまった……だからそれを謝りたい」

俺が内心で叫んでいた言葉を、ラウラは聞いたらしい。間違えて全周波で喋ってたか？。

「そ、そしてだ。……これは礼だ……」

抱き寄せられた状態から、さらにぐいつと引き寄せられ、あるところか　唇を奪われた。なんつーか男らしいキスだこと。

「むぐうつ！！？」

驚天動地。何が起こったのか俺にわかるように教えて欲しい。箒を始め、その場の全員が……　千春は寝てたい　…あんぐりと口をあけていた。

俺だっしててる。あ、あんぐりしてたら舌いれられた。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「……婿じゃなくて？」

混乱のあまりそんな冷静な突っ込みが出てしまう。俺はもしかした

ら物凄い大物なのかもしれない。
酔でした。

以上、混乱による自己陶

「日本では気に入った相手を『嫁にする』と言つのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を嫁にする」

誰だそんなデタラメ言つたやつは！間違つちやいないが責任者出てきやがれ！

ん？

「あ、あつ、あ……………！」

顔を真っ赤にして口をぱくぱくと動かし、声にならぬ声をあげている鈴。なんか金魚みたいだ。

「アンタねええええツ！！」

ガチィツ！

青龍刀を連結させた鈴が青龍刀を振り上げる。

ガキィインツ！

刃と刃がぶつかり合う！

「どっぴいっしもりよ…アンタ」

「言っただろっ？……一夏は既に私の嫁だ。手出しはさせん」

……あれ？なんでセシリアISを展開してんだ？

「一夏さん？わたくし、少々一夏さんとお話がしたくおもいまして……はやくラウラ・ボーデヴィッツさんの腕から降りてくださいまし」

「いやいや、無理だつて！今身動きとれ……」

カチャッ……

「ほう……動きたくない、と？……」

箒が日本刀を鞘から抜き払い構える。 いやいや、話は最後まで聞こうぜ！

カランカランッ…カシャッ、ジャキーンッ！

葉莢が転がる音とシリンドーが連結する音。

「じゃ、シャルロット？」

後ろを見ればラファール・リヴァイブカスタムを纏ったシャルロットが

「にっっ」

「に、にっっ」

天使の笑顔を見せていた。俺もシャルロットの笑顔を真似て返す。結構自信がある笑顔が出せた。

「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕びっくりしたなあ」

「あのー……シャルロットさん？僕はされたんであつてしたわけではないし、……なぜになぜにパイルバンカーを起動してるんですか？」

「なんでだろうね？」

四人の修羅が殺気を纏う。

「さあ始まりました、一夏争奪戦！実況は私、千春・フレイヤ・ブリュッセルでお送りしたいと思います。さて、解説の山田さん？この完全バトルロワイヤル、誰が勝ち残ると思いますか？」

「ええ！？な、なんで私解説になってるんですか？皆さんやめてくださいーい！縄ほどいてくださいーい！」

涙目になりながら解説席に亀甲縛りにされ、縛りつけられている山田先生。実況はマジックペンをマイクに見立てた千春。面白そうな事を嗅ぎ付け起きたらしい。流石自他共に認める愉快犯。

「お姉様、嫁を頼む」

ラウラが実況席の千春に俺を渡す。いや渡すって……………ん？お姉様？

「ん！ではISファイト！レディー……………」

千春に片腕で強く抱き締められた俺は千春の下乳を顔半分で押し上げてる状態だ。胸に顔を埋めると言っても過言じゃない。実際そうだし。

この重量感と柔らかさはやべええええつ!!

思わず身動きできねえぜ!主に下半身の事情で!!

「グオーーオっ!!」

ここに戦いの火蓋は斬って落とされた。みんな俺を狙って来てるのはなんでさ。バトルロワイヤルなんだろう?……ねえ?。

ドカアアアアッ!!!!

その日のホームルームは轟音と爆音、そして絶え間無い衝撃でクラスが文字どおり揺れた。

グラグラと。

「むーん……」

一言で言えばガラクタの山。しかし目を凝らせばそこらにあるガラクタのそのひとつひとつが現代にあってはいけないようなオーパーッ。

例えば、反重力発生装置とか、粒子変換装置とかタヌキ型ロボットのとか全自動卵割り機とか………ちなみに最後卵割り機、卵をセツトするとは手動だ。

そんなガラクタの山に腰かける女。その名を篠ノ之束。その姿はまた異質。空のように真っ青なワンピースに純白のエプロンと背中 of 大きなリボン。一言で言うなら『不思議の国のアリス』のアリスだ。ご丁寧にウサギの耳までついてる。センサーや盗聴機の類いが内蔵されたハイテク機だがな。

目の下に大きな隈をつくった彼女は、退屈げに溜め息をついた。

「はう〜。しいくんはやく帰ってこないっかな〜」

ガラクタの山に腰かける束はもう一度溜め息をついた。

ぱらりるぱらりるぺら〜

「い、この着信音は！………とっつ！」

ガラクタの山から聞こえたゴッドファザーのテーマに過剰な反応を見せた束はガラクタの山ヘルパングダイブ。ゴチンツ！と鈍い音が

したが気にしない。

「ぶはあ！……もすもす終日ひねもす？ハイ！みんなのアイドル、田む…篠ノ之東だよん！」

電話越しから確かにブチツ、と音がなつたのが聞こえた。

「ああ待つて！待つて箒ちゃん！」

ぐぬぬと言いながら電話を切ろうとした妹を止める。

「……ね、姉さん……じつは」

電話越しから聞こえたのは箒の声だった。

束からは先程までの退屈感など吹き飛んでいた。

「やあやあやあ！久しぶりだねえ箒ちゃん。うんうん、言わなくてもわかるよ？欲しくいだよね？もっちらんあるさあ！君だけのオンラインワン、代用無き物、……箒ちゃんの専用機が！」

箒が息を呑んだのを悟り、束のテンションが更に加速する。

「高性能にして規格外！そして白と並び立つ者！その名は……」

紅椿

レ

Stage 58 『紅いの花』（後書き）

少々急ぎ足になりましたが、これにて学年別トーナメントはおしま
い。

次章からはやっと第三巻に入れます。
いやあ、やはりシリアスは苦手です。

まあ次章からは嫌と言われても日常パートではっちゃけさせて貰い
ます（笑）

あ、でもその前に現段階の設定でも出そうかな。

ではまた次回、感想待ってま〜す！

stage59 『待ち望んだ水着姿』（前書き）

先に謝っておきます。

なんと言うか脳汁垂れ流し状態でニヤニヤしながら書いてました。
私キメエ（笑）

筈との撮影イベントが無くなりそうで怖いのでやっちゃんいました。

Stage 59 『待ち望んだ水着姿』

「うわぁ…すげえ……」

一夏は辺りを見回して小さく呟いた。

上を見上げれば照明が光り輝き、前を見れば撮影スタッフが機材や何やらを声を掛け合いながら手際良く運んでいた。

「千春さん、来ました！」

スタッフの内一人が叫ぶと、喧騒に包まれていた撮影スタジオに緊張が走る。

「おはようございます！よろしくお願いします！」

女性スタッフを数人引き連れ、長い髪をサイドテールに纏めた千春が、黒と白を基調とした際どい水着姿で現れた。

そう、今日一夏は千春の付き添いで水着モデルの見学に来ていたのだ。

事の始まりは学園での他愛ないから話だった。

「ねえねえ千春さん！」

「なんだい谷本さん」

「次号のファンファンに出るってのは本当なの!？」

授業合間の小休憩。学園へ入学前から千春のファンである谷本さんが最新刊の女性雑誌を手に持ちながら少し興奮した様子で、窓際の自分の席で日向ぼっこしていた千春へ駆け寄る。

「ああ、うん。明後日には撮影するらしいよ」

その言葉で、やいのやいのと騒いでいた教室がシッ……と静かになる。

「ほ、ほんと!?!……よ、よかつたらなんだけど、千春さんのツテで次号を速めに買えたりなんか……出来ないかな?」

おずおずと喋る谷本さん。

千春の写真が見れるのか…俺も欲しいな。

「多分出来るよ?」

「ほんと!？」

その声を皮切りにクラス中の女子が騒ぎだした。

「私二部お願い!定価の二倍までなら払える!」

「わ、私は三部お願いします!」

「私も私も!」

と言った具合にだ。

「ああ、じゃあ欲しい人はメモ用紙か何かに書いて渡してくれる?料金はいいから。名前忘れないでね?」

千春が宥めるように言うや否や、女子達はメモ用紙やノートの切れ端にガリガリと一心不乱に文字を書きなぐり始めた。

「そ、そっか、千春ってモデルやってんだっけか(棒読み)」

「ん、まあね。学園に入学するに当たって撮影する機会は減ったけどな」

「へー……そ、そそっだ、俺にもくれよ。親友のモデル姿を見ておきたいからな……」

上手く行った！！題して、『興味深々だけどそれを悟られないよう自然な流れで雑誌を貰おうぜ！』大作戦！！

親友を強調するあたりでストレスで吐血しそうになったのは内緒だ。だがその程度で千春のモデル姿を拝められるってなら安いも。

「なんだよ、信じてくれてねーのかよ」

千春が頬を膨らませ拗ねるように怒った。……………あれ？なんで今ので怒るんだ？

多分アレだ、言い方が悪くて、『ほんとーにモデルやってるのか確認したい』と言うような言葉に聞こえたのだろうか？。

「あ、いやそれは……」

「じゃあ見に来るか？私が仕事してるとこ」

雑誌を貰う以前に嫌われてはかなわない。あわてて謝ろうとした俺の言葉を制したのは千春の言葉だった。

そして冒頭に戻る。

「あらー、千春ちゃん久しぶりねん！」

体格の言いオカマのオッサンが身体をくねくねと動かしながら所謂お姉言葉で千春に声を掛けた。

「久しぶりサブちゃん！ごめんね？ぎりぎりまで予定伸ばしてさ！」

「いいのいいのっ。千春のお願いならなんでも聞くわよ？」

サブちゃんと呼ばれたこの人はどうやら千春の仕事の関係者で親しいらしい。

「で、千春ちゃん。この子が見学に来たって言うお友達ね？」

「ええ、私の親友の織斑一夏。名前は知ってるでしょ？」

「この子があの男の子？私好みの良い男だわ………食べちゃいたいくらい」

熱い眼で見られ、ゾワツと背筋に寒気が走った。これほどの悪寒を感じたのは初めてだった。

あ、ウインクしてきてる。ゾワゾワツ！！

「うふん。じゃあちゃっちゃんと水着終わらせちゃうわよん？……ゴルアツ！撮影始めるぞツ！！」

突然ドスの効いた声でスタッフに怒鳴りつけたオカマさんは、あれやこれと指示を飛ばしたながら時折低い声を出す。

スタッフの人たちは見知っているのか、気合いをいれた声で返し、慌ただしく作業を始め出した。

「カリスマメイクアップアーティストの轟豪参郎トウゴウサンロウ。メイクだけでなく服のカリスマコーディネーターでもあり、女性のそう言った方面のカリスマが付くような職なら全部持つてる人なんだよ」

「す、すごい………人なん、だな」

千春が近づいて来て、豪参郎を苦笑混じりに見ながら説明してくれた。

俺はと言つと、その肢体に目を奪われていた。

それは白と黒を基調としたスリングショット。ブラジル水着などとも言われてる。紐がうなじ辺りから伸び、首元の鎖骨上で交差して下腹部まで伸び、股でまた交差するなんと卑猥な水着だ。しかし、布地は比較的広く、白と黒の二色が卑猥さよりも『妖艶さ』を醸し出していた。

一言で言つなら『エロカッコいい』だろう。

「に、にに似合ってるぜ千春っ」

滾る鼻を抑え、多少どもりながら俺は千春を誉めた。誉めたと言っても本当に似合っていて思わず言葉が出ただけだが。

「ん！。ありがとなー夏っ」

頬をポリポリと掻きながら千春は恥ずかしそうに苦笑し、俺に笑顔を見せてから撮影場所へと小走りで行った。

かっ、可愛いぜ千春っーっ！

撮影中の千春はそれはもう凄かった。

「千春さん、笑顔でお願いできますか？」

「りょーかいつす…んっ」

カメラマンの要望に答え、千春が笑みを浮かべる。
望んでた以上の笑顔を見て、カメラマンが小さく頷きシャッターを
押す。

「じゃあ次は胸を少し寄せてみようか」

「こんな感じっすか？」

……おいちよつとカメラマン、グッジョブなんだが前屈みになるな。

とまあこんな風に、要望に完璧以上で応えてるんだ。

なんと言うか、『プロ』だなあと実感させられる。

「休憩入れまーす！」

撮影開始から既に一時間。微笑んだり儂そつな表情を見せたり、……千春は多くの表情をカメラ納めていた。

「お疲れさま千春」

「あながと。んゝ、次は秋ものの撮影かな？」

ぬるめのスポドリを千春に渡す。ちなみにペットボトルだ。

「秋の？なんで夏前に秋のなんか……」

「ファッションって言うのは流行を先取りしないといけないんだ。だから秋物を今の内に、ね」

人差し指を立てて先生のように千春が教えてくれた。もちろん露出度過多な水着姿でだ。

もう辛抱たまらんっ！

「千春ちゃんっ、次は秋物なんだけどいいかしら？」

筋肉隆々なオカマさんがまたしても身体をクネクネさせながら近寄って来た。

「りょーかいつ、じゃちよっくら着替えてくるぜー夏」

千春は小さく頷くと俺の肩を軽く叩いてウィンクし、更衣室らしき個室へ向かって歩いて行った。

……………みつ、水着が食い込んでるだとおっ！！？（どこが食い込んでるかは皆様のご想像にお任せします）

「さって、織斑くんだったかしらん？」

ゾワゾワゾワッ！！

俺の全身から鳥肌が立つ。この悪寒^{フレッシャー}…奴か！？。

「な、なんででしょうか？」

「んっっ、やっぱり良い素材だわっっ！貴方に決めたわんっ！」

とりあえず視線を合わせないようにしながら聞くと、オカマさんは先程の三倍の速度（当社比）でクネクネし始めた。

「貴方、モデルやらない？」

突然ピタリと動きを止めたオカマさんは俺にそう言ったのだった。

あれから数週間経った朝、刷り上がったばかりと言つ雑誌を、予約していた人に配り終え、千春は自分の席で寝息をたてていた。

「わっ！織斑くん!？」

「え？何々？雑誌？……………あつ！織斑君と千八るんが一緒に写ってる!？」

その一言で喧騒に包まれていた教室がシンツ…と静まり返った。

「ホントだ……ファンファンの新刊に、織斑くんと千春のツーショットがある!」

ざわざわ……ざわざわ……

ガタツ…… ! x 4

「なん……だと?」

「なっ!?!……一夏さんとのツーショットですって!?!」

「え?雑誌に一夏が載ってるの?」

「お姉様と私の嫁のツーショットだっ!?!?……こちら
ラウラ・ボーデヴィツヒだ。クラリツサ、『ツーショット』とはど
ういう意味だ?」

ざわつく教室内で音を立てて立ち上がる四人。千春が配っていた雑誌を持つてる近くの級友の席にくらいつく。

「うわーっ、織斑君カッコいい!」

「ここの言う服も似合うねっ、燕尾服とか着たら超似合うかも!」

キヤーキヤーと騒ぐ女子達を他所に、ツーショットの写真を見た篤が真剣を手に握り、俺を見た。

「…き、切るっ！」

カチャツ…。

「何の脈略なく刀を抜くなって！」

「な、なぜこんなにも爽やかな顔でツーショットが撮れている！？
う、うう腕を組みながらっ！」

そう、俺と千春のツーショット写真は女物、男物の両方の秋物の服を着た俺と千春が、恋人のように仲睦まじく腕を組んでるところが写っていたのだ。

「ばっ、バカっ！俺だって緊張しまくったんだからな！？」

腕は胸に挟まれるわ顔は近いわまつげは長いわ良い香りをするわ緊張してたのバレて久しぶりに頬を指で突かれてもう千春のかわいさが爆発するし、もうね、アレだ、生殺しだったんだ。

「む、そ、そうか………ならば私とも腕を組んでツーショットだ！」

「いやその理屈はおかしい。なんで俺が…」

「嫁よ！お姉様は兎も角愛人より私と先にツーショットだ。なんでも『ぷりくら』なる媒体があり、そこではかっぷるがツーショット写真を撮ると聞いた！」

「な、何を言っていますの！？旦那さ… 一夏さんはわたくしとツ
ーショットを撮るのですわ！」

「ぼ、僕は…その、最後までも良いからね？。一夏とツーショット写
真が撮れるなら…って、何を言ってるんだろっね僕はっ」

話が…勝手に一人歩きしていく……

「えー！ズルいズルい！私達だって織斑君とツーショット撮りた
ーいー！」

「そっだそっだー！専用機持つてるからってズルいぞー？」

教室がガヤガヤと騒がしくなり、対に奴が現れる。

「こんのバカ一夏ッ！何千春と二人だけでそんなことしてんのよ！
！」

前に鈴が壊した黒板を、急場凌ぎだが板で修繕していたのを、怒り
に燃える鈴が突き破って現れた。板での修繕だったので一組の話は
丸聞こえだったのだろう。……つかまた俺が修繕すんのか？

ガラガラッ！

「大体あんたは… ヒッ!？」

俺の襟を掴み上げた鈴の表情が青を通り越し、一回りしてまた青になった。

その視線はHRのチャイムが鳴るよりも早く現れた千冬姉。その眼はただ一点、俺の襟を掴む鈴と俺だけだ。何故かって？

「……」

誰一人として騒いでいないからだ。いや、違うな。先程までは騒いでいた。しかし、千冬姉が教室に入ってくる時にはどんなに騒いでいても自分の席に姿勢を良くして座っているのだ。

見る、箒やセシリアなんて風格すらただようほど澄まされた姿勢で座っている。シャルロットはニコニコと、ラウラは自分が持つ装備の点検。皆一様に『私は騒いでませんよー』と言った空気を出していた。

「……もうSHRショートホームの時間だ。自分の教室へ戻れ……」
鳳鈴音

絶対零度の無表情。おびただしいほどの量の殺気に晒され、鈴は生きるのを諦めた。

それもそのはず、鬼など生温温い。今日の前に立つは、悪鬼羅刹の

修羅の王。

小娘如きが相対することが烏滸くはがましい殺戮の武神。

その一言で、鳳鈴音の下着が濡れた。

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、でなければ……わかるな？」

それからの鈴の行動は早かった。

俺から離れ、股をスカートの上から抑えて教室から走り去っていった。

あれ？前にもこんなことあったような……。

「さて、雑誌を読むのは構わないが騒ぐな。これよりSHRを始める」

騒動の原因はバレてるようだ。千冬姉が教壇に立ち、出席簿を振り上げた。

「いい加減起きろブリュッセル！」

「ぐえっ」

スッパーンッ！！

千冬姉から放たれた出席簿は千春の頭を強打し、クルクルと回転しながら千冬姉の手に戻っていった。相変わらず人から大きく外れた人だ。

「今日の一、二時限目は来週に迫った郊外特別実習期間についての諸々だ。重要な件なので聞き漏らすなよ？それと織斑、今失礼な事を考えたな？」

スッパーンツ！

千冬姉が俺を出席簿で叩いた後、クラスを見渡し、意見はないかと無言で問う。

「ではSHRを終わる。各人有意義な一日を過ごせ」

そうして、今日のSHRは終わったのだった。

stage59 『待ち望んだ水着姿』（後書き）

皆さんおはこんばんちは！前話が一万文字越えしてて驚いた夕ピオ力です。

約二話文…私メチャクチャ頑張った！と自分で自分をほめて……

…シリアスを終わらせたいだけだった（笑）

さて、当分日常パートです。お待たせした買い物イベなども豊富にするつもりです！皆さんの意見（妄想）など採用したイベントもありますので必見です！

では、感想待ってます！

「いやあ、にしてもよく晴れたよなあ」

週末の日曜日。天気は快晴、すんばらしい。

来週から始まる臨海学校、いや、郊外特別実習だったかな? まあそれの準備もあって、俺はある女子と二人で街に繰り出していた。

その女子というのが

「……………」

何故だか仏頂面のシャルロットなのである。

チュンチュン……………。

「ん……………」

窓の外では早く入れるとばかりに朝日が差している。また、早く起きると言わんばかりにスズメが鳴いている。

(後五分、後……五分だけ……)

このまどろみ延長は至福の時である。おそらくこの穏やかな時間を楽しまない人間はいないだろう。

むじゅっ。

(……?)

むじゅむじゅっ。

手を伸ばそうとした俺の手を遮ったのは、何かとてつもなく柔らかいにか。

(はて、この感触はなんだ?……こんなすべすべしてて、やわからで揉みごたえがある物体、布団の中にあっただけ?)

しかし、今は未知の探求よりもまどろみタイム。この心地よさを放棄するなど出来ようか?出来ねえよ。

(あー、しあわせだ)

なんと言ってもこの未知の物体、揉んでるだけで気持ち良いのだ、
なんだか良い匂いもするし…

もみもみもみもみ……。

「ひゃんっ!」

おい、おいおいおい。今、確か

に俺のものでない声が聞こえたぞ？

「ん…………ふう」

シュル…ギユツ。

待てい。今度は背後から手が俺に絡み付いてきやがった………何か予感めいたものが俺の脳裏をよぎる。効果音はもちろんピキーン！だ。

かばっ！ と布団をめくる。と、そこには

「ら、ラウラにつ、千春うっ！！？」

一糸纏わぬ姿の二人の美女がいましたとき。

いましたとき、じゃねええええっ！！

「ん？……なんだ？……もう朝か？」

「ば、バカ！隠せ！」

むくりと起き上がったラウラに布団を被せる。……千春はどっちらって隠そう。

(「ここのままでも……って何考えてんだ俺は！？」)

俺はシャルロットがいなくなって空いていたベッドから布団を持つ

てきて、空いていた筈のベッドがぐちゃぐちゃになってたのは何で
だろうか、と千春の裸を意識しないよう思考しながら千春の肩から
足に掛けてしっかりと被せた。足やらなにやらが布団から出てたら
俺の理性が耐えられんからしっかりと。

「おかしな事を言う。夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ？」

「それは確かにそうだな……って違うわ！服着ろ、服を！なんで裸
なんだよ！千春も！」

俺の混乱はそっちのけ、ラウラは一度目を擦るとそれだけでいつも
と同じくキリツとした顔立ちになる。こいつ、地味にすげえ。まど
ろみタイムを放棄しやがった。

って、今はそんな事をいつている場合ではない。そうこうし
ているうちに、ラウラ
のほうから口を開いた。

「ベッドで裸で寝るのは私のライフスタイルだ。御姉様にその事を
話したところ、御姉様も裸で寝たのだ」

「と、とりあえずグツジョブと言っておこう。で、なんで二人そろ
って俺のベッドに潜り込んで来てんだ？」

「日本ではこういうおこし方が一般的と聞いたぞ。将来結ばれる者
同士の定番だと。……しかし御姉様はそっちのベッドで寝ていたは
すだが？」

なるほど、人肌恋しくなったのね。それはともかく、

「お前に間違った知識を教えってるのは誰だよ」

「しかし、効果はてきめんのようだな……し、しし下の方も起きた
だろう？」

「？」

ラウラの視線が俺の目から下腹部まで下がったのを見て、釣られて
俺も下を見る。

……。

「うわぁっ!?!?」

朝の生理現象が発動してました。

「ふふ、そうなっていると、男は欲情してるらしいな?」

「ぐっ……おお!?!?……これは、ただの……いでっ、いででででっ
「!」

ラウラの腕が延び、俺はベッドに寝かされ、いわゆる腕に間接技を仕掛けられた。

「つええっ」

「お前はもう少し組技の訓練をすべきだな」

くっ、言い様がまるで千冬姉だ。さすが元教え子。目線の冷たさまで似ている。

「し、しかし、そうだな……。ね、寝技の訓練をしたいというのなら、私が相手になってやらないでもないが………」

「ば、バカ！女の子がそんなのと口にすんなって！」

「ほう。お前の口から言いたいのだな？よ、よかるう。こいつ」

「だーっ！そう言うことじゃねえっつもの！」

俺がジタバタと暴れても、ビクともせず間接技を決めていたラウラが突然腕をほどき、そのほどいた腕を胸や下腹部を隠すような位置にする。

俺が溜め息混じりに起き上がるうとした時、二つの衝撃が走った。

「一夏、私だ、朝稽古を始めるぞっ?」

一つは俺の部屋のドアにドンドンと荒いノックが、

もう一つは、

。

「ん…… ふぁ……い〜ちかつ………うん、…だぁいすきい」

なんか溶けてしまいそうなほど甘い声が耳元から囁かれた俺に衝撃が走る。

………え?あれ……今、いまいなんて!!!!?

なんて言った!?

脳内一夏A:

起き上がるうとした俺を起こさんと、身体を絡めて来た千春が俺の耳元で愛を囁きました!

だよなっ!?!そーだよな!?!聞き間違いじゃねーよな!?!?

脳内一夏B：
やや乙女チックな声の高さでしたが、確かに千春の声です！しあわせボイスです！

甘く蕩ける千春のボイス、確かに聞いたな野郎ども！？
今までよく耐えた、我が精鋭達よ！長く険しい忍耐の時は終わった！そして、今ここで千春の想いに答え、『恋人』になる時が来たのだッ！

嗚呼、長かった。この時を、我等は待っていた。あの桜の花びら吹雪く朝、彼女と逢った時からの夢……千春の笑みを見た時から夢見た関係！

そう！『恋人』だあああああつ！！！！

諸君、私は千春が好きだ。

諸君、私は千春が好きだ。

諸君、私は千春が大好きだ！

私服の千春が好きだ。

制服の千春が好きだ。

水着の千春が好きだ。

ISスーツ姿の千春が好きだ。

ドレス姿の千春が好きだ。

メイド服を着た千春が好きだ。

和服姿の千春が好きだ。

ゴスロリ姿な千春が好きだ。

家庭教師のようなぴちぴちのタイトスカートにYシャツ姿の千春が好きだ。

学校で、街中で、ビル街で、公園で、山奥で、砂浜で、海原で、家

の中で、湖が見える静かなコテージで、百万ドルの夜景で、この地上で行われるありとあらゆる千春とのデートが大好きだ。

店頭にならべたお菓子の数々が、千春の天使のような微笑みと共に纏めてお買い上げされるのが好きだ。

空中高くジャンプし放り上げられた千春の胸が、重力に引かれ左右非対称に弾んだ時など心がおどる！

大型バイクを操る千春の、スラリと長く伸びた綺麗な足が好きだ（千春は15歳です）。苦手な虫に怯え、悲鳴を上げて椅子からから飛び出してきた千春を、抱き締めようとして押し倒された時など胸がすくような気持ちだった。

新聞紙を丸くし構えた千春の爆乳が、転んだ拍子に虫を潰すのが好きだ。恐慌状態の千春が既に息絶えた虫を何度も何度も新聞紙で叩いてる様など感動すら覚える。

虫がついた服を突然脱ぎ出し裸になる様などはもうたまらない（主に俺が）。泣き叫ぶ千春が俺の降り下ろした手の平とともになでなでされ安心したような声を漏らし、安心してからか泣き出すのも最高だ。

哀れな軟派野郎どもが雑多な声かけで健気にも千春に話しかけてきたのを、千春の一言で男の自信を木っ端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える。

意地悪モードの千春に滅茶苦茶にされるのが好きだ。

必死に守るはずだった千春の膝枕が鈴に取られた時などはとてもとても悲しいものだ。

爆乳の質量に押し潰されて呼吸困難にされるのが好きだ。こちょこちょをしたがる千春に追いまわされ犬の様に地べたを這い回るのは快感の極みだ。

諸君、私は恋人を、天使の様な恋人を望んでいる。

諸君、私に付き従う大隊戦友諸君、君達は一体何を望んでいる？
更なる千春を望むか？

情け容赦のないベタな様な展開を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし、三千世界の男達を殺す、夫婦の様な恋仲
を望むか？

『千春！千春！千春！』

よろしい ならば恋人だ。

我々は渾身の力をこめて今まさに千春の胸を揉みしだかんとする握
り拳だ。

だがこの親友関係を二年もの間堪え続けてきた我々にただの恋人で
はもはや足りない！！

ラブラブを！！ 一心不乱のイチヤイチヤを！！

君らはわずかに一個大隊 千人に満たぬ視聴者に過ぎない。だが諸
君は一騎当千の古強者だと私は信仰している。

ならば我らは諸君と私で総力100万と1人の軍集団となる。

我々を性欲の鬼とし眠りこけている千春を優しく起こそう。髪の毛
を撫でて優しく囁き、眼を開けさせ想いを伝えよう。千春に恋人の
キスの味を知らしめてやる。

千春に我々の心の臓の鼓動の音を教えてやる。

天と地のはざまには千春の常識では思いもよらないエッチな事があ
ることを教えてやる。一千人の野郎の変態集団で、世界を萌やし尽
くしてやる。

しかーし、いくらこんな状況でも、箒も人の子だ。話し合うことで理解を深め誤解を……。

「ちっ、ちがつ、違うんだ箒！これにらわけg（ry）」

「無作法な奴だな夫婦の寝室に」

あ、弁解フラグが叩き折られた。

「ふ、夫婦うツ!？」

ブワッ！と箒の周囲に紅いオーラが溢れ出すのを俺は見てとれた。そして死期をさとした。

「こ、この不埒者がああッ!!!!!」

箒が振り上げた木刀は神速の域に達していたとだけ記しておこう。では、アデュー。

「畜生、朝からヒデエ目にあつたぜ」

「お、お前が悪いのだ！みすみすベッドに入り込まれるなど！」

ところ変わって食堂、あれから起きた千春が興奮気味の箒を落ち着かせてくれたらしく、気絶から目覚めたら箒から謝罪を受けた。（すまなかつた、の一言なのだが箒にしては随分と珍しい）

で、いつもよりも短い朝稽古を終え食堂に着いたわけだが……。

「やっぱりラウラはSIG P220なんだ。後期型の」

「やはり使い馴れた物が一番なので。御姉様の装備は？」

「私のサイドアームはMA・TE・BA M2006。メインアームは基本的に有るものを使う主義なの」

「私のメインアームはG36です」

「良いよねG36！スナイプ用にカスタムされたSL-8とか私好きだよ？」

「やはり！御姉様は我がドイツの銃がよく似合つと思つていた！」

なんか隣の席の二人が楽しそうに物騒な話をした。

なんかゴトゴト音がするし……俺は好奇心に負け、聞いて見るとにした。

「千春もラウラと、銃が好きなんだな」

「私は銃、というより武器の類いが好きだな」

「お、一夏も興味ある？……つと、一夏にはベレッタとかがいいかな？ジャムし難しい」

胸元のボタンを外し、胸の谷間から幾つか出した銃の中から、全体的に黒い色の銃を渡された。

「あ、ありがとう」

苦笑するしかなかった。つか胸の谷間から銃が出てくるとか一体どうなってるんだ！？今すぐ説明してやりてえぜっ！

「箒はやっぱあれだな、日本刀が合うよな！そつだ、今度真剣持った姿写真に取らせてよ。お父さんもお母さんも古き良き日本って感じのが好きでさ。侍とかは大好物なんだよ」

「噂に聞いたラストサムライと言うやつか。教官ほどではなかったが、貴様の技量も中々だったな」

ラウラの言葉は朝稽古を見たからの感想だろうか。俺と箒が打ち合
い始めてから少したって武器談義になっただらしい。

「ふ、ふん。……ち、千春。写真はその…苦手だな。すまん」

ラウラを一瞥した後、千春に軽く謝った箒。ラウラにまだ冷たいな
箒。

「四人とも早いね、まだ七時前なのに」

遂に千春がスナイパーライフルを胸元から取りだし始めた時、円卓
テーブルの俺の正面に現れたシャルロットが今日も柔らかな笑みを
見せながら現れた。

「おはよう、シャルロット。俺たちは五時起きだからな」

「おはようシャルル。ねえねえ、シャルルが良く使う銃って何？」

「シャルロットか。メインアームはやはりF A - M A Sか？」

「うむ、おはよう」

四者四様の挨拶。あまりのバラバラ具合にシャルロットも苦笑だ。
千春とラウラの質問は似かよってるがな。

「僕はP・90かな。扱い易いしね」

椅子に座りながらも律儀に答えるシャルロット。持ってきたトレイの上にはサラダを挟んだサンドウィッチだ。

ちなみに俺と篤は和風朝メニュー、ラウラは洋風の朝メニューだ。千春らシャルロットと同じく軽食として個別で頼めるサンドウィッチを山盛りとモーニングコーヒー。

「おお、確かに言われてみればシャルルらしいな」

「確かに表紙とかで持ってそうなイメージがあるね」

二人は納得したらしく、自分の銃を弄りながら銃器の話に没頭していく。ちなみに千春がシャルルと言ってる理由は、単に馴れてしまったかららしい。書く言う俺もたまに素でシャルルと呼びそうになるんだよね。

ところで呼び名で思い出したが、皆さん知りたがっているであろう御姉様の呼び名の秘密、どうやらこれも『嫁』発言に関係するのだ。ラウラ曰く、日本では気に入った相手、とくに相手の身長が上だったりする場合には『兄又は姉』と呼ぶらしいとのことだ。相変わらず間違った知識を与えてるのは誰だ。

「……………ご馳走さま、ではな一夏」

「おう、てかいつもはええなおい」

両手を合わせて立ち上がった筈のトレイは綺麗に完食してある器と箸だけだ。

「篠ノ之さんはご飯食べるの早いよね。ちゃんと咀嚼してるのに…」

「あいつ、飯の最中はあんま喋らないからな」

ズズ…と味噌汁を喉に通す。朝ご飯はやっぱり白米と味噌汁だよな。

「あ、そうだ。一夏、水着買ったのか？」

一風変わった形のリボルバーを胸の谷間にしまいながら千春が思い出したように聞いて来た。

「ん？……ああ、そういや臨海学校で使うっけか。ち、千春は水着決まってるのか？」

「私は撮影の時買った水着があるから」

あ、あのエロい水着かっ！？ 至近距離で迫られて耐えられるか俺の理性は！！？

「あ、そうだ。シャルロットも水着持ってなかったんだよな？」

「え、あ、うん。僕は最初男として入学したから………」

シャルロットの表情が少し暗くなる。まだ気にしてたのか……。また話が逸れるが、シャルロットが男として入学した事は、実は世界ではあまり知られていない。知っていても各国の首脳人程度だ。

突如として現れた二人目の適格者に大騒ぎ状態だったIS国際委員会に知識をが待ったを掛け、報道と情報規制をかけたのだ。おかげでデュノア社は潰れなかつたしシャルロットは学園にいれるので良いこと尽くしだ。

また、デュノア社に対し、シャルロットとの接触を控え、無理な命令を下さぬよう千春が取り計らったらしい。

「たかだかISの設計図、もし一夏が私の立場なら、大切な友達のためなら捨てれるだろう?」

とのことらしい。相変わらず千春はすげえと思わされるぜ。

「じゃあよ、シャルロット。昼前くらいに二人で水着買いにいかないか?」

「ふえ!?ふ、ふふ二人で!?……うんっいく、僕イクよ一夏っ!」

そして冒頭の少し前に戻る。

「ね、ねえ一夏。なんでぼくだけ誘ってくれたの？」

モノレールに乗り、窓から見える海を眺めていた俺に、シャルロットがもじもじとしながら聞いて来た。

「ん？……だって水着持ってなかったんだよな？俺もないからついでに、と思ってさ」

「っ、っ……」

「？」

「そ、そんな事だろうと思ったよ」

「っ、っ」

どうやらシャルロットは機嫌を悪くしたらしい。……理由はわからないが。

大変ながらも待たせしました。

演説の改変で手間取り遅れてしまいました(テヘっ)

さて、次回からお買い物編!皆様ほんとーにお待たせしました!

そして『クアンタ』さん!(名指しですみません)クロスのお返しをさせていただきますよ!?!?こっご期待ください!!(笑)

では感想まっつて〜す!

PS、

よかつたら皆様の好きな銃を教えてください。私の好きな銃はやはりマテバM2006ですね(笑)

「いやあ、にしてもよく晴れたよなあ」

週末の日曜日。天気は快晴、すんばらしい。

来週から始まる臨海学校、いや、郊外特別実習だったかな？まあその準備もあって、俺はある女子と二人で街に繰り出していた。

その女子というのが

「……………」

何故だか仏頂面のシャルロットなのである。

「なあおい、なんで怒ってるんだよ……………」

「別に、僕は怒ってなんかないよ？」

嘘つけシャルロット。頬を膨らましてそっぽ向いてる姿は明らかに怒ってんじゃないか。

「なあシャルロット……………」

「……て、手を……握ってくれたら……許してあげるよっ」

「ああ、なんだそんなことか。ほい、はぐれたら嫌だからな」

「……だと思ったよ」

何かを諦めたようにシャルロットは小さく溜め息をついた。

「……………」

「……………とほほ」

駅前へと向かって歩き出す一夏とシャルロット。鼻唄混じりに歩いているのが一夏だ。

そんな二人の姿を物陰から見つめる二つの影があった。

二人が青になった横断歩道を渡って人混みに消えると、頃合いとばかりに茂みから姿を表す三つの影。

ひとりには躍動的なツインテール。もう一人は優雅なブロンドヘア。そして残りの一人は艶やかな黒髪のポニーテール。

とどのつまり、鈴とセシリアと筈だ。

「……あのさあ」

「……なんですか？」

「……なんだ？」

「……あれ、手え握ってなかった？」

「……握ってましたわね」

「……握っていたな……」

「そっかあ、やっぱりそっかあ………あたしの見間違いでもなく、
白昼夢でもなく、やっぱりそっかあ………」

握りしめた拳はIS既にISアーマーが部分展開しており、準戦闘
モードに入っていた。

「よし、」

「殺すか」

「射殺ですわ」

鈴に続いたのは篠ノ之家に代々伝わる名刀を鞘から抜いた筈と、こ
ちらもISアーマーを部分展開し『スターライトmk?』を構えた
セシリア。三人とも、目のハイライトが消えていた。

三人は不適な笑みを浮かべ雑踏へ消えた一夏を……
として気づいた。

追おう

「しまったっ、見失ったぞ！」

「し、しっかりしてくださいまし鈴さん！」

「あっ、あたしのせいなの!？」

そう、一夏を見失ったのだった。

「ふふふ。聞いたよ聞いた! シャルつちと織斑くんの買い物デート! これはこれは面白くなりそうだよ!」

「くふふ。まさか水着を買いに着てこんな面白いイベントに遭遇するなんてっ」

「いいな、織斑くんのデートっ! 私もしたいな」

「仕方ないって、キヨ。私達は所詮モブキャラ、ヒロイン昇格はあり得ない人種なんだから」

「……いいなあ、ヒロインは」

「何故そこで私を見るのだ？」

一夏とシャルロットの会話を盗み見ていた篤、セシリア、鈴達三人を更に盗み見ていた五人の少女達がいた。

銀髪の隻眼美少女軍人ラウラ。

千春と並ぶ愉快犯。一年一組女子おバカ四天王に名を連ねる田島、リアーデ、岸里。

そしてシヨートヘアのキュートなハンドボール部員、趣味はスポーツ観戦とジョギング。スポーツ系美少女の『相川清香』女史。

ラウラ以外の四人は各自私服なのだが、ラウラだけは制服だ。

「で、どうするどうする？」

「作戦なら、アルわ」

「流石リアーデ！頼りになるっ！」

「む？……作戦だと？市街地戦か？」

「むしろ追走戦ね。バレたらアウトの」

「隠密行為なら任せて貰おう。私はその手の作戦もこなせる」

「じゃあ、らうつちには織斑くんを見張って貰って、私達はあの三人の監視、抑止。きっしー、トランシーバーは？」

「もちもち、あるよん！」

「……なるほど。読めたわりアード、そう言うことね？……じゃあ私は遅れる事を伝えないとっ」

「私は何をすれば良いの？」

「キヨには織斑くん達の行く先に行って貰いたいわ。多分水着を買っただろうから」

「ほう、トランシーバーだけでなく地図まで用意してあるのか。中々手練れてるな」

「ふふ、私達は伊達に『お馬鹿三騎衆』と呼ばれてるわけじゃないのよ？……ではこれより、作戦名『デルタフォース三角関係』を発動するわ」

「「「「 おおおおっ！ 「「「「

かくしてここに、第三の勢力『水着買いに来たけど面白そうな事が起こってるから私達も介入しよう』が誕生した。

「えーっと、水着売り場はここだな」

俺とシャルロットは駅前のショッピングモール、その二階にいた。

交通網の中心でもあるここは、電車で地下鉄、バス、タクシーと何でもござれの揃い踏み。市の何処からでもアクセス可能、そして何処へと可能なのだ。

そして駅舎を含み、地下街全てと繋がってるのが当ショッピングモール『レゾナンス』。

上三階、下二階の計五階のこのショッピングモール、食べ物は欧・中・和を問わず完備（しかも店の種類が豊富）。衣服や量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。

その他にも各種レジャーはぬかりなく、子供からお年寄りまで幅広く対応可能。

いわく、『ここで無ければ市内にはどこにもない』と言わしめるほどだ。

地味に… いや、派手にスゲー。

ちなみに駅と完全にくっついているここを『駅前』と言うのはなんだか不思議な感覚なんだが、昔からここは『駅前』なので仕方がな

い。中学の時はよく弾と鈴、千春との四人で放課後繰り出したものだ。ちよつと懐かしい。

「じゃあ、男と女は売り場が違うし、いったんここで別れるか」

「あつ……」

ぱつと手を離したら、何故だかシャルロットは妙に心残りがあるような声を漏らした。

その後も、じーっと俺の方を『欲しいものがあるけど中々言い出せないこども』の顔で見つめてくる。

「えーっと、どうかしたか？」

「あつ、ううん。なんでもないよ」

「そつか。じゃあ、とりあえず三十分後にまたここで」

「うん、わかった」

こくと頷いてシャルロットは水着売り場に向かう。色とりどりの水着がディスプレイされてるそこは、なんだか見るだけで南国気分になりそうだった。

「と、イカンイカン。俺も自分の水着を選ぶか」

俺が男物の水着売り場へ歩を進めようとした時、それは現れた。

「おっ、一夏じゃん そう言えば水着を買ったっけか？」

「ちっ、千春！？」

白のキャミソールにジーパンと、彼女が着れば活動的でありながら
艶やかさが増す姿の千春が現れた。

「そだ、一夏の水着、選んであげよっか？」

にこやかスマイルと共に……………

。

「第一段階は完了。ちはるんと織斑くんが接触したわ」

「リアーデ、キヨりんにはデュノアく…さんを止めておいて貰ったわっ」

「仕事が早いわね島ちゃん。らうっち、水着売り場周辺にさっきの三人、又は障害物になりそうな人はいる？」

リアーデが手に持ったイヤホン付きのトランシーバーをONにし、
『レゾナンス』外のビル街に潜伏中しているラウラに問う。

『……………水着売り場100m圏内にセシリア・オルコットを確認。先程我々が通過したアクセサリー店付近だ。他には特にいないが、一階に鳳鈴音^{ファン・リンイン}を確認。……………鳳鈴音はどうやら、この周辺の地理に詳し

いらしいな。進む足に戸惑いがない』

とあるビルの屋上。吹き荒れる風に髪を靡かせながら銀髪の少女はスナイパーライフルのサイトを覗く。

ブロンドの髪の迷子気味のセシリアと、何かに憤慨しながら闊歩するツインターールを発見。

トランシーバーに繋いである小型マイクを口元に近づけてラウラは報告する。

「了解らうつち。トランシーバーわONしておくから、何かあったら呼んでね？。さて、きっしーはセシリアの妨害、島ちゃんとは引き続き待機！」

「任せて任せてっ！」

「了解、リアーデ」

二人の応えに小さく頷き、リアーデは戦況が己の思惑通り進んでいる事に小さく笑った。

水着売り場に千春に手を引かれながら入店し、千春はトランクスタ
イプの水着コーナーへと入る。

て、てててて手をつ…千春と手を繋いでっ!!

これはアレだ、まるで……まるでデートなんじゃマイカ!?

俺は空いた片手で、激しく鼓動する胸を押さえる。

ドクドクドクドクドクドクドクドクドク……

間隔短けええええええっ!!

「いやあ。リアーデとか田島さん達の付き添いで来たんだけどさ、
どうも遅れるらしくてさ」

「そっ、そうなんだ」

イカンイカン、つい興奮し過ぎた。今この貴重な時間を無駄にする
のは惜しい!。

俺は全神経を研ぎ澄まし、興奮を無理矢理抑える。でないと前屈み
になりそうで……

「おっ、これなんていいんじゃないか？。ほらほら、一夏脱いで」
「なっ！？だっ、ただだダメだろそれは！？」

ニヤリと笑った千春が手をワキワキと動かしながらズボンを脱がしにかかる。突然の事で……突然じゃなくても慌てるなこれは。

俺が慌ててズボンを押さえたのを見て千春がクスクスと笑う。

「あはっ、冗談だつて！これと、…この赤いのはちよつと目がいたくなるから、この緑と黄色のよ……お？…見てみて一夏っ！」

「？」

「青と緑と黄色の水着で『グラデーション』！モードセレクト選択が出来るよ？」

「いや、流石に三つも買いは……」

「何言つてんだよ、もちろん私の奢りだぞ？」

「奢りつて……！いや、水着くらい買えるだけの軍資金はあるからいい」

「いいじゃんかよぉ、奢らせてくれよ、一夏あ～」

「ね、猫撫で声でもダメつたらダメだ！」

「ブ～ブ～ツ、自分は奢るくせに人には奢らせないなんて不公平だ

ぞ一夏！」

「お、女の子に奢らせるなんて俺は嫌なんだ！」

なんと言うか、好きな女の子に奢られたくない気持ちだ。思わず頑固になってしまい、俺は語気を荒くしてしまう。

「……………」

三着の水着を持ったまま、千春がうつ向いてしまった。

しまった！、と思い謝罪の言葉を出そうとした時、千春の瞳がギリ、と光った。

「……………わかった、奢らないよ。奢らなければ、いいんでしょう？」

「あ、……………ああ」

顔を上げた千春は見惚れるほど美麗で、それでいて可愛いと言う天使のような笑みを見せていた。

それが、……………逆にこわかった。

「……………そう、奢らないなら……………」

クスクスと笑いながらクルリと反転した千春は店員のところまで行

つて、財布から諭吉さんを一枚出し……三着の水着を購入してしまっただ。

そして俺の前まで来て、

「あー、しまったー。間違えて男物の水着を買っちゃったよー。そうだ、一夏、私これ使わないからあげるよー（棒）」

感情の消え失せた棒読みで水着の入った紙袋を渡して来た。

……。

「いや、流石に間違えて男物の水着なんて買わないだろ」

「いやいや、これが所謂ドジっ娘とゆう奴さ明智くん」

「違うよ！絶対違うよっ！？世間様のドジっ娘達だって流石に異性の水着を買っちゃったりなんてしないよ！？」

「ええ〜。それじゃあどうすんだよコレ」

「俺が買い取る。幾らだった？」

俺は財布を取りだし、諭吉さんとの別れを惜しみながら諭吉を一枚取りだし…………

「あ、…………私が使えばいつか。男物だからって、『着れない』わけじゃないし」

た所で世界が凍りついた。

バツ！！

「!?!」

千春から紙袋をふんだくる。その速度、『疾風迅雷』にも劣らないツ！！

「…………も、貰うから。…………そんな事はしないでくれ」

脳裏に浮かんだのはトップレスな千春が、ダボダボなトランクスタイプの水着を来て海水浴場を闊歩する姿。…………もう襲ってくれとか言わんばかりの痴女の出来上がりだ。ちくせう、妄想したせいかな鼻の奥が熱くなって来やがったぜ。

「?.....まあ良かった良かった。.....ねえ、一夏」

俺を不思議そうな目で見た千春は少しの間何かを考えるように腕を組み、

「わ、私の.....水着を、選んで、くれない、かなっ?」

頬を赤くしながらモジモジと、上目使いにお願いしてきたのだった。

あれ?、また妄想?

まず皆様に謝らせていただきます。

遅れてすいませんっしたーっ!!

感想も読んでます。返信出来ずに申し訳ありませんでした；

明日にでも投稿するから、投稿する前に感想に返信すればいいか。

なんて最悪な理由で返信してませんでした。

そして難産。遅れる遅れる………返信も遅れる!!

あげくの果てにはアリアにはまったりして……

皆様、実に申し訳ありませんでした!!

……さて、前・中・後編の三部作でお買い物のかかせていただきます。件のコラボは中編で出てくる予定です。

では、感想……してくれたら嬉しいです；

『えー、こちら岸里くこちら岸里く。セツシーの誘導かんりよう。次の指示をもとむ！』

「きつしーは一度帰投。その後地下にいるであろう篠ノ之さんへ接触して」

『了解！』

レシーバー越しから岸里の元気な声が聞こえ、ブツ、と音がして通信が切れる。

「各員ごうごうに通達、現在織斑おしあくんとちはるんは、ちはるんの水着の選定のため女物水着コーナー前に移動中。織斑おしあくんに変化が見られる。どうやら店頭の紐ビキニに反応してる様子」

「あー、織斑くんってウブっばいからねー。で？リアーデ、私はどうすればいいの？」

「島ちゃんには 鳳フマシさんの誘導をして欲しいんだけど……。らうつち、今鳳さんはどこにいるの？」

『こちらウサギワン。鳳鈴音を二階で確認。どうやら目星を付けたらしい。水着売場へ向け爆進している』

「要らないらしいわ。じゃあデュノアく…さんの足止めを。キヨが

話題を失い始めたわ」

「了解」

田島はテーブルに乗っている、コップに注がれていた麦茶を飲み干すと席を立ち、勘定代三百円をテーブルに置いてその場を後にし、カランコロンと鳴る喫茶店の扉を開けてショッピングモールの雑踏の奥、女物水着売場へと、千春と一夏にバレないようにしながら向かった。

「ま、こっちから声を掛けない限り見向きもしないだろうけど」

喫茶店の窓から見えるショッピングモール、それも水着売場前の様相を見てリアーデが小さくため息を付いた。

「これと、これ、……どっちがいいかな？」

「え、いや……その……こっちってただの紐じゃないの？」

「いや？水着だよ？」

「え？……え？？」

店頭に並べられた水着、そのなかから二つの水着を見て問われた一夏は、女性の裸体を模したマネキンを縛るようにつけた紐に目を奪われた。

だっておい。こんなの、女の子の大事な所を何一つ守れてないじゃないか？

いや、辛うじて守れているようなものだ。仏前の灯火だ。吹けば飛んでしまうのではないかと錯覚させる。

対してもう一つの方は女兒用水着を大人用にしたような、フリフリが沢山のワンピース。

どちらが見たいと言えば問答無用で前者の紐だろう。

だけど、千春が海水浴場でそんな姿を晒したら嫌なので却下だ。

故に後者になるのだが……

「……………」

フリフリ〜

「……………」

フリフリフリ〜

「…………むう」

フリフリフリフリ

どうみても、子供用のデザインである。

「なあなあー夏！こ、こっちの方とか、…ほ、ほら、可愛くないか？似合いそうじゃない？」

そして子供用のデザインのワンピースタイプの水着を指差しテンションが上がる千春。

まあ確実に似合うだろう。千春が着ればなんでも可愛くなるし。

千春が似合ってるのは重々承知だ。だが、百歩。百歩譲っても……これは…………

「…………」

俺が押し黙っている間も、千春は異様なテンションでフリフリワンピースの水着を眺めている。…………千春はこつ言っのが好きなのか？。

「似合いそうだよな、絶対可愛いよな……」

鈴

「……ああ……ってっえっ！ー！？」

「……どしたー夏？」

千春の言葉に俺が驚くと、千春が首を傾げ俺を見る。

「今……り、鈴って言った？」

「……うん」

小さくコクンと頷いた千春。ちくせう、一々動作が愛らしいッ。

けど！今は敢えてスルーをッ

「なんで鈴のなんだ？千春の水着を選ぶんじゃなかったのか？」

「え？だって私もう水着あるって言ったじゃん」

じゃああれか？

私の水着を選んで欲しいって言うのは、鈴に買いに来た水着って訳か？……

「一夏？」

Orz……千春、言葉が足りません。

「……ほう……あれも水着の一種なのか。クラリッサの言っていた紐

「ビキニとはあれの事だろうな」

ラウラはスナイパーライフルのスコープ越しに千春と一夏を見ていた。

片耳につけたイヤホンからは千春と一夏の会話が聞こえてくる。

「まあ私には関係のないことだ。私には似合わんし、そもそも水着など学校指定の物があるしな」

ラウラが自嘲気味に笑う。

ラウラが一瞬、スコープから目を離れた時、ソレは居た。

「ふむ、確かにヴェントが言っていた通りの素晴らしさであるな。下から見っていくと細すぎない健康的な肉付きの脚線美、そして世の男を魅了するであろうあの柔らかかそうな尻ヒップ。見事に引き締まったくびれの腰。そしてそしてええっ！！、何より素晴らしいのは、私の変態眼アック・アイによって見てきた中で、最高級のものである形、大きさ、柔らかかさの双峰ッ！！……あの完璧なボデエを所余さずに堪能出来たらどれ程の満足感と支配感と快感に、この身を震わせるだろうか？それを予測しきれんだろうか、いいや出来ないのであるッッ！！！」

「……………」

敵つい顔の大男がラウラの横で胡座をし、気色の悪い事を大声で叫んでいた。

「ッ！？……千春！！」

「ほえ？」

突然、まるで背中をナイフで撫でられたかのような不快な感覚に襲われた。

直感でレゾナンスの外、ビル群に視線を向ける。

そこで見たのは、あるビルの屋上。その屋上で、何かキラリと光った。

咄嗟に千春を抱き寄せ、そのビルから千春を押し倒し俺の身体で隠す。
光ったのが、スナイパーライフルのスコープではないかと思ったからだ。

「……気のせい……か？」

「いつ、いい一夏っ!？」

「……?……うわぁっ!？」

数秒し、何も変化が無いことに疑問を持ったが、千春の慌てたような言葉に意識を千春に向け……………

モミュッ…

そこで、千春を押し倒し、その上で胸を手で掴んでいる事に気がついた。

……千春の胸…やわらけえ……………

じゃなかった!!

周囲から見たら、公衆の面前で美少女を押し倒し、尚且つその美少女の胸を揉みしだいてる変態じゃねえか!!
通報されるレベルだ。実際、道行く人たちは頬を赤くしながら携帯のカメラを俺と千春に向け……………続きを期待してんじゃねええええええッ!!

「1J…んのっ…」

「?」

千春を押し倒しながら混乱していると、先程の悪寒とはまた違った悪寒が俺を襲う。これは殺気の類いだ。

「エロバカ一夏あつ!!!」

「ぶへええつ!?!」

突然側頭部に襲い強烈な痛み。それが何によって引き起こされたかを知るよりも先に、俺は吹き飛ばされ地面を転がる。

「あ、ああああんたっ!こっ、こんな場所で!何をしようとしてんのよエロ一夏!」

「ぐっ…この声、鈴か…っ、いつてええっ」

特徴的なツインテールを靡かせながら、顔を真つ赤にした鈴が振り上げた脚を戻し、俺を指さしながら声を荒げる。どうやらあの脚で俺の頭をサッカーボールよろしく、思いきり蹴り抜いたのだろう。

「り、鈴?」

「だいじょうぶ千春!?このバカに変なことされてない!?!」

「え、やつ、…その……………おっぱい揉まれたくらい……………」

半身起き上がった千春に鈴が抱きつき問うと、千春は俺を一瞬見て、顔を赤く染め、俯いて小さく呟いた。

ブチッ

そう、それは何か糸のようなものが切れた音。ハサミや何かで切ったような音でなく、引っ張って切れたような音がした。

「……このエロ―夏…」

「わっ！バカバカ待て！ISは不味いつて！」

「問答…無用ッ！！」

ISを部分展開した鈴が双天牙月を振り上げる。

ブオンッ！！

「っ… ……？……ちっ、」

勢いよく降り下ろされたはずの双天牙月は、轟音をピタリと止めて、俺に一撃を与えない。

恐る恐る目を開けると、そこにはこんな時にも黒いスーツにタイトスカート姿の我らが千冬姉がいた。

「千冬姉っ!？」

「あわっ、あわわわわっ……」

「……ファン・リンイン 鳳鈴音。ISを扱う上での最重要項目、よもやそれを知らんわけでは……ないだろう?」

人差し指と中指の、たった二指による真剣白刃取り。二指で受け止めていた双天牙月を部分展開とは言え、展開されたISの腕から引き抜き、地面に叩きつける。

「ヒッ!？」

鈴が顔を真っ青にする。千冬姉に対する戦意は全く無さそうだ。

「ファン・リンイン 鳳鈴音、お前には明日までに五枚の反省文を提出しろ。それで、今回は終わらせてやる」

「あ、……ありがとうございます」

「そして織斑、貴様にも同様、反省文を提出しろ」

「なっ、何で俺まで!？」

「鳳鈴音は衆人環視の中女を押し倒し乳房を揉んでいる変態まじまからブ

リュッセルを助けただけだ。凰鈴音に課せられた罰はISの無許可展開、貴様は強制猥褻罪だ」

「ぐうつ…確かに、そう思われる、か…」

「ふん…わ、私でなら外でも構わんがな……」

「え？なんか言ったか千冬姉？」

ボソツと呟いた千冬姉の言葉が聞こえず聞き返すと、顔を若干赤くした千冬姉が顔を背けた。

あれ？なんか悪い事したか？。

「……ふん。……さて、私はまだ仕事があるのでな」

「仕事？」

「ああ。この件の主犯を捕りに行く。面白そうだと言っ理由だけで行動する辺りが気に入くないのでな」

そう言っ千冬姉は水着売場の前にある喫茶店へ向け歩いて行った。

「どこで…どこで間違えたっ」

リアーデは襲いくる恐怖に耐えながら必死に逃走を図っていた。

一夏が千春を押し倒し、鈴が参入した辺りは嬉々としてその様子を眺めていたが、かのブリュンヒルデが現れた事でリアーデの表情は氷りついた。

目が、合ったのだ。鈴と一夏に罰を与えながら千冬の視線は一点、リアーデを捉えていた。

「らっつちは何をっ…らっつち！らっつち！？」

トランシーバー越しに叫ぶ。ラウラがちゃんと監視していれば、もっと速く千冬 of 存在を関知、撤退出来ていた。

しかし、トランシーバー越しに何度叫んでも当のラウラは答えない。

「くっ…変態のくせに……化け物かつ！」

「否！…私は聖人である。銀髪ロリっ子よ！」

ラウラは突然現れた変態と激闘を繰り広げていた。

しかし、ラウラには絶望しかない。

まるで千冬と戦っている時のような絶対的な力の差、そしてこの男の威圧感。

常に吐いている変態チックな言葉も確かにあるが、本能がこの男に近寄るなど警鐘を鳴らしている。

既にラウラはトランシーバーを捨てナイフを持っている。……千冬の事を知らせる以前に見ていなかったのだ。

「私は個人的に苛められるより弄る方が好みである。ロリっ子よ、その未熟に育った柔肌を弄り倒してくれよう！」

「やっ、やめろっ！くるな！！……や……あ、アーッ……！」

「今悲痛な声が…そ、そんな事より、早く逃げなきゃ…」

「ほう、どこへ逃げると言っただリアーデ？」

「！？」

トランシーバーから聞こえた断末魔にリアーデが後ずさると、後ずさった後ろから、声が聞こえた。

「お、織斑…先生……」

「さて、リアーデ。単刀直入、簡単な質問をしよう」

そして千冬はリアーデの頭をつかみ、

「第三アリーナの清掃と反省文を今日中に十枚。どちらがしたい？」

死刑宣告を言い渡した。

Stage 62 『仁義なき水着戦争・中編』（後書き）

皆様、大変ながらもお待ちせしました、中編でございます。

次回後編で水着購入編が終わり、ついに臨海学校編でございます。

長かった…ようやく福音戦までこれた…。

ところで皆様、例えば一夏ラバーズの間々の後継機が出たらどんな後継機になると思いますか？

一夏のように二次移項か、はたまた完全な新型ISか……

よかったらアイデアを下さい（笑）

千春の後継機？……千春のはネーミングセンスの問題なんだよなあ…

感想待ってます！

「ち、千春？……それ本当に買うの？」

「え？……可愛いよ？」

「う…ぐうつ………そ、そうかな？」

凰鈴音は決断の時を迫られていた。

千春が手に持つのはフリフリの水着。

子供用の水着のサイズを大きくしただけのような、そんな水着だ。

鈴は自分の幼児体型に少なからずコンプレックスを抱いている。

千春のようなグラマーになりたいとも思っている。

そこへ狙い済ましたかのように千春が薦めてきた水着だ。

「……鈴」

「わ、わかってるわよっ……」

一夏が小声で囁いて来た。
わかつている。

ここで鈴が断れば千春は悲しむだろう。しかし、水着を着れば間違

いなく鈴のプライドは崩れ去ってしまう。

凰鈴音は決断の時を迫られていた。

友か誇りかを……。

「
」

「ひっ……ぐすっ……いいのよっ、あたしは、千春の友達だもんっ」

「り、鈴っ……お前って奴は……」

勝者、水着。

鈴は膝を着きながら嗚咽を漏らした。

「ふふふ、織斑くんってばすごいねえ」

「あ、……あの、シャルロットさん？なんで呼び方が……」

「何かな織斑くん？今は僕が喋ってるんだよね？」

「は、はい」

漢を見せた鈴が千春に試着室まで連れ去られて行ったのを敬礼で見送った後、俺は怖いくらい微笑んでいるシャルロットを前にしていた。

「公衆の面前で女の子を押し倒してえつちな事をするなんて、織斑くんしかできないよね。さすがだね織斑くん」

「い、いや、あれは……さ、殺気のような悪寒がして、それにあのビルの屋上で何かが光った気がして思わず……今思えば、あれは殺気と言っより、同族嫌悪のような……」

「……ふーん」

あ、この笑顔、「信じてませんよー」って顔だ。
やばい、このままじゃ同じような問答の繰り返しになりかねん。

「と、ところでシャルロット、シャルロットの水着ってどんななんだ？」

「えっ？ぼ、僕の水着？……え、えと……」

俺が話を変えると、シャルロットがその話に乗ってくれた。

GJ俺！

「どうしたんだよシャルロット？」

顔を赤くしてモジモジとするシャルロット。なんだ？トイレにでも行きたいんだろうか。あ、いやいや。女の子はトイレに行く、なんて言わなかったっけ。

「花でも積みに……」

「いつ、一夏に選んで欲しくって！……え？」

「え？」

あ、シャルロットの顔がみるみる真っ赤になっていく。

「一夏のばかあっ!」

「あいてっ」

半泣き状態のシャルロットに拳骨された。

「もっつ!一夏は女の子に対するデリカシーが無さすぎだよっ!?!」

「よ、よく言われます」

「よく言われるんじゃダメだよ?……もっつ、一夏のバカ……」

溜め息を漏らしたシャルロットと、現在進行形でバカと呼ばれてる俺は水着売場の女性物コーナーへと進んでいた。

「で?どれなんだ?……ある程度は決まってるんだろ?」

「う、うん。えっと……こ、この水着と、この水着」

シャルロットが取ったのは、橙色の水着と若草色の水着。両方ともビキニっぽい水着だ。橙色の水着はアンダーウェアにフリフリのスカーツが付いていて、パレオみたいにも感じる。

「……俺的にはこっちのオレンジの水着だな。そうだ、試着してくれば?シャルロットの水着姿見せてくれよ」

俺はこういった水着のモデルを千春で想像してしまいがちだ。シャルロットでの想像が少し難しかったためにこう言う結論に行き着い

ただが、 シャルロットは顔を真っ赤にしたまま俯いてしまった。

「シャルロット？」

「う、うん！？し、試着してくるよ！待ってて……！」

俺が声を掛けるとシャルロットは顔を勢いよく上げ、水着を持って試着室へ飛び込んで行った。

巨大ショッピングモールレゾナンス。その二階を生氣の抜けた様相で歩く少女が、そこには居た。

「……ひ、ひどいめにあつた……」

元々、あまり手を加えていなかったラウラの長い銀髪は同じ長髪のセシリアや千春と比べたらボサボサだろう。しかし、ラウラの持つ一種の風格が、寝癖のついた髪でさえワイルドに見せてしまう。そのワイルドさと、ラウラ自身の可愛さをもってして『かなりレベル』が高いと同じIS学園女子生徒は敵視しながら羨んでいる。

しかし、今のラウラの姿にはワイルドさなんてものが根底から姿を

無くしていた。

一言で言うならば、……そう、魔法少女だ。

明るめのピンクや黄色で彩られたヒラヒラな衣装は、ラウラの持つハート型のステッキも合間って誰がどう見ても魔法少女の姿に思われる。

そして一番の問題はラウラの髪……いや、『頭部』にあるだろう。

溢れんばかりのキューティクルを纏った銀の髪は、普段の様相とは違って代わり、サラサラヘヤーとなっていた。

そしてそのサラサラヘヤーな銀髪を後頭部で結い上げている、その巨大なりボンだった。

正面から見てもそのリボンの姿を容易く視認できるくらい大きなリボン。そのリボンをどうやってつけたのか？と疑問を持たせるよりも、このリボンは重そうだ。と人に思わせるのが速い。

そして眼帯もハートの眼帯に取って変えられてしまっている。

この所業、先程の体格の良い変態のせいである。（個人的にはラウラにはこう言ったヒロイン魔法少女系の色は似合わないと思う。そう、最初はライバルだけど幾つかの事件を経て仲間となるライバル魔法少女系の色。青や黒と言った暗色系が良く似合うと私は思う。あ、でも普段とのギャップもまたいいな。…恥ずかしがりながらピンクのヒラヒラなコスを着るラウラ萌え。GJ変態！）

認めたくない事実だが、戦闘中に手加減をされ敗退し、無理矢理この服を着せられ写真を撮られたと言う屈辱をラウラは受けていた。

変態をシユヴァルティア・レーゲンを呼び出し撃滅しようとしたが、変態の仲間らしき集団が現れ目の前で奴もろとも消失。直ぐ様ハイパーセンサーによる探索を試みるも、姿を捉えることはできなかつた。

「本部との連絡も取れん今、独自に行動するほか無い……………」

周囲からの珍しいものを見るような奇異な視線に晒され、ラウラは顔を真っ赤にしながらトコトコと歩く。

赤い靴がキュートだ。

「えっと…ど、どうかなー夏？」

試着室のカーテンを控えめに開きながら、シャルロットが俺に聞いてきた。

「お…おう。似合ってるぞシャルロット」

水着を着たシャルロットに、俺の鼓動が高鳴った。

並みのモデルでは得られないその身体と顔。海に出れば、男であれば見とれること間違い無しの我が儘ボディが今目の前にッ！

俺の言葉に喜んでくれたのか、シャルロットはクスクスと笑う。

その笑みがまた可愛くて……………

「なに鼻の下伸ばしてんのよヒロ一夏！」

「ぐえっ！？…………り、鈴！？」

シャルロットの水着姿に見とれてしまっていた俺に、鈴のラリアットが炸裂する。

見ると、買い物袋を手に提げた千春と額に青筋を浮かべている鈴がいた。

「おお！それ、いい！シャルロット可愛いよ〜！」

「わわっ！ち、千春！？」

買い物袋を提げていた千春が、シャルロットの水着姿を見て抱きつく。

可愛い物に目がない千春は、可愛い物、人などに抱きつく癖がある。ん？そっいえば鈴にも良く抱きついているが……………ああ、あれか。親しい人に対する挨拶みたいなもんか。

「あんだ、今失礼なこと考えたでしょ？」

「ま、まさか！は、ははは……………」

す、鋭い。

「ち、千春！？そんな所…っ、ひゃんっ！」

「ぐふふふ〜。シャルロットってばここが弱いんだ、……なら、こことかはどじっ？」

「んんっ！？……ダメだよ千春。はあ…はあ…ふあっ！？」

「よいではないか〜、よいではないか〜」

……あ、ヤベ、鼻血出てた。

手をワキワキと動かしながらシャルロットの身体をたのしそーにまさぐる千春。

くんずほぐれる二人の姿をはとつてもとても百合々しい。
いやあ、ほんと、いい笑顔になってるよ千春。そんな君が大好きです。

千春とシャルロットの様子を見て、残念そうに溜め息をつきながら鈴が千春の肩を叩く。

「ほら、千春。シャルロットも困ってるわよ？」

「ふえ？……あ、ごめんごめん」

ようやく意識を取り戻した千春が頬を掻きながらシャルロットから離れる。心なし千春の肌の艶が二割ましになった気がする。

身体中を触られ揉まれたシャルロット。水着が所々ずれてとてつもないことになっていた。

「あ、そだそだ。話は変わるけど、ラウラとはどうなの一夏？」

今度は鈴に抱きつきながら俺を見た千春が、そんな事を聞いてきた。

「ラウラ？……なにがだ？」

「とぼけんなって、ラウラに求婚されてんじゃないか。嫁にするって」

「なっ!？」

ニマニマと笑いながら言う千春。ほんと、いい顔だよ。しかし、千春に誤解されては困る。説得にかからねば!

「ら、ラウラとはそんな関係じゃないって!」

「こやつめハハハ。キスした仲じゃん、それともラウラに不満とかあるの?一夏的にはラウラはダメ?」

「いや、ラウラは可愛いぞ?……だけど、その……い、いろいろあるんだよ!」

俺がそう締めると、千春は、

「『Damn good』。流石だよ一夏」

とニヤリと笑った。

ん？どういう意味だ？……。ぐっどって……。良い、って意味か？……？

「……ラウラは可愛い……」

「！……？」

ヒラヒラな衣装を着替えようと試着室のある水着店に入った時だった。

いきなり、一夏の声が、聞こえたのだ。

どうやら千春と一夏と二人で話しているところまで把握していたのだが、盗み聞きをする趣味もないので会話を意識していなかったところへの不意打ちだ。

「……わ、わたしが……か、かか可愛い……？」

突然の言葉に頬は熱を持ち紅潮し、心臓の動悸は一気に四速ギアまで叩き込んだかのように早くなっている。
ドキドキと胸の高まりが収まらない。

誉めるがいい　と何度も一夏に強要していたラウラであったが、実際に褒めてもらったことはなく、もちろん『可愛い』と言われた事もない。そこへ来て、突然のこの言葉なのだから、冷静沈着・ドイツの冷氷と呼ばれたラウラが取り乱すのは仕方がないことだった。

(かわつ、かか、かかかかかわいい!!?.....はふうっ!)

思わず感極まり、ラウラは真っ赤になつた顔を両手で隠す。

流動する戦局に自分だけでは対処出来ないと感じたラウラは、自分の胸に手を当てて瞼を閉じる。

それは本来であれば必要としない、意識のご集中法。コールする番号を何度も間違えかけながらラウラはISのプライベート・チャンネルを開いた。

ドイツ国内軍施設

ラウラがプライベート・チャンネルを開いたのと同時刻、そこでは現在IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』　通称『黒ウサギ隊』が訓練を行っていた。

ドイツ国内の総IS数は十機なのだが、その内三機を部隊専用機として配備しているのがこの部隊なのである。そして、それは名実共に最強の部隊であることの証明でもあった。

眼帯をした黒ウサギが部隊章であるこの部隊の隊長のラウラをはじめ全員が肉眼へのIS用補佐ナノマシン移植者である。

元々ラウラの眼帯は『ヴォータン・オージエ越界の瞳』のための機能制御装置であったのだが、現在では全員が肉眼の保護と部隊の誇りとして眼帯を装着していた。

「何をしている！シユヴァルツェ・ハーゼの名を汚すつもりか！？。現時点で三七秒の遅れだ、急げ！」

そうインカム越しに怒号を飛ばしているのは副隊長であるクラリッサ・ハルフォーフであった。

年齢は二十二、部隊の中では最高齢であり、十代が多い隊員たちを厳しくも面倒見よく牽引する『頼れるお姉様』。

その専用機『シユヴァルツェア・ツヴァイク』にラウラからの緊急暗号通信と同義のプライベート・チャンネルが届いた。

「受諾、クラリッサ・ハルフォーフ大尉であります」

『わ、私だ……』

本来ならば名前と階級を言わなければいけないのだが、ラウラの声が妙に落ち着き無く揺れているためクラリッサは怪訝そうな顔をす

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか？」

『あ、ああ……。とても、重大な問題が発生している……』

その様子かはただ事ではないと思ったクラリツサは、訓練中の隊員へとハンドサインで、『訓練中止・緊急招集』を伝える。そのハンドサインに隊員達が慌ただしくなる。

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長の現在地を確認。周囲の映像取得機器へハッキング完了、電腦を掌握しました。モニター、出せませす」

コンソールを弾くように操る隊員がクラリツサへ伝える。クラリツサはそれに首肯で答え、続ける。

「部隊を向かわせますか？」

『い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、ない……』

「……では？」

モニターに映像が写る。どうやら何処かのショッピングセンターの監視カメラをハッキングしたようだ。

『クラリツサ、その…だな。わ、わ、私は、可愛い……らしい、ぞ』

そのモニターに大きく映ったのは、フリフリの魔法少女のコスプレをしたラウラの姿。

「この意匠…超機動少女カナミン？…いや、魔女っ子…メルル…だと？」

クラリツサ・ハルフォーフは思わず呟いた。

『く、クラリツサ？』

「いえ、なんでもありません。ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長が可愛いらしいのは私クラリツサ・ハルフォーフ先刻承知。しかし、隊長の言葉からすると、他者から言われたのですね？」

『あ、ああ。い、一夏が、そう言っていて、だな』

と、そこまで聞いてクラリツサはピンときた。

「隊長が好意を寄せているという彼ですか？」

『う、うむ……。ど、どうしたらいい、クラリツサ？こづいう場合は、どうすべきなのだ？』

モニター上のラウラが頬を真っ赤にしながらオロオロとしてる姿を見てクラリツサの鼻孔からは鮮血が溢れる。

「そうですね……まずは状況把握を。直接言われたのですか？」

鼻血を多量のティッシュで拭いながらクラリッサは問う。

『い、いや…直接ではない。向こうはここに私がいるとは思っていないだろう』

「最高ですね」

『そ、そうなのか？』

「はっ。本人のいない場所でされる誉め言葉にウソはありません。彼は、確実に隊長の事を異性……それも、恋愛対象として見ていることでしょう！！」

『そ、そうか…そうなのかぁ……！』

先程まで動揺が十割を占めていたラウラの声が、クラリッサの言葉ではあっと花開くように明るいものへと変わる。

ちなみに、現在緊急招集により集めた隊員達には、クラリッサがプライベート・チャンネルをしながら筆談で状況を伝えている。

【隊長の片想いの相手に脈アリ】

「おおお〜！」と隊員達から声上がる。

以前までは、この部隊でラウラは人間関係に多大な問題を抱えていたのだが、先月のVT事件の直後に『好きな男が出来た』とい

う相談をクラリッサに持ちかけたときから全てのわだかまりが解けて消えた。

『そ、それでだな、今、その、水着売り場なのだが……』

「ああ、そういえば、来週からは臨海学校でしたね。隊長はどのよ
うな水着そっぴで？」

『う、うん？……学園指定の水着だが』

「何を愚かなことをっ！！！」

『！？？』

「確か、IS学園は旧式スクール水着でしたね。それも悪くはない、いや、むしろご褒美でしょう。世界三大制服の一角を担う旧スクは、確かに男子が持つマニア心をくすぐり、なおかつ激しく叩きつけるでしょう。……だがしかし、それでは」

『そ、それでは？』

ごくっ、とラウラが唾を飲む。

「色物の、域を出ない！」

『なっ……！！？』

ラウラはクラリツサの言葉に大きな衝撃を受けた。雷に打たれたように、青天の霹靂とも言えるほどの衝撃を覚えた。

「隊長は確かに豊満なボディで男を老籠絡するタイプではありません。ですが、そこで際ものに逃げるようでは、『気になるアイツ』から前には進めないのです！。聞けば、彼の周囲に我々の天敵、『閃光』の娘千春・フレイヤ・ブリュツセルを始め多種多用な美少女がいるとか。余計に肉体での籠絡は臨めません！」

『な、ならば……どうすればいいのだ？』

「フツ……。私は伊達や酔狂で日本のサブカルチャー、『ヲタク文学』に触れたわけではありませんよ隊長」

『で、では!?!?』

ラウラの歡喜の言葉に、クラリツサは最後の一枚のティッシュを箱から抜き取り一拭き。

「はっ。……このクラリツサ・ハルフォーフ、必ずや上手く行く秘策がございます」

赤く染まったティッシュを投げ捨て、クラリツサはニヤリと笑う。そして、クラリツサの目がキラリと光った。

Stage 63 『仁義なき水着戦争・後編』（後書き）

お待たせしました、六十三話です。

いやあ、頑張りました。途中、完成度85%辺りで没にしたからさあ大変、ですよ。

没ネタは一夏が女に絡まれるのをキレた千春が防ぐものでした。しかし、一気にシリアスと化すので没。シリアスは臨海学校編まで取っておきます（笑）

さて、次回からは遂に臨海学校編。臨海学校編は怒涛の展開!…になるといいなあ〜（笑）

ちなみにメインヒロインは千春の予定ですよ！（笑）

感想待ってま〜す！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5847t/>

IS 北欧生まれのカレンダー

2011年12月29日01時39分発行